

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第232集

めいじょうこうえんいせき  
名城公園遺跡

第1分冊

2026

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

[ 正誤表に示された訂正箇所を修正済み ]



## 序

令和7年(2025)7月、名古屋市北区の名城公園北園にIGアリーナが誕生しました。

名城公園北園は名古屋城の北側にある広大な都市公園で、そこは江戸時代までさかのぼると、名古屋城下御深井御庭という尾張徳川家の庭園があった場所なのです。慶長15年(1610)の名古屋城築城から間もない頃、その土取り場だったとされる沖積低地に、池と水路がめぐる回遊式庭園として築庭されたと伝えられています。その面積は最終的に13万余坪(約43万平方メートル)となり、江戸時代の各大名が築いた大名庭園のどれよりも巨大な規模を誇っていました。しかしこれらの歴史は長らく埋もれた存在となりあまり知られていませんでした。

このたび、愛知県埋蔵文化財センターでは名城公園遺跡の発掘調査を行い、下御深井御庭の痕跡を確認するとともに多数出土した陶器や窯道具からそこで営まれた御庭焼「御深井窯」の実態に迫ることもできました。さらに築庭から千年をさかのぼった6世紀代の須恵器が多量に出土する地点を調査しました。これによって、蛇行する河道に沿って古墳時代の集落が営まれ、上流の窯業地から運ばれた須恵器を選別・出荷する場所だったことも明らかにされました。

発掘調査範囲は広大な面積となり、そこに多数の調査員・測量士・発掘作業員をはじめとする発掘調査や工事関係のスタッフが従事することになりました。限られた工程の中で、整然とした発掘調査記録の作成と出土遺物の取り上げ・収納に尽力された方々に感謝申し上げます。また、発掘調査の進行にご理解とご協力をいただきました地元名古屋市北区の皆様にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます次第です。

最後になりましたが、本書ならびに愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査記録が、地域ひいては世界の歴史を紡ぐことの一助となり、広く活用されることを祈念いたします。

令和8年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
理事長 佐藤 正美

## 例 言

- (1) 本書は、愛知県名古屋市中区名城1丁目に所在する名城公園遺跡（県遺跡番号 002027、県埋文センター遺跡記号 2NMJ）の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は、愛知県スポーツ局競技・施設課（現：愛知国際アリーナ課）による愛知県新体育館整備・運営等事業に伴う事前調査で、愛知県民文化局文化芸術課文化財室を通じた委託事業として公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査の管理と発掘調査報告書作成にかかる整理・報告業務を行い、発掘調査業務は愛知県スポーツ局から委託された前田建設工業株式会社中部支店が行った。
- (3) 発掘調査期間は、令和3年度は令和3年（2021）1月20日から3月31日、令和4年度は令和4年（2022）4月1日から6月30日である。
- (4) 発掘調査面積は、27,000 m<sup>2</sup>である。
- (5) 発掘調査の管理員は、令和3年度は鈴木正貴（調査課長、現調査研究主任）・樋上昇（主任専門員）・永井邦仁（調査研究専門員）・早野浩二（同）・宮腰健司（調査研究主事）、令和4年度は鈴木正貴・永井邦仁・早野浩二・鈴木恵介（調査研究主任）・宮腰健司・石黒立人（調査研究主事）・木村有作（調査研究主事）が担当した。
- (6) 発掘調査業務は、高江俊之（現場代理人、前田建設工業株式会社）のもと、鷲坂有吾・杉山敬亮・鈴木和古・高木祐志・高橋理恵・山内信浩・湯川善一（以上株式会社二友組）、荒川和哉・生駒昌史・小野瀬一路・喜多亮輔・香山周亮・高木佑介（以上株式会社イビソク）、雨宮瑞生・西川亨・日紫喜勝重・樋田泰之・平井美典（以上株式会社四門）、村松利康（株式会社ノガミ）、高梨雅幸（株式会社C-ファクトリー）が調査補助員として遺構の検出や遺物の取り上げなどを行い、稲生貴仁・白木宏幸・舟橋哲郎・宮本亮太（以上株式会社二友組）、古家貴浩・山崎弘勝（以上株式会社イビソク）、尾崎裕司・高橋啓介・金子堅二（以上株式会社四門）が測量士として遺構や遺物の測量を行った。
- (7) 発掘調査から報告書刊行までに、以下の諸機関・個人のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げる。  
愛知県スポーツ局愛知国際アリーナ課・愛知県民文化局文化芸術課文化財室・愛知県埋蔵文化財調査センター・名古屋市教育委員会文化財保護室（現文化財課）・岩倉市教育委員会・名古屋市中区・前田建設株式会社名古屋支店・青木修・秋松大允・浅田博造・伊藤聡・井上喜久男・岩崎茂・内野正・大西遼・岡千明・岡本直久・小澤一弘・梶原義実・金子健一・小池富雄・瀬戸茂・小坂延仁・小橋健司・酒井将史・佐藤公保・島田崇正・清水政宏・城ヶ谷和広・洲崎和宏・高橋圭也・田口哲也・千葉豊・榎木真・中里信之・仲野泰裕・二橋慶太郎・濱崎健・樋田泰之・平田健・藤村俊・堀内亮介・前田博・丸山宏・村木誠・森島一貴・山内良祐・吉田真由美（敬称略、五十音順）
- (8) 本書作成のための整理作業は永井が担当し、遺物実測・デジタルトレースで株式会社イビソクおよび株式会社文化財サービス、遺物写真撮影で有限会社写真工房・遊、科学分析で株式会社パレオ・ラボ、保存処理で株式会社吉田生物研究所の協力を得た。なお、石製品の石材鑑定は堀木真美子（調査課長）による。
- (9) 整理・報告書作成期間は、令和5年4月から令和8年3月である。
- (10) 本書の編集および主要項目の執筆は永井邦仁が行った。また小林克也（株式会社パレオ・ラボ）ほかにより提出された分析結果報告も編集の上掲載した。執筆者名は文末に記載した。
- (11) 本書で提示した座標数値は、国土交通省で定められた世界測地系における平面直角座標第七系（以下、国土座標VII系と呼ぶ）に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
- (12) 本書で提示する土層説明の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- (13) その他の埋蔵文化財にかかわる学術用語については特に断らない限り『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した。
- (14) 遺構一覧および遺物一覧のデータは愛知県埋蔵文化財センターのホームページで公開されている。
- (15) 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。  
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4161）
- (16) 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。  
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（TEL 0567-67-4164）

# 目次

第1 分冊	第1章 遺跡と発掘調査の概要	
	第1節 遺跡の位置	1
	第2節 発掘調査に至る経緯	3
	第3節 発掘調査の経過	10
	第4節 室内調査の経過と報告書の作成	12
	第2章 遺跡の環境	
	第1節 名城公園遺跡の地形	13
	第2節 周辺の遺跡からみた歴史的環境	15
	第3章 層序と遺構面	
	第1節 基本層序	18
	第2節 遺構面と時期区分	34
	第4章 発掘調査の成果（検1面）中世～近代	
	第1節 概要と表土等の出土遺物	36
	第2節 北練兵場期の遺構と遺物	46
	第3節 名古屋城下御深井御庭の遺構と遺物	51
	第5章 発掘調査の成果（検2・3面）古墳時代後期～古代	
	第1節 概要と表土等の出土遺物	121
	第2節 古墳時代後期～古代の集落の遺構と遺物	130
第3節 古墳時代後期～古代の旧河道跡と出土遺物	283	
第2 分冊	第6章 発掘調査の成果（検2・3面）古墳時代中期	
	第1節 概要	
	第2節 旧河道跡とその遺物	
	第3節 古墳時代中期の集落の遺構と遺物	
	第4節 その他の古墳時代～古代の遺物	
	第7章 発掘調査の成果（検3・4面）弥生時代後期～古墳時代前期	
	第1節 概要	
	第2節 古墳時代前期の遺構と遺物	
	第3節 弥生時代後期の遺構と遺物	
	第8章 自然科学分析	
第1節 古代土師器甕の胎土分析		
第2節 弥生土器と古墳時代土師器の胎土分析		
第3節 放射性炭素年代測定		
第4節 樹種・種実同定		
第9章 総括		
	遺構一覧	
	遺物一覧	
第3 分冊	遺構基本図	
	写真図版	

## 挿図・表・写真目次（第1分冊）

図1 名古屋市の位置図	1	図38 00532K (SD) 出土遺物実測図	49
図2 名城公園遺跡の位置図	1	図39 00002SD 遺構図・00002SD・00003SK・00034SD・00035SD・00900NR 出土遺物実測図	50
写真1 名城公園北園の案内板(2021年11月)	2	図40 00011SD 遺構図	51
写真2 名城公園北園の野球場(2021年11月、北東から)	2	図41 00006SX 遺構図・出土遺物実測図	52
写真3 名城公園北園からみた名古屋城(2022年3月全景撮影時、北から)	2	図42 00034SD 遺構図	53
図3 試掘調査トレンチの配置と地表面の標高図(愛知県埋蔵文化財調査センター提供)	5	図43 00056SD 遺構図・遺物実測図	54
図4 試掘調査による遺構面の標高と想定された遺跡の概要図(愛知県埋蔵文化財調査センター提供図をもとに作成)	5	図44 00100SG 遺構図	55
図5 試掘調査出土遺物実測図(1)	6	図45 00100SG 出土遺物実測図	56
図6 試掘調査出土遺物実測図(2)	7	図46 00175SD 遺構図	57
図7 試掘調査出土遺物実測図(3)	8	図47 00175SD 出土遺物実測図	58
図8 調査区配置図(調査着手時)	9	図48 00202SG・00216SK・00220SK 遺構図	59
写真4 発掘調査風景(東から)	9	図49 00202SG・00216SK 遺構図	60
図9 表土掘削の進行状況図	10	図50 00202SG・00220SK 遺構図	61
表1 調査日誌抄(5月11日は最も佳境となった頃の例示)	11	図51 00202SG 出土遺物実測図(1)	62
表2 発掘調査工程表	11	図52 00202SG 出土遺物実測図(2)	63
写真5 整理作業の状況	12	図53 00202SG 出土遺物実測図(3)	64
図10 熱田台地北縁部の等高線と矢田川の関係図	13	図54 00202SG 出土遺物実測図(4)	65
図11 若葉通遺跡の古墳時代～奈良時代の旧河道	14	図55 00202SG 出土遺物実測図(5)	66
図12 志賀公園遺跡の古墳時代～奈良時代の旧河道	14	図56 00202SG 出土遺物実測図(6)	67
図13 名城公園遺跡周辺の遺跡分布図	16	図57 00202SG 出土遺物実測図(7)	68
写真6 『下御深井図面』(名古屋市蓬左文庫蔵)	17	図58 00202SG 出土遺物実測図(8)	69
図14 調査区西壁の土層図(1)	18	図59 00202SG 出土遺物実測図(9)	70
図15 調査区西壁の土層図(2)	19	図60 00202SG 出土遺物実測図(10)	71
図16 調査区南壁(21Bb区南壁)の土層図	21	図61 00202SG 出土遺物実測図(11)	72
図17 調査区南壁(21Ba区南壁)の土層図(1)	22	図62 00202SG 出土遺物実測図(12)	73
図18 調査区南壁(21Ba区南壁)の土層図(2)	23	図63 00204SE 遺構図(1)	75
図19 調査区南壁(21Ba区南壁)の土層図(3)	24	図64 00204SE 遺構図(2)	76
図20 中央南北トレンチ(T46)の土層図	26	図65 00204SE 出土遺物実測図	77
図21 旧河道左岸東西トレンチ(T47)の土層図	27	図66 00216SK 出土遺物実測図(1)	78
図22 調査区横断(00001SD・00900NR・01157NR)東西トレンチの土層図(1)	28	図67 00216SK 出土遺物実測図(2)	79
図23 調査区横断(00001SD・00900NR・01157NR)東西トレンチの土層図(2)	29	図68 00216SK 出土遺物実測図(3)	80
図24 調査区横断(00001SD・00900NR・01157NR)東西トレンチの土層図(3)	30	図69 00216SK 出土遺物実測図(4)	81
図25 調査区横断(00001SD・00900NR・01175NR)東西トレンチの土層図(4)	31	図70 00216SK 出土遺物実測図(5)	82
図26 00900NR 右岸東西トレンチ(T43)の土層図	32	図71 00220SK 遺構図(1)	83
図27 00900NR 右岸東西トレンチ(T42)の土層図	33	図72 00220SK 遺構図(2)	84
表3 名城公園遺跡における土器・陶磁器類の編年表	35	図73 00220SK 出土遺物実測図(1)	85
図28 工事立ち会い等出土遺物実測図	37	図74 00220SK 出土遺物実測図(2)	87
図29 攪乱出土遺物実測図	38	図75 00220SK 出土遺物実測図(3)	89
図30 表土出土遺物実測図(中世～近代)	40	図76 00220SK 出土遺物実測図(4)	91
図31 検1面出土遺物実測図(中世～近代1)	41	図77 00220SK 出土遺物実測図(5)	92
図32 検1面出土遺物実測図(中世～近代2)	42	図78 00220SK 出土遺物実測図(6)	93
図33 表土～検1面出土遺物実測図(近世瓦1)	44	図79 00320SD・00325SK・00360SD 遺構図	94
図34 表土～検1面出土遺物実測図(近世瓦2)	45	図80 00320SD・00325SK・00326SK 出土遺物実測図	95
図35 00716SX 遺構図	46	図81 00360SD 出土遺物実測図	96
図36 00717SX 遺構図	47	図82 00368SK 出土遺物実測図	97
図37 調査範囲南東部(21Bb区)検1面遺構図	48	図83 00419SK 遺構図	98
		図84 00567SK 出土遺物実測図	98
		図85 00583SD 出土遺物実測図	99
		図86 00710SD・00821SD・00822SK 出土遺物実測図	100
		図87 00414SD・00416SD・遺構図	101
		図88 00789SK 遺構図・00414SD・00416SD・00789SK・(旧00390SD) 出土遺物実測図	102
		図89 00452SK・00491SK・00492SK 出土遺物実測図	103
		図90 調査区中部の土坑群出土遺物実測図	104

図 91	00300SD・00301SD・00302SD 遺構図	105
図 92	00300SD・00301SD 出土遺物実測図	106
図 93	00626SD・00627SD・00628SD 遺構図	107
図 94	00651SK 遺構図	108
図 95	00626SD・00627SD・00628SD・00645SD・00651SK 出土遺物実測図	109
図 96	00498SD・00499SD 遺構図	110
図 97	00622SD 遺構図	111
図 98	00498SD 出土遺物実測図	112
図 99	00498SD・00499SD・00622SD・00694SD 出土遺物 実測図	113
図 100	01300SD・01301SD 遺構図	114
図 101	01302SD・01303SD 遺構図・出土遺物実測図	115
図 102	01304SD・01634SD 遺構図	116
図 103	01304SD・01636SK 出土遺物実測図	117
図 104	01658SK 出土遺物実測図	118
図 105	00225SE 出土緑釉陶器香炉蓋(916)復元図	118
図 106	00225SE 遺構図・出土遺物実測図	119
図 107	その他中世・近世遺構出土遺物と灰釉陶器集成 実測図	120
図 108	表土・攪乱出土遺物実測図	122
図 109	検 1 面出土遺物実測図(1)	123
図 110	検 1 面出土遺物実測図(2)	124
図 111	検 2 面出土遺物実測図(1)	125
図 112	検 2 面出土遺物実測図(2)	126
図 113	検 3 面出土遺物実測図(1)	127
図 114	検 3 面出土遺物実測図(2)	128
図 115	検 3 面出土遺物実測図(3)	129
図 116	00001SD 出土遺物実測図(1)	131
図 117	00001SD 出土遺物実測図(2)	132
図 118	00035SD 出土遺物実測図(1)	133
図 119	00035SD 出土遺物実測図(2)	134
図 120	00035SD 出土遺物実測図(3)	135
図 121	00300SD・00301SD・00315SK・00317SK 出土遺物 実測図	136
図 122	00370SK 遺構図	137
図 123	00370SK 出土遺物実測図	138
図 124	00626SD・00627SD・00645SD 出土遺物実測図	139
図 125	00115SI 遺構図	140
図 126	00115SI 出土遺物実測図	141
図 127	00332SI・01215SI 遺構図	142
図 128	00332SI・01277SL 出土遺物実測図	143
図 129	00334SI・01267SL 遺構図	144
図 130	00334SI・01267SL 出土遺物実測図	145
図 131	00333SD 遺構図	146
図 132	00333SD 出土遺物実測図	147
図 133	00336SI 遺構図	148
図 134	00336SI・01425SK・01426SK 遺構図・出土遺物 実測図	149
図 135	旧河道左岸の古墳時代後期～古代の建物跡分布 図(1)	150
図 136	00337SI 遺構図	151
図 137	00337SI 遺構図・出土遺物実測図	152
図 138	00338SI 遺構図(1)	153
図 139	00338SI 遺構図(2)	154
図 140	01405SP・01406SK 遺構図・00338SI 出土遺物実 測図	155
図 141	00340SI 遺構図(1)	156
図 142	00340SI 遺構図(2)	157
図 143	00340SI 遺構図・出土遺物実測図	158
図 144	01444SI・01445SL 出土遺物実測図	159
図 145	00371SI 遺構図	160
図 146	00371SI 出土遺物実測図	161
図 147	00790SI 遺構図(1)	162
図 148	00790SI 遺構図(2)	163
図 149	00790SI 関連・00980SL・00981SL 遺構図(1)……	164
図 150	00790SI 関連・00980SL・00981SL 遺構図(2)……	165
図 151	00790SI・00980SL・00981SL 遺物出土地点分布 図	166
図 152	00790SI 出土遺物実測図	167
図 153	00818SI 出土遺物実測図	168
図 154	旧河道左岸の古墳時代後期～古代の建物跡分布 図(2)	168
図 155	旧河道右岸の古墳時代後期～古代の集落の建物 跡分布図	169
図 156	01061SL・01062SI 遺構図	170
図 157	01061SL・01062SX 遺構図・出土遺物実測図	171
図 158	01010SD・01069SL 遺構図	173
図 159	01075SI 遺構図	174
図 160	01196SI 遺構図(1)	175
図 161	01196SI 遺構図(2)	176
図 162	01196SI 関連遺構図	177
図 163	01196SI・攪乱(01197K)・01198SI 出土遺物実 測図	177
図 164	01198SI 遺構図(1)	178
図 165	01198SI 遺構図(2)	179
図 166	旧河道左岸の古墳時代後期～古代の建物跡分布 図(3)	180
図 167	00864SL・01213SI・01257SI 遺構図(1)	181
図 168	00864SL・01213SI・01257SI 遺構図(2)	182
図 169	01213SI・01257SI 出土遺物実測図	183
図 170	01216SI・01420SI 遺構図(1)	185
図 171	01216SI・01420SI 遺構図(2)	186
図 172	01216SI・01420SI 出土遺物実測図	187
図 173	旧河道左岸の微高地上における小溝群の分布図	188
図 174	01216SI・01420SI と重複する小溝群遺構図	189
図 175	01251SI・01274SI 遺構図(1)	191
図 176	01251SI・01274SI 遺構図(2)	192
図 177	01251SI・01274SI 関連(01278SL・01913SP・ 01914SP・01915SK・01916SP・01917SK・01919SK・ 01920SD・01921SK・01922SK・01923SK・01924SK・ 01925SP) 遺構図	193
図 178	01251SI 遺物出土分布図	194
図 179	01251SI 出土遺物実測図	195
図 180	01251SI・01278SL 出土遺物実測図	196
図 181	旧河道左岸の古墳時代後期～古代の建物跡分布 図(4)	197
図 182	01540SI 遺構図(1)	198
図 183	01540SI・01540SI 関連(01540SI・01556SL・ 01597SK・01806SK・01817SK) 遺構図	199

図 184	01540SI 関連 (01556SL・01557SK・01597SK・01806SK・01812SP・01860SK) 遺構図	200	図 227	01630SB 遺構図 (2)	245
図 185	01540SI 関連 (01553SK・01580SK・01807SP・01809SP・01810SP) 遺構図	201	図 228	01270SA 遺構図	246
図 186	01540SI 遺構図 (2)	202	図 229	05001SA (01355SP・01356SP・01357SP・01358SP) 遺構図	247
図 187	T19 (01540SI・01556SL) 土層断面図 (1)	203	図 230	05002SB～05008SB 遺構図	248
図 188	T19 (01540SI・01556SL) 土層断面図 (2) 土層解説	204	図 231	05002SB・05002SB 関連 (01355SP・01356SP・01357SP・01358SP) 遺構図	249
図 189	01540SI・01556SL 出土遺物実測図	205	図 232	05002SB 出土遺物実測図	250
図 190	01545SI・01820SL 遺構図	206	図 233	01270SA・05009SB～05014SB 遺構図	251
図 191	01545SI 出土遺物実測図	207	図 234	05015SB・05016SB 遺構図	252
図 192	01600SI 遺構図	208	図 235	00152SK・00159SK・00160SK・00168SP 遺構図	253
図 193	01600SI 遺構図・出土遺物実測図	209	図 236	00172SP・00196SP・00197SP・00251SP・00252SP・00270SP 遺構図	254
図 194	01601SI 遺構図 (1)	211	図 237	00271SP・00272SP・00276SP・00280SP・00281SP・00287SP 遺構図	255
図 195	01601SI 遺構図 (2)	212	図 238	古墳時代後期～古代の集落に関わる溝の分布図	256
図 196	01601SI 関連 (01601SI・01639SL・02117SL・02118SL) 遺構図	213	図 239	00150SD 遺構図	257
図 197	01601SI 関連 (01648SD・01655SK・01681SK・02001SK・02002SK・02003SK・02004SK・02130SK) 遺構図	214	図 240	00265SD 遺構図	258
図 198	01601SI 遺構図 (3)	215	図 241	00151SD・00153SD 遺構図	259
図 199	01601SI・01639SL 出土遺物実測図	216	図 242	00200SD 遺構図	260
図 200	01601SI・02117SL・02118SL 出土遺物実測図	217	図 243	00150SD・00151SD・00153SD・00200SD・00265SD 出土遺物実測図	261
図 201	01750SI 遺構図	219	図 244	00899SD 出土遺物実測図	262
図 202	01750SI 関連 (01787SK・01903SL・01979SP・01980SP) 遺構図 (1)	220	図 245	01665SD 出土遺物実測図	263
図 203	01750SI 関連 (01787SK・01903SL・01979SP・01980SP) 遺構図 (2)	221	図 246	01328SD・1329SX 遺構図	264
図 204	01750SI 関連 (01787SK・01903SL・01979SP・01980SP) 遺構図 (3)・出土遺物実測図	222	図 247	01155SD 遺構図	265
図 205	01799SI 遺構図	223	図 248	01154SD・01155SD・01167SD・01192SD 遺構図	266
図 206	01799SI 遺構図・出土遺物実測図	224	図 249	01010SD 出土遺物実測図	267
図 207	01996SI 出土遺物実測図	225	図 250	01652SD・01151SD 出土遺物実測図	267
図 208	01900SI 遺構図・出土遺物実測図	226	図 251	01155SD・01648SD・01334SD 出土遺物実測図	268
図 209	01900SI・01757SP・01758SP・02185SP・02190SK 遺構図	227	図 252	01648SD 出土遺物実測図	269
図 210	01995SI 遺構図 (1)	228	図 253	01156SD・01160SD 遺構図	270
図 211	01995SI 遺構図 (2)	229	図 254	00769SD・00785SD・00786NR 遺構図 (1)	271
図 212	01998SI 遺構図	230	図 255	00769SD・00785SD・00786NR 遺構図 (2)	272
図 213	01995SI・01998SI 出土遺物実測図	231	図 256	00769SD・00785SD・00786NR・01160SD 出土遺物実測図	273
図 214	02135SX 出土遺物実測図	231	図 257	00095SX 遺構図・出土遺物実測図	274
図 215	02175SI 遺構図	232	図 258	00097SD・00098SD 遺構図	275
図 216	02199SI 遺構図 (1)・出土遺物実測図	233	図 259	00097SD・00098SD・00099SD 出土遺物実測図	276
図 217	02199SI 遺構図 (2)	235	図 260	00110SX・00145SD 遺構図・出土遺物実測図	277
図 218	02215SI 遺構図・出土遺物実測図	236	図 261	00640SX・00745SD・00845SD・01076NR 出土遺物実測図	278
図 219	02273SI 遺構図	237	図 262	01076NR 遺構図	279
図 220	02273SI 関連 (02176SP・02260SK) 遺構図・出土遺物実測図	238	図 263	01210SK 出土遺物実測図	280
図 221	00130SB 遺構図・出土遺物実測図	239	図 264	01442SD 出土遺物実測図	280
図 222	旧河道右岸の掘立柱建物跡分布図	240	図 265	01616SD 出土遺物実測図	280
図 223	01190SB 遺構図 (1)	241	図 266	01653SK 出土遺物実測図	281
図 224	01190SB 遺構図 (2)・01179SK 出土遺物実測図	242	図 267	01663SK 出土遺物実測図	281
図 225	01190SB 遺構図 (3)	243	図 268	01800SK 出土遺物実測図	281
図 226	01630SB 遺構図 (1)	244	図 269	01813SD・01832SK・01860SK・01883SK・02181SD 出土遺物実測図	282
			図 270	旧河道跡 00900NR と関連遺構の分布図	283
			図 271	21Ba 区東西トレンチ (00900NR・01450SD) 土層断面図	285

図 272	T21 (00900NR・01450SD) 土層断面図 (1)	.....	286
図 273	T21 (00900NR・01450SD) 土層断面図 (2、土層解説)		287
図 274	01450SD 出土遺物実測図 (1)	.....	288
図 275	01450SD 出土遺物実測図 (2)	.....	289
図 276	01450SD 出土遺物実測図 (3)	.....	290
図 277	01450SD 出土遺物実測図 (4)	.....	291
図 278	01450SD 出土遺物実測図 (5)	.....	292
図 279	01450SD 出土遺物実測図 (6)	.....	293
図 280	01495SM 遺構図 (1)	.....	294
図 281	01495SM 遺構図 (2)	.....	295
表 4	01495SM 出土具類集計表 ※大型植物遺体を除く...		295
図 282	01495SM 出土遺物実測図 (1)	.....	296
図 283	01495SM 出土遺物実測図 (2)	.....	297
図 284	01495SM 出土遺物実測図 (3)	.....	298
図 285	01495SM 出土遺物実測図 (4)	.....	299
図 286	02116SM 出土遺物実測図	.....	300
表 5	02116SM 出土具類集計表 ※大型植物遺体を除く		300
図 287	00900NR・01700NR 遺構図	.....	301
図 288	T1 (00900NR・01700NR) 土層断面図	.....	302
図 289	01700NR 出土遺物実測図 (1)	.....	303
図 290	01700NR 出土遺物実測図 (2)	.....	304
図 291	01700NR 出土遺物実測図 (3)	.....	305
図 292	01700NR 出土遺物実測図 (4)	.....	306
図 293	01700NR 出土遺物実測図 (5)	.....	308



# 第1章 遺跡と発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の位置

### (1) 名城公園遺跡の位置

**名古屋市北区** 名城公園遺跡は愛知県名古屋市北区名城1-2に所在する。名古屋市北区は、愛知県庁や名古屋市役所の所在する同市中区の北隣に位置する。名古屋市の面積は約326㎢あり、そのうち北区の面積は約17.5㎢を占める。また同市全体の人口が約2,340,000人であり、そのうち北区が約161,000人である（以上の数値は令和7年10月現在）。このように北区は人口密度の高い都心部に属するが、とりわけ遺跡の名称にある名城公園は、その名の通り特別史跡名古屋城（以下、名古屋城）から連続する都市公園である。ちなみに遺跡のほぼ中心（北緯35度11分24秒、東経136度54分09秒）から名古屋城天守までの距離は約650m、愛知県庁までの距離は約700mである。

**名城公園北園** 名城公園は、第二次世界大戦の空襲で焦土と化した名古屋市の戦後復興計画の一環で昭和24（1949）年に整備が開始された総合公園である。その面積は80.41ha（約800,000㎡）である。その内訳は、名古屋城二之丸・三之丸などの南園と名古屋城北堀から北側の北園で構成される。北園は、芝生広場や野球場・ラ

ンニングコースなどが整備され、主にスポーツに親しむ空間として利用されてきた。その面積は21.79haである。これほどの広大な空間が都心部に存在したのは、第二次世界大戦の終了まで当該地が大日本帝国陸軍（以下、旧日本陸軍）第三師団の練兵場（名古屋城北練兵場、以下同）であったことに起因する。

**北練兵場** 名古屋城は明治2年（1869）に尾張徳川家から明治政府に献上され、その敷地には旧日本陸軍第三鎮台が設置された。その後明治4年（1871）に第三師団が設置された。周辺の土地は地元に払い下げられていたが、師団設置に伴い名古屋城北側の広大な土地が北練兵場として施入された。なお、北練兵場に対して名古屋城東方の三之丸地区には東練兵場も設置されており、現在の独立行政法人名古屋医療センターから法務局などの所在地が相当し、平成14年度（2002年）の愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査において、陸軍の施設跡が確認されている（愛知県埋蔵文化財センター2004『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第127集）。

北練兵場は写真資料などによれば（陸軍第三師団1929『昭和四年七月名古屋防空演習写真帖』愛知県図書



図1 名古屋市の位置図

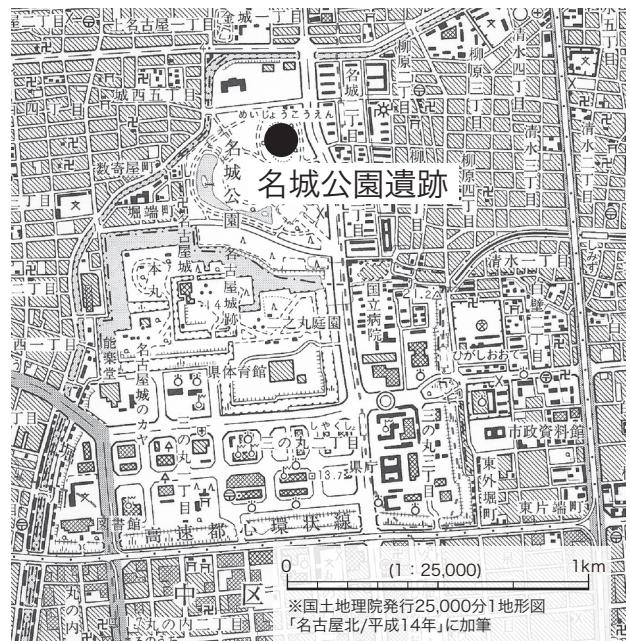


図2 名城公園遺跡の位置図

館蔵)、広大な広場を基本とする構成になっており、極東米軍撮影の航空写真(国土地理院空中写真閲覧サービス)によれば、広場の北側には演習用の塹壕と思われる溝状施設がみえる。また各地の練兵場は最新技術の実験・演習場の側面もあり、大正4年(1915)に行われた東海七州京阪大飛行では、複葉機(モーリス・ファルマン式1913年型、16号機)が北練兵場に着陸した状況を名古屋城天守を背景に撮影した当時の絵葉書がある。その後、昭和期に戦時体制が強まると練兵場東部には高射砲陣地が設置され、終戦に至っている。

**下御深井御庭** 北練兵場の土地が尾張徳川家から引き渡されたのは明治22年(1889)である。それ以前は、尾張徳川家の所有地として、耕作地(田畑)が営まれていた。この耕作地は明治維新後に徳川家が名古屋城から出る際にそれまで下御深井御庭と呼ばれる徳川家の庭園や新屋敷のあった地域を開墾したものである。その際あるいは北練兵場の造営によって、庭園などの諸施設はことごとく滅失したと広く考えられており、「この名園も、明治維新後は、まったく破壊されて、第三師団の北練兵場となり、むかしの面影を失った」と評されている(織茂三郎1967「名古屋城庭園の古絵図」『増補新版 名勝史蹟 名古屋城の庭園』名古屋城叢書3 名古屋城振興協会)。この評価は広く一般的で、例えば名城公園北園の案内板に下御深井御庭を彷彿とさせるものではなく、令和3年度の発掘調査着手前の段階で、同公園内には名古屋市教育委員会が設置した『御深井焼窯跡』の標札がある

のみである。この標札も正確な窯跡の位置に立てられているとはいえず、岡本柳英が写真で示した「御深井焼窯址」は大津通の東側に所在したことを示唆している(岡本柳英1967「477 御深井焼窯址」『名古屋の史跡と文化財』名古屋市教育委員会)。

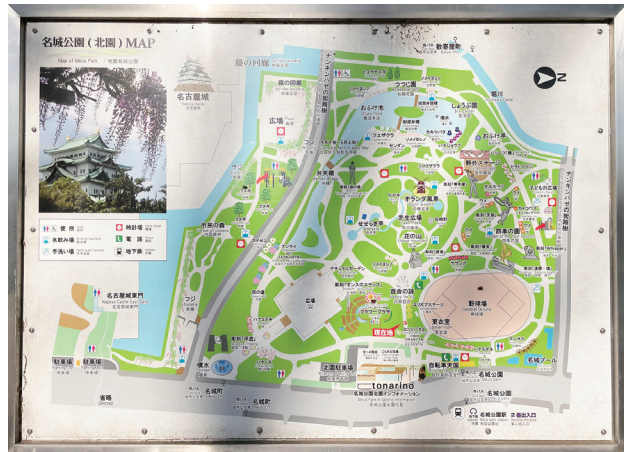


写真1 名城公園北園の案内板(2021年11月)



写真2 名城公園北園の野球場(2021年11月、北東から)



写真3 名城公園北園からみた名古屋城(2022年3月全景撮影時、北から)

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

### (1) 愛知県新体育館建設と名城公園遺跡

**愛知県新体育館の計画** 令和 2 年(2020)、愛知県は名古屋市中区二の丸に所在する愛知県体育館(以下、県体育館)に代わる愛知県新体育館(以下、新体育館)の構想を発表した。従来の県体育館は大相撲名古屋場所(夏場所)の開催場として全国的に著名な施設であるが、昭和 39 年(1964)に新設された建物であることから老朽化が進んでいた。そのため、新体育館建設計画が立ち上げられたのである。

**名古屋市教育委員会の試掘調査** 計画段階における新体育館の事業予定地やその周辺には、顕著な埋蔵文化財包蔵地(すなわち遺跡)が知られておらず、愛知県の埋蔵文化財包蔵地台帳(以下、県遺跡台帳)にも記載がなかった。しかし新体育館事業に伴って計画された、名古屋市営地下鉄名城線の名城公園駅への連絡地下通路(地下鉄横断施設)はその東側に位置しており、その北東には城北新町遺跡の所在が既に知られていた。城北新町遺跡は地下鉄工事で発見された遺跡でその範囲は明確でなく、遺跡地図においても点で表示されていた。このような状況において名古屋市教育委員会では、文化財保護法第 99 条に基づき、周知の埋蔵文化財包蔵地外として連絡地下通路建設に伴う試掘調査をその隣接地である名城公園北園内(名古屋市北区名城 1 丁目 4 番 1)で令和 3 年(2021)6 月 30 日に行った。調査面積は 12 m<sup>2</sup>である(県文書番号:3 文芸 1044 号、令和 3 年 7 月 8 日)。試掘調査では古墳時代の土師器が出土している。そして、文化財保護法第 94 条に基づき名古屋市長から届け出(令和 3 年 7 月 14 日)のあった周知の埋蔵文化財包蔵地外(名古屋市北区名城 1 丁目 4 番 1、同名城 2 丁目 1 番、2 番、3 番)における地下鉄横断施設の建設工事について、愛知県からは発掘調査を行う指示が出された(県文書番号:3 文芸 1165-1 号、令和 3 年 7 月 29 日)。

**愛知県による試掘調査** 一方、名城公園北園内に計画された新体育館の事業用地について、愛知県スポーツ局競技・施設課新体育館室長から遺跡の有無について照会があった(令和 3 年 7 月 27 日)。この時点で遺跡としての認定は未了であったが、その直前にあった名古屋市による試掘調査の成果をふまえ、文化財室からは試掘調

査の必要ありとの回答がなされた(県文書番号:3 文芸 1198 号、令和 3 年 7 月 27 日)。これに基づき 9～11 月に、愛知県埋蔵文化財調査センター(以下、県埋蔵文化財調査センター)では名城公園北園における試掘調査に着手した。試掘調査はトレンチ掘削による遺構と遺物の有無確認が主目的で、トレンチの総数は 50 か所で合計面積は 787 m<sup>2</sup>である(成果は後述)。

試掘調査の成果をうけて、当該地における遺跡の所在について、以下のように県遺跡台帳に新規記載された(県文書番号:3 文芸 1853 号)。

番号 002027

名古屋市北区名城 1 丁目 2-13 外  
集落跡、その他の墓、遺物散布地  
弥生～奈良、中世～近現代

そして令和 3 年 11 月 24 日、文化財保護法第 93 条に基づき、愛知県知事より名城公園遺跡(北区名城 1 丁目 4-1)における愛知県新体育館建設を目的とする土木工事の届出が提出された。これに対して県文化財室からは発掘調査の通知がなされている(県文書番号:3 文芸 1927 号、令和 3 年 11 月 29 日)。

### (2) 試掘調査の実施

**試掘調査の経過** 以上の経緯から名城公園北園の事業予定地やその周辺を対象地として、遺跡の有無を確認する試掘調査が行われた。調査は県埋蔵文化財調査センターが担当し、その期間は令和 3 年(2021)10 月 11 日～11 月 10 日である。調査は対象地の北西隅から開始された。その手法は、主に植樹の間隙に設定されたトレンチを重機掘削し、遺構や遺物の検出を行うとともにトレンチ壁面を観察して土層の堆積状況を確認するものである。掘削後、遺構と壁面の土層を測量して記録された。トレンチの規模は大半が狭小であるが、一方で野球場に設定されたトレンチ(No.44 など)は長大で、当該地点では旧河道の堆積を確認することができた。また、新体育館建設予定地だけでなく周辺においても多数の遺物出土がみられた。

**試掘調査の成果** 試掘調査に先立って名城公園北園各

地点の現地表面における標高が測定された（図 3）。標高値は約 4.3～5.9m の幅があるが、園路（ランニングコース）が約 4.4～4.7m で園路周囲の植栽空間がそこから約 0.3～0.5m ほど高く盛土がなされている。野球場は園路とほぼ同じ標高でほぼ水平になっている。

試掘調査では、名城公園北園内に沖積低地の微高地部分と埋没した旧河道部分からなる 2 つの地形的要素が存在することが確認された。それによると、野球場の南端付近から北西方向へカーブする旧河道とそこから分岐するような規模の小さな旧河道があり、いずれも北園の北西隅が堀川方向へ抜けていると想定された。これに対して微高地部分は主に旧河道の西側に存在し、該当位置のトレンチからは竪穴建物跡の可能性のある遺構や古墳時代の土師器や須恵器が出土したことから、当該期の集落遺跡が想定された。また一部ではその下層から弥生時代の土器が出土している。

出土遺物の大半は江戸時代後半～明治時代のものである。当該期の遺構分布が想定された区域（本発掘調査の 21Aa 区）ではトレンチ 9 で瀬戸・美濃窯産の瓶掛（図 5-1）が出土している。鎬のある頸部を中心に緑釉が掛かっており、時期は江戸時代後期である。トレンチ 10 からは巴文の軒丸瓦と唐草文軒平瓦の中心飾り部分が出土している（図 5-2・3）。いずれも江戸時代のものであるが、後者は瓦当文様が摩滅しており通常的使用方法では考えられず、庭園の園路やその脇に並べて立てて埋められた「飾り瓦」として使われた可能性がある。トレンチ 11 からは緑釉の掛かった施釉丸瓦が出土している（図 5-4）。凸面に円形の色違い部分があり、葺いた時に斑点状の模様となるようになっている。瀬戸窯で生産されたものであろう。施釉瓦は名古屋城二之丸庭園で出土する傾向にある。図 5-5 は美濃窯産の徳利で鉄釉で「番」の文字が判読できる。図 5-M1 は小銃の葉莢で陸軍練兵場に関わるものであろう。トレンチ 18 からは肥前産染付磁器皿（図 5-5）や瀬戸・美濃窯産の鉢で「復興織部」と呼ばれる鉄絵の施されたもので江戸時代後期である（図 5-8）。同トレンチからは磁器製の碇子（図 5-10）や底部に「SMC」と表示のあるインク瓶、さらには内面に星形のマークが描かれた白磁鉢（図 5-11）が出土している。これらは近代のもので特に白磁鉢はいわゆる（陸）軍用食器で直径約 12cm であることから「4 寸深鉢」と呼ばれる。明らかに練兵場に関わる遺物である。トレン

チ 22 では図 5-14 は瀬戸窯産陶胎染付の箱形碗で連房式登窯第 8～9 小期で江戸時代後期、15 は瀬戸・美濃窯産の花立て、16～18 は瀬戸・美濃窯産以外の製品、19 は瀬戸窯産陶胎染付の大型碗で連房式登窯第 8 小期、20 は近代の皿、である。特徴的なものとして相馬焼青磁碗がある（図 5-21）。底部内面にウマの陽刻があり、その外面に「相馬」の刻印がある。19 世紀代とみられ名古屋での出土は少ない。また図 5-23～25 は型紙使用の磁器染付の碗で明治時代前半である。一方図 5-27～30 は銅版転写の磁器染付で明治 30 年代以降となる。図 6-38 も染付の鉢だが瀬戸窯産ではなく肥前産の可能性がある。図 6-36 は水滴で銅版転写。図 6-37 は白磁の小杯で左回りに配列された文字は「工三下土集會所」と判読できる。岐阜県多治見市にはこのような記念品類の生産を集中的に行っている製陶所がある。図 6-39 は東濃産の山茶碗で 11 型式（脇ノ島窯期）で中世の資料は少数派である。図 6-42 は瀬戸・美濃窯産の小瓶で江戸時代中期、43 は瀬戸窯産の練鉢で連房式登窯第 8 小期、45 は同じく第 9 小期、48 は片口鉢と思われ江戸時代後期である。S2 は方形の石造物の一部である。図 6-49 は奈良時代の須恵器杯で比較的大口径が特徴である。図 6-54 大窯期の天目茶碗を打ち欠いて作った加工円盤である。トレンチ 30 で出土した 51 は、須恵器高杯の蓋だが隅丸形状に歪んでいる。このような歪んだものは旧河道で多量に出土している。図 6-53 は絵瀬戸と呼ばれる江戸時代後期の瀬戸窯産大皿である。図 6-55 は肥前産染付筒形碗で 18 世紀のものである。図 6-57 は匣鉢で御庭焼に関連するものであろう。図 6-58 と 60 は須恵器の杯身・無蓋高杯、63 は江戸時代後期の瀬戸窯産植木鉢、59 は古墳時代前期の台付鉢。図 7-S2 は磨製石斧とみられ石材は砂岩である。図 6-62 は施釉熨斗瓦で凸面に鉄釉、凹面は無釉で滑り止めのカキメが施される。しかし瀬戸窯産のものはこれより器厚が厚い傾向にあるため、本資料は御庭焼で庭園内で生産された可能性がある。トレンチ 47 は古墳時代後期集落の想定域にあり、そこからは 6 世紀～7 世紀前半の須恵器甕（図 7-64）が出土している。胴部外面は全面を整ったタタキ痕が覆いさらにカキメ状の横方向施文がなされる。内面は指ナデで抑え具の痕は消されている。

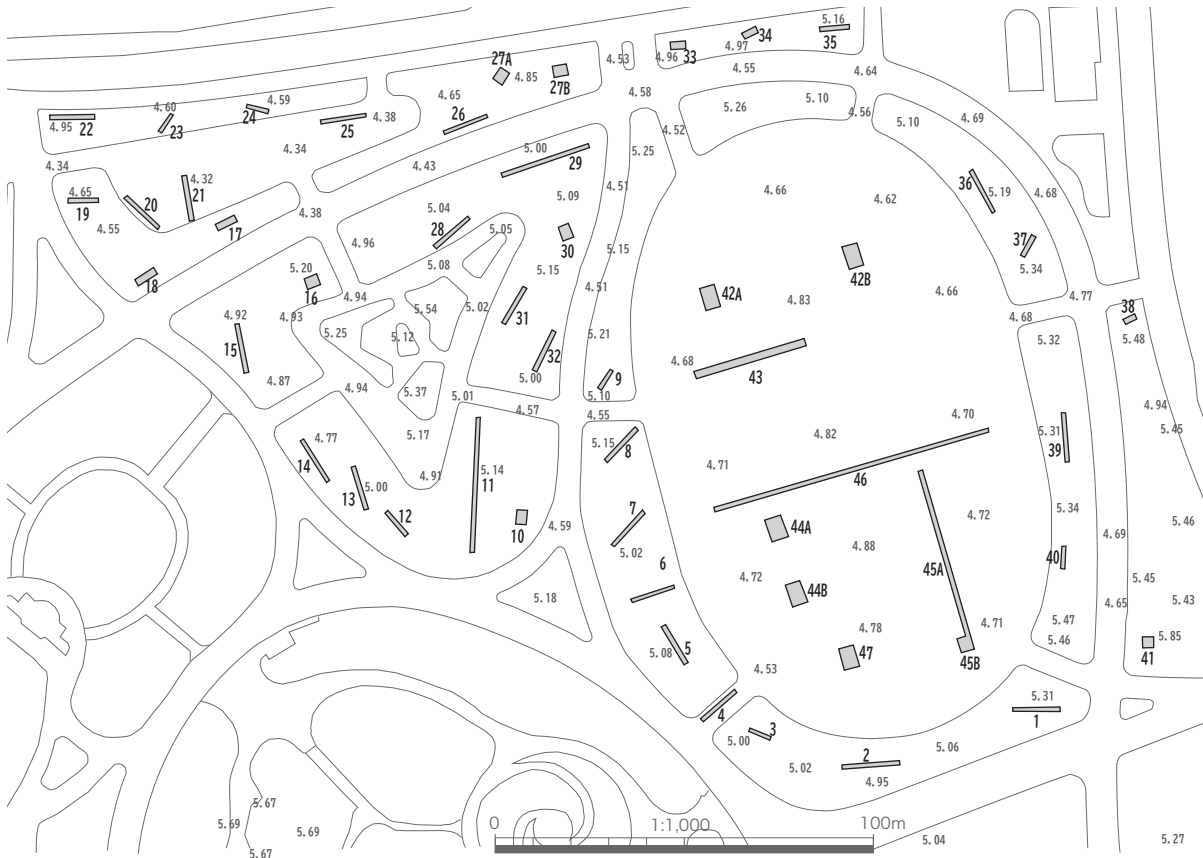


図 3 試掘調査トレンチの配置と地表面の標高図（愛知県埋蔵文化財調査センター提供）

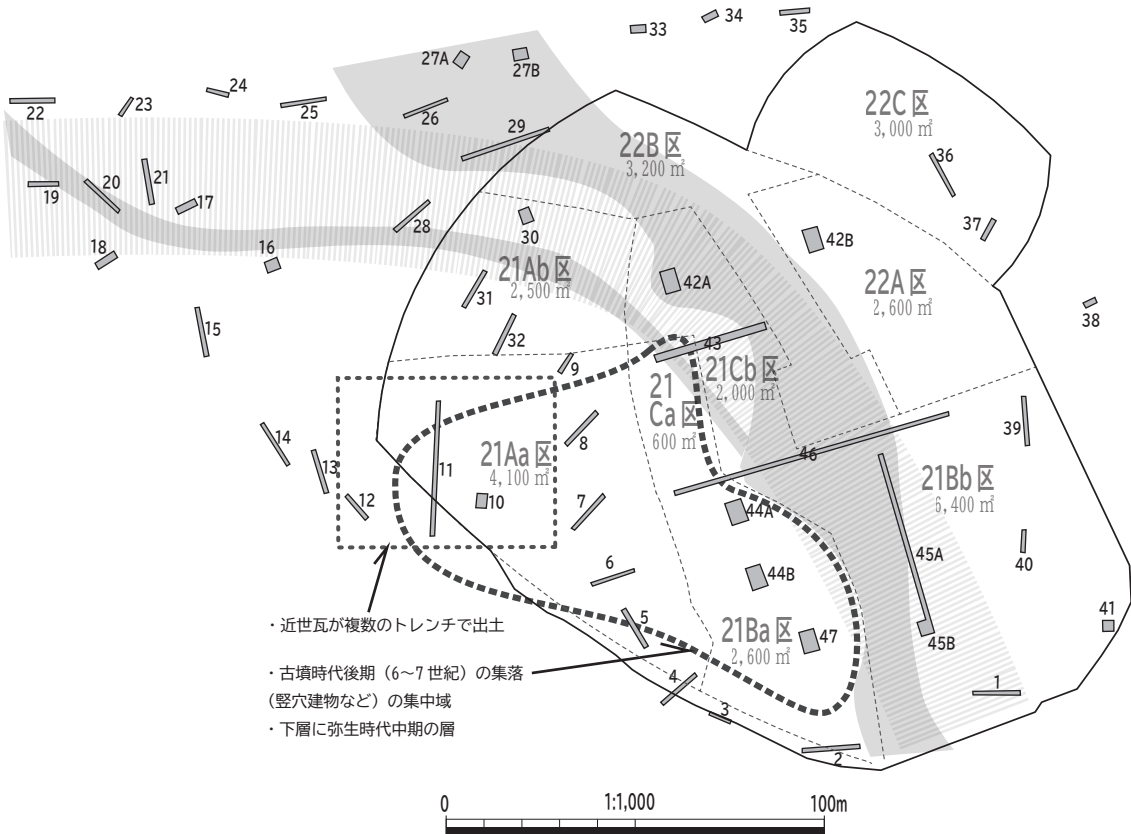


図 4 試掘調査による遺構面の標高と想定された遺跡の概要図（愛知県埋蔵文化財調査センター提供図をもとに作成）



図 5 試掘調査出土遺物実測図 (1)

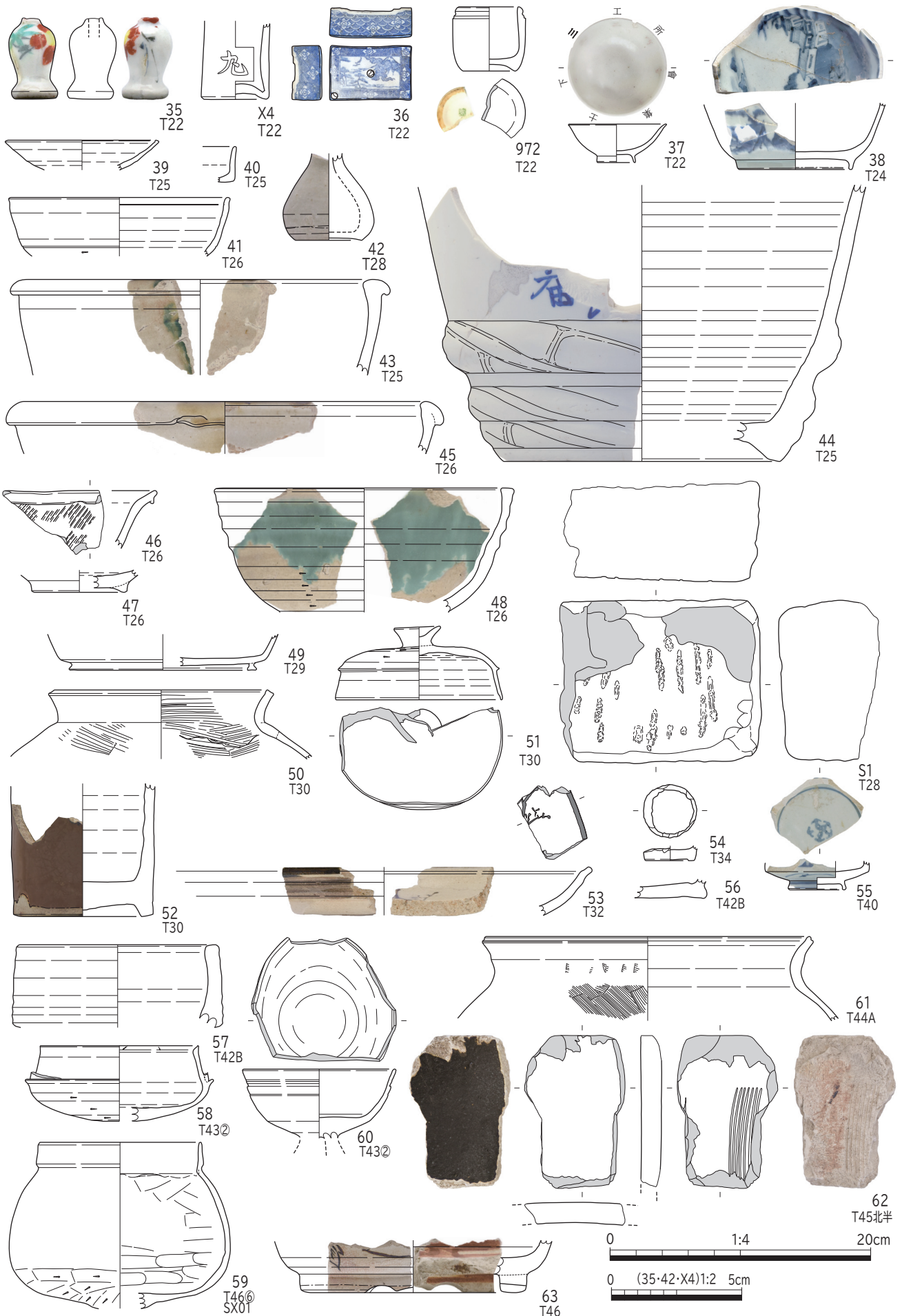


図6 試掘調査出土遺物実測図(2)

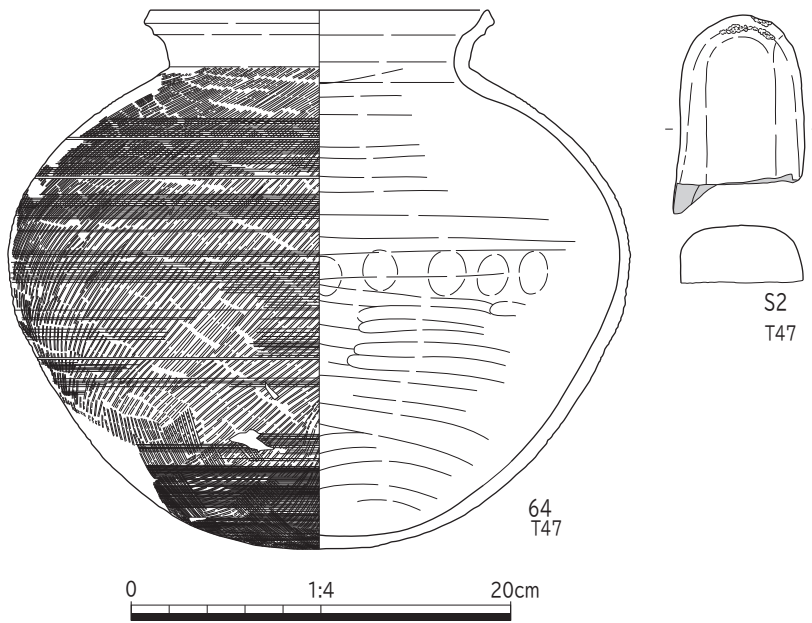


図 7 試掘調査出土遺物実測図(3)

### (3) 本発掘調査の実施

**調査区の設定** 試掘調査を受けて、名城公園遺跡における本発掘調査を要する範囲が示された。それは新体育館の外壁・外構のラインを基本とし、一部はその建設に伴って掘り下げることになる範囲を組み入れたものである。その面積は 27,000 m<sup>2</sup>におよぶ広大な規模となった。しかしこれほどの範囲を一括で発掘調査するには準備工などの期間が膨大になり、本調査開始時期が後ろへずれ込んでしまうことになる。そこで調査範囲を 9 区の発掘調査区に区分し、その単位ごとに準備工を実施することで順次本発掘調査に着手できるようにした。その区分は、3 班の調査班体制（後述）に対応させたもので、まず令和 3 年度分と令和 4 年度分に大別しそれぞれを A～C の 3 区に区分して 21A～C 区と 22A～C 区の 6 区に区分した。以上の各調査区の形状は、試掘調査によって想定された旧河道の位置を基軸に設定された。とりわけその南西～南側で遺構・遺物が濃密であるために調査の長期化が考えられたので、最も先行して調査に着手すべき範囲として 21A～C 区が割り当てられた。そしてそれぞれを調査班が対応しうる規模に小区分（a, b）した。結果調査区は 9 区となり、1 調査区の面積は約 3,000 m<sup>2</sup>とされた。

**本発掘調査の体制** 先述のように、本発掘調査に着手する以前から新体育館建設の工程がほぼ確定した状態であったため、自ずとそれまでに発掘調査を完了させる

必要があった。これに対応するためには、迅速な準備を進めていち早く本発掘調査に着手するだけでなく、表土掘削で発生した排土の場外搬出が必須であり、加えて想定される旧河道を重機を利用して掘削するなど機械化による調査手法が考えられた。排土については、事業全体の準備段階で公園の樹木抜根や埋設物撤去に伴う排土が生じることから、産業廃棄物と区分の上で場外の土置き場への搬出が計画され、引き続き着手した表土掘削や河道跡掘削による多量の排土についても同様に行われた。

しかし、各遺構の掘削や調査記録の作成にはそれらを検知し必要な情報を把握できる調査員や発掘作業員の存在が不可欠である。また、デジタル化が進んだとはいえ人力が基本であることから対応能力には限界がある。したがって、調査範囲全体で複数の調査班が同時に作業を進めることで工期の短縮が図られることとなった。

そこで発掘調査業務を行う前田建設株式会社の現場代理人の下に、愛知県内での発掘調査実績を有する民間の発掘会社に所属する施工管理技士（現場代理人補）と調査員、測量士からなる班体制が組織され、各調査班に約 20 名の発掘作業員と一般の土木作業員や重機オペレーターなどが配された。これを 1 調査班として、各調査班が並行して発掘調査を進めることになった。準備工と表土掘削が最も先行する 21Aa 区から着手し、その後 1～2 週間ごとに順次新たな調査班が乗り込むかたちで発掘調査が開始された。以上の調査組織や発掘調査の着手時期については、令和 4 年 1 月 14 日に前田建設株式会社から提出された施工計画書に明記された。

これに対して、愛知県埋蔵文化財センターは本発掘調査における管理を愛知県から委託され、各調査班に対して 1～2 名の調査課職員が管理員として配された。各調査班での調査活動は、管理員の指導で遺構検出から遺物の取り上げと観察・記録が行われ、その仕様は埋蔵文化財センターの『愛知県埋蔵文化財センター発掘調査マニュアル 2021』に基づいている。このように各調査班は主体的に発掘調査を進めることになったが、旧河道や

溝のような調査区を超えて連続する大型遺構の扱いや全景撮影など全体工程に関わる事項については、愛知県埋蔵文化財センターの管理員（永井邦仁）と前田建設株式会社の現場代理人（高江俊之）が中心となって調整を行った。

調査班の構成は以下のとおりである。

- 【1 班】 管理員 永井邦仁  
現場代理人補 鈴木良知  
調査補助員 湯川善一  
・ 山内信浩・鷺坂有吾  
・ 鈴木和古  
測量士 稲生貴仁
- 【2 班】 管理員 宮腰健司  
現場代理人補 後藤英樹  
調査補助員 高橋理恵  
・ 村松利康・高梨雅幸  
測量士 宮本亮太
- 【3 班】 管理員 石黒立人  
現場代理人補 川元康民  
調査補助員 杉山敬亮  
測量士 舟橋哲郎
- 【4 班】 管理員 早野浩二  
現場代理人補 枋原正美  
調査補助員 生駒昌史  
測量士 古家貴浩
- 【5 班】 管理員 早野浩二  
現場代理人補 小林俊之  
調査補助員 小野瀬一路・香山周亮  
測量士 山崎弘勝
- 【6 班】 管理員 早野浩二  
現場代理人補 矢井明  
調査補助員 樋田泰之  
測量士 白木宏幸
- 【7 班】 管理員 木村有作  
現場代理人補 齋藤宣明  
調査補助員 雨宮瑞生  
測量士 尾崎裕司
- 【8 班】 管理員 樋上昇  
現場代理人補 山田文彦  
調査補助員 平井美典

- 測量士 高橋啓介
- 【9 班】 管理員 鈴木恵介  
現場代理人補 川口洋次郎  
調査補助員 日紫喜勝重  
測量士 金子堅二



図 8 調査区配置図（調査着手時）



写真 4 発掘調査風景（東から）

## 第 3 節 発掘調査の経過

### (1) 準備工事

**準備工事** 建設工事のための事業用地は名城公園北園の多くを占め、さらに名古屋市による北園内の整備も同時進行であったため、それまで樹木と野球場・園路（ランニングコース）などで構成される各施設群の改修や撤去が令和 3 年 11 月より広範囲にわたって本格化した。事業用地内に関しては、野球場の防護ネットや照明施設、便所などの構造物の解体とともに、周辺の樹木の伐採と園路周辺の盛土の除去や埋設物（電気配線・雨水管）の撤去が具体的な内容である。本書ではこれらの施工を発掘調査の準備工事として位置づける。特に、盛土の除去と施設の地下構造物・埋設物の撤去は土の掘削を伴うものであり、県文化財室による立ち会いのもとに進められたが、令和 4 年 1 月からは埋蔵文化財センターの職員もそれに加わった。

準備工事は樹木伐採から開始された。その抜根は遺構や包含層への影響が想定されたため当初は控えられていたが、根の張り方が浅く公園整備に伴う盛土の範囲にとどまっていたことから、盛土除去時に抜根も同時に進められていった。これに対して照明施設などの地下構造物は地下数 m にまで達するものがあり、一部で発掘調査の表土掘削段階と併行して撤去作業が行われた箇所もあった。また埋設物は、ほとんどが園路の下またはそれに沿って施工されたものが大半であったが、施工時の設計図とは異なる箇所に埋設されたりその後移設や撤去されたりしたものがあつた。そのため埋設物を探して掘削範囲が広がることもまあり、例えば本報告の出土遺物で示した「御庭方」墨書のある陶器火鉢は、そのような経緯で出土したものを埋蔵文化財センター職員が回収したものである。また、野球場の排水管のように葉脈状に緻密に配置されたものがあり、撤去に時間を要することや一部は遺構面に到達しているものもあることから、表土掘削時に撤去することで対応した。

準備工事に伴う掘削の大半は盛土にかかるものであったことから、近代より古くさかのぼる時期の遺物はほとんどなかった。試掘調査の成果から、公園地表面下約 0.5～1.0m の土を盛土と判断し、標高約 43m の水平な状態に削平することで、その後の表土掘削への進行がスムー

ズになされるように進められた。また当初は表土掘削時の除去も検討された抜根も、根の張り方が浅いことから同時に進められた。

### (2) 発掘調査の経過

**表土掘削** 以上のように 1 週間ほどで調査範囲の約 40% で盛土除去が完了したことから、1 月 20 日よりその南西隅（21Aa 区）より表土掘削が開始された。排土は野球場に集積された後に場外へ搬出されていった。表土掘削はそのまま南西壁に沿って進み、数日後には 21Ba 区・21Bb 区の表土掘削に着手して、重機の後退によって調査範囲の南側から第 1 遺構面（検 1 面）の遺構検出に取り掛かった。これらの調査区は試掘調査で江戸時代の遺構があると想定されており、その下層状況も合わせると調査期間が最も長くなると考えられたからである（以上、第 1 段階）。しかし野球場の北半部を排土集積場として確保する必要があつたため、一旦表土掘削の対象を調査範囲西部へと変更した。また、4 月に入ると名城公園北園北東隅にあつたプールの解体がほぼ完了したことから 22C 区の表土掘削に着手し、その北東約 4 分の 1 は攪乱であることを確認した。また調査範囲の中央の旧河道を横切る東西方向の土層断面（中央ベルト）を設定し、それ以南の旧河道の埋土を遺物の出土状況を確認しながら重機で掘削した（以上、第 2 段階）。そしてその土層断面の記録が完了後、ほぼ未着手となつていた旧河道の北半部について表土掘削とその埋土の重機による掘削を進め、最終的に表土掘削が完了したのは 6 月 17 日

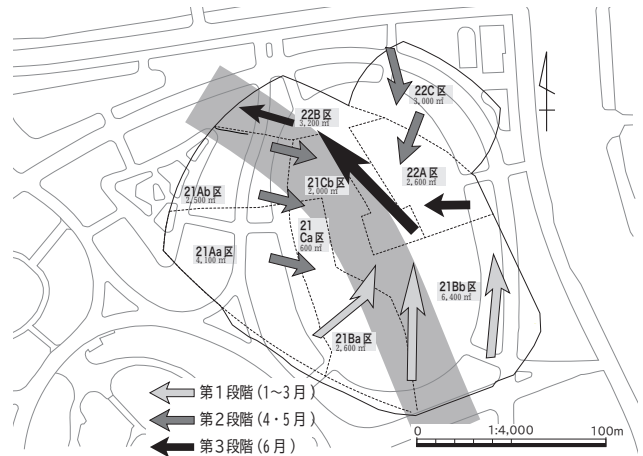


図 9 表土掘削の進行状況図

であった（第 3 段階）。

**遺構の検出と掘削** 遺構検出は通常の手法で行い、随時測量を行った。遺構番号や遺物の取り上げ番号は、各調査区で調査が同時進行することを前提に、また大規模な遺構が調査区間で連続して検出されることも見越して、遺跡全体で通番とした。よって、これらの数値は最大で 5 桁までの使用が想定されたので、遺構番号は「00001」から最終番号「02299」まで、遺物取り上げ番号は「d-00001」から最終番号「d-02378」までを付した。なお、当センターのマニュアルでは、遺構の種別記号は番号の末尾に付している。

遺構の掘削は、先述したように大規模な旧河道と包含層に限定して重機の使用も行った。これは特に旧河道では遺物の出土範囲が河岸近くに限られることもある。もちろん遺物の出土が確認できた時点で重機掘削を止め、人力での掘削へと切り替えて遺物とその出土状況の把握を行った。一方、竪穴建物跡や溝・土坑などの人為的構築の遺構は土層断面を設定し、その埋土の記録も行った。

**成果のまとめと地元説明会** 発掘調査成果の主体は測量遺構図と写真および遺物である。遺構図は発掘調査終了後約 2 か月を要して遺構観察一覧表や遺構写真とともに整理を完了した。遺物についても発掘調査と併行して洗浄と収納を進めたが、完了には同様の期間を要した。遺物は 27L コンテナ換算で 570 箱と大型木製槽（全長約 2.5m）1 点である。

発掘調査の経過は、3 回の速報を作成し工事用仮囲いに掲示して近隣の方に広報した。また、調査終盤の 5 月 28 日（土）に地元説明会を開催し、出土遺物の展示や、遺構を間近で観察できる見学コースを設置して、地元の方を中心に 370 名の来場があった。コロナ禍でさまざまな制限のある中での発掘調査であったが、6 月 30 日の竪穴建物跡 2223SI の調査をもって現場作業を完了した。

表 2 発掘調査工程表

	令和 3（2021）年度				令和 4（2022）年度	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月
21Aa区	■	■	■	■	■	
21Ab区	■	■	■	■	■	
21Ba区		■	■	■	■	■
21Bb区		■	■	■	■	■
21Ca区			■	■	■	■
21Cb区			■	■	■	■
22A区				■	■	■
22B区					■	■
22C区						■

表 1 調査日誌抄（5 月 11 日は最も佳境となった頃の例示）

2022年1月11日	発掘調査準備工への立ち会い開始。
1月13日	掘りあがった土は、褐灰色シルトで近世の耕作土によくみられるものだが、その中に近世後期の陶器類が含まれている。鉢の底部に「御庭方」などと墨書されたものも出土。
2022年1月17日	駐車場は標高4.8mで盛土削平。調査区予定地は標高4.6mで削平。
2022年1月20日	21Aa区位置出し測量、表土掘削開始。
2022年1月21日	21Aa区の粗砂層は新しい時期、その下位にある暗褐色粘質シルト包含層を重機で慎重掘削し、その下面（明青灰色シルト）で遺構検出。
2022年1月25日	スポーツ局から調査区外周ラインは建築計画図の外壁ラインと伝達。
2022年2月1日	人材シルバーセンターからの入所者オリエンテーション（40名）
2022年2月7日	21Ba区、約30cm掘り下げたところで椀瓦や径5cm程度の白色系円礫（玉石）が混じる明黄褐色砂層
2022年2月16日	愛知県県民文化局長・スポーツ局視察。、株式会社前田建設の安全パトロール実施。
2022年2月22日	21Bb区東縁の名古屋市調査区域との境界について名古屋市と現地確認。
2022年2月25日	コロナ感染防止のための休憩所の利用方法について協議する。
2022年3月10日	調査範囲北側の排土山がほぼなくなってきたので搬出を一旦停止。3月28日に再開予定。来月以降の対応については再度協議。
2022年3月25日	ラジコンヘリによる全景撮影（1回目）。
2022年4月21日	6月末の工期満了に向けて、どの区域から調査が完了し、排土置き場や車路として利用可能なかの検討。概ね21Aa区南西部、21Bb区南東部、22C区での利用を順次進めていく（21Aa区についてはすでに排土搬入開始）。
2022年5月11日	21Aa区：溝00654SD・00688SDの東側への延長部分を確認する目的で、重機で掘り下げた結果、00654SDがさらに直線的に延伸することを確認。一旦収束した00688SDも同じ方向でその延長部分でやや位置をずらして溝00697SDが確認された。溝の位置と層位から昨日までに取り上げた古墳時代前期の土器は溝に併ずる可能性が高いと思われる。溝の底部は微高地の西側への傾斜に合わせて下降する状況も確認。掘削後、00697SDの土層断面、完掘状況を撮影。/21Ba区：遺構掘削、竪穴建物完掘状況及び建物内遺構検出状況の写真撮影。00870SK柳ヶ坪型壺の取り上げ。調査区南端の近世常滑焼埋設土坑底面から出土する桶？木製品のエレベーション実測、取り上げ【高橋】。/21Bb区：遺構掘削、竪穴建物完掘状況及び建物内遺構検出状況の写真撮影。00870SK柳ヶ坪型壺の取り上げ。調査区南端の近世常滑焼埋設土坑底面から出土する桶？木製品のエレベーション実測、取り上げ【高橋】。/21Bb区：調査区西部の遺構全景撮影。中央ベルトの土層断面チェック【木村】。調査区東部、遺構検出開始【生駒】。河道中央ベルト前面で深掘り調査。現況からさらに約1.5m掘り下げたところ、右岸側で側方堆積段階の細粒砂層を検出。それを切り込むようにして小礫混じりの粗粒砂層が河道域ほぼ全体に広がっており、層中に古墳時代前期までの土器片（ローリング受けたもの多い）が出土【鬼頭・永井】。/21Cb区：調査区西部の遺構全景撮影。中央ベルトの土層断面チェック【木村】。調査区東部、遺構検出開始【生駒】。河道中央ベルト前面で深掘り調査。現況からさらに約1.5m掘り下げたところ、右岸側で側方堆積段階の細粒砂層を検出。それを切り込むようにして小礫混じりの粗粒砂層が河道域ほぼ全体に広がっており、層中に古墳時代前期までの土器片（ローリング受けたもの多い）が出土【鬼頭・永井】。/21Ca区：近世の溝00694SDは完掘状況撮影。大型土坑00679SKに重複する00601SKは土層断面撮影・図化後に残り掘削。南端の竪穴建物等の検出が想定される部分を掘り下げ。須恵器・土師器がまとまって出土する土坑00693SKは東側半分を掘削し、宙車型壺、陶形器台等、遺物が集積する状況を確認。遺物出土状況撮影後、取り上げ。/22A・C区：遺構検出（主に北部）と遺構掘削（竪穴建物跡など）。前者は21Bb区から続く古墳時代溝の北端と思われる箇所を検出。一方、北東から延びてくる浅い溝はやや北側に反っていくため交点がなさそう。後者は、砂地に立地しているため竪穴建物跡床面の検出が難しい。その北側の掘立柱建物跡では柱穴の大半に礎板（厚さ2cmほど）があるため半截記録後、さらに断割りを実施。束柱は直径15cm深さ5cm程度と小さい。
2022年5月28日	地元説明会のための最終整備、シート外し、写真パネル・遺物展示を完了。9:50には入口から歩道橋まで約50名の行列となったため10:00予定より早めて開場し12:00閉場。午後、名古屋市北区の区政協力委員来所、その後撤収。資料450部配付、感染対策の記帳に基づく集計から370名の参加とする。
2022年6月4日	中日新聞の取材
2022年6月15日	旧河道00900NRの北端付近を重機で砂層を掘削。その下位でみられる須恵器の集積を作業員で取り上げる。赤色顔料が内面に付着した須恵器杯身が出土。H-10号窯式期。
2022年6月24日	[contents]正午にラジコンヘリによる空撮(10回目)
2022年6月30日	[contents]21Ba区弥生時代竪穴建物跡2231SI調査、22A区大型竪穴建物跡1601SI補足調査。以上で現地調査終了。文化財室、スポーツ局による終了確認。
2022年8月19日	月間工程会議、遺構測量図や写真などの成果まとめや遺物搬入の日程を協議。
2022年9月21日	[process] 遺物搬入（アリーナ作業所→弥富→常滑）

## 第 4 節 室内調査の経過と報告書の作成

### (1) 工程

**出土遺物の資料化** 発掘調査報告書作成のための出土遺物の整理を中心とする室内調査は令和 5～7 年度に行った。出土遺物の構成は、①弥生時代後期～古墳時代前期の弥生土器・土師器、②古墳時代後期の須恵器・土師器、③江戸時代の陶磁器・近世瓦の 3 つに大別される。一方、確認された各遺構の時期は概ね上面から③→②→①の順に対応するはずであるが、短期間の発掘調査であったことと、一度に広範囲の遺構を調査対象としたことから、現地調査の段階において、時期はもとよりその性格を特定できていないものが多数に上った。したがってそれらを特定する過程は室内調査での出土遺物の検討を経る必要があった。そこで上面の遺構（若番の遺構番号）から順にその遺物を抽出して資料化を進めて、新しい時期の方から遺構の時期や性格を特定していく手法をとった。

出土遺物の抽出は、取り上げられた破片状態のものを接合してその形状を復元することから始めた。次に、時期を特定するために必要なその型式的特徴の判明するものを完形品はもとより破片にいたるまで抽出し、個体ごとに仮番号を付して管理し、いくつかの要素を記録した。そしてそこからさらに実測図や写真・一覧表などの方法でその情報を資料化（データ化）することが有効であるものを選別し、資料化を進めた。

資料化の方法は、主に正射投影法による遺物実測図とストロボ使用の室内撮影による遺物写真である。前者は、実測者が器具を用いて手描きした原図をパソコンでデジタル・トレースしたもので、それに拓本や撮影された画像を貼り付けた遺物トレース図を基本とし、一部は 3D スキャンから生成したモデルを基に作成したトレース図も含まれる。後者はスタジオをセットして撮影したデジタル画像である。資料の提示は、破片からもとの形状を復元的に示すことのできる遺物実測図が主体となっているが、その表面の色調や歪みなどより実物の状態を可視化することができる遺物写真を提示したのも相当数に上る。

**復元と保存処理** 以上の資料化に必要な範囲で遺物の形状保持を目的として充填材を用いた復元作業も行なっ

た。また木製品や金属製品のような脆弱な遺物については、保存のための処理を行なった。中でも旧河道から出土した古墳時代の大型木製槽（いわゆる田舟）は、全長約 2.5m という特大品で、かつほぼ全形が残存していたという資料的な価値があることから、室内調査期間の大部分を費やしての保存処理となった。

**自然科学分析** 出土遺物の資料化と併行して、それらに付着した炭化物などを試料とする放射性炭素年代測定や、木製遺物の樹種、旧河道内の貝塚から採取した土壌サンプルの洗別から得られた種実の同定などの自然科学分析は、分析業者に委託して実施した。

### (2) 報告書の作成と構成

**報告書の作成** デジタルデータとなった資料は担当調査員によって図版に構成され、発掘調査で作成された遺構図版と併せて文字情報とともに編集されて報告書（本書）となる。その作成期間は令和 7 年度の後半を充当し、さらにその最終段階に印刷・製本工程となった。

**報告書の構成** 室内調査の工程期間と出土遺物の資料化の進捗を考慮すると、先述のように進めた工程に従って、新しい時期・時代から古い方へ遡って順に記述することとした。時期・時代別には古墳時代の旧河道と集落遺構に関わる部分が大部分を占めることになり、分冊の構成においても当該期が第 1 分冊と第 2 分冊で分割されるかたちとなった。なお、遺構基本図と遺構・遺物写真は第 3 分冊に収めた。



写真 5 整理作業の状況

## 第 2 章 遺跡の環境

### 第 1 節 名城公園遺跡の地形

#### (1) 名古屋台地と沖積低地

名城公園遺跡は、第 1 章で述べたように特別史跡名古屋城の北隣に位置するが、その立地環境は大きく異なっている。まず、名古屋城は熱田台地に所在する。例えば天守の位置は標高約 16m で台地の中でもとりわけ高い位置にあり、周辺に位置する名古屋城三の丸遺跡では標高約 12～13m を測る。台地は白川公園など一部に開析谷が入るもののおおむね平坦な地形であり、台地南部の金山地区でも標高約 10m である。名古屋城の北辺や西辺は台地縁辺と重なり、急な崖線を利用した立地となっている。一方、名古屋城よりも低い標高にある名城公園遺跡とその周辺は、沖積低地に分類される。その標高は約 5.1m で、台地との高低差は 8～10m になる。この低地も、等高線によれば東から西へわずかな傾斜がみられるのみで概ね平坦であるが、遺跡の基本土層で示すとおり河川堆積を基本としているので、微高地（自然堤防）と後背湿地や旧河道からなる微細な凹凸が存在する。

#### (2) 矢田川と大幸川

名城公園遺跡の所在する名古屋市北区の大部分を占める沖積低地は、庄内川流域に属するが、こと名城公園遺

跡のある熱田台地北縁直下は、その支流である矢田川の流域に該当する。矢田川は瀬戸市内の赤津川に端を発し、香流川などが合流して名古屋市北区内で庄内川に合流する。その現河道は大きく北へ振れて比較的標高の高い地点を流れているが、等高線からみればより直線的に西進していた時期もあったことがうかがえる。その名残の位置にあるのが大幸川の河道である。この大幸川も江戸時代（天明年間）に河道の人為的な改変（付け替え）や暗渠化が進んでその姿をみることはほとんどできない。暗渠（下水幹線）化された現在の河道は、矢田川と香流川の合流点付近を発し、名城公園遺跡の北方を西へ直進している。同川には、大曾根付近で西道川や地蔵川といった熱田台地縁辺を流れる小河川が合流しており、これらがかつての矢田川の状況を示唆しているとみられる。

熱田台地北側の矢田川に対して、西側は慶長 15 年（1610）の名古屋城築城に際して開削された堀川が南進している。これにより名古屋城と城下町への水上交通アクセスが向上するのだが、人工河川であるがゆえに比較的標高の高い地点を流れている。堀川の西側にはかつて江川もあったが（現在は埋め立て・暗渠化）、これも同様に高い地点を流れている。そこからさらに約 1km 西方を南流する中川（笈瀬川）は、その蛇行する形状から比

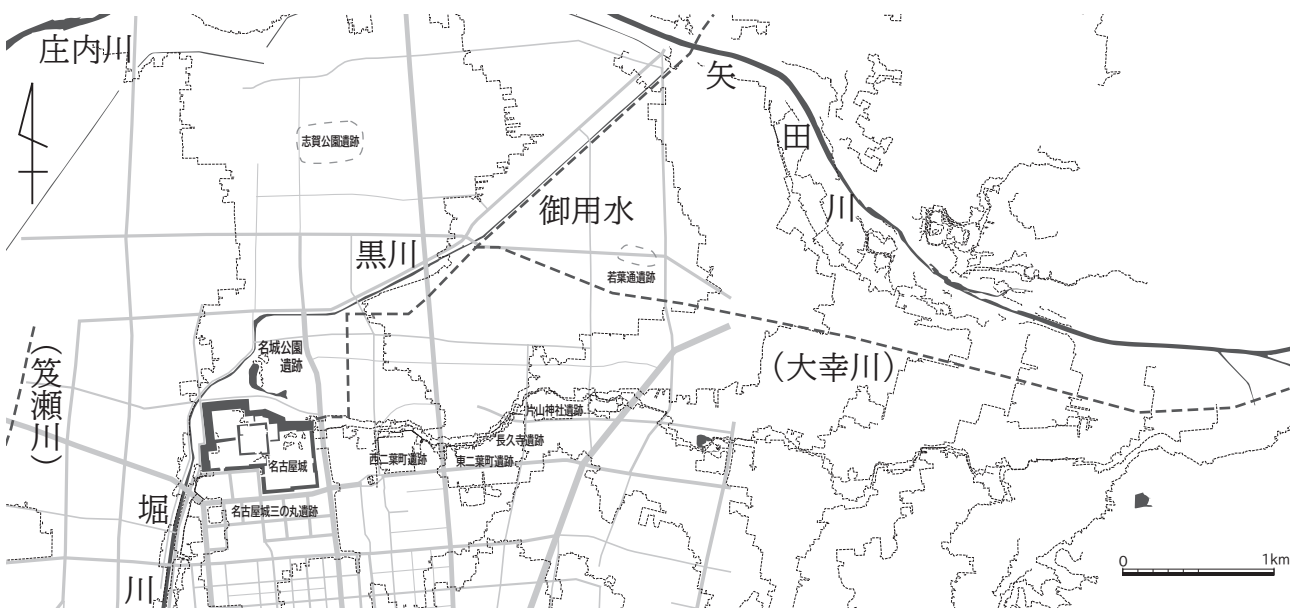


図 10 熱田台地北縁部の等高線と矢田川の関係図

較的古い河道に近いと考えられる。

以上のように大幸川や笈瀬川が名城公園遺跡を取り巻く沖積低地を流れる旧河道の一端を示していると想定されているが、現在はこれらは繋がっていない。大幸川(暗渠)は現在黒川に合流しているが、黒川は明治9年(1876)に開削された人工河川である。その黒川は、名古屋城築城後に外堀へ給水するために寛文3年(1663)に開削された御用水に併行している。御用水は庄内川から取水し矢田川を潜り(延宝4年(1676)以降)、南西方向に直進し名古屋城の北東隅から外堀に流入する。大幸川は下流での洪水を回避する目的で天明4年(1784)堀川へ流れ込むように改変されている。これ以外にも庄内用水などの人工河川が造られており、それらが南北方向に横切ることによって従来の自然河川が失われていく。

### (3) 発掘された旧河道

旧河道の大半は埋没し、名古屋市北区のような都心部では、開発によって土地区画が改変されて旧河道の痕跡を示す地割もほとんどみることができない。しかし過去の発掘調査事例によれば、名古屋市北区内の沖積低地では古墳時代～奈良時代に機能していたと考えられる旧河道が確認されている。

志賀公園遺跡は、名城公園遺跡から北へ約1.2kmに所在する弥生時代～中世の集落遺跡である。平成12年度の愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査で7世紀後半の須恵器などが多量に出土する旧河道跡とそれに重複

する8世紀の旧河道跡が確認されている。いずれも大局的には東から西への水流であるが、8世紀代の河道は規模も小さく蛇行の度合いが大きくなっている。河道から数十mの所には当該期の集落が立地し、河川と密接な生活環境であったことがわかる。ところがこれらの河道が埋没した中世には一帯は耕作地化により地形の平坦化が進んだ(愛知県埋蔵文化財センター2004『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集)。

若葉通遺跡は名城公園遺跡から東へ約2kmにある古墳時代～中世の集落遺跡である。発掘調査で7世紀～8世紀前葉の須恵器や木製品が出土する幅約12mの旧河道(または大溝)SD005が確認されている(ナカシャクリエイテブ株式会社『若葉通遺跡第4次発掘調査報告書』・株式会社島田組2019『若葉通遺跡第5次発掘調査報告書』)。

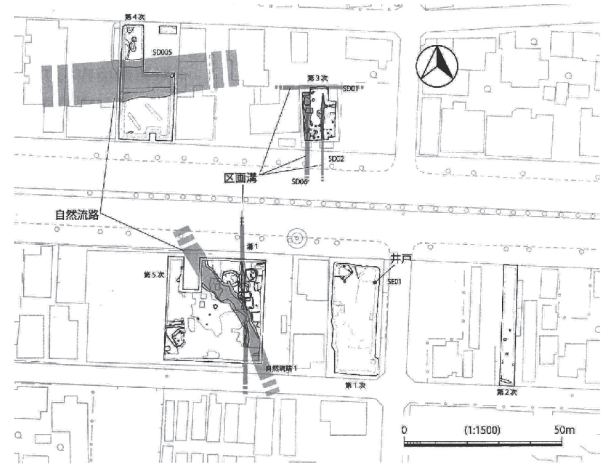


図 11 若葉通遺跡の古墳時代～奈良時代の旧河道

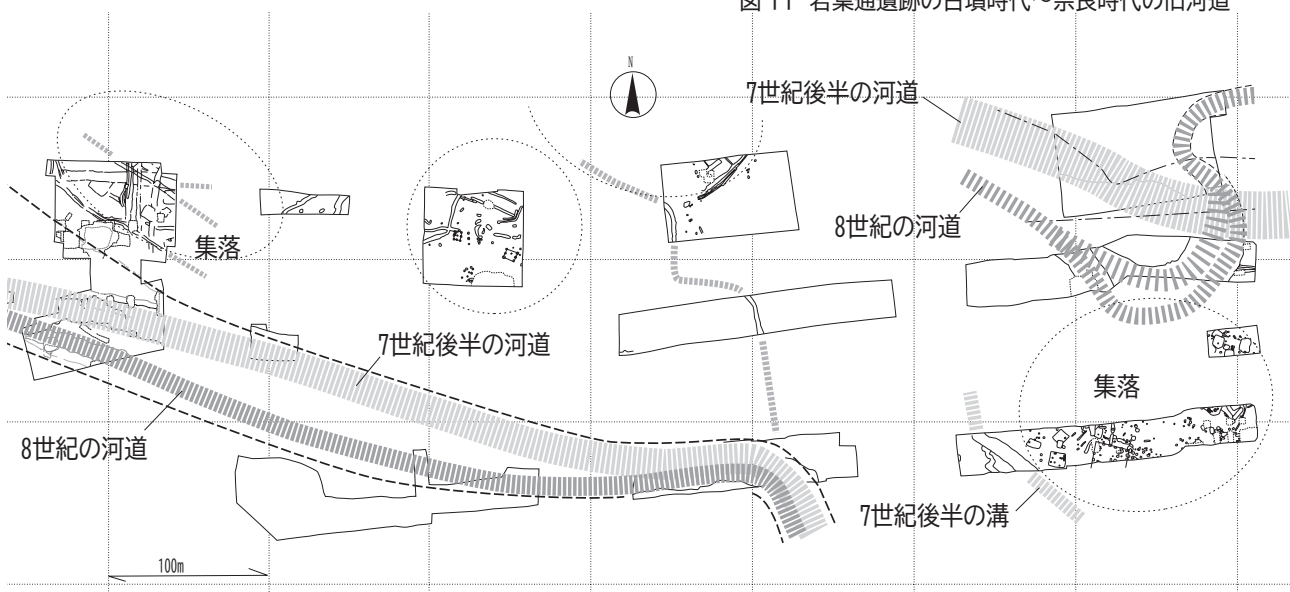


図 12 志賀公園遺跡の古墳時代～奈良時代の旧河道

## 第 2 節 周辺の遺跡からみた歴史的環境

### (1) 遺跡の分布状況

名城公園遺跡の周辺における遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の分布状況を、地形環境に基づいて台地上と沖積低地上に大別して概観する。

**名古屋城と武家屋敷地** 台地上には特別史跡名古屋城を中心に戦国時代から江戸時代の遺跡が分布する。史跡は名古屋城本丸と二之丸を範囲とし、これが遺跡としての名古屋城跡でもある。名古屋城は慶長 15 年(1610)に徳川家康によって造営され、九男義直が初代城主として入ってから後は幕藩体制下の尾張藩の政庁として機能した。一方これに先行する城として、戦国時代の今川氏やそれを奪取した織田信秀の居城となった那古野城跡(31)が重複して存在する。もっとも那古野城跡の中心は名古屋城二之丸付近に想定されているが、16 世紀代に造られた大小の堀は、名古屋城跡の南側に広がる名古屋城三の丸遺跡で検出されており、城跡の範囲もそこまで広がっている可能性が高い(松田訓 2003「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要』第 3 号 愛知県埋蔵文化財センター)。

名古屋城三の丸遺跡は、その名のとおり三之丸地区の武家屋敷地の大部分を占めている。武家屋敷地は家ごとに区画されており、その階級に従って規模の大小が存在する。特に本町通りから直進する位置にあたる令和 5 年度の発掘調査区では、広大な屋敷地の一角に造られた水琴窟が 2 基以上確認されており、上級家臣の暮らしぶりを彷彿とさせる。しかし尾張藩家臣中で最上位にあるのは犬山城主でもある成瀬家であり、その中屋敷の位置は西二葉町遺跡として令和 6・7 年度に発掘調査がなされている。当該遺跡ではタタキ(三和土)を用いた水路や池などを含む庭園遺構が確認され、建物配置の絵図に記載されていない中庭に相当する空間の使われ方が判明し、多量の焼塩壺が出土するなど近世武家の文化を示している(愛知県埋蔵文化財センター 2026『年報 令和 7 年度』)。その成瀬家中屋敷は明治時代になると廃絶するが、その跡地は愛知第一中学校やがて名古屋帝国大学という文教施設へと変貌する。その煉瓦積みなどの建物遺構も同時に発掘調査されている。

**熱田台地の遺跡** 以上のように、名古屋城跡とその周

辺の台地上は武家屋敷地の遺構・遺物が広く分布するが、先述した那古野城やそれを遡る時代の遺構・遺物もやや偏在するが認められる。名古屋城三の丸遺跡においては台地西端(愛知県図書館地点)で弥生時代中期～平安時代前期の墳丘墓や集落が濃密に分布しており、長らく地域の中核的な場所だったことを思わせる。これ以外にも家庭裁判所地点や国立名古屋病院(現・名古屋医療センター)地点などで古墳時代以降の建物分布がみられることから、名古屋城天守から南東方向に延びる稜線を挟んだ両側に分かれて集落が営まれていたと考えられる。そこからさらに東方の東二葉町遺跡では、縄文時代中期(咲畑式期)の竪穴建物跡や古墳時代中期(5 世紀後半)の円筒埴輪が出土する古墳が確認され、合わせて東山 11 号窯式期～同 10 号窯式期と 8 世紀代の須恵器が出土している(株式会社パスコ 2014『東二葉町遺跡第 5 次発掘調査報告書』)。この状況は東隣の長久寺貝塚でも同様で、江戸時代の名古屋城築城や城下町の形成によって消失した部分があるとはいえ、縄文時代～奈良時代の生活域が熱田台地北辺に連なる状況が遺跡によって明らかになっている。その断片的な状況を確認することができるのが名古屋城天守閣貝塚(30)で、縄文時代晩期～弥生時代前期の貝塚があり、そこから弥生土器・土師器から中世(宋銭)までの遺物が出土している。これらは天守台の築造によって埋もれた存在となっていたのである。以上のことから台地縁辺は空間的・時間的にほぼ切れ目なく土地利用が続けられ、その生業の一部に貝類採取を含む漁労があったと想定される。ちなみに名古屋城の堀からは突線文銅鐸が出土している(伝名古屋城濠銅鐸発見地)。

**沖積低地の遺跡** 台地上の遺跡分布と対照的なのが沖積低地における遺跡分布である。名城公園遺跡もその 1 つであるが、ここでは台地直下～約 1.5km の範囲とそこから遠方の 2 つに分けて概観する。

台地西方約 1.2km に位置する則武向貝塚(25)は古墳時代の土師器が出土する貝塚である。このような縄文時代より新しい時期の貝塚は庄内川沿いの堀越町遺跡(11)にもある。一方、名城公園遺跡の北東に位置する城北新町遺跡(22)や七夕町遺跡(21)は弥生・古墳時代、北西に位置する児玉町遺跡(12)は古墳時代と想定されている。七夕町遺跡からは弥生時代後期の土器が出土して

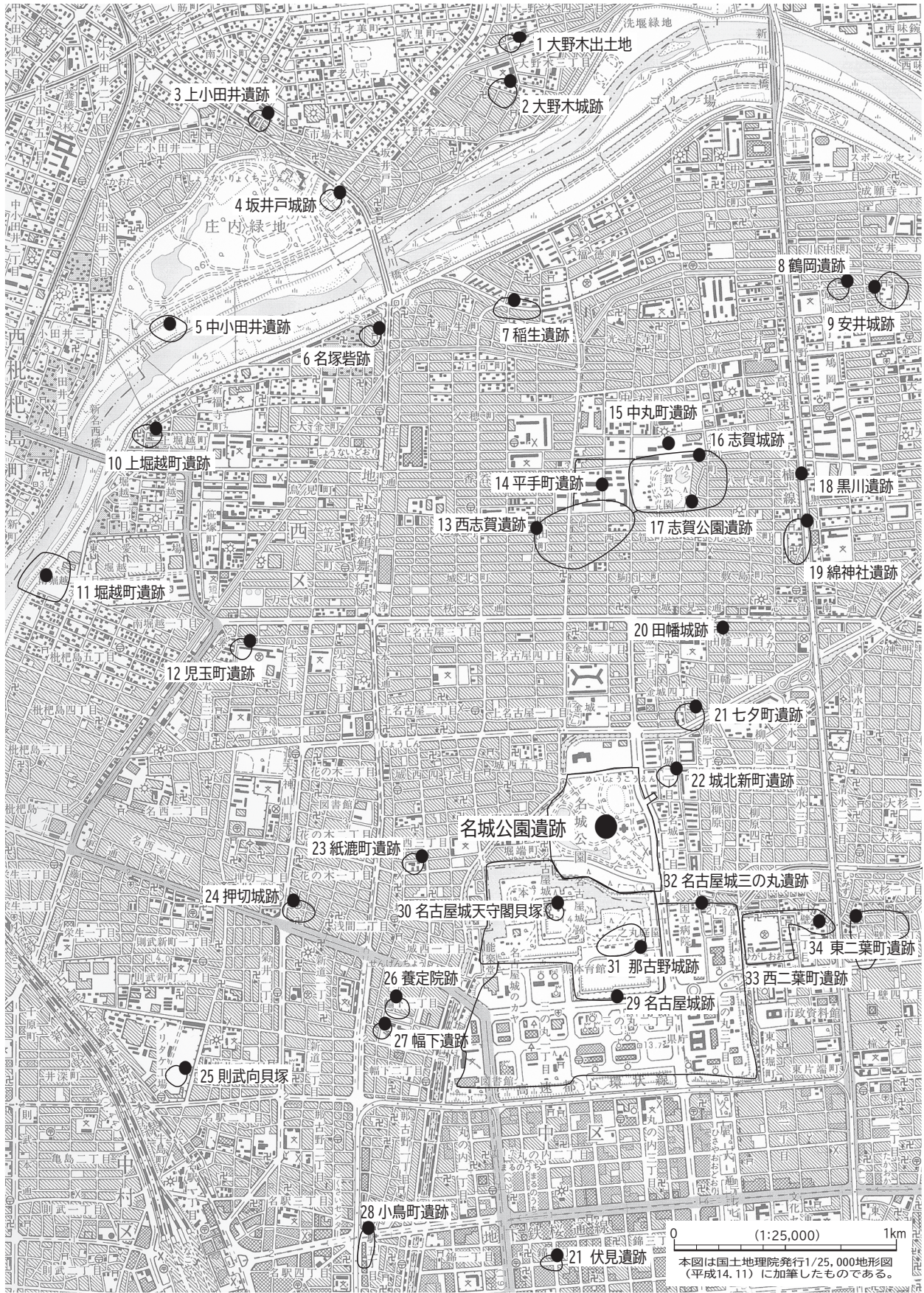


図13 名城公園遺跡周辺の遺跡分布図

いる。これらを見ると沖積低地における集落形成が弥生・古墳時代になって本格化することと、ここでも生業の1つに漁労が挙げられることが指摘できる。ただし、城北新町遺跡では地下鉄名城線の建設工事に伴って地表下約7mから土器が出土したとされているので、土器が旧河道中に所在した可能性が考えられる。つまり、それまで集落地だったところが自然環境（河道）の変動によって居住不可地になることもあったと想定しておく必要がある。

さらに台地直下から離れると、遺跡（群）が島状に分布する状況がみられる。そこは集落形成可能な環境であるから、地形分類では（旧）河道に囲まれた微高地ということになる。最も顕著なのが西志賀遺跡（13）や平手町遺跡（14）、志賀公園遺跡（17）からなる一群で、両遺跡のみで東西約900m南北600mの範囲となりさらに東方の黒川遺跡（18）や綿神社遺跡（19）も合わせると東西約1,500mの規模となる。当該遺跡群に匹敵する規模の微高地は周辺に見出されていない。西志賀遺跡・西志賀貝塚は弥生時代前期の遠賀川式土器が出土しており、朝日遺跡などとともに弥生文化の東漸を示す考古学的に重要な遺跡であるが、その時期から比較的安定的に継続する沖積低地内の微高地であったことをうかがわせる。庄内川周辺に目を移すと、範囲がごく小さいあるいは規模不明の遺跡が分布する。中小田井遺跡（5）は弥生土器を含むが稲生遺跡（7）は古墳時代以降の土師器、上堀越町遺跡（10）は須恵器・灰釉陶器以降と時期のばらつきはあるものの志賀公園遺跡より新しい時期となっている。

沖積低地には中世の城跡も分布している。図13の範囲内では南から田幡城跡（20）、志賀城跡（16）、安井城跡（9）、名塚砦跡（6）、坂井戸城跡（4）、大野木城跡（2）がある。なかでも名塚砦跡は、弘治2年（1556）の織田信長とその弟信行による尾張平野の覇権争いの最中に、信行方の林秀貞・通具兄弟に対抗するために信長方が急造した拠点で、そこから出撃した信長は稲生原の合戦で林通具に勝利している。このように当該地域は戦国時代の合戦場になるような地理的要素を有しており、諸城の用途は庄内川・矢田川流域の河川交通の監視にあったと考えられる。また、田幡城跡や安井城跡のように南北の道路（現・柳原通り）に沿って立地しているものは陸上交通との結節点という評価も可能であろう。安井城

跡はその西隣に古瀬戸の壺2個体が出土している鳩岡遺跡（8）があり、城主に関わる墓の可能性もある。

## （2）『下御深井図面』の存在

一方、名城公園北園とその北・西側は、遺跡分布が希薄な印象を受ける。これは前節で示したように、志賀公園遺跡などで確認された旧河道が熟田台地の北西隅で集合していく位置にあることが大きい。河道変動によって結果的に居住可能な微高地やその遺跡が島状に分布する景観になったと考えられる。

もちろん地理的要因のみならず、当該遺跡の位置は名古屋城築城による人工改変の影響も留意しなければならない。すなわち名古屋城下御深井御庭の存在である。ただしその作庭年代は明確でなく、築城後まもなくの時期と考えられている。その空間構成については、19世紀半ばの史料であるが『下御深井図面』（名古屋市蓬左文庫蔵）がある。名城公園北園より広大な面積に作られた回遊式庭園と関連施設群の配置が記されており、本発掘調査においても重要な指針となっている。加えて幕末近くになると庭園の西側に新御殿が造営され、その後の練兵場も含めると名古屋城北側は大規模な改変を繰り返し受けてきた場所であったといえる。



写真6 『下御深井図面』（名古屋市蓬左文庫蔵）

# 第 3 章 層序と遺構面

## 第 1 節 基本層序

### (1) 調査区壁面における基本層序

**名城公園遺跡における基本層序について** 名城公園遺跡発掘調査は、調査範囲を漸次的とはいえば一括して表土から掘り下げるという手法であることから、地表面から通した遺跡の地層（基本土層）を観察・記録することができたのは、結果的に調査範囲の外縁壁面（調査区壁）のみであった。また調査範囲の中央を旧河道 00900NR が横切っており、その左・右岸で堆積状況の大きく異なっていることが想定された。これらを踏まえて遺跡の基本土層を遺構面の認識を交えて以下に詳述する。

**調査区西壁** 名城公園遺跡の発掘調査は、調査範囲南西端（21Aa 区南西隅）の表土掘削から開始された。当該地点は、試掘調査の成果によれば古墳時代後期の集落域であるとともに近世瓦の出土するトレンチ（10・11）がある。したがって上位遺構面の存在が考えられたが、表土掘削と同時に観察を開始した調査区西壁の南端から約 10m の状況では（図 14）、褐灰色シルト層（34 層）に対して中粒砂ブロックの混じる層（23 層）が食い込ん

でおり、攪拌層が比較的下位にまで及んでいることが確認された。また 34 層も南端から約 25m の地点で黒褐色シルト層（35 層）を切り込んでいることから、明治時代になって開墾された時点の層と考えられる。したがって標高約 4.0m の 35 層上面が近世（後半）の遺構面という可能性がある。当該層に対しては 00085SD が掘り込まれていることが南端から 33m 地点の調査区西壁で確認できるが、それ以外に顕著な遺構はなく不安定である。し

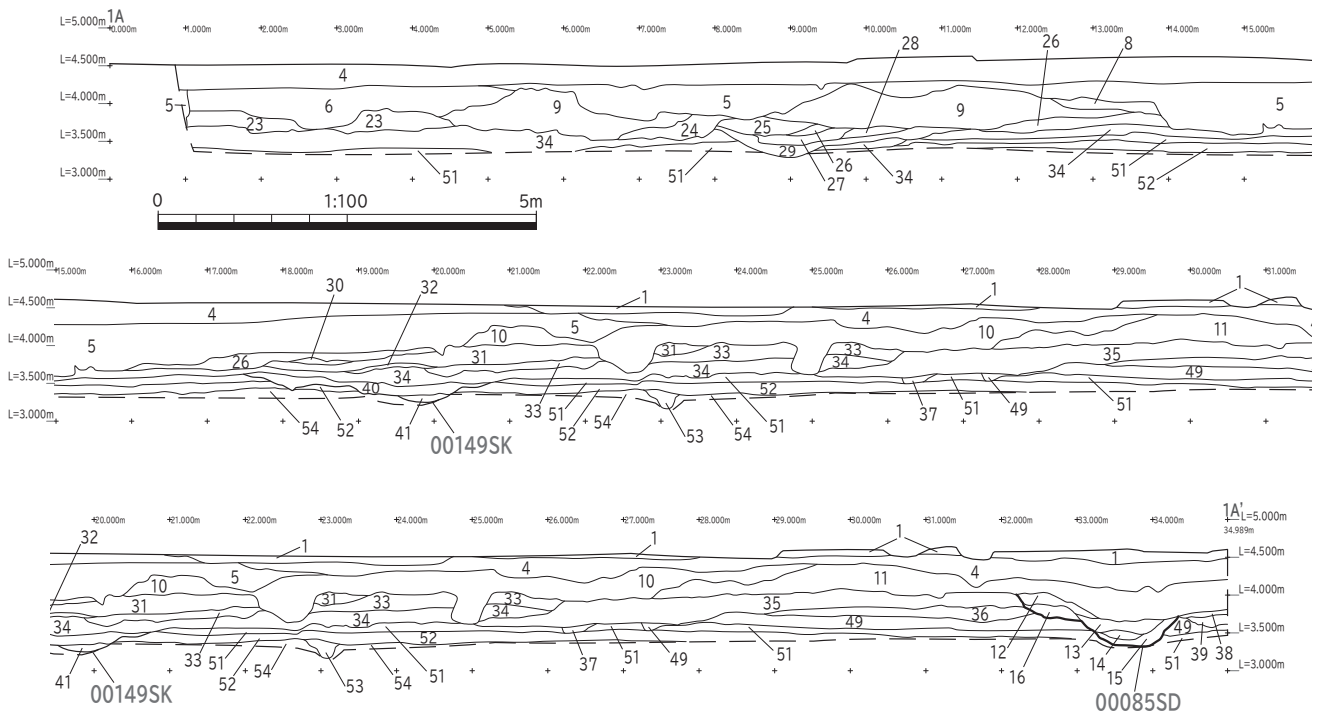
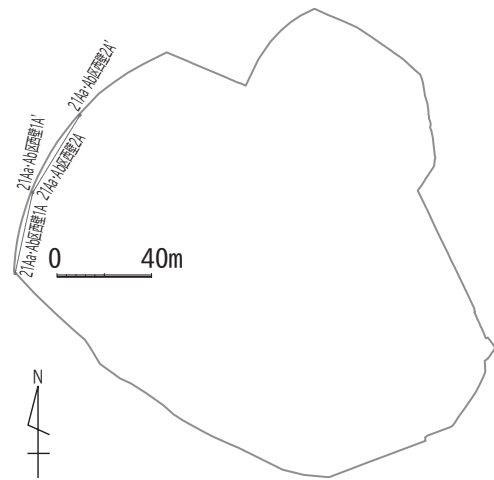
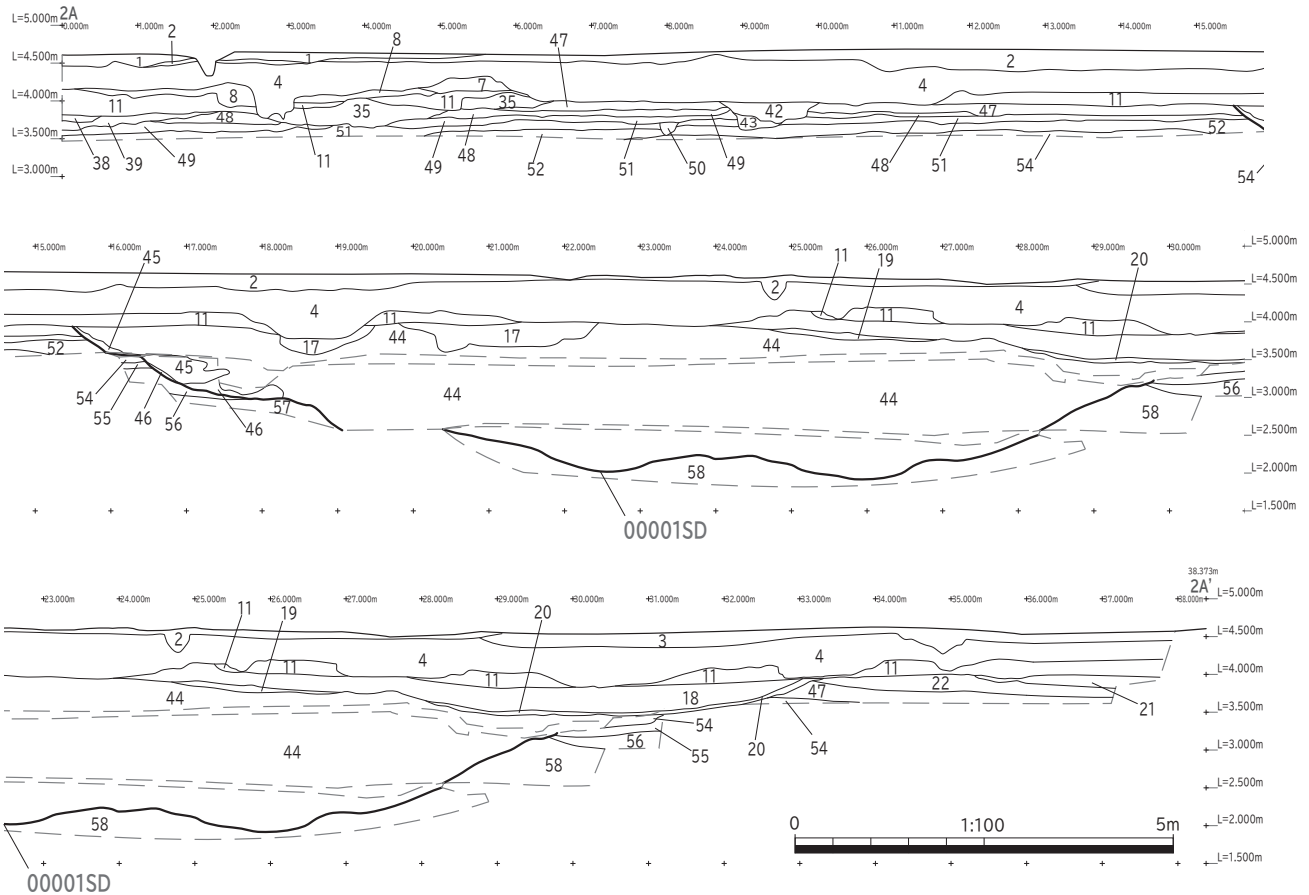


図 14 調査区西壁の土層図 (1)



1. 2.5Y4/2暗灰色中粒砂層(小~中礫含む。鉄斑あり。径5mm~1cm炭化物含む。表土)
2. 10YR4/4褐色粘土質シルト層(表土)
3. 10YR4/4褐色粘土質シルト層(小~中礫含む。表土)
4. 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂層(下面に7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂が堆積する。小礫含む。中~大礫の垂角礫含む。径1~3cm炭化物含む。表土)
5. 7.5YR5/2灰褐色砂質シルト層(鉄斑あり。小礫少量含む。径5mm~1cm炭化物含む)
6. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じりシルト層(10YR7/4にぶい黄褐色中粒砂多く含む。7.5Y6/1褐灰色粘土質シルト多く含む。径1mm炭化物含む)
7. 10YR5/1褐色極細粒砂層(小礫少量含む。鉄斑あり)
8. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト層(マンガン粒多く含む)
9. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じりシルト層(10YR7/4にぶい黄褐色中粒砂少量含む。7.5Y6/1褐灰色粘土質シルト含む)
10. 2.5Y5/2暗灰色砂混じりシルト層(小~中礫少量含む。鉄斑あり)
11. 7.5YR5/2灰褐色極細粒砂混じりシルト層(小~大礫の垂角礫含む。中世以降の堆積層。第1検出面相当)
12. 10YR7/2灰黄褐色細粒砂層(00085SD)
13. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(木質含む。00085SD)
14. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(00085SD)
15. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(10YR5/6黄褐色中粒砂ラミナ状に堆積。00085SD)
16. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(鉄斑多い。10YR4/1褐色粘土質シルト含む。00085SD)
17. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト含む)
18. 10YR6/6明黄褐色砂混じりシルト層(木質含む。径5mm~1cm炭化物含む)
19. 7.5YR5/1褐色粘土質シルト層
20. 7.5YR4/2灰褐色有機質シルト層(木質多く含む)
21. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/6明黄褐色極細粒砂含む)
22. 10YR6/6明黄褐色砂混じりシルト層(木質含む。径5mm~1cm炭化物含む)
23. 7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト層(10YR6/3にぶい黄褐色中粒砂含む。マンガン粒含む)
24. 7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト層(径5mm~1cm炭化物含む)
25. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じりシルト層と7.5Y6/1褐灰色粘土質シルトの混層(径1~3cm炭化物少量含む)
26. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じりシルト層
27. 7.5YR5/1褐色粘土質シルト層(マンガン粒少量含む)
28. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じりシルト層
29. 7.5YR5/1褐色粘土質シルト層(10YR5/6黄褐色中粒砂ラミナ状に堆積)
30. 7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む)
31. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(鉄斑あり)
32. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(鉄斑あり)
33. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む)
34. 7.5YR5/1褐色粘土質シルト層(マンガン粒多く含む)
35. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層(マンガン粒多く含む)
36. 10YR5/2灰褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む)
37. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む)
38. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(木質含む)
39. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/1灰白色粗砂ラミナ状に堆積)
40. 10YR4/1褐色粘土質シルト層(2.5Y6/2灰黄色極細粒砂含む。鉄斑あり。00149SK)
41. 10YR4/1褐色粘土質シルト層(2.5Y6/2灰黄色極細粒砂少量含む。鉄斑あり。00149SK)
42. 10YR4/1褐色粘土質シルト層(鉄斑多く含む。径1~5mm炭化物含む)
43. 10YR4/1褐色粘土質シルト層(10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂含む。鉄斑あり)
44. 2.5Y8/1灰白色中粒砂層(2.5Y8/1灰白色極細粒砂と10YR7/6明黄褐色極細粒砂が水平にラミナ状に堆積。層下部に木質を含む10YR3/1黒褐色粘土質シルトが堆積する。00001SD)
45. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む。00001SD)
46. 2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト層(00001SD)
47. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む。鉄斑あり。第2検出面)
48. 10YR5/2灰褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む)
49. 10YR4/1褐色粘土質シルト層(マンガン粒含む。鉄斑あり。径1~5mm炭化物含む。古墳時代中期以降)
50. 10YR5/1褐色極細粒砂層(マンガン粒含む。鉄斑あり)
51. 2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト層(マンガン粒多く含む。鉄斑多い。浅黄色細粒砂含む。古墳時代前期~中期。第3検出面)
52. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(マンガン粒含む。鉄斑あり。径1~5mm炭化物含む。径1~3cm青灰色粘土質シルトブロック少量含む。古墳時代前期)
53. (土坑状断面)
54. 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂層(鉄斑多く含む。第4検出面)
55. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(鉄斑含む。径1mm炭化物含む)
56. 2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト層(マンガン粒多く含む)
57. 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混じりシルト層(10YR6/6明黄褐色極細粒砂含む)
58. 10YR8/1灰白色灰黄色極細粒砂層

図15 調査区西壁の土層図(2)

かしその北側に位置する礫を多く含む砂質の強い灰褐色土層（11 層）は一定の厚さで続いており、中世の遺物が混じる点や攪拌の状況からみて中世以降の下御深井御庭に関わる造成層と推測される。21Aa 区では当該層の上面を第 1 遺構面（検 1 面）とした。

また調査区西壁では 00001SD の断面も見ることができ、これは 11 層によって堆積層が削平されていることや黒褐色シルト層（47 層）の上面から掘り込まれていることからより先行する時期の遺構であると考えられる。21Aa 区では 47 層上面を第 2 遺構検出面（検 2 面）とした。

**調査区南壁** 調査区南壁は調査範囲の南端（21Bb 区南壁）とその西側で江戸時代の遺構が多数確認された地点（21Ba 区南壁）の 2 か所で設定した土層断面である。

21Bb 区南壁（図 16）では地表面（標高約 4.5m）から約 1m の深さまで近現代の攪乱が入り、その下位では中粒砂～細粒砂主体の河川堆積が確認された。いずれの堆積も東側が高く西側に低い斜方向に分層される。これは水流によって運ばれてきた砂が、河川蛇行の内側斜面（滑走斜面）に徐々に堆積していく状況を示しており、側方堆積とよばれる。旧河道 00900NR の堆積によってその右岸微高地（自然堤防）が成長したことが示される。残念ながらそのように形成された微高地堆積に対して表土攪乱が著しく、微高地上の地層変遷はほぼ不明であるが、言い換えるとそれだけ微高地の高さが顕著だったことを示している。斜方堆積からの出土遺物はないが、微高地上に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が存在することから、それ以前に形成されたものと考えられる。

これに対して旧河道左岸に位置する 21Ba 区南壁（図 17～19）の層序は複雑で時期幅もある。地表面（標高約 4.5m）から約 0.5m 下では、江戸時代の陶磁器類や近世瓦が多量に出土する土坑 00215SK・00216SK の掘り込み開始レベルとなっている。ただし当該遺構は同じ近世瓦が出土する細礫混じりシルト層（25 層）の上位にあることから時期的には相当新しいものということになる。一方 25 層によって削平された下位には土坑 00217SK・00329SK などが存在する。25 層は当該壁面の 31m 地点で造成層と思われる 26 層を切り込んでいることから、両者は調査区西壁の 34・35 層に相当し、26 層が江戸時代の造成層である可能性が高い。いずれにせよ 25・26 層の上面の標高 4.5m が第 1 遺構面となるのだが、

当該壁面から開始した表土掘削では攪乱や池 00202SG の埋め立て層が広範囲に及んでいたことから、26 層の上面を的確に把握することができず、そこから約 0.3m 下の標高 4.15m 前後でようやく検 1 面とした。

また 25 層は 21Ba 区南壁 23m 地点で中礫混じりの砂質の強い土層（34 層）にも切り込んでいる。34 層の下位には古墳時代後期の集落に関わる溝 00811SD があり、34 層が概ね古代～中世の堆積または人為的な造成層であると考えられる。したがって 34 層の下面またはその下位にある砂質土層（77 層）の上面が第 2 遺構面となる。77 層に対しては 0811SD の他にも竪穴建物跡と思われる 31～33 層、35～37 層が掘り込まれていることから、集落形成の行われた微高地の基盤層であったと位置づけられる。旧河道左岸の微高地では古墳時代後期を中心としつつ前期の土器が出土する遺構もあることから、77 層はそれまでに基盤化していたと思われる。

77 層は土層断面東端から約 15m の地点から西方で認められる一方、そこから東側では 35 層や 81 層が相当するとみられるが遺構の重複でわかりにくくなっている。それらの東端では 11・12 層の 2 段階にわたる砂主体のラミナ堆積の落ち込みの端部が認められるが、11 層はさらに上層からの落ち込みであることから、12 層が当該期の河道となる。11 層は庭園の大溝 175SD に相当する可能性があるが、旧河道を再利用した形になっている。

77 層以下では東から 120・140 層とその上位に 83・121 層が水平な堆積として把握される。140 層は標高約 3.5m 以上にまで発達した微高地の頂部で、熱田台地に近づくにつれて上昇傾向にある標高からすれば微高地の南側延長としうる。140 層以外はいずれも大小のシルトブロックを含んでいることからその形成が人為的とみられる。そして面的な広がりもあることから耕作地として開墾された形跡と見ることも可能で、弥生時代末期～古墳時代前期前半に位置づけられる。当該層に先行する堆積層は 137 層ではラミナ状を呈しており、緩やかな水流によって堆積が進む環境が考えられる。137 層は断面形でみると幅約 7m の旧河道であり、例えばその西側では 139・140・181 層は側方堆積であることから旧河道が徐々に水流の勢いがなくなっていった過程が考えられる。この旧河道の時期は遺物がないため不明であるが、先述した微高地がこの真上に位置していることを踏まえると、両者に直接的な関係はなく、時期的にも大きく隔たって

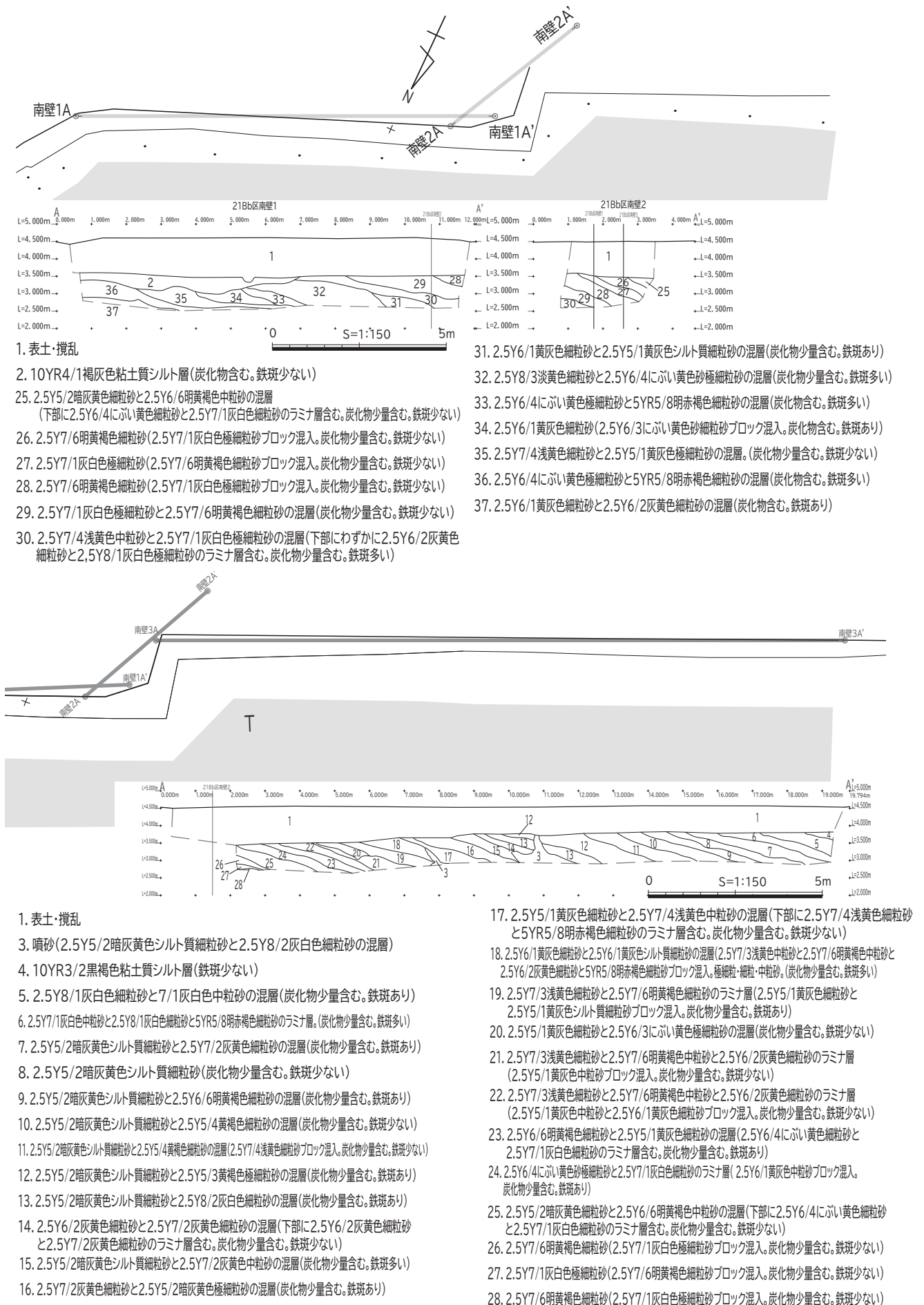
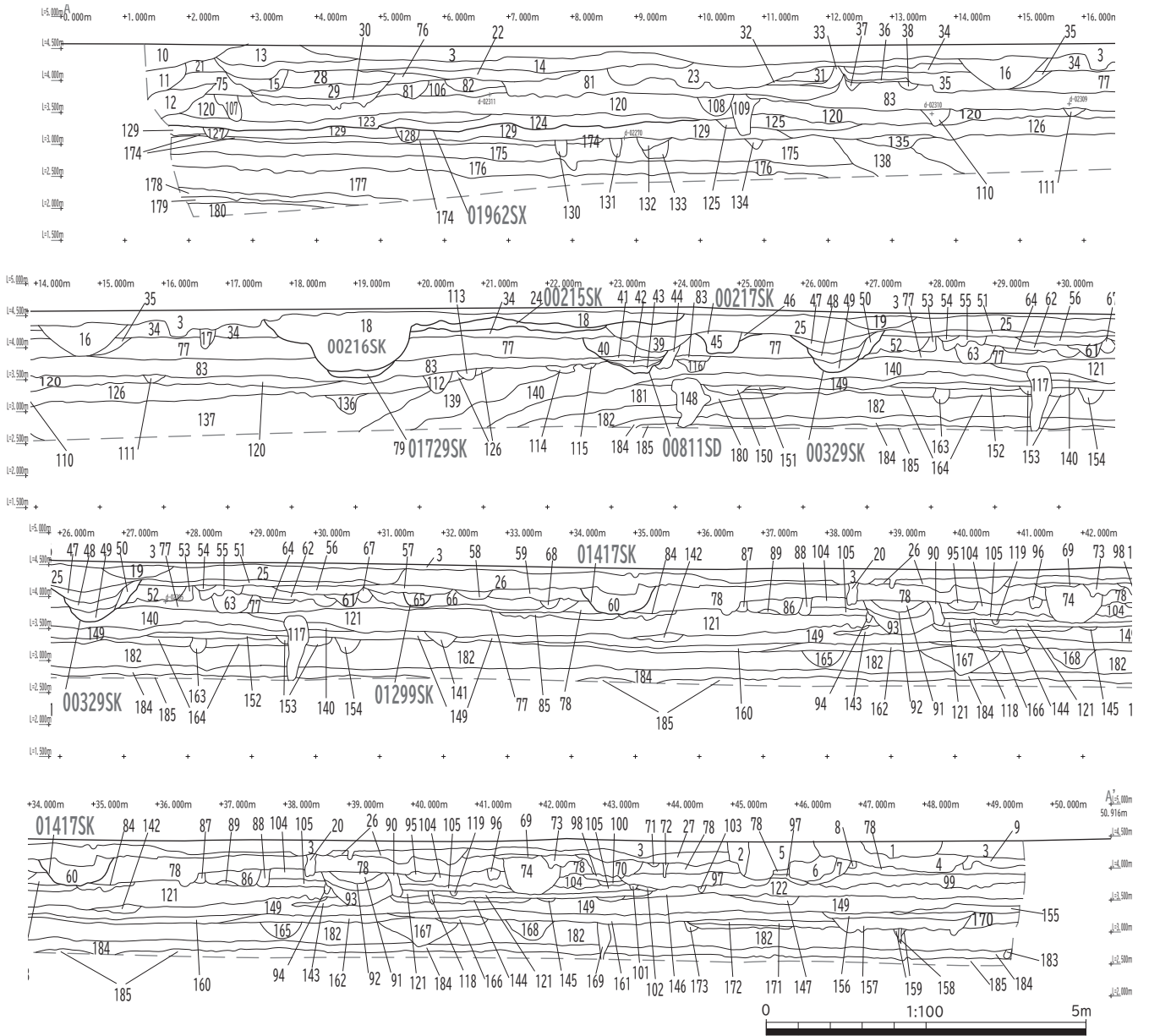


図16 調査区南壁(21Bb区南壁)の土層図



1. 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂と10YR4/1褐色細粒砂の混土層（にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。攪乱）
2. 10YR4/6褐色極細粒砂混じり細粒砂層（灰黄褐色シルトブロック含む）
3. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト層（褐色シルトブロック少量含む。盛土）
4. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり極細粒砂層（灰黄褐色中粒砂ブロック含む。攪乱）
5. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり中粒砂層（褐色シルトブロック含む。細礫含む。炭化物少量含む。攪乱）
6. 10YR6/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（細礫含む。中礫含む。灰白色極細粒砂ブロック下部に含む。鉄斑あり）
7. 10YR6/3にぶい黄褐色粗粒砂混じり中粒砂層（褐色シルトブロック含む）
8. 10YR6/3にぶい黄褐色粗粒砂混じり中粒砂層（灰白色中粒砂小ブロック含む。攪乱）
9. 10YR4/1褐色シルト層（にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片少量含む。鉄斑あり）
10. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（褐色シルト小ブロック含む。細礫・中礫含む）
11. 7.5YR5/1褐色極細粒砂混じりシルト層（にぶい黄褐色極細粒砂斑状に含む。ラミナ崩れ）
12. 10YR4/1褐色細粒砂混じりシルト層（ラミナあり。鉄斑あり）
13. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり極細粒砂層（褐色シルト小ブロック少量含む。細礫含む。中礫少量含む）
14. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（細礫少量含む。中礫少量含む）
15. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（細礫含む。鉄斑あり）
16. 10YR6/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（やや明るい灰黄褐色極細粒砂ブロック下部に含む。細礫含む。中礫含む）
17. 10YR6/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（やや明るい灰黄褐色極細粒砂ブロック下部に含む。細礫含む。中礫含む）
18. 10YR5/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（褐色極細粒砂ブロック・にぶい黄褐色細粒砂ブロック少量含む。細礫・中礫多く含む。玉砂利、瓦含む。00216SK）
19. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
20. 10YR4/1褐色粘土質シルト層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり）
21. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない）
22. 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂混じり極細粒砂層（灰黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。細礫含む。炭化物少量含む。鉄斑あり）
23. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む。細礫・中礫含む。28と同色。鉄斑多い）
24. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（灰黄褐色極細粒砂大ブロック少量含む。細礫・中礫多く含む。鉄斑少ない。00215SK）
25. 10YR4/4褐色細粒砂混じりシルト層（にぶい黄褐色細粒砂ブロック含む。褐色シルトブロック少量含む。細礫少量含む。瓦含む）
26. 10YR5/6黄褐色細粒砂混じりシルト層（褐色シルトブロック少量含む。細礫・中礫少量含む。整地層）
27. 10YR4/1褐色シルト層（にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片少量含む。鉄斑あり）
28. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり細粒砂層（にぶい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。鉄斑あり）
29. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（褐色シルトブロック少量含む。鉄斑あり）
30. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層（褐色極細粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む。ラミナあり）

図17 調査区南壁（21Ba区南壁）の土層図（1）

31. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
32. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑多い)
33. 10YR5/1褐灰色シルト混じり極細粒砂層(鉄斑多い)
34. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(細礫多く含む。中礫少量含む)
35. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色シルトブロック含む。鉄斑あり)
36. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(炭化物含む。鉄斑あり)
37. 10YR6/3にぶい黄褐色極細粒砂混じりシルト層(径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑多い)
38. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(鉄斑少ない)
39. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じり極細粒砂層(噴砂。ラミナあり。鉄斑多い)
40. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック含む。土器片含む。噴砂。鉄斑多い。00811SD)
41. 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混じり極細粒砂層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり。00811SD)
42. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂混じり極細粒砂層(灰白色中粒砂ブロック上層に含む。ラミナあり。00811SD)
43. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じり極細粒砂層(灰白色極細粒砂ブロック含む。ラミナ崩れ。鉄斑あり。00811SD)
44. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。噴砂)
45. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂と10YR6/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂の混土層(細礫・礫含む。土器片含む。鉄斑あり。00217SK)
46. 10YR5/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(細礫少量含む。中礫少量含む。鉄斑あり。00217SK)
47. 10YR5/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(褐灰色シルトブロック多く含む。0329SK)
48. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり粘土質シルト層(灰黄褐色極細粒砂小ブロック多く含む。鉄斑多い。0329SK)
49. 10YR4/1~2中粒砂混じりシルト層(灰黄褐色粗粒砂ブロック含む。細礫少量含む。0329SK)
50. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(黄褐色細粒砂ブロック少量含む。鉄斑あり)
51. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色細粒砂ブロック含む。細礫含む)
52. 10YR5/2細粒砂混じりシルト層(灰白色シルト小ブロック少量含む。土器片含む。鉄斑多い)
53. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。中礫少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり)
54. 10YR6/1褐灰色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑多い)
55. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。土器片含む。噴砂。鉄斑多い)
56. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック含む。鉄斑多い)
57. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色細粒砂小ブロック含む。土器片含む)
58. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロックを少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
59. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じり細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片含む。鉄斑あり)
60. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
61. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む)
62. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層(灰黄褐色極細粒砂小ブロック含む。噴砂あり。鉄斑多い)
63. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。土器片含む。噴砂。鉄斑多い)
64. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層(灰白色極細粒砂小ブロック含む。鉄斑多い)
65. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色シルトブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
66. 7.5YR5/2灰褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。炭化物少量含む。鉄斑多い)
67. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック含む)
68. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
69. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロックを少量含む。炭化物を少量含む)
70. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルトブロック多く含む。細礫・中礫多く含む。径1~2mmマンガング粒含む。土器片含む。鉄斑少ない)
71. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
72. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
73. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(灰黄褐色極細粒砂ブロック含む。土器片含む。鉄斑多い)
74. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(褐灰色中粒砂ブロック少量含む。細礫含む。鉄斑多い)
75. 10YR4/1褐灰色細粒砂混じりシルト層(褐灰色極細粒砂ブロック少量含む。鉄斑あり)
76. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(灰白色極細粒砂ブロック少量含む。鉄斑あり)
77. 10YR4/3~4にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
78. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
79. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑少ない。01729SK)
80. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片含む。炭化物少量含む。鉄斑多い)
81. 10YR6/1褐灰色細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
82. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑あり)
83. 10YR5/1~2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑多い)
84. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
85. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層(灰白色極細粒砂小ブロックを含む。鉄斑多い)
86. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。土器片含む。鉄斑多い)
87. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑多い)
88. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロックを少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
89. 10YR5/1褐灰色シルト混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
90. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(黒褐色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
91. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(黒褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
92. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(鉄斑多い)
93. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(黒褐色シルトブロック含む。鉄斑少ない)
94. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
95. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(黒褐色シルト小ブロック少量含む)
96. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック・にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
97. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(やや明るい灰黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む。鉄斑あり)
98. 10YR4/2灰黄褐色シルト層(径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり)
99. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(やや明るい灰黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む。鉄斑あり)
100. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑少ない)
101. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(黒褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり)
102. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
103. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(灰黄褐色シルト大ブロック多く含む。鉄斑あり)
104. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト層(黒褐色シルトブロック含む。鉄斑あり)
105. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と粘土質シルト層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり)
106. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片含む。鉄斑あり)
107. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
108. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂と粘土質シルト層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり)
109. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層(灰白色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
110. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(灰黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。土器片含む。鉄斑少ない)
111. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(中礫多く含む。鉄斑少ない)
112. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)
113. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
114. 10YR6/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
115. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(鉄斑あり)
116. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
117. 10YR3/2黒褐色極細粒砂混じりシルトと10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂の混土層(植物痕)
118. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑少ない)
119. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層(暗褐色粗粒砂ブロック多く含む。鉄斑少ない)
120. 10YR3/2黒褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑あり)
121. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(灰黄褐色極細粒砂大ブロック含む)
122. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。鉄分附着)
123. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり。01962SK)
124. 10YR3/2黒褐色極細粒砂混じりシルト層(鉄斑あり。01962SK)
125. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり)
126. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり)

図18 調査区南壁(21Ba区南壁)の土層図(2)

127. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層（鉄斑あり）
128. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層（灰黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑あり）
129. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
130. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（褐灰色シルト小ブロック含む。鉄斑少ない）
131. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂と粘土質シルト層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。炭化物含む。鉄斑少ない）
132. 10YR3/3暗褐色粘土質シルト層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。ラミナ状堆積。鉄斑多い）
133. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒多量を含む。焼土・炭化物含む。鉄斑あり）
134. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑少ない）
135. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（にびい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。にびい黄褐色極細粒砂小ブロック含む。炭化物少量含む。鉄斑あり）
136. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層（にびい黄褐色細粒砂ブロック含む。炭化物少量含む。鉄斑あり）
137. 10YR5/3にびい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（にびい黄褐色細粒砂ブロック含む。ラミナ状堆積）
138. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（にびい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。にびい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない）
139. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じり粘土質シルト層（にびい黄褐色中粒砂ブロック含む。径1~2mmのマンガング粒多量を含む。斜方向のラミナ状堆積。鉄斑あり）
140. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト層（径1~2mmのマンガング粒多量を含む。鉄斑あり）
141. 10YR3~4/1褐灰色粘土質シルト層（にびい黄褐色シルトブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒多量を含む。鉄斑少ない）
142. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。炭化物少量含む。鉄斑あり）
143. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（黒褐色粗粒砂ブロック少量含む。鉄斑あり）
144. 10YR3~4/2灰黄褐色粘土質シルト層（黒色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
145. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（黒色シルトブロック含む。鉄斑あり）
146. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（黒色シルトブロック含む。鉄斑あり）
147. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
148. 10YR3/2黒褐色極細粒砂混じりシルトと10YR5/3にびい黄褐色中粒砂混じり細粒砂の混土層
149. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（黒褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない）
150. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層（径1~2mmマンガング粒多量を含む。鉄斑多い）
151. 10YR5/3にびい黄褐色細粒砂混じりシルト層（径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑多い）
152. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（にびい黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑多い）
153. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒多量を含む。鉄斑あり）
154. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり）
155. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層（にびい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑あり）
156. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（褐灰色シルト小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり。竪穴建物か）
157. 10YR4/1~2褐灰色シルト混じり極細粒砂層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり。竪穴建物か）
158. 10YR4/1褐灰色シルト層（鉄斑少ない）
159. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（にびい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む）
160. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層（灰黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり）
161. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層（褐灰色シルト小ブロック含む。鉄斑多い。ラミナ状堆積）
162. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト層（鉄斑あり。ラミナ状堆積）
163. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層（褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑多い）
164. 7.5YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じり粘土質シルト層（褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
165. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（にびい黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない）
166. 10YR4/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層（灰黄褐色シルトブロック含む。鉄斑少ない）
167. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（褐灰色細粒砂小ブロック・にびい黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない）
168. 10YR4/2灰黄褐色シルト層（にびい黄褐色細粒砂ブロック少量含む。鉄斑少ない）
169. 10YR5/1褐灰色シルト混じり細粒砂層（にびい黄褐色シルトブロック含む）
170. 10YR4/2灰黄褐色シルト層（灰黄褐色シルトブロック含む。竪穴建物か）
171. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層（鉄斑あり。竪穴建物か）
172. 7.5YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層（灰黄褐色細粒砂ブロック少量含む。壁溝か）
173. 10YR3~4/2黒褐色極細粒砂混じりシルト層（灰黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑あり）
174. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層（灰黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑あり）
175. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑多い）
176. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層（灰黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない）
177. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（黒褐色シルトブロック少量含む。鉄斑あり）
178. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じり粘土質シルト層（にびい黄褐色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑少ない）
179. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層（径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
180. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層（灰黄褐色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない）
181. 10YR4/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層（灰黄褐色シルトブロック含む。にびい黄褐色細粒砂ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒少量含む。鉄斑あり）
182. 10YR4~5/1褐灰色粘土質シルト層（にびい黄褐色シルト小ブロック・灰黄褐色細粒砂小ブロック少量含む）
183. 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土層（黒褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない）
184. 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土層（褐灰色シルトブロック含む。鉄斑少ない）
185. 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土層（鉄斑あり）

図19 調査区南壁（21Ba区南壁）の土層図(3)

いる可能性がある。なお、これら標高約3.0m以下には遺構状の落ち込みが各所にみられるが、植生痕跡の可能性が高い。

**中央南北トレンチ T46** 発掘調査の終盤に行った深掘り調査のトレンチである。微高地の地質構造について把握すべく、発掘調査範囲の中央からやや西寄りにおいて、微高地（標高約3.8m）や旧河道00900NRに対して重機によって標高約1.0mまでトレンチ（T46）掘削を行い、その土層断面を観察した（図20）。それによれば標高約2.0mより上層では砂質シルトの傾斜が緩い斜方堆積の連続で、そこから下層（25～28層）は粘質の強いシルトの水平堆積となっている。下層（27層、北から10m地点）では流木などの木質も出土している。遺跡周辺の状況については不明であるが、低湿地帯で河道からやや離れた

環境（後背湿地）であった可能性が考えられる。これに対して上層は河道化した状況が示される。このトレンチでは南から北方向へ流下する河道を縦方向に断ち割ったような状態で見ていることになる。

河川堆積を観察すると、19層より下位では砂主体の堆積であるのに対して、そのすぐ上位の14層からはシルトの堆積へと移行している。さらに13層では炭化物が含まれていることから、この時点における旧表土ないしは14層に対して火を使った開墾が始まっていたことが推測される。ただしこの時点で層理面は傾斜したままである。遺構の可能性のある土坑状を呈する12層はその傾斜上端付近に位置していることから、河道に面した微高地の端部が徐々に拡大するにつれて人の生活域も進行していったことを示している。なお12層はその標高

が 3.0 ～ 3.5m であることから、21Ba 区の調査最終段階の遺構面（検 4 面）において確認され並行する直線溝 00654SD・00697SD（標高約 3.8m）に近い。当該遺構が古墳時代前期に年代比定されることから、トレンチ T46 の位置における微高地形成は 3 ～ 4 世紀に乾燥地化と生活域化の画期を迎えたと評価される。

しかしながら、12 ～ 14 層の形成以降に再び当該地点は湿地化する。それが 10 層で、土層観察によれば砂質シルトと極細粒砂の水成堆積（ラミナ層）がみられる。したがって河道の上昇と再接近が起きたと考えられる。10 層はトレンチ北端で 50cm 以上の厚さになっていることから、本格的な河道であったと考えられる。この水成堆積が落ち着きを見せるとその上面は再び開墾を受け、炭化物を含む 9 層や 4 層といった水平な層理がみられ、これらは安定した基盤層と評価される。すなわちそれに掘り込まれる古代の竪穴建物跡 01540SI や近世の溝 00626SD などに対する「地山」に位置づけられ、当該層上面をもって遺構面の 1 つに数えることができる。

**00900NR 左岸東西トレンチ T47** トレンチ T46 の南端に対して直交方向すなわち旧河道跡 00900NR を横断する位置に設定されたのが T47（図 21）である。したがって両者で T 字形の位置関係となる。こちらも発掘調査の終盤に河道形成過程を記録するために標高 1.5 ～ 2.0m の深さまで掘り下げて断面観察を行った。00001SD は人工開削の大溝で、それに先行して堆積する 5 ～ 12 層が旧河道に相当する。本トレンチにおける注目点は、旧河道が微高地を形成する堆積 4・15 ～ 24 層を切り崩していることで、そのうち 22 ～ 24 層が最も古い段階の堆積であり、おそらく微高地を形成する基部のような位置づけと考えられる。それを覆う 19・21 層は西方に対して傾斜し、かつそれぞれ厚い（1m 以上）粘土質シルトとなっており、湿地化の進んだ状況を示す。ただし T46 の 26 層のような有機質を多く含む黒褐色粘土質シルトではないのでそれとの連続性は確認できていない。標高からみればさらに下位にこのような黒色系シルトが存在する可能性はある。いずれにせよこれらの段階には当該地点で人の活動がほとんどなかったとみられる。

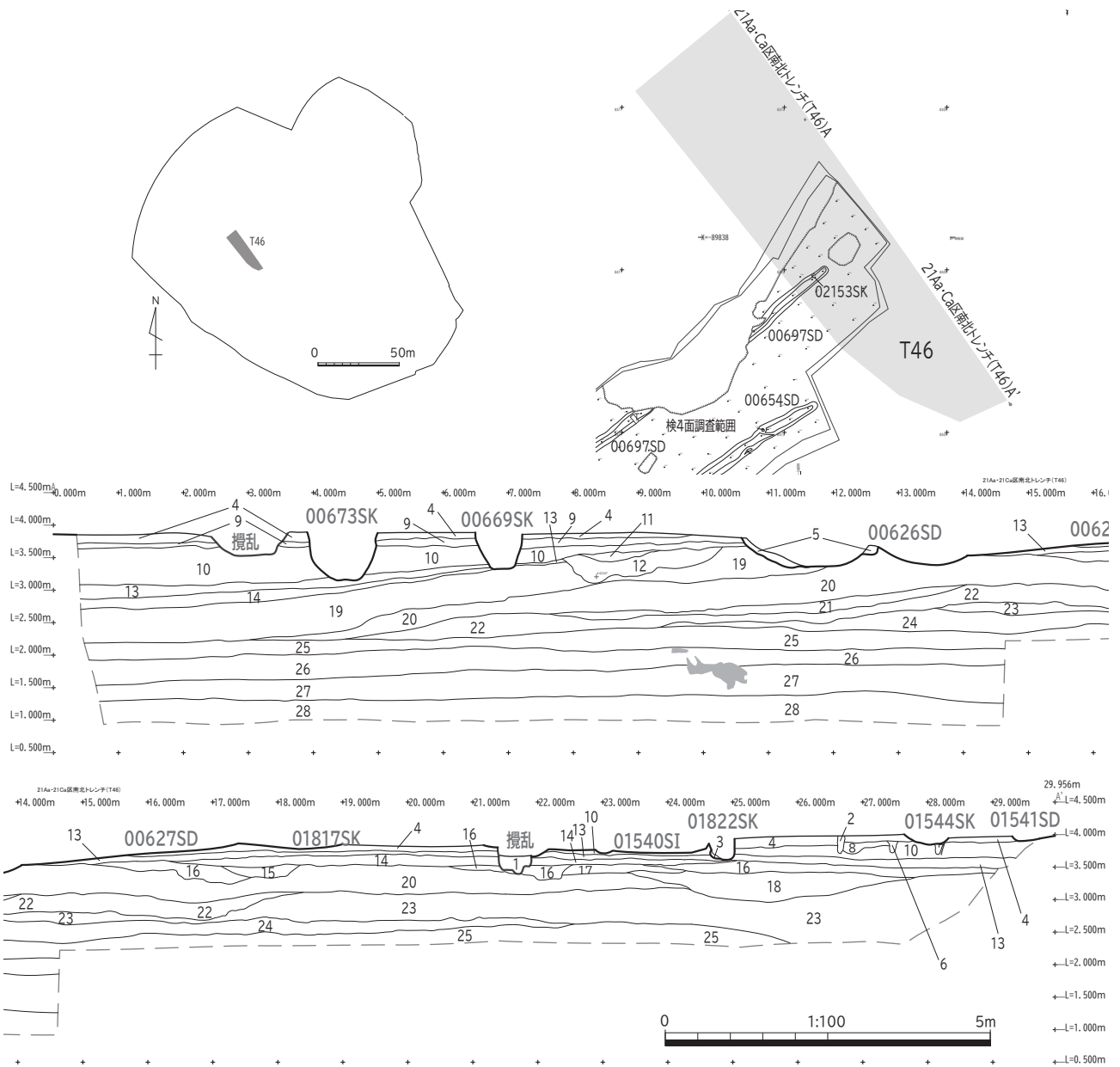
一方、T47 の 15 層に対しては、13・14 層（標高約 3.5m）で遺構の可能性のある掘り込みの断面があり、それを 4 層が覆ったうえで旧河道の堆積に切り崩されていることから、T46 で見出したように一旦生活域になったものの

再び擦り寄ってきた河道によってそれらは埋没し後に削剥されたことを示している。

**調査区横断トレンチの土層** 発掘調査の終盤に、調査範囲東部で確認された旧河道跡 01157NR と中央部の旧河道跡 00900NR の関係を確認するために設定した深掘りのトレンチで、最深部で標高約 0.7m まで掘り下げて微高地や旧河道跡を断ち割って検証を行った（図 22 ～ 25）。01157NR と 00900NR の堆積についてはそれぞれの報告で記述するとして、ここでは微高地の形成過程を中心に確認しておきたい。

01157NR は旧河道堆積上部の土器群をその範囲と捉えている。それに先行する河川堆積（側方堆積）は東から西方向へ進み、1157NR はその上にできた大溝状の凹地に位置づけられる。これに対して 00900NR は側方堆積を切り崩しており、連続する事象ではないことがわかる。これは T46・T47 で確認したように、古墳時代前期までに形成された微高地が新たな河道によって切り崩されており、これと同じ状況が右岸でも確認できたことになる。ただし 01157NR と同様に 00900NR も遺物の出土する範囲で範囲を認定しているため、微高地を切り崩した河道の堆積はこれに含めていない。したがって当該断面では、断面東端のセクションポイントから約 100m の位置にある 269 層（極細粒砂混じりの粘土質シルト層）から東方の堆積を 00900NR としている。なお 269 層よりやや上層の 267 層からは、土師器の宇田型台付甕（2984）が出土している。もともと微高地上に存在したものが切り崩されて落下した可能性が考えられるが、これによって当該地点の切り崩しが古墳時代中期以降だったことが明らかとなる。

そこで T46 北端の標高約 3.5m における河道による削剥を当該土層断面に求めると、269 層からさらに約 20m 西方に位置する 302・303 層（砂質シルトと極細粒砂のラミナ堆積）が 308・309・311 層を切り崩している状況が該当する。309 層下半部は標高約 2.0m で有機質の多い黒褐色粘土質シルトであり、これは T46 の 26 層に当たる。したがって標高約 3.3m が最頂部となる 308 層（極細粒砂混じりの粘土質シルト）が T46 の 19 層などに相当すると考えられる。したがって 302・303 層は T46 の 10 層に相当する河道変動の痕跡とみることができ。当該土層断面で興味深い点は、削剥は微高地の西側にも及んでいることで、東端のセクションポイントから



- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 現代の攪乱</p> <p>2. 根跡</p> <p>3. 10YR6/2灰黄色砂質シルト層(2.5Y8/2灰白色極細粒砂含む。鉄斑あり。遺構埋土か)</p> <p>4. 10YR6/1褐灰色粘土質シルト層(マンガン粒・鉄斑あり)</p> <p>5. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂含む。遺構埋土か)</p> <p>6. 根跡</p> <p>7. 根跡</p> <p>8. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト層(2.5Y8/2灰白色極細粒砂含む。径1mm炭化物含む)</p> <p>9. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり。径1mm炭化物含む)</p> <p>10. 10YR7/2にぶい黄橙色砂質シルト層(2.5Y7/1灰白色極細粒砂が水平にラミナ状堆積。鉄斑あり)</p> <p>11. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり。径1mm炭化物含む)</p> <p>12. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層(2.5Y7/1灰白色極細粒砂少し含む。鉄斑少ない。径5mm~3mm炭化物含む。遺構埋土か)</p> <p>13. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂が水平にラミナ状堆積。径1mm炭化物含む)</p> <p>14. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑少ない。径1mm炭化物含む)</p> | <p>15. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂層(鉄斑含む)</p> <p>16. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑少ない)</p> <p>17. 10YR6/1褐灰色粘土質シルト層</p> <p>18. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(鉄斑あり。大礫の歪角礫少し含む。径1~5mm炭化物含む)</p> <p>19. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂層(鉄斑あり。径1mm炭化物含む)</p> <p>20. 10YR7/1灰白色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂多く含む)</p> <p>21. 10YR5/1褐灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む)</p> <p>22. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む)</p> <p>23. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト層(10YR7/2にぶい黄橙色中粒砂層と互層に堆積)</p> <p>24. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト層(層上部に2.5Y7/1灰白色細~中粒砂含む。10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む)</p> <p>25. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(径1~5mm炭化物含む)</p> <p>26. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細~中粒砂少し含む)</p> <p>27. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む)</p> <p>28. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細~中粒砂と互層に堆積)</p> |
|---|---|

図 20 中央南北トレンチ (T46) の土層図

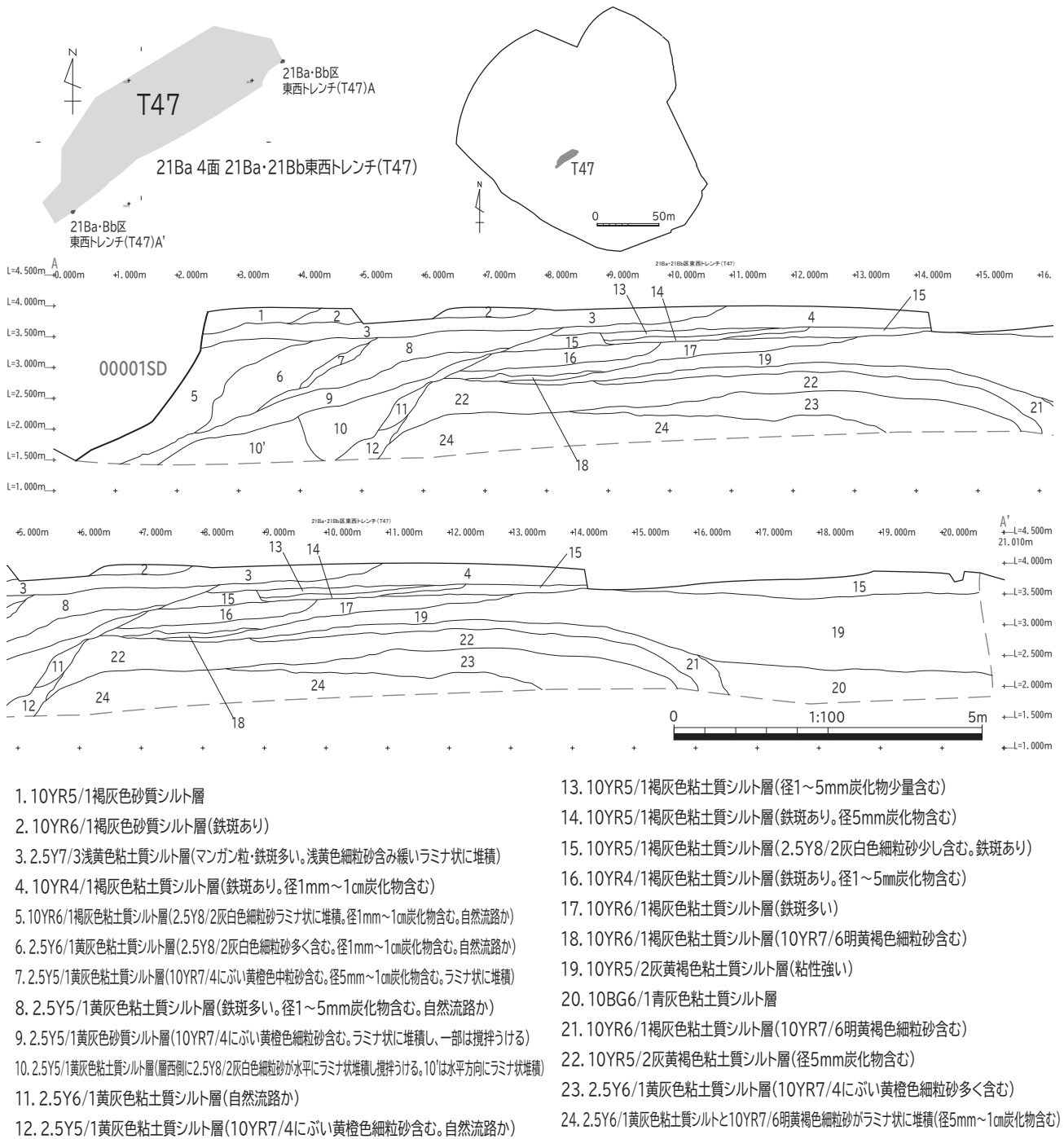


図 21 旧河道左岸東西トレンチ (T47) の土層図

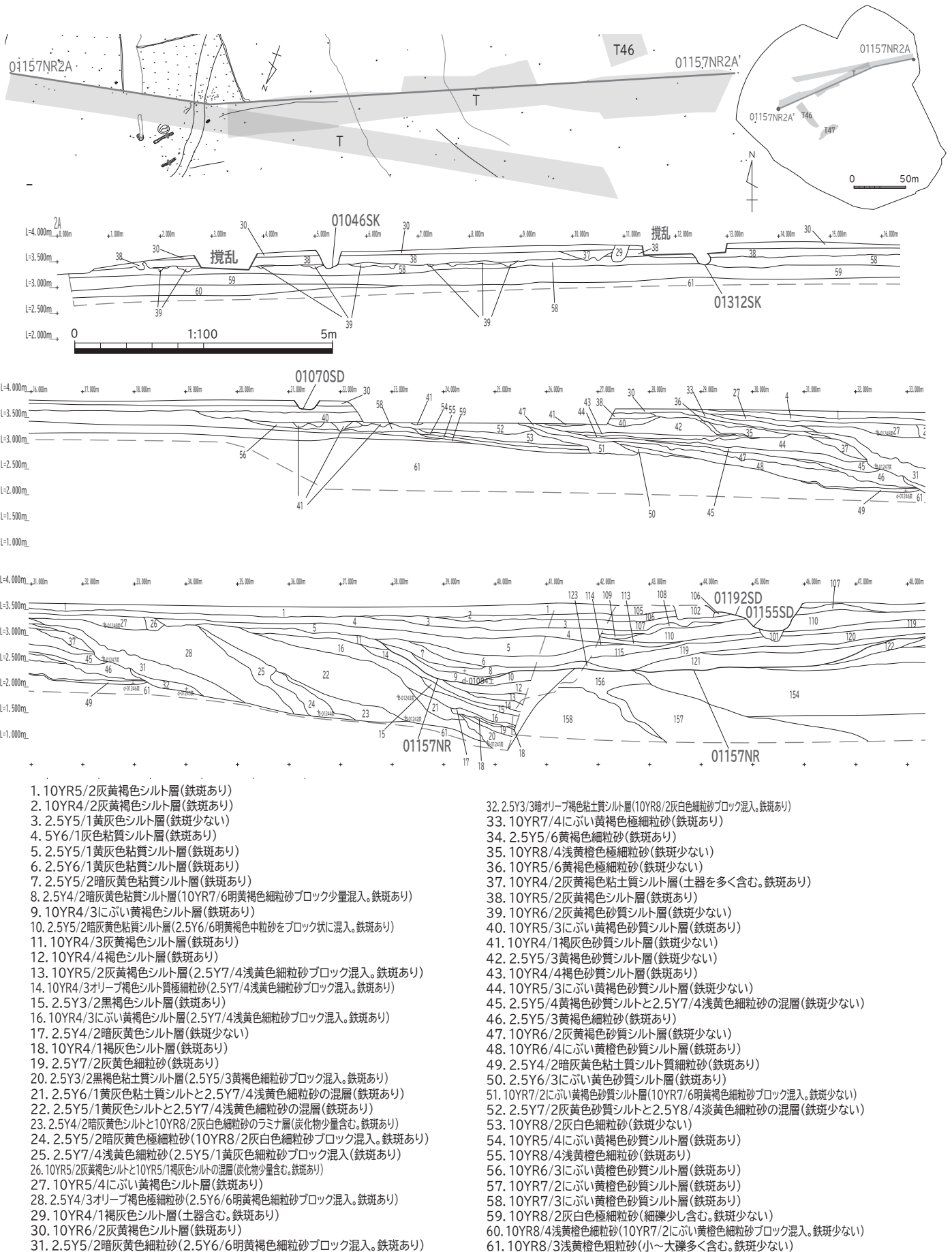
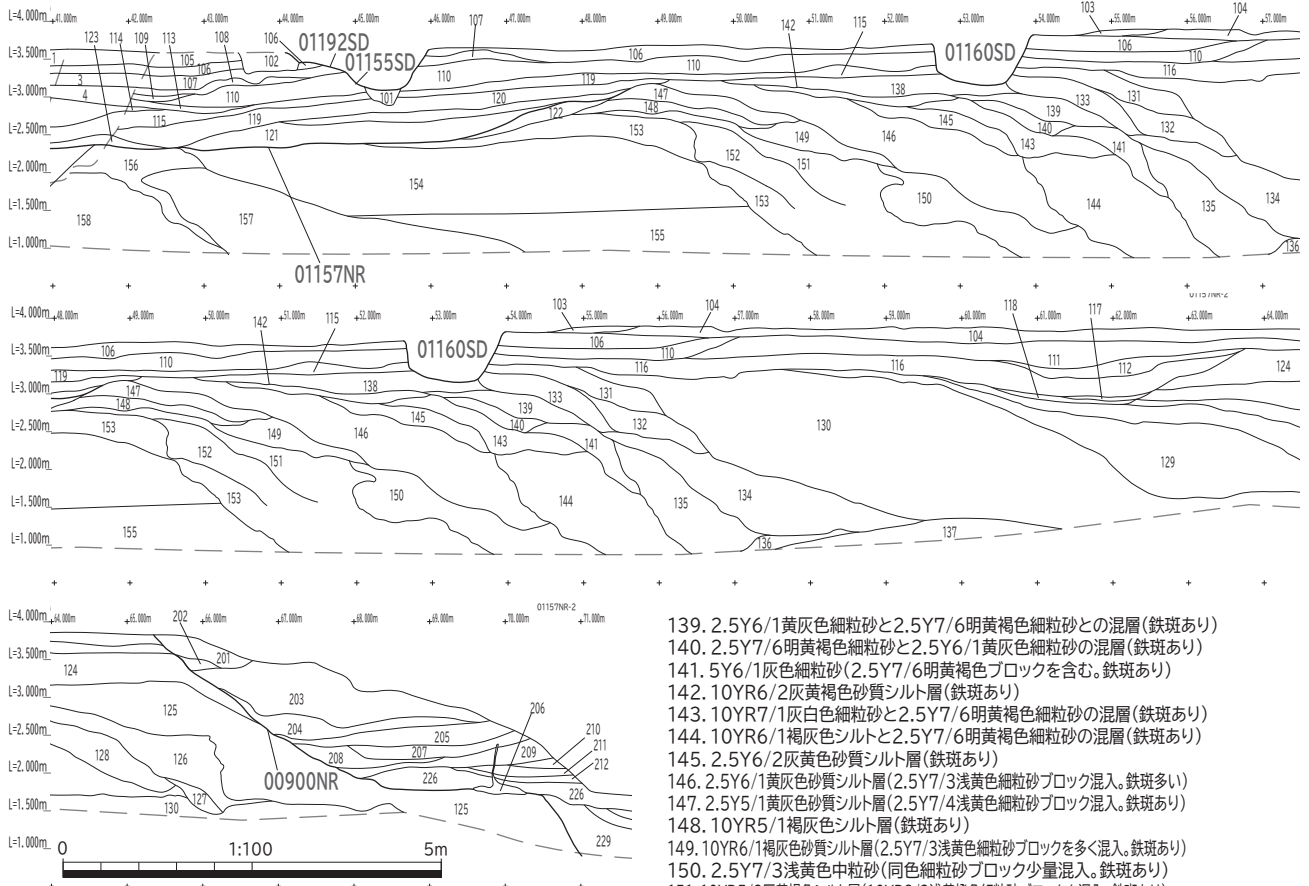


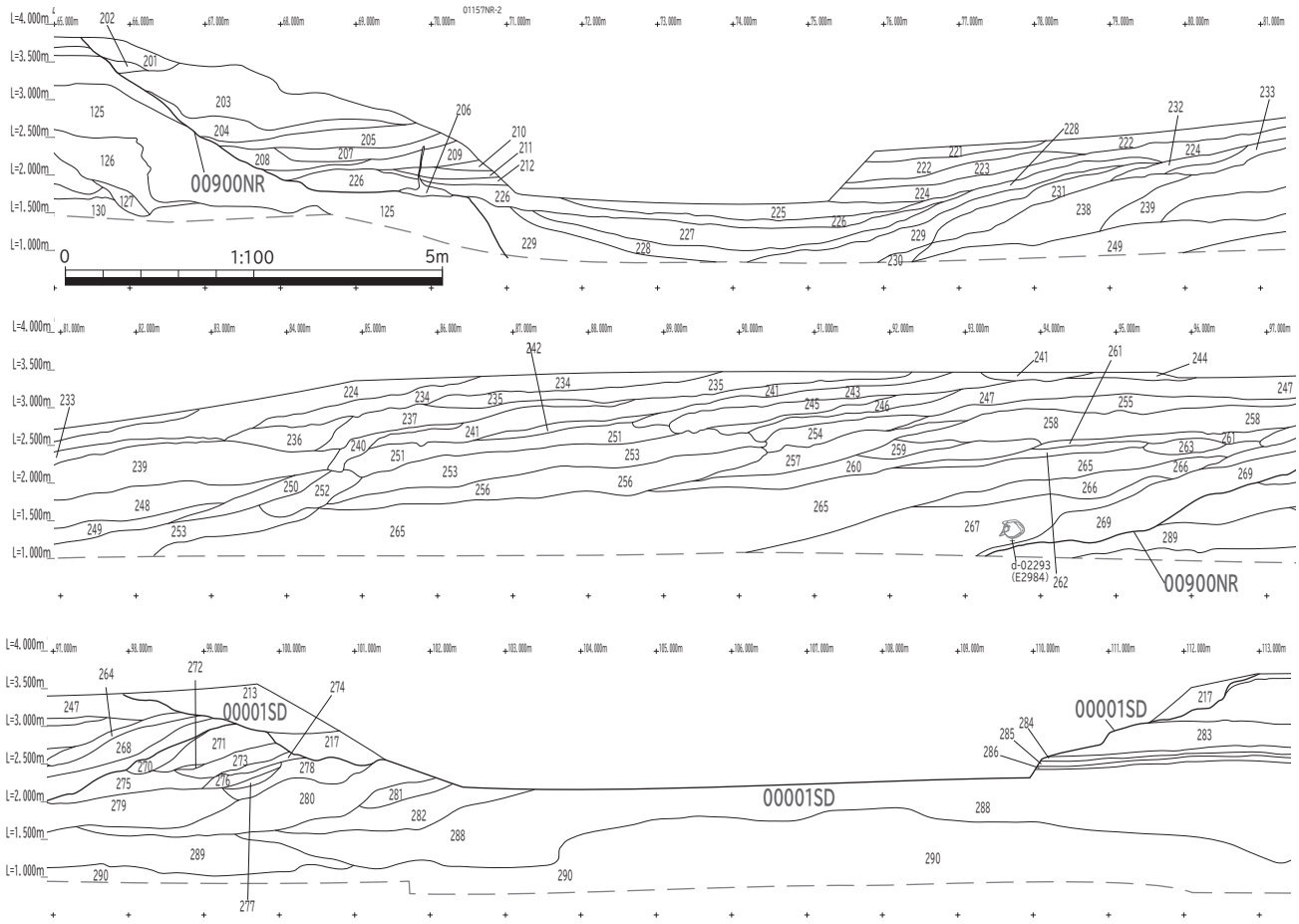
図 22 調査区横断 (00001SD・00900NR・01157NR) 東西トレンチの土層図 (1)



- 101. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(鉄斑あり。1155SD)
- 102. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 103. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト層(鉄斑あり)
- 104. 10YR5/2灰黄褐色シルト層(鉄斑あり)
- 105. 10YR5/2灰黄褐色シルト層(鉄斑あり)
- 106. 10YR4/2灰黄褐色シルト層(鉄斑あり)
- 107. 2.5Y5/1黄灰色シルト層(鉄斑少ない)
- 108. 10YR6/2灰黄褐色粘土質シルト層(炭化物少量含む。鉄斑あり)
- 109. 10YR5/1褐灰色シルト層(鉄斑あり)
- 110. 5Y6/1灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 111. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト層(鉄斑あり)
- 112. 2.5Y6/2灰黄色シルト層(鉄斑あり)
- 113. 5Y6/1灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 114. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 115. 2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 116. 5Y4/1灰色シルトと5Y5/2灰オリープ色シルトの混層(鉄斑あり)
- 117. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 118. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト層(炭化物少量含む。鉄斑少ない)
- 119. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 120. 2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 121. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y8/2灰白色細粒砂ブロック混入。鉄斑あり)
- 122. 10YR6/1褐灰色粘土質シルトと2.5Y6/2灰黄色シルトの混層(鉄斑あり)
- 123. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト層(10YR7/6明黄褐色細粒砂ブロック少量混入。鉄斑あり)
- 124. 2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 125. 2.5Y5/1黄灰色シルトと2.5Y8/6黄色細粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 126. 2.5Y4/1黄灰色シルト(2.5Y8/3淡黄色細粒砂ブロックを多く混入)
- 127. 10YR5/1褐灰色シルト(10YR8/2灰白色細粒砂をブロック状に混入。鉄斑あり)
- 128. 2.5Y7/2灰黄色細粒砂と5Y7/2灰白色細粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 129. 2.5Y8/4淡黄色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色シルトのラミナ層(鉄斑あり)
- 130. 5Y7/6黄色細粒砂と2.5Y6/2灰黄色シルトのラミナ層(鉄斑あり)
- 131. 10YR6/2灰黄色砂質シルトと5Y6/3オリープ黄色シルトの混層(鉄斑あり)
- 132. 5Y6/2灰オリープ色細粒砂(2.5Y7/4淡黄色細粒砂ブロックを混入。鉄斑あり)
- 133. 2.5Y6/2灰黄色細粒砂(2.5Y7/6明黄褐色細粒砂ブロックを多く混入。鉄斑あり)
- 134. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂と2.5Y8/3淡黄色細粒砂との混層(鉄斑あり)
- 135. 2.5Y7/6明黄褐色細粒砂と2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂との混層(鉄斑あり)
- 136. 2.5Y8/4淡黄色中粒砂(小礫混じる。鉄斑少ない)
- 137. 2.5Y8/1灰白色中粒砂(鉄斑少ない)
- 138. 10YR5/1褐灰色砂質シルト層(炭化物少量含む。鉄斑あり)
- 139. 2.5Y6/1黄灰色細粒砂と2.5Y7/6明黄褐色細粒砂との混層(鉄斑あり)

- 139. 2.5Y6/1黄灰色細粒砂と2.5Y7/6明黄褐色細粒砂との混層(鉄斑あり)
- 140. 2.5Y7/6明黄褐色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色細粒砂の混層(鉄斑あり)
- 141. 5Y6/1灰色細粒砂(2.5Y7/6明黄褐色ブロックを含む。鉄斑あり)
- 142. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト層(鉄斑あり)
- 143. 10YR7/1灰白色細粒砂と2.5Y7/6明黄褐色細粒砂の混層(鉄斑あり)
- 144. 10YR6/1褐灰色シルトと2.5Y7/6明黄褐色細粒砂の混層(鉄斑あり)
- 145. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト層(鉄斑あり)
- 146. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト層(2.5Y7/3淡黄色細粒砂ブロック混入。鉄斑多い)
- 147. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(2.5Y7/4淡黄色細粒砂ブロック混入。鉄斑あり)
- 148. 10YR5/1褐灰色シルト層(鉄斑あり)
- 149. 10YR6/1褐灰色砂質シルト層(2.5Y7/3淡黄色細粒砂ブロックを多く混入。鉄斑あり)
- 150. 2.5Y7/3淡黄色中粒砂(同色細粒砂ブロック少量混入。鉄斑あり)
- 151. 10YR5/2灰黄褐色シルト層(10YR8/3淡黄色細粒砂ブロックを混入。鉄斑あり)
- 152. 10YR6/1褐灰色砂質シルト層(10YR8/3淡黄色細粒砂ブロックを多く混入。鉄斑多い)
- 153. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルトと2.5Y7/4淡黄色細粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 154. 2.5Y8/2灰白色細粒砂と2.5Y5/1黄灰色シルトのラミナ層(鉄斑なし)
- 155. 10YR8/2灰白色中粒砂(小～中礫を多く含む。鉄斑なし)
- 156. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト層(2.5Y6/6明黄褐色中粒砂をブロック状に混入。鉄斑あり)
- 157. 2.5Y8/1灰白色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色シルトのラミナ層(鉄斑あり)
- 158. 5Y8/1灰白色中粒砂と2.5Y4/1黄灰色シルトのラミナ層(鉄斑なし)
- 201. 2.5Y4/1黄灰色シルト層
- 202. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト層(鉄斑あり)
- 203. 2.5Y8/2灰白色中粒砂と10YR8/2灰白色細粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 204. 10YR6/2灰黄褐色極粗粒砂と2.5Y7/2灰黄色細粒砂のラミナ層(鉄斑少ない)
- 205. 2.5Y8/2灰白色粗粒砂(少礫含む。鉄斑あり)
- 206. 噴砂
- 207. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトと10YR8/4淡黄褐色中粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 208. 10YR5/2灰黄褐色シルト層(鉄斑あり)
- 209. 10YR6/6明黄褐色粗粒砂(少礫含む。鉄斑あり)
- 210. 2.5Y8/3淡黄色中粒砂(鉄斑なし)
- 211. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
- 212. 10YR5/6黄褐色粗粒砂(少礫含む。鉄斑あり)
- 213. 盛土
- 214. 攪乱
- 215. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層(10YR7/6明黄褐色中粒砂含む)
- 216. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層(00139SK)
- 217. 10YR6/1褐灰色粘土質シルトと10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂の混層
- 218. 10YR6/1褐灰色砂質シルト層(鉄斑あり)
- 219. 2.5Y7/3淡黄色粘土質シルト層(マンガン粒・鉄斑多い。淡黄色細粒砂含む)
- 220. 10YR4/1褐灰色砂質シルト層
- 221. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂少し含む。径1~5mm炭化物含む)
- 222. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)
- 223. 10YR7/3にぶい黄褐色粗粒砂~極粗粒砂層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)
- 224. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄褐色粗粒砂含む。径5mm~1cm炭化物少し含む)
- 225. 10YR7/3にぶい粗粒砂~極粗粒砂層(10YR4/1褐灰色粘土質シルトと互層に堆積)
- 226. 10YR7/2にぶい黄褐色中粒砂と10YR8/2灰白色細粒砂のラミナ層(鉄斑あり)
- 227. 10YR7/3にぶい粗粒砂~極粗粒砂層(10YR4/1褐灰色粘土質シルトと互層に堆積)
- 228. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄褐色中粒砂含む)
- 229. 10YR4/1褐灰色粘土質シルトと10YR7/1灰白色細粒砂の混層(未分解の木質含む)
- 230. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層
- 231. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)
- 232. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(木質少し含む)

図23 調査区横断(00001SD・00900NR・01157NR)東西トレンチの土層図(2)



- |   |   |
|---|---|
| <p>233. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>234. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)</p> <p>235. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)</p> <p>236. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり。径5mm~1cm炭化物含む)</p> <p>237. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>238. 10YR7/1 灰白色粗粒砂層(10YR5/1 褐灰色粗粒砂と互層に堆積)</p> <p>239. 10YR7/1 灰白色粗粒砂層(10YR6/2 灰黄褐色細粒砂~中粒砂と互層に堆積)</p> <p>240. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>241. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂多く含む)</p> <p>242. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルトと10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂の混層</p> <p>243. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色中粒砂含む)</p> <p>244. 10YR8/3 浅黄橙色中粒砂層</p> <p>245. 10YR5/1 褐灰色細粒砂層(層西側に10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂多く含む。径5mm~2cm炭化物含む)</p> <p>246. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルトと10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂の混層</p> <p>247. 10YR5/1 褐灰色細粒砂層(層西側に10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂多く含む。径5mm~2cm炭化物含む)</p> <p>248. 10YR7/1 灰白色粗粒砂層(10YR5/1 褐灰色粗粒砂と互層に堆積)</p> <p>249. 10YR5/1 褐灰色細粒砂層</p> <p>250. 10YR7/3にぶい黄橙色粗粒砂層</p> <p>251. 10YR7/2にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂層</p> <p>252. 10YR4/1 褐灰色粗粒砂と10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂の混層</p> <p>253. 10YR7/1 灰白色粗粒砂層(細粒少し含む)</p> <p>254. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(7.5YR7/4にぶい橙色粗粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>255. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(層西側に10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂~中粒砂含む)</p> <p>256. 10YR7/2にぶい黄橙色粗粒砂~細粒層(10YR5/2 灰黄褐色中粒砂と互層に堆積)</p> <p>257. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂層</p> <p>258. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂と2.5Y7/1 灰白色極細粒砂がラミナ状に堆積)</p> <p>259. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂層(径5cm 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト含む)</p> <p>260. 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂層</p> <p>261. 10YR8/1 灰白色粗粒砂層</p> | <p>262. 10YR5/1 褐灰色粗粒砂層</p> <p>263. 10YR7/4にぶい黄橙色極粗粒砂~細粒層</p> <p>264. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂少し含む)</p> <p>265. 10YR7/1 灰白色粗粒砂と10YR6/1 褐灰色細粒砂の混層</p> <p>266. 10YR5/1 灰白色粗粒砂~細粒(10YR7/2にぶい黄橙色中粒砂と互層に堆積)</p> <p>267. 10YR7/1 灰白色粗粒砂(10YR6/1 褐灰色細粒砂を含む)</p> <p>268. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂含む。径1mm~1cm炭化物含む)</p> <p>269. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂含む)</p> <p>270. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂と10YR8/2 灰白色極細粒砂の混層</p> <p>271. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂(10YR8/2 灰白色極細粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>272. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂層</p> <p>273. 10YR6/1 褐灰色極細粒砂(10YR8/2 灰白色極細粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>274. 10YR7/1 灰白色極細粒砂(10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂含む)</p> <p>275. 10YR7/2 灰白色粗粒砂~極粗粒砂層</p> <p>276. 10YR7/1 灰白色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂少し含む)</p> <p>277. 10YR7/1 灰白色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂~粗粒砂含む)</p> <p>278. 10YR7/1 灰白色極細粒砂層(2.5Y8/1 灰白色極細粒砂含む)</p> <p>279. 10YR7/1 灰白色粗粒砂と10YR6/1 褐灰色細粒砂の混層(中粒の垂角礫少し含む)</p> <p>280. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂少し含む)</p> <p>281. 10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂層(10YR6/1 褐灰色極細粒砂含む)</p> <p>282. 2.5Y8/1 灰白色細粒砂層(10YR6/1 褐灰色極細粒砂含む)</p> <p>283. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり。径1mm~1cm炭化物含む)</p> <p>284. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層</p> <p>285. 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト層(10YR7/6 明黄褐色細粒砂含む)</p> <p>286. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト層</p> <p>287. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)</p> <p>288. 10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂~中粒砂層(10YR6/2 灰黄褐色中粒砂~粗粒砂ラミナ状に堆積)</p> <p>289. 10YR7/1 灰白色粗粒砂と10YR6/1 褐灰色細粒砂の混層(中粒の垂角礫ラミナ状に堆積)</p> <p>290. 10YR5/1 褐灰色極粗粒砂~細粒層(一部10YR7/6 明黄褐色中粒砂~粗粒砂がラミナ状に堆積)</p> |
|---|---|

図24 調査区横断(00001SD・00900NR・01157NR) 東西トレンチの土層図(3)

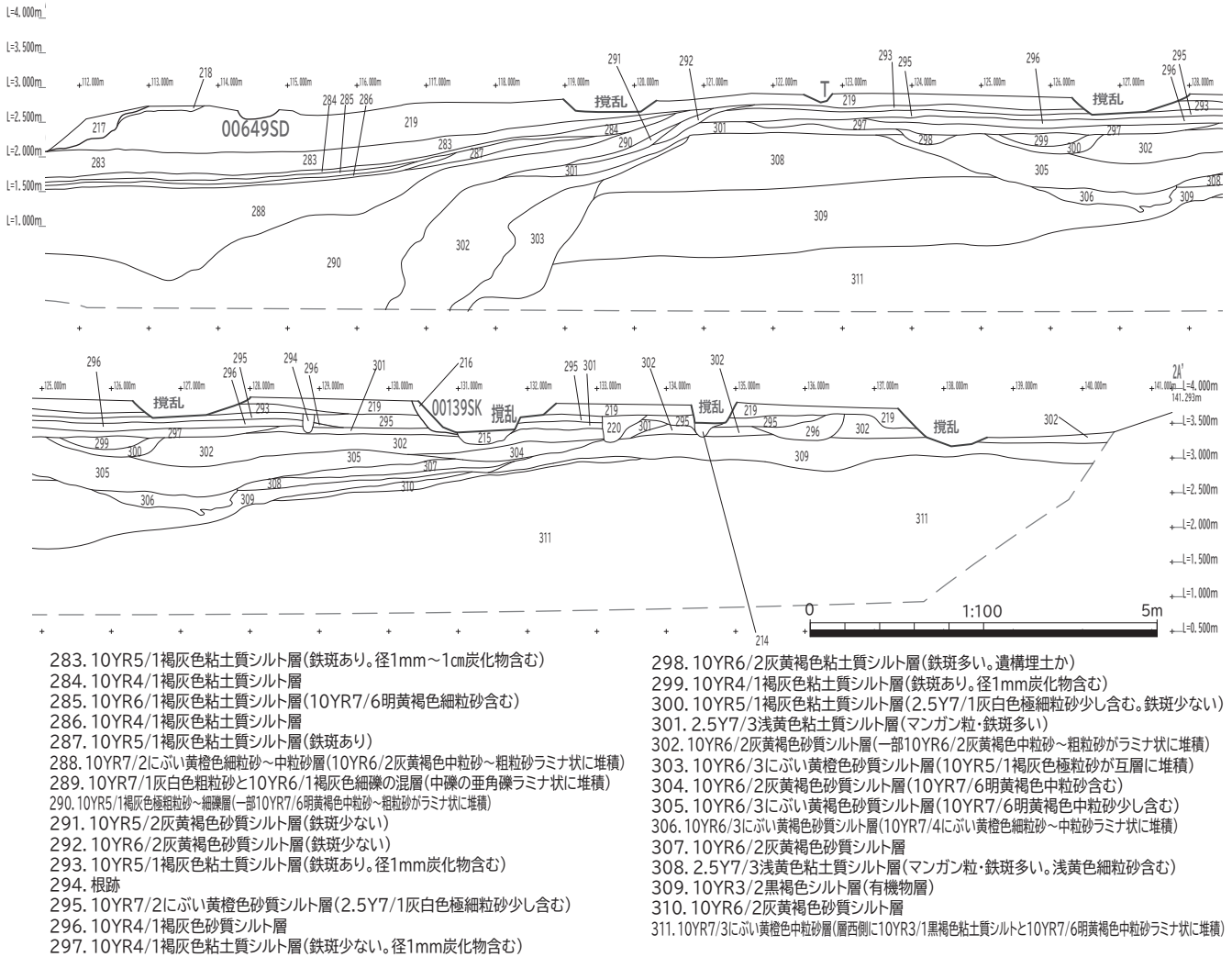
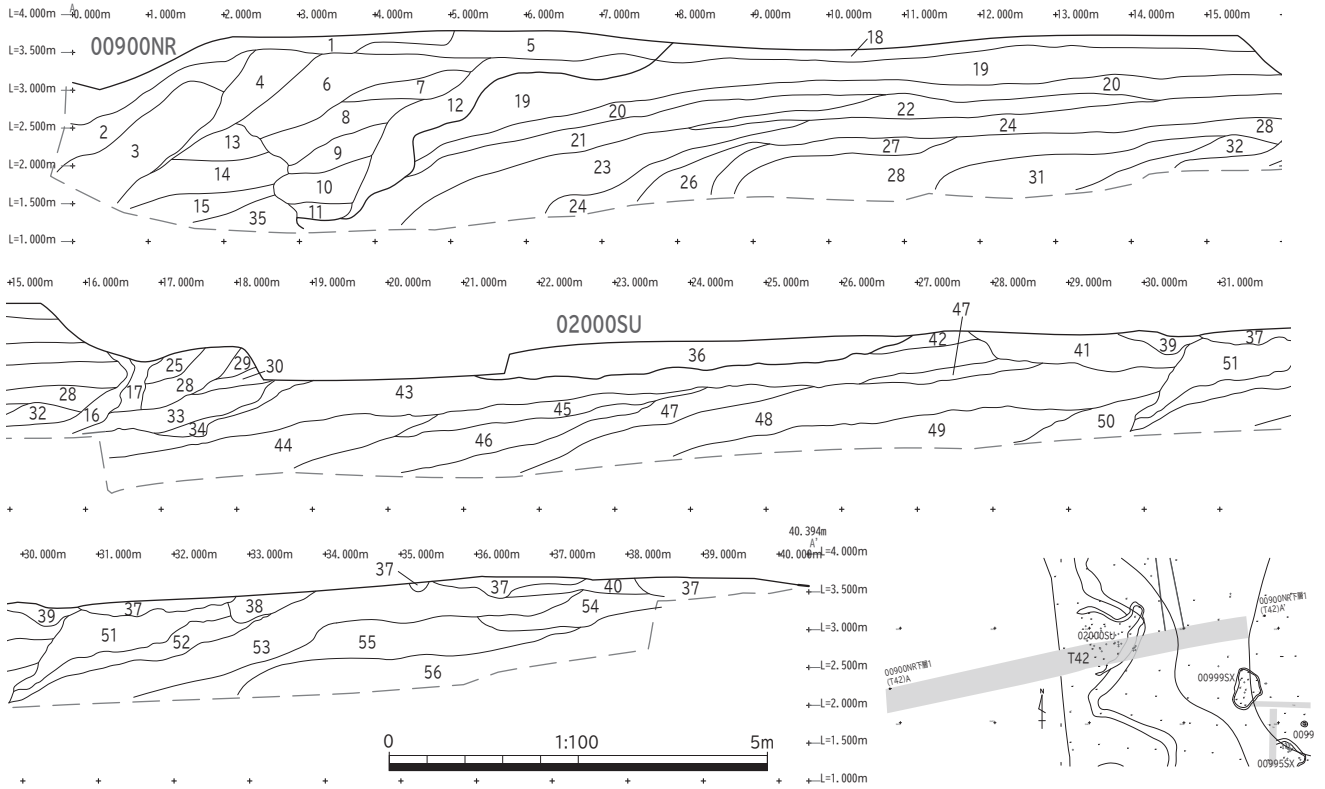


図 25 調査区横断 (00001SD・00900NR・01175NR) 東西トレンチの土層図 (4)

124 ~ 134m の幅約 10m の凹地に対する堆積も河道の痕跡である (最下部の 306 層がラミナ堆積)。この規模は 1157NR に似ており、こちらは集落の横ではなかったために土器の顕著な出土がなかったとみられる。

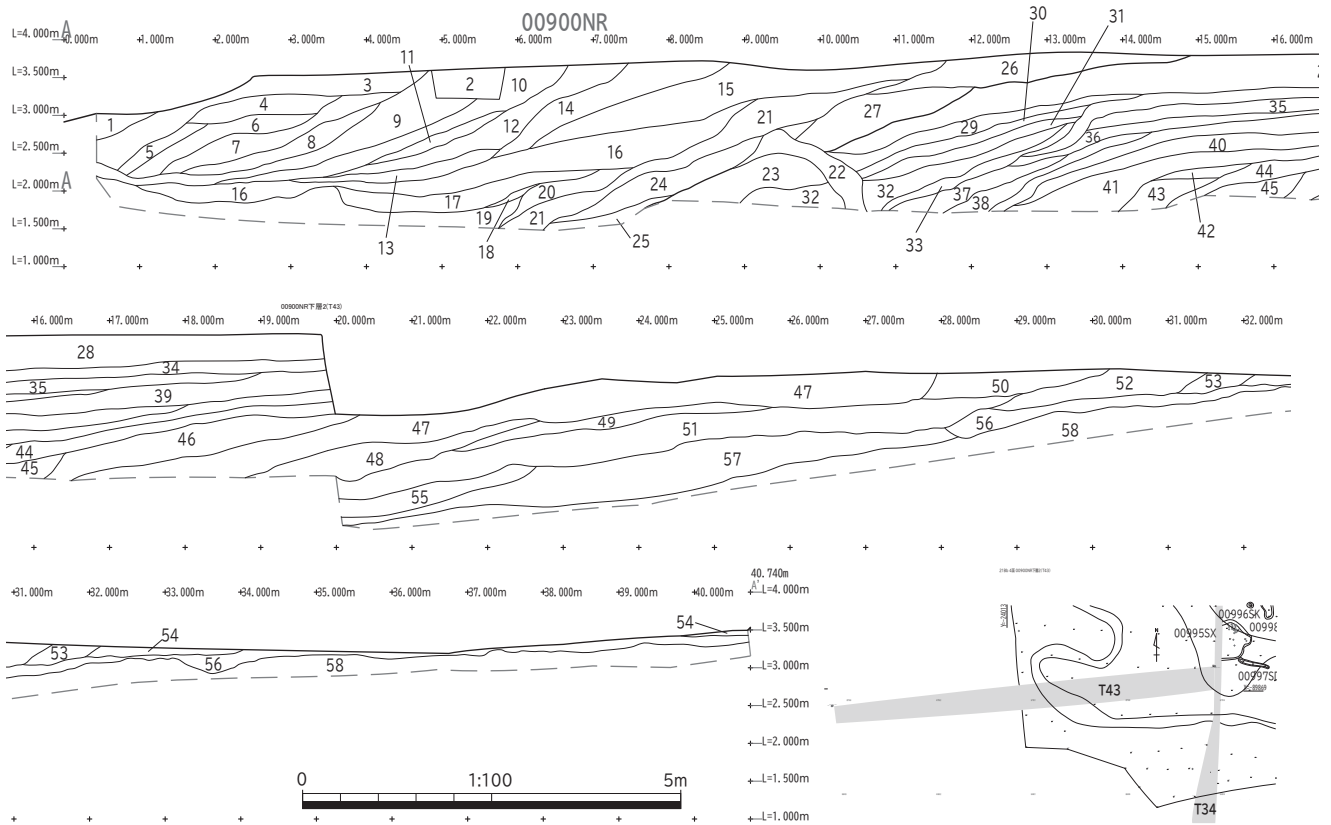
**微高地の形成過程** このように、各土層断面の観察から以下の変遷が想定される。すなわち低湿地だった環境に微高地が形成され生活域として土地利用が始まった。この開始時期については後章で述べるように竪穴建物跡が確認された弥生時代後期初頭と想定される。しかし、古墳時代前期に河道の削割を受けた後に進んだ堆積によって、標高約 3.0m だった微高地の頂部が標高 3.5 ~ 4.0m まで隆起した。その段階で古墳時代前期後半以降に土地利用が再開された。この土地利用は継続的で、古墳時代後期 ~ 奈良時代前半に河道の堆積が進むにつれて微高地の範囲が拡大したとみられる。

弥生時代から奈良時代にかけて微高地を形成した河道が完全に埋没した時期は、旧河道跡の上で確認された遺構の時期を踏まえて総括で述べることにするが、江戸時代の築庭の直前には平坦な地形環境に変貌していたことは確かである。それまでの期間での隆起は最大で約 0.5m の上昇にとどまり、例えば調査区南壁 (21Ba 区南壁) の土層断面にあるように、古墳時代 ~ 奈良時代の集落遺構が検出可能な標高約 3.8m から江戸時代の遺構検出面の標高は約 4.3m となっている。



1. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂層(N6/灰色砂質シルト少し含む。00900NR)
2. N6/灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ラミナ状に堆積。00900NR)
3. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂層(N6/灰色砂質シルトラミナ状に水平堆積。00900NR)
4. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(鉄斑少しあり。00900NR)
5. 2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト層(マンガン粒・鉄斑多い。浅黄色細粒砂含む。00900NR)
6. N6/灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ラミナ状に堆積。00900NR)
7. 10YR6/1褐色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む。00900NR)
8. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(鉄斑少しあり。00900NR)
9. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ラミナ状に堆積。00900NR)
10. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト層(しまり無し。00900NR)
11. 2.5Y8/2灰白色細粒砂層(層最下部に未分解の木質堆積。00900NR)
12. 10YR6/1褐色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂含む。00900NR)
13. 2.5Y8/2灰白色細粒砂層(00900NR)
14. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂と10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混層(径5mm炭化物少量含む。00900NR)
15. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂層(層最下部に10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが堆積。00900NR)
16. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂含む。径1mm炭化物含む。噴砂跡)
17. 2.5Y8/2灰白色中粒砂層(噴砂跡)
18. 2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト層(マンガン粒・鉄斑多い。浅黄色細粒砂含む。21Aa区壁面15層相当・21Bb区東壁23層下層相当。2面目検出)
19. N6/灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ラミナ状に堆積)
20. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂少し含む)
21. N6/灰色極細粒砂と10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂の混層
22. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(径1mm炭化物少量含む)
23. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む。径1~5mm炭化物含む)
24. 10YR5/1褐色粘土質シルト層(径1mm~1cm炭化物含む)
25. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂層(2.5Y7/3浅黄色と10YR5/1褐色粘土質シルトがブロック状に堆積。24層と同一層か)
26. 10YR6/1褐色粘土質シルトと2.5Y7/4浅黄色中粒砂の混層(径1mm炭化物含む)
27. 10YR6/1褐色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂含む。径1mm炭化物含む)
28. 10YR6/1褐色粘土質シルト層(粘性強い。2.5Y7/4浅黄色中粒砂ラミナ状に堆積。径1mm炭化物含む。3面目検出)
29. 10YR6/2灰褐色細粒砂層(径1mm炭化物含む)
30. 10YR6/1褐色極細粒砂層(鉄斑あり)
31. 10YR5/1褐色砂質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂ラミナ状に堆積。径1~5mm炭化物含む)
32. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂含む。鉄斑あり。径1mm炭化物含む)
33. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂と2.5Y7/4浅黄色中粒砂の混層
34. 10YR6/1褐色極細粒砂層(鉄斑あり)
35. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(00900NR埋土か。噴砂のため21層を变形させる)
36. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(10YR7/6明黄褐色中粒砂少し含む。マンガン粒・鉄斑あり。径5mm~2cm炭化物含む。02000SU)
37. 10YR3/1黒褐色粘土質シルト層(10YR7/6明黄褐色中粒砂少し含む。マンガン粒・鉄斑あり。径5mm~2cm炭化物含む。遺物包含層)
38. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂層
39. 10YR5/1褐色細粒砂層(径1mm炭化物含む)
40. 2.5Y7/1灰白色砂礫層
41. 10YR7/1灰白色細粒砂層(木質含む)
42. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂層(径1mm炭化物含む)
43. 2.5Y8/2灰白色中粒砂層
44. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(細礫ラミナ状に堆積)
45. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(10YR8/2灰白色細粒砂含む)
46. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(10YR8/2灰白色細粒砂と互層に堆積)
47. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(10YR6/6明黄褐色粗粒砂ラミナ状に堆積)
48. 10YR8/2灰白色細粒砂層(10YR6/6明黄褐色粗粒砂ラミナ状に堆積)
49. 10YR8/2灰白色細粒砂層
50. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂層(径1~5mm炭化物含む)
51. 10YR7/2灰白色中~細粒砂層
52. 2.5Y7/1灰白色極細粒砂と10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂の混層
53. 2.5Y7/1灰白色細粒砂層(細礫~中礫の垂角礫多く含む)
54. 10YR4/4褐色粗粒砂層(中礫~大礫多く含む。基盤層)
55. 2.5Y7/1灰白色細粒砂層(細礫~中礫の垂角礫ラミナ状に堆積)
56. 2.5Y7/1灰白色細粒砂層(細礫~中礫の垂角礫多く含む)

図26 00900NR 右岸東西トレンチ (T43) の土層図



- 1. 盛土
- 2. 擾乱
- 3. 10YR3/1黒褐色シルト層(有機物層, 00900NR)
- 4. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(00900NR)
- 5. 7.5Y3/2黒褐色シルト層(有機物層, 00900NR)
- 6. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂少し含む, 00900NR)
- 7. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂ラミナ状に堆積, 00900NR)
- 8. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂ラミナ状に堆積, 00900NR)
- 9. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂含む, 00900NR)
- 10. 2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂ラミナ状に堆積, 00900NR)
- 11. 2.5Y8/2灰白色細粒砂層(00900NR)
- 12. 10YR6/1褐灰色砂質シルト層(2.5Y8/2灰白色極細粒砂含む, 00900NR)
- 13. 2.5Y8/2灰白色細粒砂層(00900NR)
- 14. 10YR6/1褐灰色砂質シルト層(00900NR)
- 15. N6/灰色極細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む, 径1~5mm炭化物含む, 00900NR)
- 16. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(層西側は2.5Y8/2灰白色中粒砂ラミナ状に堆積, 層東側は10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂が水平にラミナ状に堆積, 00900NR)
- 17. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(2.5Y7/4浅黄色細粒砂が層下部に堆積, 径1mm~1cm炭化物含む, 00900NR)
- 18. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(00900NR)
- 19. 2.5Y7/4浅黄色中粒砂層(00900NR)
- 20. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む, 00900NR)
- 21. 10YR5/1褐灰色砂質シルト層(10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂含む, 00900NR)
- 22. 10YR6/1褐灰色砂質シルトと2.5Y8/2灰白色細粒砂の混層(木質少し含む, 噴砂跡)
- 23. 2.5Y8/2灰白色細粒砂層(10YR6/1褐灰色砂質シルトと互層に堆積, 噴砂により影響を受けた層)
- 24. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂含む, 00900NR)
- 25. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(00900NR)
- 26. 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂層(鉄斑あり, 00900NR)
- 27. 2.5Y7/4浅黄色細粒砂と5Y6/1灰白色極細粒砂の混層(00900NR)
- 28. 2.5Y7/3浅黄色粘土質シルト層(マンガノ粒・鉄斑多い, 浅黄色細粒砂含む, 21Aa区壁面1.51層相当, 21Bb区東壁23層層相当, 2面目検出面)
- 29. 2.5Y7/1灰白色極細粒砂層

- 30. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂層
- 31. 2.5Y7/1灰白色極細粒砂と2.5Y8/2灰白色極細粒砂の混層
- 32. 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂と10YR5/2灰黄褐色極細粒砂の混層
- 33. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂層
- 34. N6/灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ラミナ状に堆積, T42\_19層相当)
- 35. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂少し含む, T42\_20層相当)
- 36. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂層(径1mm炭化物少し含む)
- 37. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層(2.5Y8/2灰白色極細粒砂含む, 径1mm炭化物少し含む)
- 38. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層
- 39. 10YR5/1褐灰色粘土質シルト層(径1mm~1cm炭化物含む, T42\_24層相当)
- 40. 10YR6/1褐灰色粘土質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂少し含む)
- 41. 10YR6/1褐灰色粘土質シルト層(粘性強い, 径1mm炭化物含む, T42\_28層相当, 3面目検出面)
- 42. 10YR5/1褐灰色砂質シルト層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂少し含む, 径1mm炭化物少し含む)
- 43. 10YR5/1褐灰色粘土質シルトと10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂の混層
- 44. 2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト層(層下部に10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂含む, 径1mm炭化物含む)
- 45. 2.5Y6/1黄灰色細粒砂層(10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂含む)
- 46. 2.5Y7/2灰黄色細粒砂層(2.5Y6/1黄灰色細粒砂含む, 4面目検出面)
- 47. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂層(2.5Y7/4浅黄色中粒砂含む, 鉄斑あり, 径1mm炭化物含む, T42\_32層相当)
- 48. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂と2.5Y7/4浅黄色中粒砂の混層(T42\_33層相当)
- 49. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂層
- 50. 10YR5/1褐灰色極細粒砂層(径1~5mm炭化物含む)
- 51. 10YR5/1褐灰色細粒砂層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂ラミナ状に堆積)
- 52. 10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂層(径1mm炭化物含む)
- 53. 10YR6/1褐灰色細粒砂層(10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂含む)
- 54. 10YR6/1褐灰色極細粒砂層(鉄斑少ない, T34\_48層相当)
- 55. 10YR5/1褐灰色細粒砂層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂含む)
- 56. 10YR6/1褐灰色細粒砂層(10YR6/6明黄褐色中粒砂含む, 径1mm炭化物含む)
- 57. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂層(細礫ラミナ状に堆積)
- 58. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と10YR8/2灰白色細粒砂の混層(細礫・中礫の垂角礫含む, T34\_52層相当)

図 27 00900NR 右岸東西トレンチ (T42) の土層図

## 第 2 節 遺構面と時期区分

### (1) 遺構面の設定

**遺構面について** 前節で述べた調査範囲西半部の微高地形成過程を元に本書における遺構面の設定について述べる。尤も、発掘調査期間中には遺構面の整然とした理解はできていない。理由の 1 点目は、調査範囲西半部(特に 21Ba 区)における遺構の集中度が突出して高かったことである。2 点目として、旧河道跡を挟んで堆積環境の異なる東半部と西半部の共通性を把握することは工程上不可能であった。したがって調査誌(遺物カードや調査日誌など日々積み上がる記録類)における遺構面表記は、特に 21Aa・21Ab・21Ba・21Ca・21Cb の各区(調査範囲西半部)と 21Bb・22A～C の各区(調査範囲東半部)では食い違いがある。

**検 1 面** 調査範囲全域で共通する遺構面で、鎌倉時代の井戸跡～江戸時代の庭園跡が該当する。21Bb 区では近代の高射砲陣地跡もこれに含まれる。調査区南壁(21Ba 区南壁)の 34 層を基準にすると中礫を含む細粒砂～極細粒砂の上面が相当する。ただし人為的な整地層(例えば同壁の 24 層)も含まれるのでブロック土の広がりもある。遺構面の標高は約 4.3m である。

**検 2 面** 21Ba・21Ca 区のみで設定される遺構面で、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物跡や小溝群などが該当する。21Ba 区では検 1 面の砂層を約 0.1～0.2m 下げたところでシルト層の上面が現れる。微高地の最頂部に相当し、微高地の軸線に沿って約 30m×60m の範囲に限定される。

**検 3 面** 旧河道跡右岸の調査範囲東半部では検 1 面の下層で古墳時代の竪穴建物跡などが検出され、これを検 2 面としている。ただしその全域で微高地のシルト層が認められたわけではなく、一部は砂質が強く弥生時代後期～古墳時代前期の土器が含まれる遺物包含層であった。そのため当該区域では、検 2 面の調査後にその包含層を掘り下げて検 3 面・検 4 面へと遺構面を更新しながら遺構検出を試みているが、後章で述べるように多量の土器が出土したものの顕著な遺構を確認することはできなかった。

これに対して 21Ba・21Ca 区などは検 2 面の遺構面を全体的に下げて更新し、さらなる精査を行った。結果、

微高地のより広範囲で竪穴建物跡などの集落遺構を検出し、検 3 面とした。このように調査範囲東半部と西半部で検出面の概念が異なっている。

**検 4 面** 21Aa 区では微高地最上面の遺構調査後、微高地西側で古墳時代前期の包含層に覆われた直線溝(645SD ほか)が検出され、その北東延長線上の検出を行うために微高地を掘り下げてあらたに検 4 面を設定した。それは T46 における 10 層より下に相当する(図 20)。一方 21Ba 区では、旧河道左岸に面して弥生土器を含む包含層や遺構の断面が認められたことから、該当する標高まで微高地のシルト層を掘り下げてこれもあらたに検 4 面とした。また先述のように調査範囲東半部でも包含層を掘削してこれを検 4 面としている。このように調査範囲内で局所的に最下面の調査を行っており、それぞれ異なる時期を対象としている。

### (2) 時期区分と本報告の構成

**時期・時代区分と遺物の編年** 名城公園遺跡は尾張地域に属する弥生時代～明治時代の遺跡である。発掘調査成果は考古学的手順にしたがい個別の遺構や遺物の提示から始まり、それらの型式としての認識つまり編年上の位置づけを行い相対的な新旧関係を示す。その際に必要になるのが編年体系で、当該地域で用いられる弥生土器～近世陶磁器の編年を骨子とする。すなわち尾張沖積低地の弥生・古墳時代土器、猿投窯産須恵器・灰釉陶器、尾張型山茶碗、瀬戸・美濃窯産陶(磁)器である。以下では型式(窯式・段階)名によって遺物や出土層位の時期の表記を基本とする。一方、編年と暦年代の対応は研究の積み重ねや放射性炭素年代測定によって今後改訂される可能性はあるが、時代や世紀での表記にも対応できる(表 3)。よって特定の型式が付与できなくとも、こういった表記で該当時期を示すこともある。また他地域からの搬入品(およびその模倣品)も含まれているが、それらの呼称については各地域での呼称に従っている。

**本報告の構成** 前節および前項で詳述したように、沖積低地に立地する本遺跡では複数の遺構面が存在する一方で空白期も存在する。試掘調査の成果も踏まえると、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～奈良時代、江戸時代の 3 つの時代において遺構や遺物の検出がピー

クとなり、それ以外は少ない。本書では上位遺構面から順に発掘調査成果を記述するが、この3つのピークを遺跡の特徴として認識し、それぞれの成果が遺跡評価に直結できるように構成したい。しかし3つのピークのなかでもとりわけ古墳時代中期～奈良時代の集落は、旧河道の機能とその利用により最も遺物量が多く、結果的に本書の分冊化においても当該期については途中で区切らざるを得なかった。また、遺構と出土遺物のまとまりを重視してそれぞれを掲載するので、特定器種(型式)の分布状況などは総括や後考に委ねることとしたい。

遺構の実測図は基本的に50分の1縮尺で、長大な溝や土層断面で100分の1や200分の1縮尺を用いている。出土遺物の実測図は基本的に土器・陶磁器類が4分の1縮尺、瓦が5分の1縮尺としている。ただし微小な遺物や逆に大型の木製品などは適宜縮尺を変更している。

土器・陶磁器類の型式認定や編年的位置づけなどについては、以下に挙げる外部の識者から多数のご教示をいただいた。近世・近代の陶磁器類は井上喜久男氏、金子健一氏、仲野泰裕氏、中世は青木修氏、岡本直久氏、古墳時代・古代の須恵器は浅田博造氏、大西遼氏、尾野善裕氏、城ヶ谷和広氏、鈴木敏則氏、中里信之氏、弥生土器・古墳時代の土師器は石黒立人氏、鈴木とよ江氏、川崎みどり氏、小橋健司氏、宮腰健司氏である。記して感謝申し上げる。

表3 名城公園遺跡における土器・陶磁器類の編年表

西暦	時代	土器・陶磁器類	西暦
1世紀	弥生時代後期	八王子古宮式	100
2世紀	弥生時代末期	山中式	200
3世紀	古墳時代前期	廻間Ⅰ式	300
4世紀	古墳時代前期	廻間Ⅱ式	400
5世紀	古墳時代中期	廻間Ⅲ式	500
6世紀	古墳時代中期	松河戸Ⅰ式	600
7世紀	古墳時代中期	松河戸Ⅱ式	700
8世紀	古墳時代後期	宇田Ⅰ式	800
9世紀	古墳時代後期	宇田Ⅱ式	900
10世紀	奈良時代	儀長式	1000
11世紀	(飛鳥時代)		1100
12世紀	奈良時代		1200
13世紀	平安時代		1300
14世紀	鎌倉時代		1400
15世紀	室町時代南北朝期		1500
16世紀	室町時代		1600
17世紀	室町時代戦国期		1700
18世紀	江戸時代		1800
19世紀	明治時代		1900
20世紀	近代		

西暦	時代	土器・陶磁器類	西暦
4世紀	古墳時代中期	須恵器・灰釉陶器	400
5世紀	古墳時代中期	H-111号窯式	500
6世紀	古墳時代後期	城山2・3号窯式	600
7世紀	古墳時代後期	H-11号窯式	700
8世紀	奈良時代	H-61号窯式	800
9世紀	奈良時代	廻ヶ池窯式	900
10世紀	平安時代	H-44号窯式	1000
11世紀	平安時代	H-15号窯式	1100
12世紀	平安時代	H-101号窯式	1200
13世紀	鎌倉時代	I-17号窯式	1300
14世紀	室町時代南北朝期	C-2号窯式	1400
15世紀	室町時代	I-25号窯式	1500
16世紀	室町時代戦国期	NN-32号窯式	1600
17世紀	江戸時代	O-10号窯式	1700
18世紀	江戸時代	K-14号窯式	1800
19世紀	明治時代	K-90号窯式	1900
20世紀	近代		

西暦	時代	土器・陶磁器類	西暦
9世紀	奈良時代	尾張型	900
10世紀	平安時代	東濃型	1000
11世紀	平安時代	山茶碗	1100
12世紀	鎌倉時代	第1型式	1200
13世紀	鎌倉時代	第2型式	1300
14世紀	室町時代南北朝期	第3型式	1400
15世紀	室町時代	第4型式	1500
16世紀	室町時代戦国期	第5型式	1600
17世紀	江戸時代	第6型式	1700
18世紀	江戸時代	第7型式	1800
19世紀	明治時代	第8型式	1900
20世紀	近代	第9型式	

西暦	時代	土器・陶磁器類	西暦
12世紀	鎌倉時代	瀬戸・美濃窯産陶器	1200
13世紀	鎌倉時代	古瀬戸前期様式	1300
14世紀	室町時代南北朝期	古瀬戸中期様式	1400
15世紀	室町時代	古瀬戸後期様式	1500
16世紀	室町時代戦国期	大窯期第1段階	1600
17世紀	江戸時代	大窯期第2段階	1700
18世紀	江戸時代	大窯期第3段階	1800
19世紀	明治時代	大窯期第4段階	1900
20世紀	近代	連房式登窯	

弥生土器・土師器：愛知県2003『愛知県史 資料編3考古3 古墳』  
 須恵器・灰釉陶器：愛知県2015『愛知県史 別編窯業1 古代 猿投系』  
 山茶碗・瀬戸・美濃窯産陶器：愛知県2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』

## 第 4 章 発掘調査の成果（検 1 面）中世～近代

### 第 1 節 概要と表土等の出土遺物

#### (1) 概要

本章では、検 1 面で確認された中世から近代までの遺構・遺物について記述する。検 1 面は江戸時代の庭園関連遺構が主な調査対象であったが、明治時代以降に北練兵場として利用された時期の遺構・遺物も含まれる。

本発掘調査の着手前やその最初期段階では、調査範囲以外（調査区設定前の未詳段階）の伐採や埋設管撤去工事が並行して行われており、特に後者は管理員が重機掘削に立ち会った。伐採時の抜根も同様で、作業時に公園盛土などから遺物の出土がみられた。なかには名城公園遺跡の評価に直結する出土文字資料も含まれている。

一部の遺構からは、20 世紀後半の物質も出土したので攪乱として扱ったものがあったが（攪乱は K を付して番号で管理）、その後の精査や検討によってその性格や意義が判明したものについてここで報告する。

#### (2) 各種工事立会時の出土遺物

**工事立会** 調査区設定前の伐採・抜根作業中に出土した遺物は公園の盛土に含まれているものが主体であるが、一部は埋設管除去作業で掘り下げ中に出土したものもある（79～83）。65 は江戸時代後期の瀬戸窯陶器練鉢。66 は瀬戸窯の磁器で、型紙絵付であることから明治 20 年代（19 世紀末）の製品。67 も精緻な絵付であるがこちらは明治 15～25 年の製品とされる。69 は白磁の型押し成形人形で、モチーフは旧日本陸軍の兵士ようである。このような白磁の玩具は 20 世紀前半の瀬戸市西萩 1 号窯跡などで生産されていたことが知られている（公益財団法人瀬戸市文化振興財団 2022『戦時下のせとやき - 近代後期の瀬戸窯と美濃窯 -』）。71・72・74 は 21Ba 区付近の伐採作業中に出土したもので瀬戸窯産の陶器製便器である。71 は大輪の花文、73・74 は外縁に雷文が描かれ明治時代とみられる。72 は煉瓦に磁器製タイルがモルタルで貼り付けられた状態で、タイルは瀬戸窯産とみられる。75 以降は調査範囲西方で工事用駐車場を施工した際に出土したものである。75 は近代の茶碗。76 は瀬戸・美濃窯産陶器の丸碗で大窯期、削

り出し高台で一部に釉が掛かっている。77 は瀬戸窯産の皿で呉須絵付。78 は瀬戸窯の磁器皿で型紙絵付であることから明治 20 年代に位置づけられる。

「御庭方」墨書 最も注目されるのが 79 で、80～83 とともに埋設管撤去工事で標高約 4.0m 付近まで重機掘削した際に出土した。出土した土層は青灰色シルトで池ないしは溝遺構の埋土である可能性が考えられる（遺物の出土もみられたことから当該地点での掘削は中止とした）。79 は瀬戸窯産の鉄釉火鉢の底部で外縁に 3 つの丸形粘土貼り付けによる三足の脚がある。底部外面は無釉で、明黄褐色の素地に 2 行にわたって大きく墨書がなされている。江戸時代後期のものである。釈文は一行目が「卯十月十一日（花押?）」二行目が「御庭方」で、状況からみて文字の消去・欠損はなさそうである。「御庭方」と呼称する庭園管理の部署を記したものであり、下御深井御庭の管理を行う部署の存在が確認できる資料でもある。おそらく「御庭方」での購入・配備の記録であろう。「卯」は卯年で、該当するであろう干支（暦年）を列挙すると乙卯（寛政 7 年、1795 年）、丁卯（文化 4 年、1807 年）、己卯（文政 2 年、1819 年）、辛卯（天保 2 年、1831 年）、癸卯（天保 14 年、1843 年）のいずれかとみられる。ただし尾張藩第 11 代藩主の徳川斉朝による下御深井御庭の改修が文化・文政年間であることから 1807 年または 1819 年の可能性が最も高い。80 は瀬戸窯産の鉄釉鉢で孫太と呼称される。81 は江戸中期の灰釉陶器蓋物の身、82 は江戸時代後期の柳茶碗で瀬戸窯産であろう。83 も瀬戸窯産の土瓶蓋であろうか詳細不明である。X5 は白色のビー玉大のガラス玉。

#### (3) 攪乱・表土・検 1 面の出土遺物

本項では発掘調査によって出土したがその所属遺構が不明な遺物を提示する。

**攪乱の出土遺物** 攪乱から出土した遺物は、中世～近世の陶磁器類が中心である。山茶碗は 128 が東濃型の 5 型式、129 は同 4 型式、130 は同 10 型式で底部外面に墨書の一部が残存する。これらは時期は 13～15 世紀代であるが当該期に限定できる遺構が少なくその出所は不明

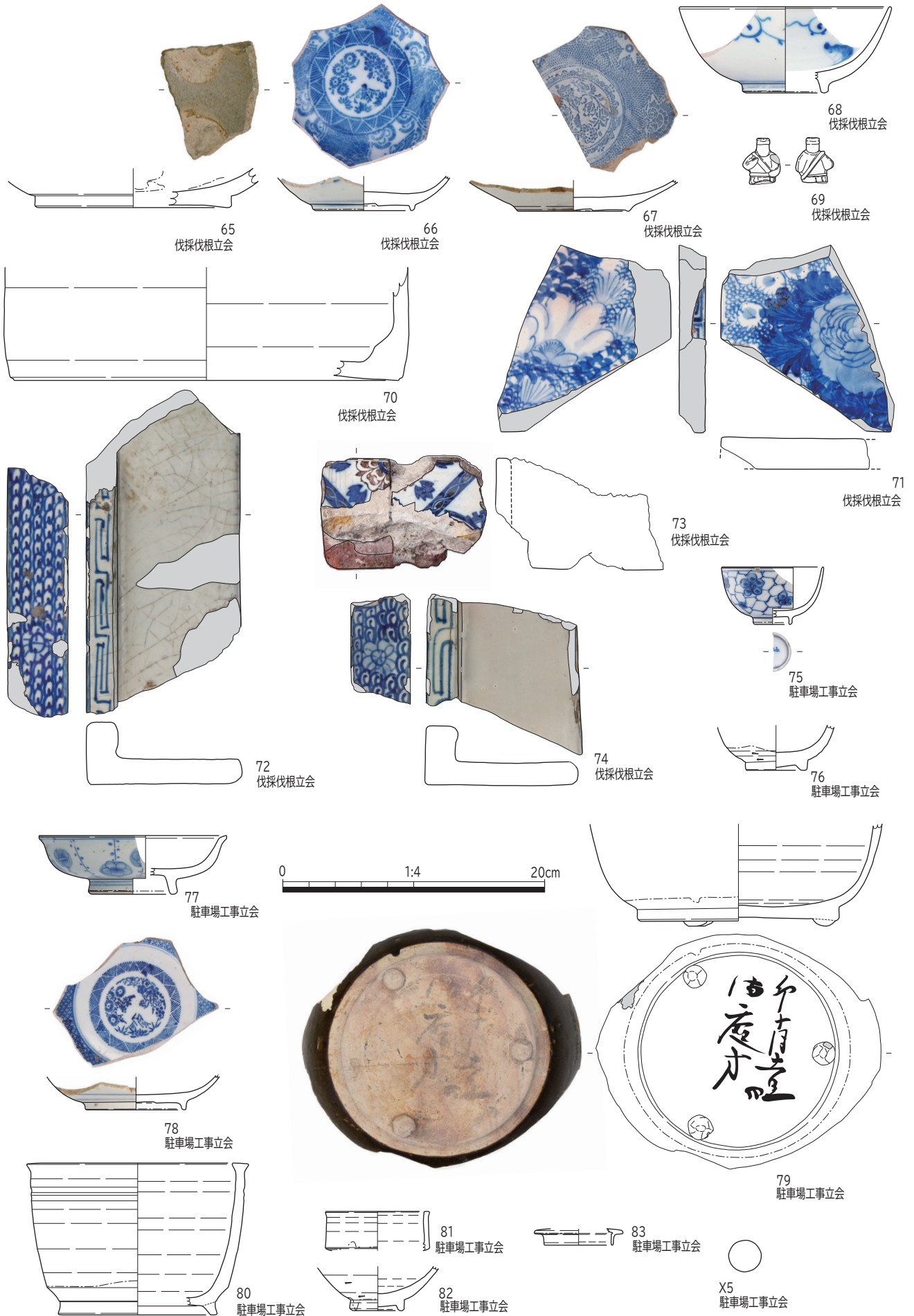


図 28 工事立ち会い等出土遺物実測図

である。133は古瀬戸後期様式IV期新段階の鉢である。131は大窯第4段階末期の志野皿底部で江戸時代初め頃のもの。近世・近代の陶磁器類で、141は近代の煉瓦、137～140は匣鉢で付与された攪乱の番号(K10、K136)によれば調査範囲南端付近に分布していたものである。146は底部内面(見込み)に擦り絵が施される。147はひょうそく(明かりを灯す器)。148は灰白色の釉が掛かった小瓶である。後述するようにこれも調査範囲南端の池状遺構などで集中して出土する。

特記すべきは大日本帝国陸軍(以下、旧日本陸軍)の銅製武器類で、M2・M3は小銃の薬莖である。長さ4.6cm、直径約1.2cmの円筒形だが側面は6面に面取されている。

またM4は大砲の砲弾(薬莖)である。底面は直径約11.6cmの円形で平らな面の中央に雷管がある。そこから上へ約15.6cm部分が残存しており、筒部径は約8.6cmと推定される。底面には「昭和8」の陰刻がかすかに見え、製造年号かと思われる。練兵場に設置された高射砲用の可能性が高いが、薬莖の上部に装着される弾頭の口径は8.0cm以下としかわからない。側面は外側に向けて大きく裂けており、内部の爆破によって破裂した状態であると考えられる。これは通常の保管や使用では考えにくいことで、可能性としては終戦後に進駐してきた米軍によって場内で意図的に爆破させた可能性もある。M5はウマの蹄鉄で軍馬のものであろうか。

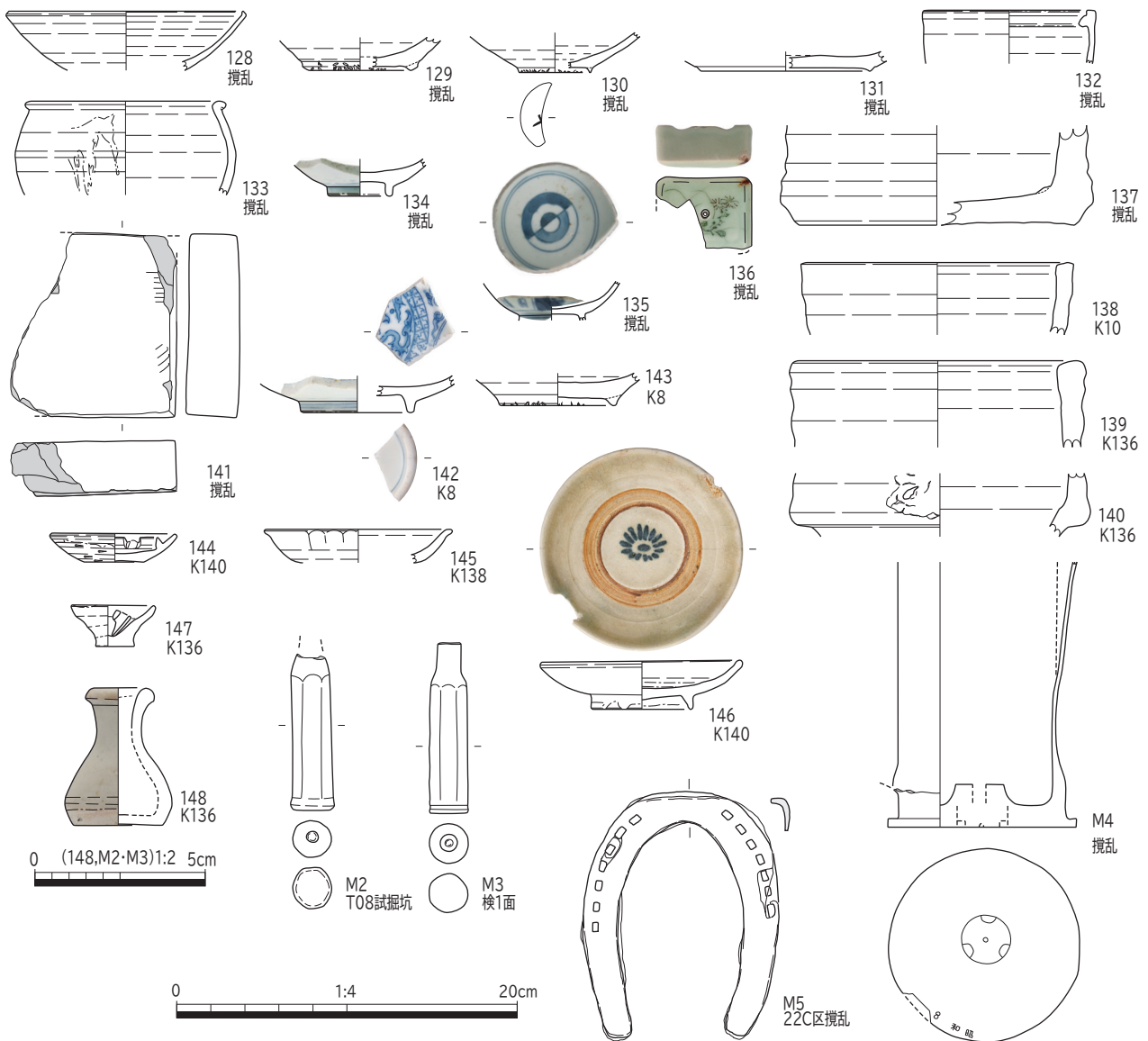


図29 攪乱出土遺物実測図

**表土出土の陶磁器類** 表土掘削時に出土した土器・陶磁器類のうち中・近世に属するものを提示する。84～90 は山茶碗類の碗・皿である。84・85 は三角形の高台が特徴の尾張型第 4 型式、86・88 は尾張型第 6 型式、87 は東濃型第 5 型式、90 は東濃型第 11 型式前半段階の小皿である。91 は古瀬戸前～中期様式の瓶類口縁部。92 も古瀬戸で平縁鉢。94 は大窯期の瀬戸・美濃窯産陶器丸皿で底部内面に型押し菊文あり。95 は菊皿。96 は瀬戸窯の連房式登窯（以下、登窯）第 10 小期の広東碗、97 は江戸時代前期の長杯、98 は瀬戸産磁器でいわゆる「染色体文」の絵付けで幕末～明治時代の製品である。106 は近代の白磁。108 は白磁で底部内面に吉祥句が陰刻される。近代美濃・飛騨地域の特産品である。113 は瀬戸窯の練鉢。110・111 は灰白色の釉が掛かった小瓶。112 は江戸時代中期末以降とみられる型式の小瓶であるが瀬戸窯産かどうかは明らかでない。114 は通い徳利で鉄絵で屋号とみられる文字がある。116 は瀬戸窯の火鉢で登窯第 9 小期。120 は美濃窯高田地区（多治見市）の徳利（いわゆる高田徳利）で、外面は横方向のヘラ削り、時期は登窯第 7 小期。124 は瀬戸窯白磁の水盤（花器）で側縁は唐草文様。125 は太平洋戦時下の磁器丸碗で、底部外面（高台内）に統制番号「岐 671」の印がある「国民食器」である。「岐 671」は岐阜県土岐市妻木町の窯とみられる。127 は施釉瓦で形状から棧瓦であろう。凹面は褐色釉で凹面は無釉素地に条線が施されている。990 は手捏ねの陶製品で窯道具（棒ツク）の一種か。

**検 1 面出土陶磁器類** 遺構面（検 1 面）での包含層掘削中あるいは遺構精査中に出土した遺物群である。149～157 は山茶碗類。149 は東濃型第 11 型式、150 は尾張型第 6 型式、151 は東濃型第 10 型式、152 は東濃型第 11 型式古段階、153 は尾張型第 7 型式、154 は東濃型第 5 型式、いずれも碗である。155・156・157 はいずれも高台のない小皿で尾張型第 5 型式である。158 は瀬戸・美濃窯産陶器の丸皿で大窯第 2～3 段階。159 も大窯期の灯明皿。160 は古瀬戸後期様式（前半）の鉢の底部。161 も鉢で古瀬戸中期様式。162 は瀬戸窯の植木鉢底部で江戸時代後期。163 は輸入青磁碗。169 は古瀬戸後期の平碗。170 は古瀬戸折縁皿。171 は瀬戸窯登窯第 1～2 小期の長石釉（志野）丸皿。173 は腰錆釉の湯呑。174 は大窯期第 4 段階の長石釉皿。176 は瀬戸窯産の磁器で銅版絵付けであるから明治 30 年代の製品である。181

は瀬戸窯の磁器で型紙摺り絵であるがその質が落ちるので明治時代後半まで下るとみられる。187 は瀬戸窯の磁器皿で型紙絵付けであるから明治時代前半。189 は美濃窯の志野皿で高台の貼り付け箇所凹線が廻るのが特徴である。192 は瀬戸・美濃窯の御神酒徳利で登窯第 10～11 小期なので 19 世紀半ばの時期である。197 は瀬戸・美濃窯産半胴甕の口縁部。198 は瀬戸窯の植木鉢だが時期は特定しがたい。199～201 は瀬戸・美濃窯産陶器の挿鉢で 199 は大窯第 2 段階～同第 3 段階前半、200 は大窯第 4 段階～登窯初期段階。202 は土師器の内耳鍋口縁部で半球形を呈する尾張地域の型式であろう。

**「小肩衝」茶入** 193 は 21Aa 区で 00001SD 検出時に検 1 面の砂層から出土した茶入である。砂層の時期など位置づけは困難である。また、他の近世の陶磁器類が多く出土する 21Ba 区南端から離れて単体で出土している点も注意される。完形品で全く欠損がないものの、器面に窯体滓などが付着しており被熱のためか色調も良くない。高さ 8.1cm、底径 3.1cm の回転糸切痕のある底部から丸みをもって立ち上がり、胴部半ばに最大径を有しそのやや上方で 1 条の凹線が廻る。肩部は明瞭な稜線で屈曲し、口縁にも繊細な屈曲がある。このような「小肩衝（こかたつき）」で精巧かつ胴部の凹線がきれいに一周するものは日本国内で作られたもので、江戸時代初めかあるいは古瀬戸まで遡る可能性もある。器面の状況からみて下御深井御庭内で操業した御庭焼の初期段階の作である可能性も考えられる。

**匣鉢と施釉瓦** 204～211 は窯道具の匣鉢である。204 は器壁が薄くやや異なる印象がある。外面に自然釉が掛かっている。205 以降は多様なサイズの匣鉢のあることがわかる。212 は一見すると鉢であるが底部内面に重ね焼き時のワドチ痕らしきものがある。213 は古代の灰釉陶器のような精良な胎土で焼きしまった陶製品であるが器形・用途ともに不明である。214 は施釉瓦の丸瓦で凸面に濃緑色の釉が掛かっている。

**袍衣容器** 215・216 は 21Bb 区で検 3・4 面へ掘り下げ中に出土した土師器皿である。出土状況の詳細は不明であったが出土地点座標の記録があり、取り上げ時から 2 枚の皿であることは認識されていた。遺構図と対照させると検 1 面の土坑 00419SK の位置に該当することから、当該遺構の最下部に埋蔵されていたものだった可能性がある（遺構については後述）。さて土師器皿はとも

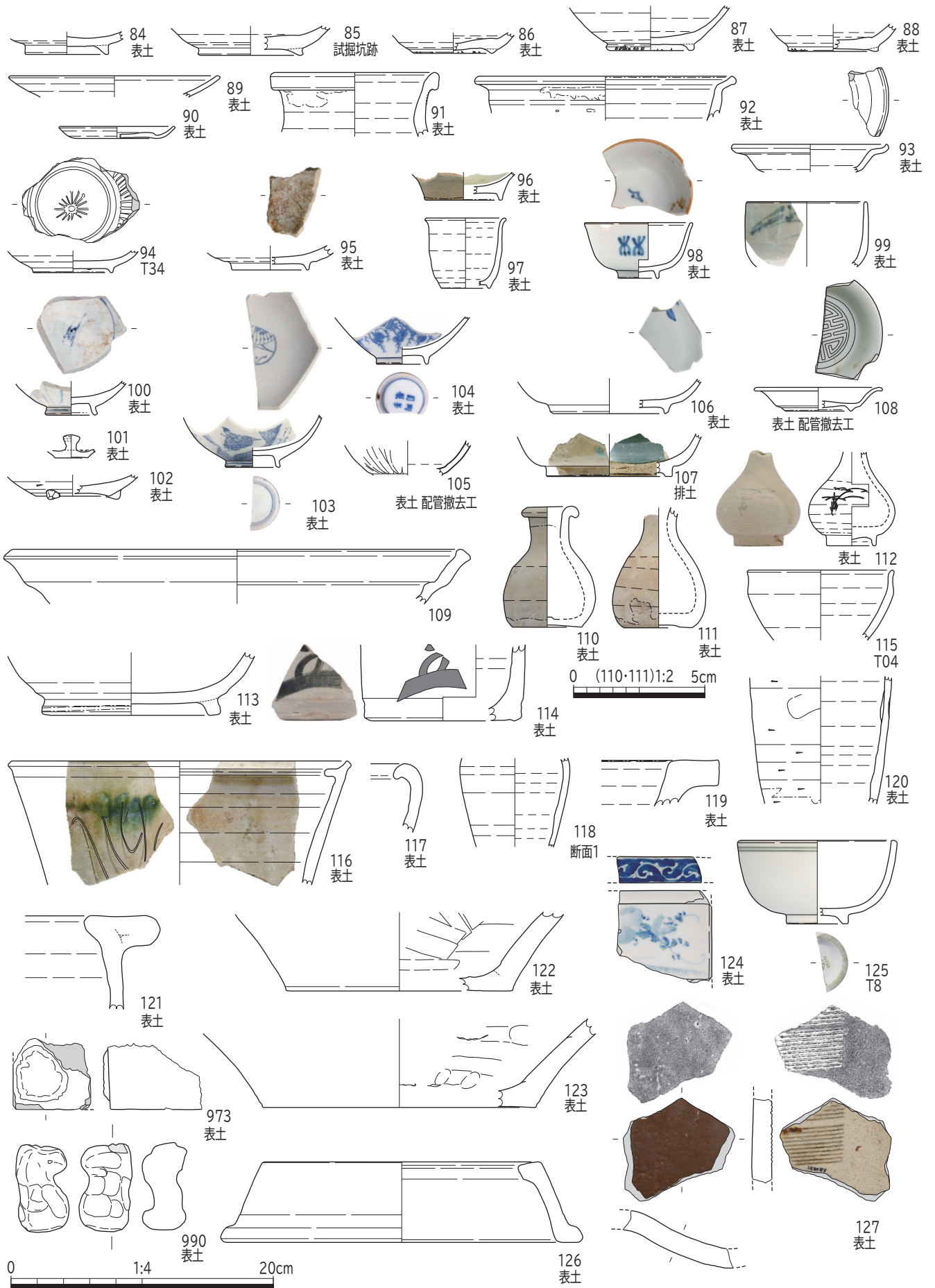


図30 表土出土遺物実測図(中世~近代)

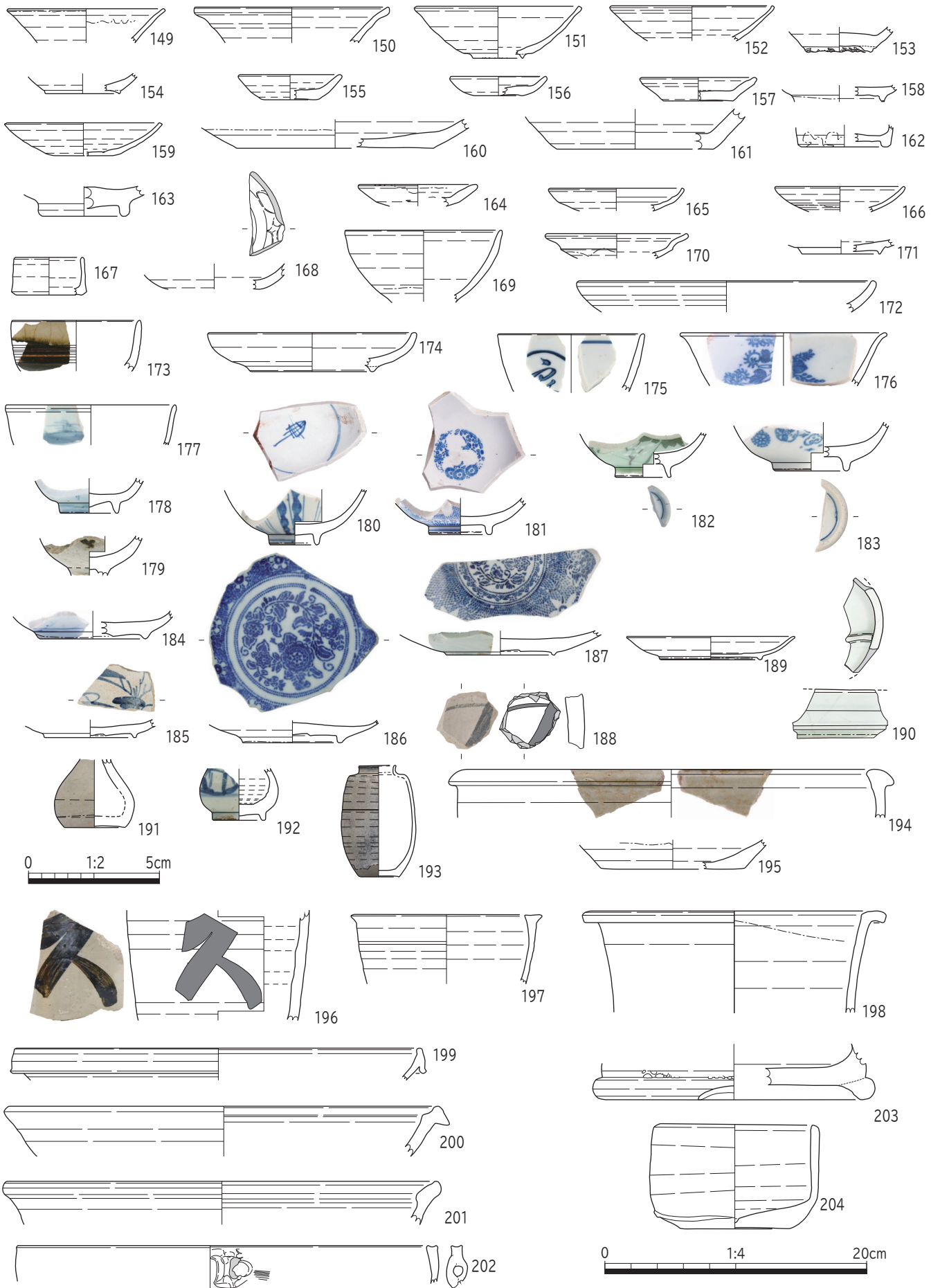


図 31 検 1 面出土遺物実測図 (中世~近代 1)

に正円形で直径 20.9cm の大型品である。口縁部から体部まで全体に丸みを有し、平らな底部外面はロクロ成形後の糸切り離しの可能性もあるが丁寧にナデ消されているため不明である。216 が約 90% の残存であるのに対して 215 は欠損部が多い。また 216 では内面に暗褐色の滲みがある。この両者の外面には帯状の変色域が認められる。おそらく繊維質の紐で縛り上げた痕跡と考えられる。

以上の痕跡から土師器皿は、215 を蓋に 216 を身にした合子状の容器で胞衣（出産にともなう胎盤）を収め埋納した可能性が考えられる。このような土師器皿を用いた胞衣容器埋納は江戸城下では盛んに行われており江戸の習俗が名古屋で確認できたことになる。なお近隣では岡崎城菅生曲輪の屋敷地における発掘調査でも同様の胞衣容器が確認されている（岡崎市教育委員会 2002 『岡崎

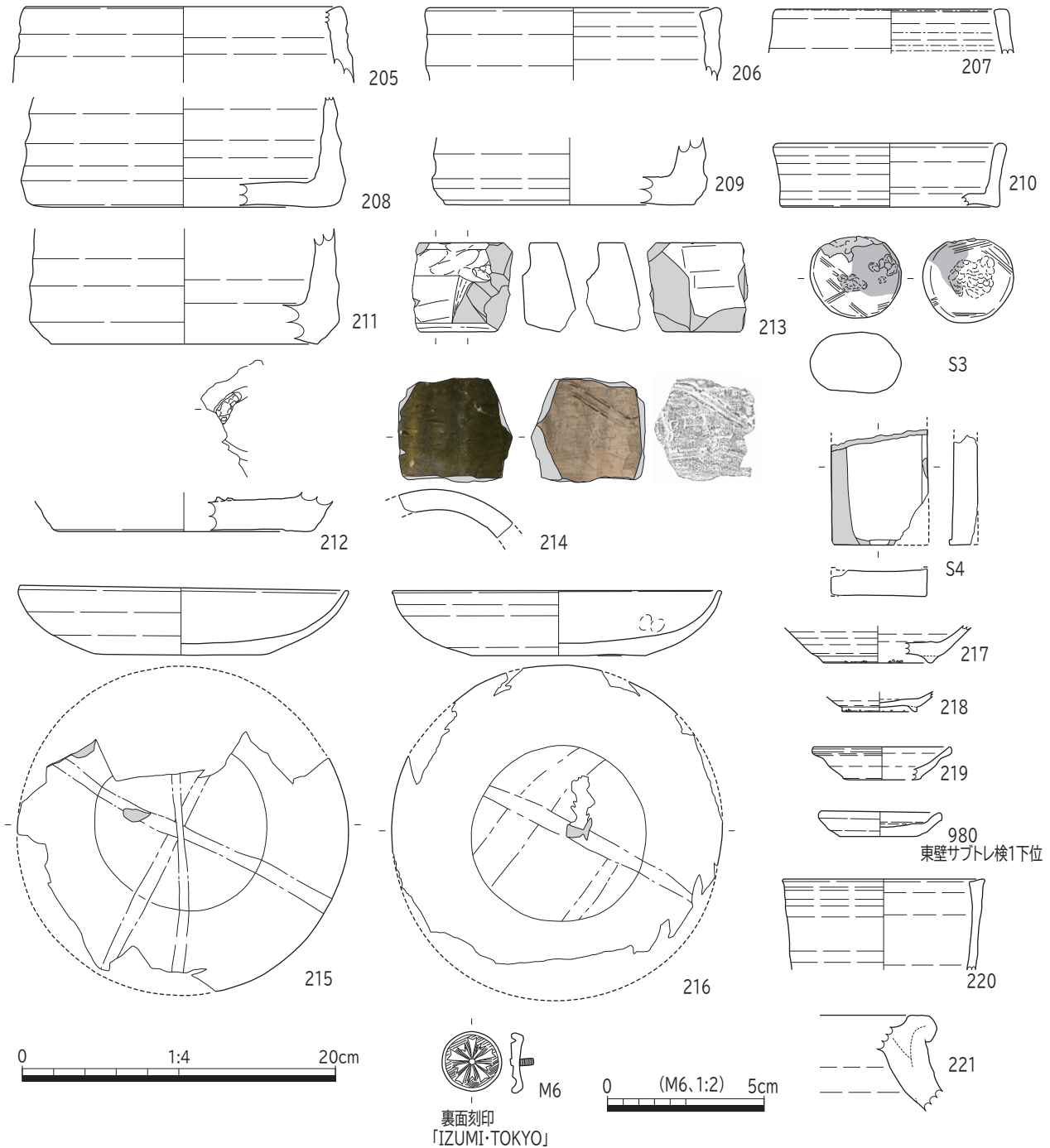


図 32 検 1 面出土遺物実測図 (中世～近代 2)

城菅生曲輪跡発掘調査概報』)。

S3 は石材が軽石で、円盤形の円礫に擦痕や敲打・被熱痕が全体的に観察される。S4 は硯である。名城公園遺跡で唯一の出土例である。217～219 は山茶碗類で 217 は尾張型第 6 型式、218 は東濃型第 7 型式、219 は無台の小皿で尾張型第 6 型式とみられる。220 は鉄釉の孫太(半胴甕の小型品)。221 は常滑産の大甕口縁部である。M6 は警察官制服のカフス釦で表面は旭日章、裏面にネジと「IZUMI・TOKYO」の陰刻がある。

**検 1 面出土瓦** ここでは伐採・抜根作業から表土掘削を経て検 1 面の遺構検出時に出土した近世の瓦類について提示する。瓦類は陶器瓦以外はすべて燻のかかった瓦である。222～228 は丸瓦である。本体部の上部に連結部となる玉縁がつく有段式で、製作技法は、筒形模骨に粘土板を巻き付けて成形しそれを 2 分割した後に側縁などをヘラ削りで面取する。厚みが約 1.7cm なので形状は 1 種類とみられる。その大きさは 222 によれば全長 28.7cm、全幅 14.8cm である。222・223 の玉縁長は 1.5cm、222・226・227 によれば下端部の面取幅は 2.4cm、側縁幅は 2.5cm とほぼ揃っている。229～235 は平瓦である。平瓦は 1 枚ずつ台上で成形したもので凹・凸面ともに丁寧にナデ消されており製作痕はみえない。このうち両側縁の確認できるのは 229 のみで、全幅は 23.6cm、厚みは 1.9cm である。一方全長のわかるのは 235 で 26.3cm である。231・235 は中心線で破断しており、平瓦 1 枚を分割して 2 枚分の熨斗瓦にしたとみられ、234 も同様にその可能性がある。232 は成形時に穿った直径 0.3cm の小孔があり、銅線で固定するためであろうか。234 は端面に「○」刻印がある。236・237 は軒平瓦である。236 は瓦当が残っているが文様はない。平瓦の端部を若干斜めに加工した平瓦の端部に顎部を貼り付ける製作技法である。一方、237 は顎部が外れているが接合面に 3～4 条の溝が施工されている。この接合面は 236 と異なりほぼ平らである。238～240 は軒棧瓦の軒丸瓦当部である。いずれも瓦当文様が別の范型によって施文されており、238 が面径 7.9cm に対して 239・240 が面径 9.0cm、238・240 は左巴、239 が右巴にと三巴文のモチーフも異なっている。241 は棧瓦、243 は端瓦で建物の切妻面位置に葺かれる。244 は凸面に切り込み風の刻線がある熨斗瓦か。245 は平瓦の形態に弧線状の端面がある。飾瓦の一部であろうか。246 は凸面に直線と弧線からなる条

線が施される。247・248 はあらかじめ熨斗瓦として成形されたもので側縁が緩く曲げられている。249 は平らな面に弧線状の条線が文様ふうに施されている。これと 250～252 は全体曲面がないことから床に敷く塼であったと考えられる。253 は飾瓦(鬼瓦)の一部で、手捏ねとヘラ切り込みによる加工である。254 も飾瓦(鬼瓦)で手捏ね成形である。974・975 は大棟に葺く冠瓦で厚さ 4.7cm である。

**玉石群** 表土掘削から遺構検出時および池跡 202SG 調査時に多量の玉石状の円礫が出土した。出土範囲は調査区南壁付近のグリッド 9106 を中心とする約 10 × 15m (150 m<sup>2</sup>) で、砂質の包含層に散布し敷設状態にはない。このうち土嚢袋 2 袋分に相当する 398 点(総計約 24kg)をサンプル採取し、室内調査で石材鑑定や大きさと重量の計測を行った。その平均値は長軸 5.1cm、短軸 3.8cm、厚さ 2.6cm、重量は 83.3g である。形状は角礫・亜角礫が各 1 点ずつに対して垂円礫 104 点、円礫 292 点に分類され、円磨度が極めて高い厚みのある円盤状が大半を占めている。また色調白色系のものがほとんどである。これらは礫敷き(庭園では州浜)に用いられるいわゆる玉石である。石材は、アプライト(有色鉱物が少ない花崗岩) 291 点、チャート 92 点、濃飛流紋岩 9 点、閃緑岩 5 点、石英または長石 4 点、砂岩 3 点、泥岩 2 点、花崗岩 1 点、ホルンフェルス 1 点である。特に円磨度の高い円礫に限ればアプライト 265 点、チャート 22 点、閃緑岩 3 点、濃飛流紋岩 2 点、花崗岩 1 点、砂岩 1 点、泥岩 1 点となる。石材からすると木曾川付近で採取されたものと推定される。本データではアプライトが主体であるのに対して、名古屋城二之丸庭園や御屋形庭園(愛知県埋蔵文化財センター 2005『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』)の円礫ではチャートが主体となっている(高橋圭也・永井邦仁 2025『【研究ノート】礫敷遺構の分析・検討方法名名古屋城二之丸庭園及び関連庭園遺跡を分析対象とした試み』『研究紀要』第 6 号 名古屋城調査研究センター)。この違いは作庭やその改変の時期に関係するのか作庭の資材調達方法の違いに関わるのか作庭の工程を考える上で重要な資料となる。

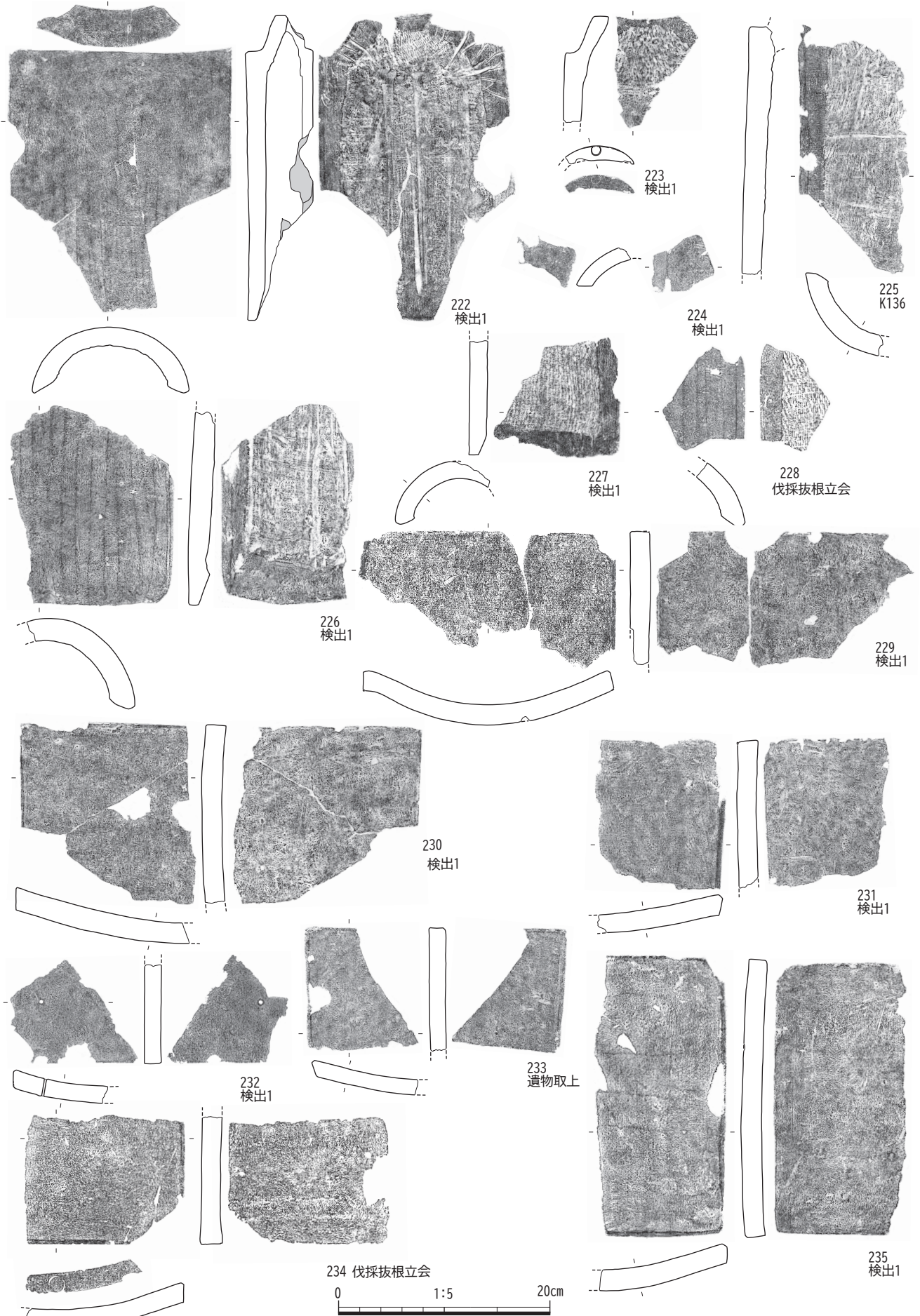


図 33 表土～検 1 面出土遺物実測図 (近世瓦 1)

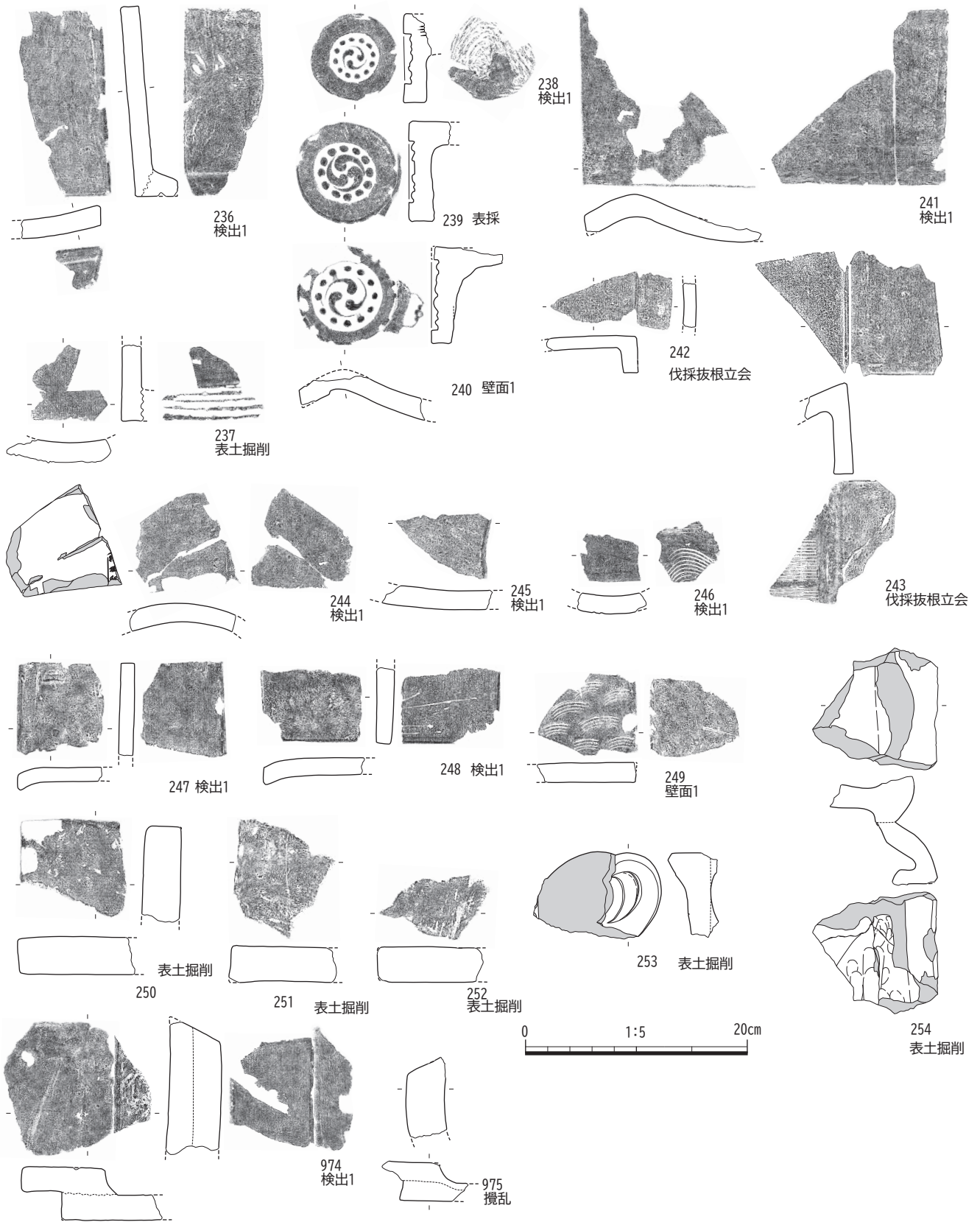


図 34 表土～検 1 面出土遺物実測図 (近世瓦 2)

## 第 2 節 北練兵場期の遺構と遺物

### (1) 高射砲陣地跡

**概要** 明治 22 年 (1889) に旧日本陸軍第三師団の名古屋城北練兵場となつてから、昭和 20 年 (1945) の終戦までを北練兵場期とする。その間、昭和 16 年 (1941) 8 月に、高射砲第 1 連隊 (浜松) から高射砲第 4 中隊 (高射砲 16 門) などが名古屋に動員され一部が北練兵場に配備された。その後太平洋戦争中に高射砲が増強されていったが、本発掘調査では高射砲陣地の一角を遺構として確認することができた。

**高射砲陣地跡** 調査区南東部で確認された 00716SX・00717SX は高射砲台座の遺構である可能性が高い。また両遺構の西側で南北方向に延びる直線溝状の攪乱

K0008・00532K (一部 00533 ~ 00535K) は高射砲陣地の西縁を囲う土塁の基部 (側溝) であるとみられる。これらの痕跡は、極東米軍による 1946 年の空中写真 (M-184) に写された旧日本陸軍の高射砲陣地跡にみえる砲座と区画の位置関係に符合する。北練兵場における高射砲陣地は南北 2 か所にあり、本発掘調査で確認された遺構は南側の一角、西方を主軸として円形に配置された 6 基のうち北西の 2 基に該当する。先述の薬莖とともに当該地に配備された高射砲連隊の存在を示す戦争遺構である。

**00716SX** 調査範囲東端に位置する隅丸方形竪穴状の遺構で、旧日本陸軍の高射砲台座跡と推定される。遺構検出時には表土と変わらない埋土であったことから攪乱として完掘したが、底面で杭の痕跡が柱列で確認でき

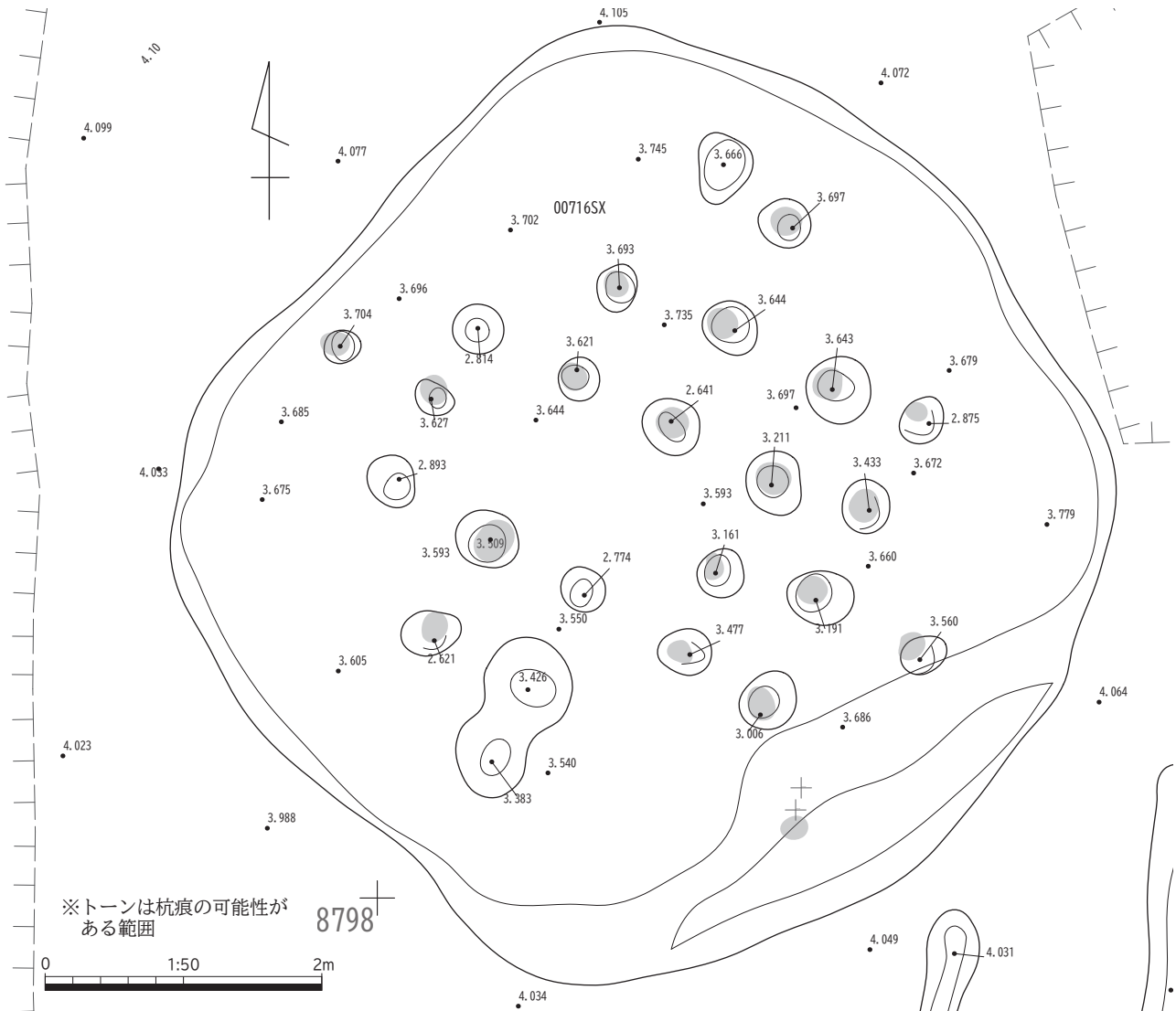


図 35 00716SX 遺構図

たことや後述する 00717SX の存在から近代の遺構である可能性がでてきたため、番号を付して遺構として記録を行った。竪穴状部分は検出面での長軸約 6.3m で、垂直に彫り込まれた底面の径もほぼ同じである。遺構面～底面までは深さ約 0.5m で、基盤層が砂層なのでやや安定に欠くがほぼ平らな底面となっている。底面では 24 基の柱穴状掘り込みが確認され、その大半（18 基、掘り込み外で 1 か所）で腐朽した杭と思われる木質が残存していた。この木質が 00716SX の埋土中においても残存していたかどうかは不明である。なお木質は土壌化が進みサンプリングは行えなかった。柱穴状掘り込みの直径は 0.2～0.3m で杭の痕跡もそれにほぼ近い直径であることから、これらは地中に打ち込まれた杭の下端部と推測される。杭の配置は検出された掘り込みの分布から推測して中心部の 5×4 または 5×5 本を基本としてその外郭で残存するものや底面の広さを勘案すると最大で 7×7 本を方格状に打ち込んだ可能性がある。

埋土中には近現代の物質が混じっていたが、台座に関わる顕著なコンクリート片はなかった。竪穴状部分は整った平面形状で検出されたことから、杭打ち込み前に掘り込まれたと考えられる。一方で埋土が表土とほとんど変わらなかったことから、上部構造物や杭の撤去のために掘り返された可能性がある。

**00717SX** 調査範囲南東部に位置する隅丸方形が崩れた形の竪穴状の遺構である。旧日本陸軍の高射砲台座跡と推定される。00716SX と同様に攪乱として掘削したが床面の状況から遺構と判断し遺構番号を付した。竪穴状部分は南東辺が比較的直線的に見受けられるが、中心を通る長軸はそれより長く約 6.2m である。底面は砂層まで掘りこまれ安定を欠くがほぼ平らな底面があり底面の長軸は約 4.8m である。底面からの立ち上がりは 00716SX とは異なり斜めになっており、北西側には小段がみられ全体的に歪な形状となっている。底面には柱穴状の掘り込み 27 基がありその全てで杭状の土壌化が著

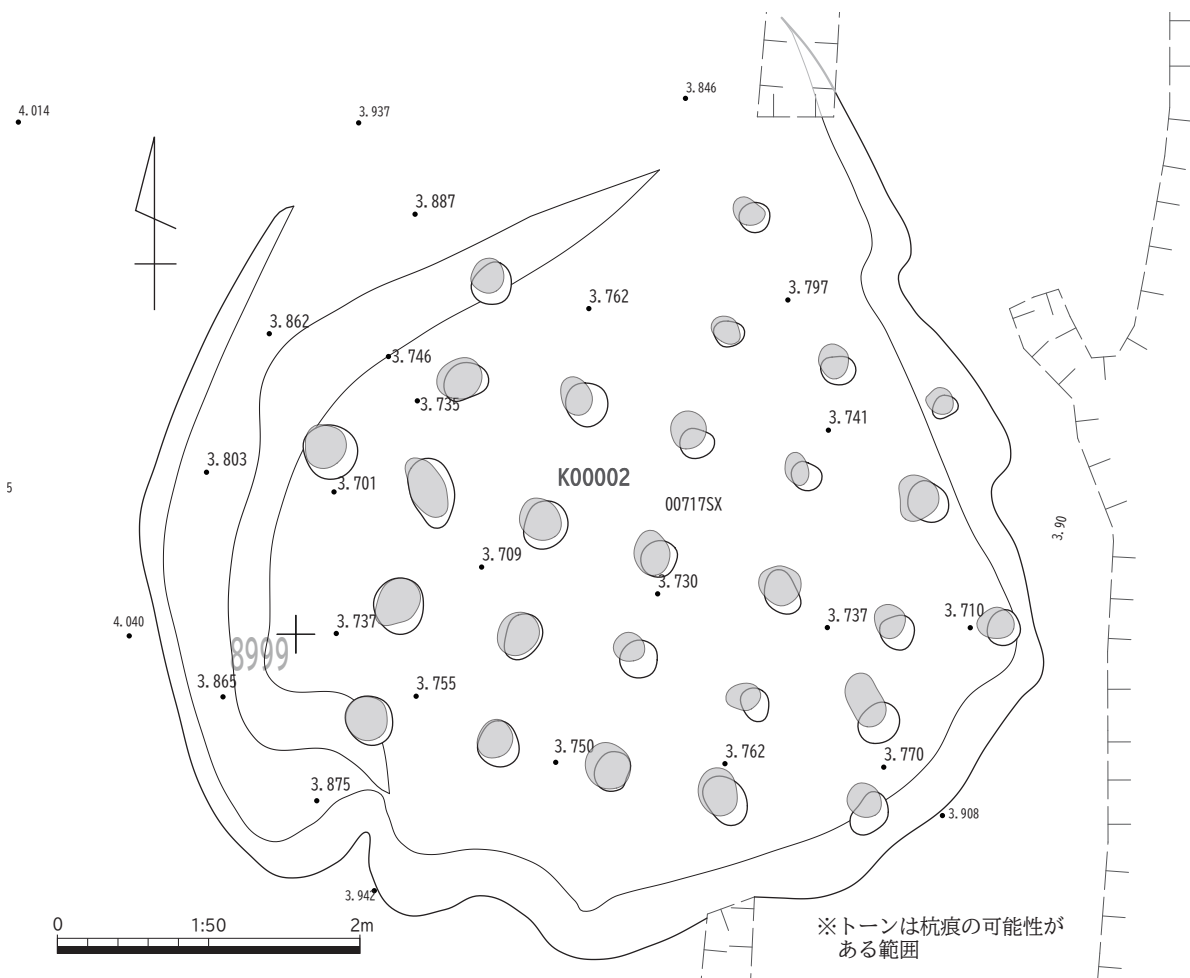


図 36 00717SX 遺構図



図 37 調査範囲南東部 (21Bb 区) 検 1 面遺構図

しい腐朽した木質が確認された。掘り込みの直径と木質の範囲はほぼ同じであることからこれらは打ち込まれた杭と考えられる。00716SX と同じく埋土中の杭痕跡は確認できなかった。杭の配置は 5 × 5 本の方格状が基本とし、さらに中心で交差する線上で外郭に 1 本ずつ打ち込んでいるように見受けられる（計 29 本）。

埋土中には近現代の物質が混じていたが、台座に関わる顕著なコンクリート片はみられなかった。竪穴状部分の形状が不安定でかつ埋土の状況から当初の掘方が掘り返された可能性が高い。

**00532K (SD)・K00008** 00717SX から西へ約 38m に位置する南北に延びる直線溝である。重複する遺構群のいずれよりも上位にあり、域内で最も新しい時期であることが確認される。北部 (K00008) は当初から攪乱と認識される一方で南部 (00532K) は当初溝 (SD) で調査を開始し遺物も 00532SD で取り上げたが近現代のものが混じることから最終的に攪乱として扱っている。その方位はグリッド北から東へ 2° 振れている。南は調査区範囲外へ延び、確認された全長は約 95m である。検出面での幅は 1.6 ~ 1.8m である。攪乱として扱われているため底面の標高は計測されていないが、さほど顕著な掘り込みではなく表土に近い埋土であった。

出土遺物の時期は江戸時代後期～近代が主体である。927 ~ 931 は瀬戸窯産の染付磁器で明治時代、931 は銅版絵付けなので明治 30 年代。932 と 933 は同じ時期とみられる。934 は瀬戸窯の鍋、935 は同播鉢である。936 は角形口縁の甕で常滑製品に似た胎土で一部に透明釉がかかっている。937 はその底部で厚みからして相当の大

型品である。

**00002SD** 調査範囲南西部 (21Aa 区) に位置する直線溝である。調査区南壁から北東方向に約 25m 延びて攪乱で不明になる。遺構の重複関係では最も新しい時期となる。埋土はラミナ堆積があり水流のある溝だったと考えられる。煉瓦が出土しており明治時代以降に掘られた可能性が高いが、北練兵場との関連は不明である。

以下に調査の初期に出土した遺物を提示する。大溝 00001SD (後述) の最上層は近世の陶磁器類が混入する。255 は瀬戸・美濃窯産陶器の鉄釉鉢で江戸時代後期。256 は軒丸瓦の瓦当部片である。溝 00002SD からは近代の煉瓦が出土している。257 は厚さ 6.4cm 幅 10.4cm で接着剤としてモルタルが付着している。258 も同様の煉瓦。259 は 00003SD 出土の瀬戸窯産の播鉢口縁部で、登窯第 10 小期である。261 は匣鉢で底部突出のある重ね置き用。263 は唐草と花卉のモチーフによる染付のある器具口縁部で便器の可能性もある。時期は明治時代であろう。264 は平瓦凹面に絵画ふうの刻線がなされている。265 は瀬戸窯の磁器で銅版絵付技法であるから明治時代後半以降、一方 266 は型紙絵付技法で明治時代前半と推測される。269 は瀬戸・美濃窯産陶器の卸皿。00900NR 最上層は攪乱も多く近代以降の陶磁器が混入している。271 は大正時代の瀬戸窯磁器碗で、ゴム印による絵付のため口縁部の雷文にずれが生じている。

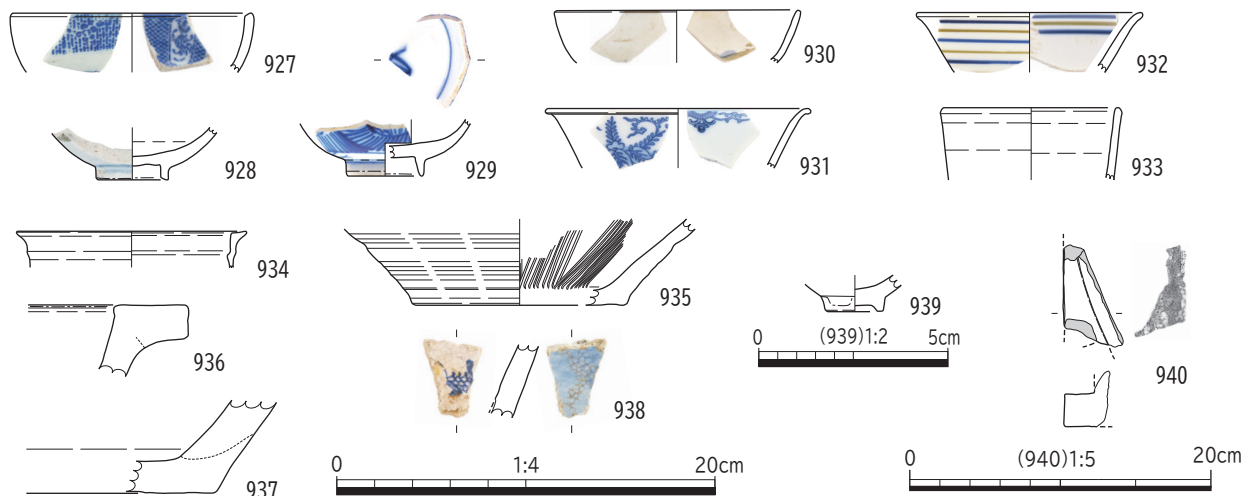


図 38 00532K (SD) 出土遺物実測図

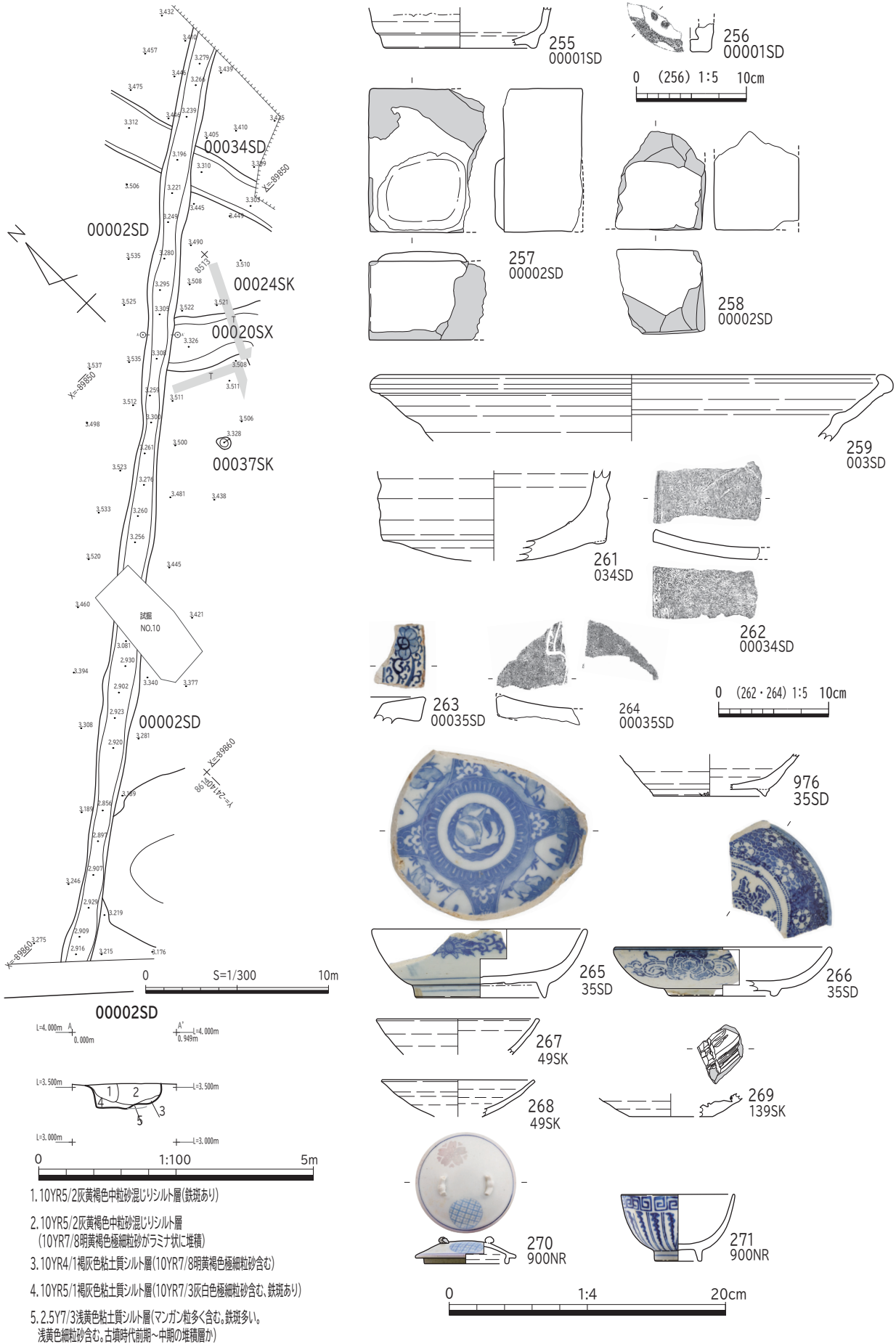


図 39 00002SD 遺構図・00002SD・00003SK・00034SD・00035SD・00900NR 出土遺物実測図

## 第 3 節 名古屋城下御深井御庭の遺構と遺物

### (1) 概要

本節では、検 1 面で確認された遺構・遺物のうち第 2 節で示した近代の北練兵場期以外の主に江戸時代に属するものを提示する。したがって一部の遺物は明治時代のものを含んでいる。江戸時代の遺構は種別で溝が最も多く、調査範囲の全域に展開している。それ以外には池(00100SG、00202SG)、廃棄土坑(00220SK など)などがあり、これらは調査範囲南西部から南端に集中している。一方、遺物は表土から検出面までの間での出土については既に第 1 節で述べたとおりであるが、遺構埋土からの出土では調査範囲南端の池や廃棄土坑とその周辺が圧倒的に多い。遺物の時期は江戸時代後期が主体であるが、江戸時代前期や中世戦国期(大塚期)まで遡るものも一定量ある。

### (2) 遺構各説

**00006SX** 調査範囲南西隅(21Aa 区)に位置する大型土坑である。平面形は歪んだ楕円形をしており、長軸約 7.1m、短軸約 5.0m、深さ約 0.9m である。断面形は浅い播鉢状であるが底面は溝状の凹みがあるなど不安定な形状である。埋土も底面形状に応じて複雑な変遷となっており、最下層(13~15 層)に粘土質シルトがありその上層(10・11 層)でラミナ堆積があることから一時的に湛水状態にあったようである。しかしそれを再び掘り返している(5・7 層)。最上層(2 層)は砂混じりのシルトであることから水流はほとんどなく埋没している。すなわち一時の掘削に止まらない利用だったのであるが、一方で出土遺物はほとんどなく、中世の山茶碗類と同じ焼成の鉢の破片が出土している。

**00011SD** 調査範囲南西部(21Aa 区)に位置する南北溝である。調査区南西壁から南方外部へ延びる一方、北端は攪乱(名城公園北園の園路)から先が不明で確認された長さは約 13m である。ほぼ直線となっており、検出面での幅約 2.0m、底面幅約 1.7m、深さ約 0.3m で断面形は逆台形である。攪乱から先が不明であるが、同じ規模の近世の溝 00034SD が存在しており、一連の溝である可能性がある。埋土は粘土質シルト主体でラミナ堆積が認められなかった。顕著な出土遺物はないが、近代以降

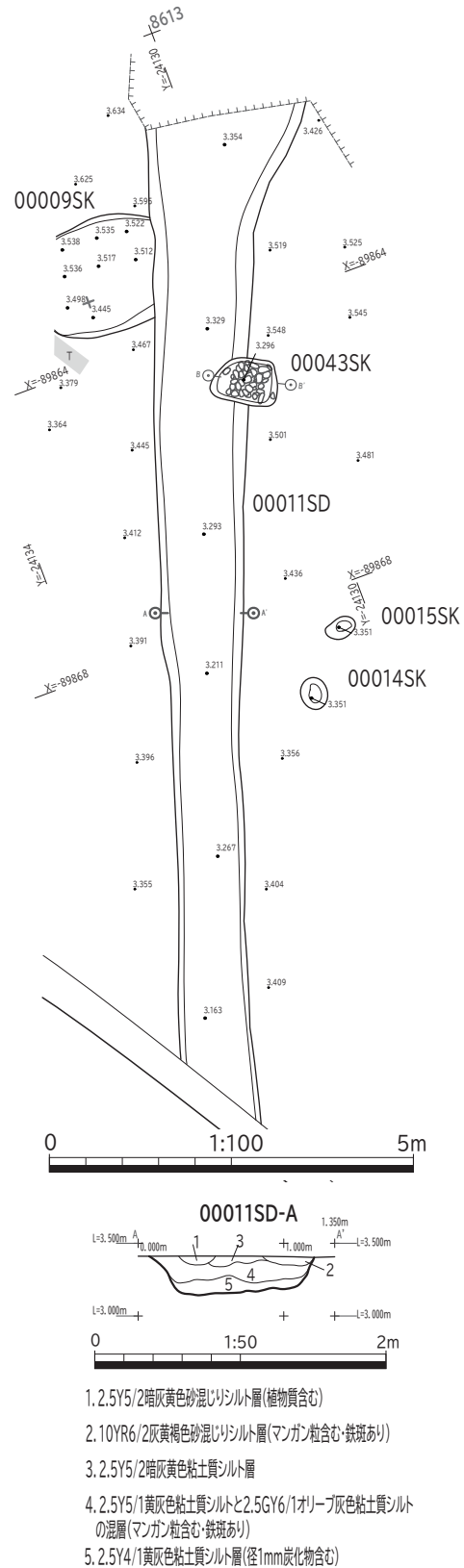
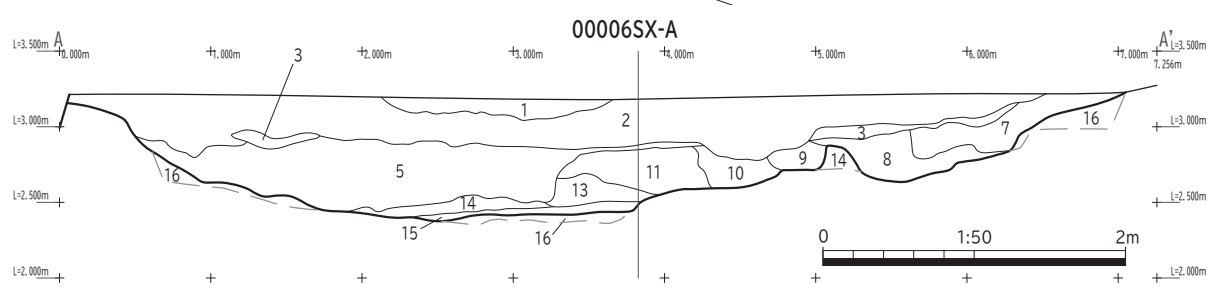
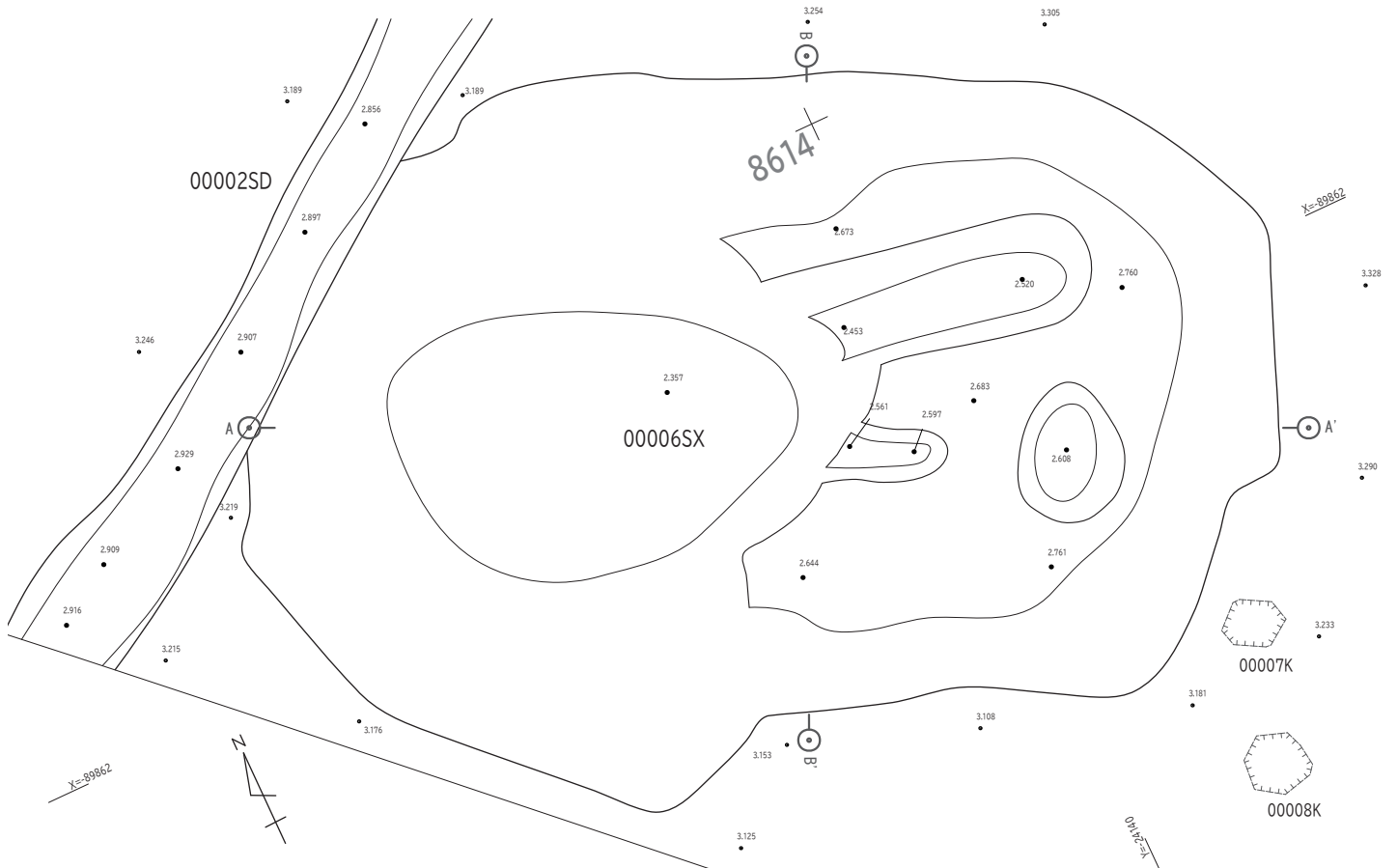


図 40 00011SD 遺構図



1. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂混じりシルト層(鉄斑あり)
2. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂と7.5YR7/8 黄橙色中粒砂の混層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂多く含む。鉄斑あり)
3. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂含む。鉄斑あり)
4. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂が斜方向にラミナ状に堆積)
5. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトブロック混入。10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂がラミナ状に堆積。鉄斑あり)
6. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトブロック混入。10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂がラミナ状に堆積)
7. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂ブロック混入。沈鉄層あり)
8. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(径1~5mm炭化物含む。10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂少量含む)
9. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む。マンガン粒多く含む。鉄斑多い。)
10. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂がラミナ状に堆積)
11. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂がラミナ状に堆積)
12. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト層(10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂がラミナ状に堆積。沈鉄層あり)
13. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む)
14. 2.5Y7/3 浅黄色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む。鉄斑含む。一部沈鉄層あり)
15. 2.5Y5/1 灰黄色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む。10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂少量含む。鉄斑あり)
16. 2.5Y7/3 浅黄色粘土質シルト層(マンガン粒多く含む。鉄斑多い。浅黄色細粒砂含む。古墳時代前期~中期の堆積層か)

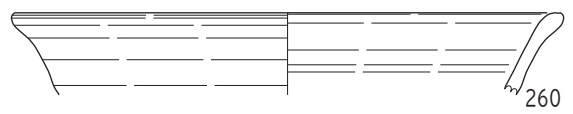


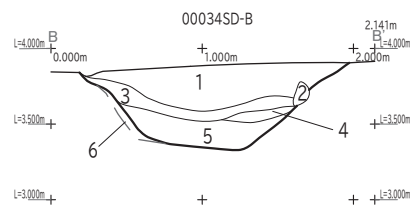
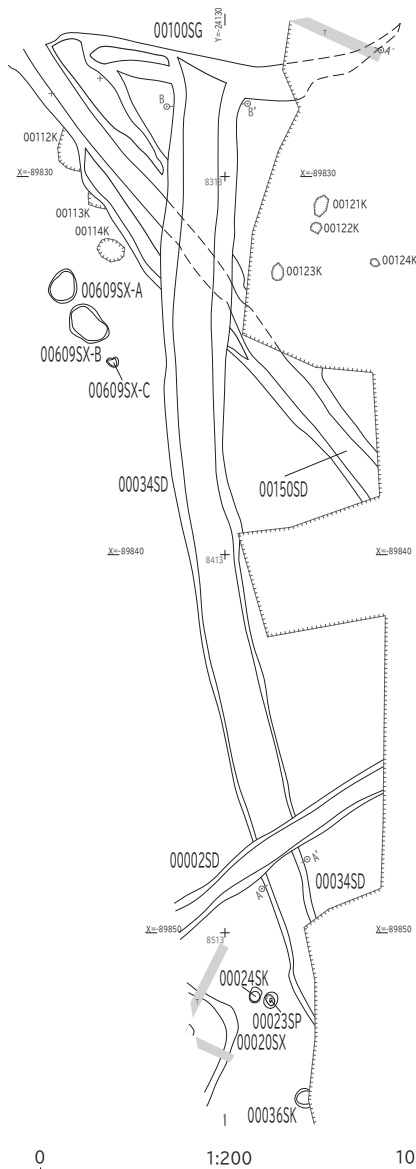
図 41 00006SX 遺構図・出土遺物実測図

の陶管の破片が出土していることから明治時代以降も機能していたと考えられる。

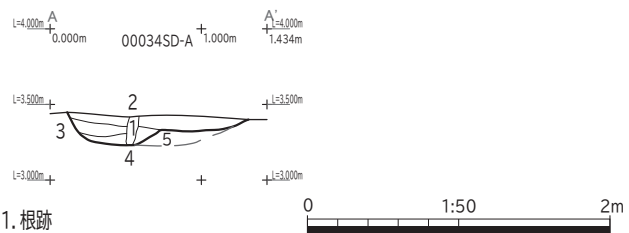
**00034SD** 調査範囲南西部 (21Aa 区) に位置する溝である。南端は溝 00011SD と同じく攪乱で不明である一方、北端は池跡 00100SG とその南辺に達しており、両者の先後関係は明瞭でなかったことから一連のものであった可能性が高い。確認された長さは約 25m で全体的に緩い弧線状に延びている。なお南端の攪乱から先は 00011SD へ続く可能性もある。その断面形は逆台形であり、遺構検出面での幅約 1.9m、底面幅約 0.8m、深さ約 0.7m である。出土遺物は匣鉢 (261) と平瓦 (262) とわずかであるが、ともに庭園廃絶時に混入した可能性が高いこ

とから、江戸時代に機能して明治時代初めに埋没したもののと思われる。

**00056SD** 調査区北西部 (21Aa 区) に位置する溝である。調査区北西壁から外部に延びる一方、調査区内を直線的に南東方向へ約 11m 延びる。断面形は、検出面での幅約 4.3m、深さ約 0.4m の浅い皿状である。遺構の一部が 00001SD や 00900NR の砂堆積の上にかかっている。出土遺物は近世瓦の丸瓦 (957) があることから江戸時代と考えられる。

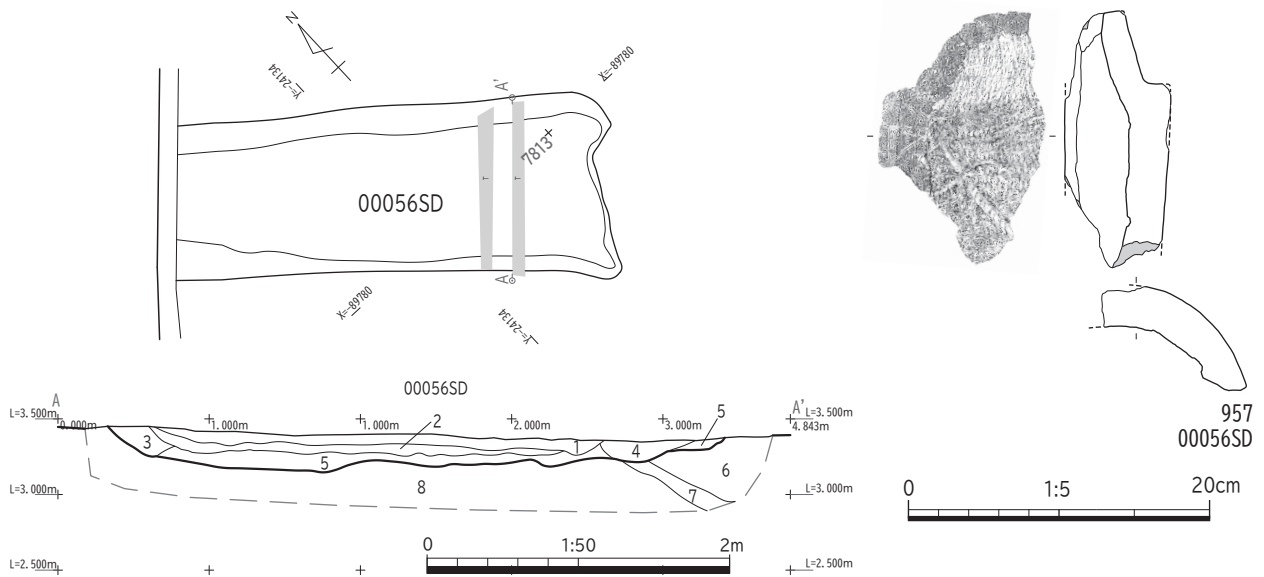


1. 2.5Y5/2暗灰黄色砂混じりシルト層(2.5Y7/2灰黄色極細粒砂含む。細礫含む)
2. 根跡
3. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(植物質含む。マンガ粒含む)
4. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(径1mm炭化物含む。マンガ粒含む。鉄斑あり)
5. 10YR4/1褐灰色粘土質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色細～極細粒砂の混層(径1～5mm炭化物含む。鉄斑あり)
6. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト層(マンガ粒含む。鉄斑あり。径1～5mm炭化物含む。径1～3cm青灰色粘土質シルトブロック少量含む。古墳時代前期か)



1. 根跡
2. 10YR4/1褐灰色粘質シルト層(径1mm炭化物含む。マンガ粒含む。鉄斑あり)
3. 10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR2/2黒色粘質シルトの混層(2.5Y7/1灰白色極細粒砂含む)
4. 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト層(鉄斑あり)
5. 2.5Y7/3浅黄色粘質シルト層(マンガ粒多く含む。鉄斑多い。浅黄色細粒砂含む。古墳時代前期～中期の堆積層か)

図 42 00034SD 遺構図



1. 7.5YR4/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(00056SD)
2. 7.5YR5/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(にぶい黄褐色粗粒砂小ブロックを少量含む。00056SD)
3. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂質シルトと10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂層のラミナ(細礫含む。00056SD)
4. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(褐灰色シルトブロックを含み、にぶい黄褐色中粒砂ブロックを少量含む。00056SD)
5. 10YR5/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(褐灰色シルト小ブロックを含み、にぶい黄褐色中粒砂小ブロックを含む。鉄分沈着顕著。00056SD)
6. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(炭化物を少量含む。鉄分沈着顕著。00900NR下面河川か)
7. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂質シルト層(炭化物を少量含む。鉄分少量沈着。00900NR下面河川か)
8. 10YR4/1 褐灰色シルトと10YR5/1 褐灰色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂のラミナ層(00900NR下面河川か)

図 43 00056SD 遺構図・遺物実測図

**00100SG** 調査範囲中央からやや西部(21Aa区)の検1面で確認された池である。その東部は大規模な攪乱によって失われているため全形は不明であるが、概ね東西方向に長軸となる隅丸長方形であると推定され、南北両辺間の長さは約9.1mに対して東西の残存長は東西14.7mを測る。断面形は、緩く斜め(約40°)または一部で小段を有しながら立ち上がる縁辺に対して、ほぼ水平な底面となっており特に凹凸はない。遺構の埋土はその上層が攪乱により不明で、底面直上の黒褐色有機質シルト層が水平堆積している。出土遺物は少なく、瀬戸・美濃窯産陶器鉢(272)や常滑窯産陶器大甕の口縁部(274)がある。特徴的なものとして瀬戸・美濃窯産陶器播鉢を円盤状に加工したもの(加工円盤、273)や円盤状の白色円礫(S8)がある。石材は珪質岩である。飛礫(つぶて)のような遊戯に使ったものであろうか。

一方、庭園施設の遺物として石灯籠がある。S5は遺構南辺に転げ落ちたような状態で出土した。部位は最頂部に据える宝珠で、上端の突起などいくつかは破損箇所が

みられる。残存高12.9cm、珠の最大直径は21.2cmでその下部に複弁蓮華文が陰刻されている。S6は火袋に相当する破片で断面形から火袋は六角形であったと推測される。S6も同様の破片である。石灯籠の石材はいずれも花崗岩である。宝珠の大きさから推定すると全高が1.5~2.0mになると考えられる。

以上のように石灯籠以外に顕著な出土遺物が少ないが、その出土状況からみて庭園廃絶時に埋没したものと思われる。このことから江戸時代末期に描かれた『下御深井図面』に記載のある池に相当する可能性が高い。

**00175SD** 調査範囲南西部(21Ba区)の検1面で確認された大規模な溝である。調査区南西壁から西方外部へ抜ける一方、そこから東へ約97mほぼ直線的に延びたところで南へ屈曲しそのまま調査区南壁から外部へ抜けている。ただし当該箇所は旧河道00900NRの粗粒砂を主体とする埋土と重複しているため遺構形状が不安定であることから明確には把握できていない。またその幅も一定しないが最大約18.0mとなっている。

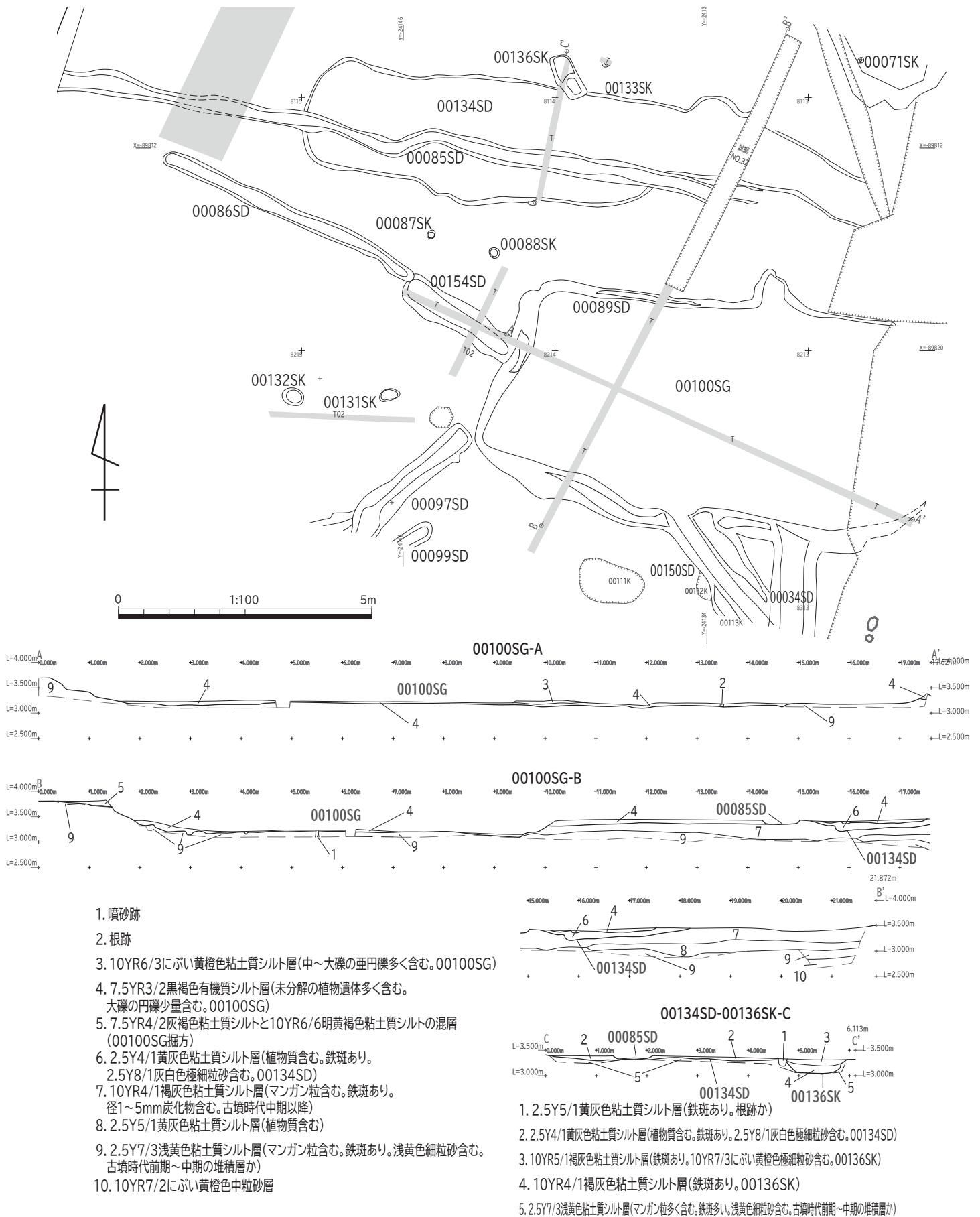


図 44 00100SG 遺構図

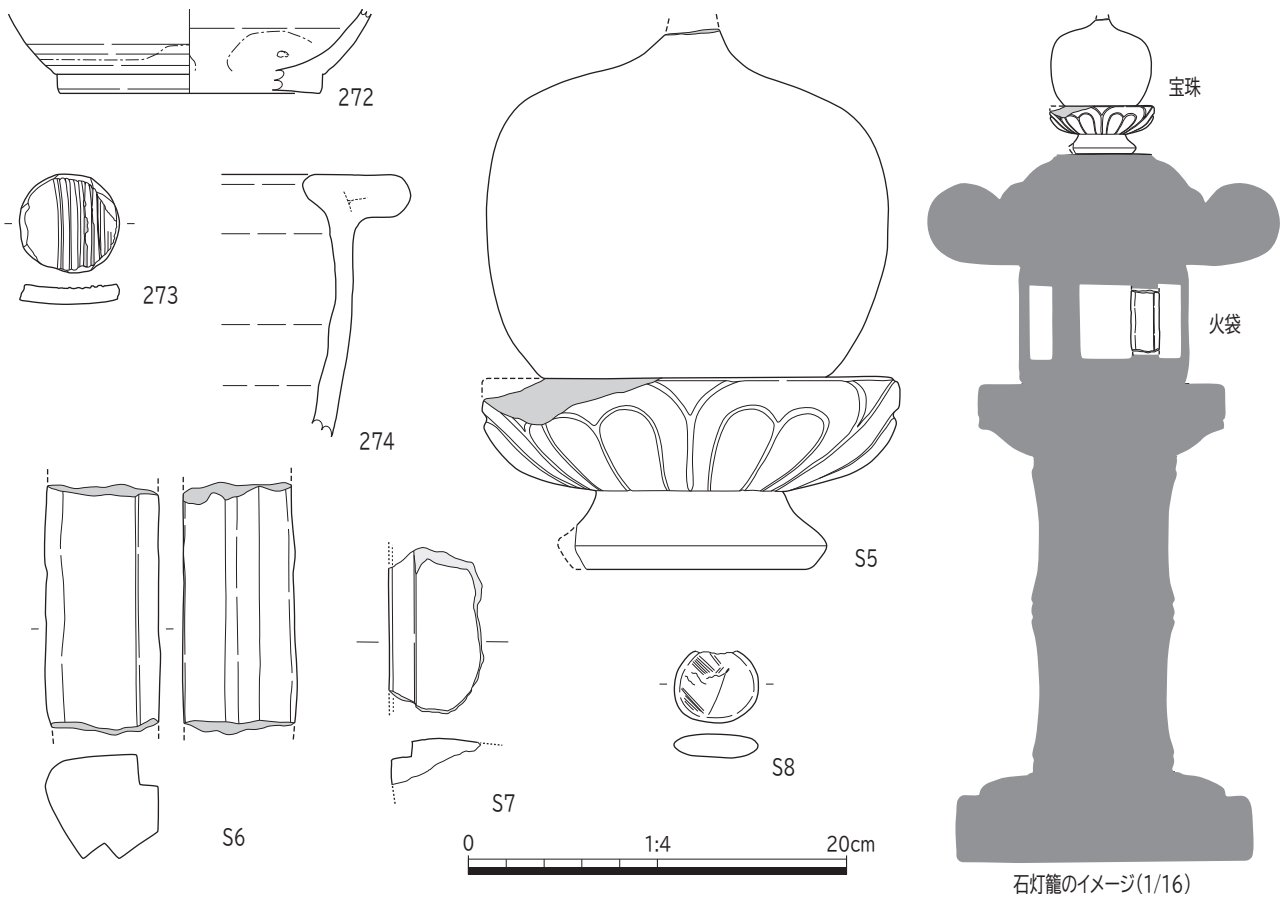


図 45 00100SG 出土遺物実測図

溝の断面形や埋土の堆積状況は南西隅付近で確認した。人為的に掘り込まれた傾斜のある箱堀形であるが、 $45 \sim 70^\circ$  の急角度である以外は大きな特徴はない。平らな底面の標高は基盤層である砂主体の河川堆積に対して掘り込まれているにも関わらず、側壁の崩落は少なく、掘り込まれてから埋没までの期間は比較的短かったと推測される。その埋土にみる堆積状況は大きく以下のように3段階を見出すことができる(図46)。①は、13～17層が相当し、当初の掘削後に流速のある水流による粗粒砂や細礫を多く含む堆積の段階である。ここで水を外部から引き込んだが、同時に多量の土砂も流入し比較的短期間で埋没したと考えられる。②は、①の堆積を掘り返したもので(7・9～12層)で黒褐色シルトなどの混合土によって埋まっており、ラミナの部分がわずかであることから大半は水流が作用していないとみられる。規模は当初掘削幅とほぼ同じであることから①の上位を人為的に埋め戻した可能性が高い。③は①・②に対

して掘り込まれたもので(1～6層)、幅約3.5m、深さ約0.6mの溝で当初の規模に比べて圧倒的に小さくなっている。4・6層でラミナが認められる以外は2・3層がブロック土が混じり、最上層(1層)は腐葉土がみられる。当初水流があったものの埋没が進んで沼地のような状態になっていたと考えられる。以上のように1条の溝の中で全く異なる局面の堆積が認められる点が特徴である。それらは①が調査範囲外東方に位置する「御用水」に接続していたならば、そこからの引水目的で掘削された段階、②が一旦①の機能を終了させ埋め戻した段階、③が庭園の小溝として必要な規模で再掘削した段階、という変遷が想定される。いずれも築庭からその運営・改変に関わる事象として意義深い。

00175SDの出土遺物は掘削土量に比べてひじょうに少なく、しかも古代・中世の遺物が主体である。275は土師器甕の口縁部で7世紀代とみられる。口縁端部に連続する刻み目がある。276は土師器台付甕、277は古墳時



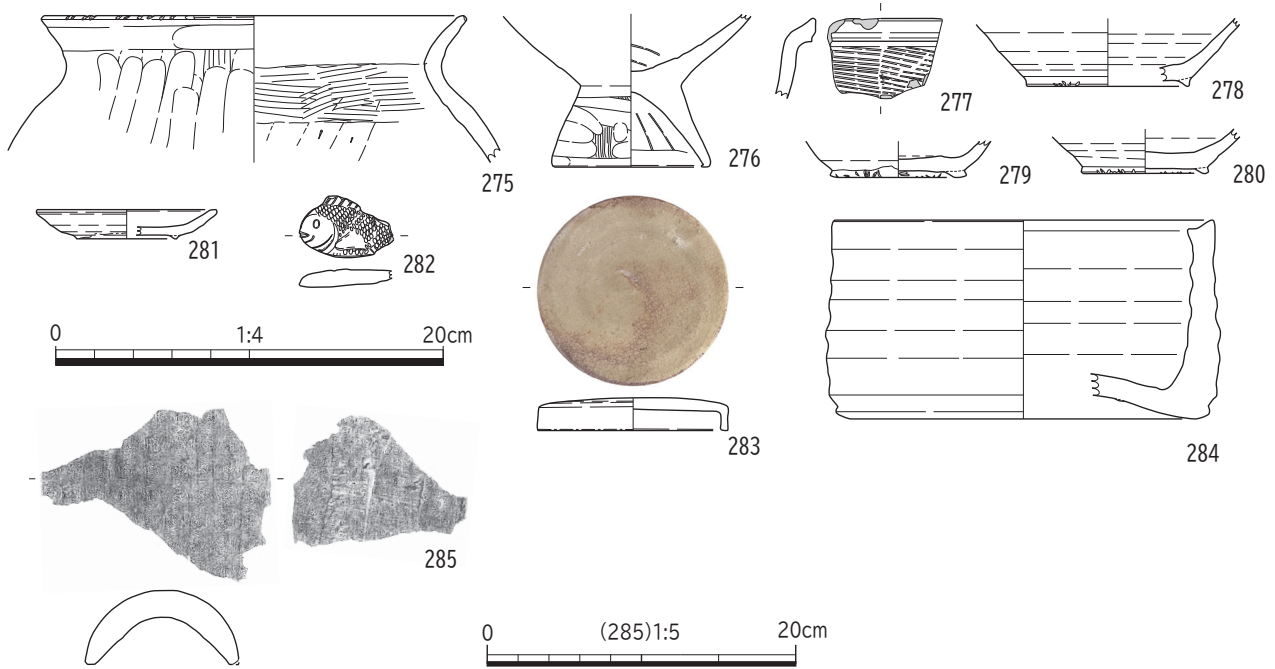


図 47 00175SD 出土遺物実測図

代須恵器鍋口縁部、278～280は山茶碗類で、278は尾張型第6型式、280は東濃型第5型式、平安時代末期～鎌倉時代前期である。282は型押し成形の土人形で魚形という点が溝との親和性をうかがわせる。283は江戸時代中期の美濃窯産灰釉陶器の合子蓋である。284は匣鉢で、容量から口径約16cm、高さ約8cm規模の陶磁器が入ると推定される。

**00202SG** 調査区南端(21Ba区)に位置する池跡である。東西方向に長く歪んだ楕円形をしており、東西両端部は攪乱によって失われている。一方南北両辺は顕著な重複関係がなく残存しており、そのラインは緩く小さな蛇行を繰り返しながら全体的に弧線状となっている。側壁の立ち上がりは明瞭で、それらが意図的に掘り込まれたものであることを示している。ところが底面については平らな掘方を確認することができず、後述する土層断面や廃棄された瓦や陶磁器の出土位置から復元的に示すことしかできない。特に西端部付近は、底面が一段高いところで止められて段状になっており、これも意図的なものと考えられる。そして側壁のほとんどは基盤層が露頭する状態であるが、北西辺の一部では6個の垂角礫を側壁に貼り付けるようにして配置された箇所がある。以上が池の掘方の形状である。

土層観察によれば(図50)、東西方向の土層断面(A-A')

をみると、砂混じりシルト層(5層)に多量の瓦類が出土している。5層は南北土層ベルト(B-B')を挟んだ西側にもみられ、ここでも瓦類などが多く出土している。さらに5層より上位の1～3層では庭園の州浜に使用される玉石(円磨度の高い円礫)が多量に出土しているが、これは検1面の概要でも示したように00202SGの最上層から当時の地表面に相当すると考えられる。したがって池底に玉石が敷かれた状態ではない。4層については粒度の状況から5層と同一層の可能性が高い。このように瓦類をはじめとする廃棄がなされたのは5層より上の段階で、その時点で00202SGは開口していたことになり、5層の下面が池として機能していた段階の底面ということになる。これに対して6・9・12～14層ではその下位で00202SGの掘方に相当する分層ができなかった。また顕著な遺物の出土がないものの13層では焼土粒が混じっているなど下位で検出された古墳時代の竪穴建物跡の埋土である可能性が高く、これらは00202SGの掘方には該当しないと考えられる。

瓦類の出土分布は遺構の西端部に集中する(図49)。それと東半部にみえる瓦出土分布を加えると、池の底は中央の南北土層ベルトあたりがちょうど土手のようになる。これは南北の土層断面(B-B')における6層の高まりにもみることができ、わずかに3・4層で東西の凹み

が繋がっていたとみることができよう。以上に示した状況から、00202SG は東西 2 箇所に凹みがある瓢箪のような形状だったと推測される。

出土遺物は陶磁器類と瓦類に大別され、ここでは陶磁器類に窯道具も含む。後述するように瓦類が圧倒的に多く、陶磁器類は比較的破片状態で全形のわからないものが主体である。19 世紀半ば過ぎに、庭園の建物（松山御茶屋など）の解体によって生じた廃棄物によって池を埋め立てた際に混ぜ込まれたものと推測される。

286 は肥前産磁器の丸碗である。287 は瀬戸窯の磁器で端反碗、登窯第 10 小期である。288 も染付の端反碗である。289 は瀬戸窯の丸碗で青色の釉が掛かっている。時期は不明。290・291 も瀬戸窯で江戸時代後期、290 は呉須掛けの茶碗である。292 は登窯第 3～4 小期の天目茶碗、293 は底部が加工円盤に転用されている。

**御小納戸茶碗** 295 はいわゆる御小納戸茶碗で、底部内面（見込み）に「小」の文字が鉄絵で大きく描かれて

いる。名称にある御小納戸は、将軍や藩主の側に仕えて庶務に従事または司る役割の武士で、尾張藩におけるその活動は『尾州御小納戸日記』などの史料によって裏付けられる（堀内亮介 2021 『御小納戸日記にみる名古屋城二之丸御庭の改造』『研究紀要』第 2 号 名古屋城調査研究センター）。御小納戸茶碗はその執務時に使う食器とされ、従って本来の用途に供されていたとすれば御小納戸の役にある人物が所有・使用していたものと思われる。一方、当該資料には底部外面に「山方蔵」とその左に日付らしき墨書がある。「山方蔵」にある「山方」は尾張藩による山林支配組織の一つである「山奉行」の呼称である（白根孝胤 2009 「尾張藩御林の管理・利用形態と茸狩」『研究紀要』43 号 徳川林政史研究所）。その管轄地には瀬戸の窯業地域も含まれており、「蔵」とあるのは蔵入地（直轄地）や蔵物（貢納物）のことを指すものと思われる。折しも御小納戸茶碗の使用年代（18 世紀末～19 世紀前半）には瀬戸に尾張藩の陶磁器専売

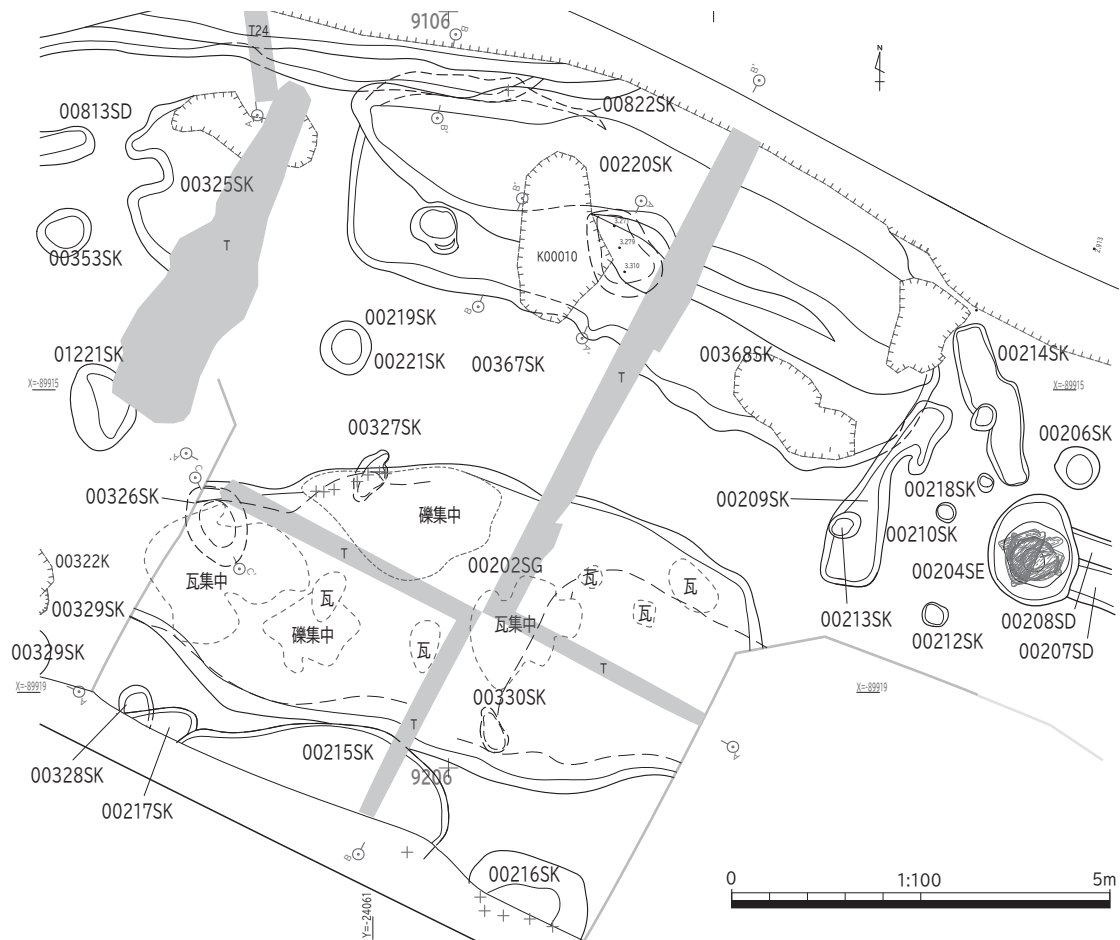


図 48 00202SG・00216SK・00220SK 遺構図

制度である蔵元制度が享和元年（1801）に開始されており、その字義も想定されよう。このように「山方蔵」墨書のある御小納戸茶碗は、相伴する陶磁器類や窯道具が瀬戸の窯業地域に関わっていることを示している。

301 はきわめて大型の鉢で、瀬戸窯では出土例がない。302 も同様に内面に白釉が掛かっている。303 は瀬戸窯の播鉢で登窯第 10 小期、304 は瀬戸窯の孫太、305 ～ 307 は流し掛け釉の輪花鉢。308 は植木鉢だが瀬戸窯になく不明。310 は低火度で焼かれた土師質の容器。平底で特殊な窯道具であろうか。311 は常滑窯の大甕口縁部である。312 ～ 317 は匣鉢、318 は輪ドチ、319 も窯道具、320 は棚板で○に「太」の刻印がある。

00202SG の出土遺物を特徴づけるものが多量の瓦である。瓦は全て近世瓦に分類され、燻のかかった黒色を呈するものである。瓦は屋根への葺き方で丸瓦と平瓦の組み合わせを基本とする本瓦葺きと、棧瓦のみで構成され

る棧瓦葺きの 2 種類に分けられるが、当該遺構ではその両者が存在する。資料の提示にあたっては、端面や側縁などの特徴的な部位が残存するものを抽出しただけで図化した。なお、丁寧なナデ調整で凹凸面のいずれかで製作技法痕が観察できないものについては一部で拓本を省略している（以下、各遺構出土瓦についても同様）。

丸瓦は 14 点図示する（321 ～ 334）。そのうち全形の判明するものは 2 点（321・322）ある。玉縁のみが欠損する 323 も含めると、いずれも凹面の側縁と広端面に幅 2 ～ 3cm の面取、玉縁長が 5cm 以下と短めである点が共通する。その法量は例えば 321 では長さ 27.8cm、幅 15.8cm、厚さ 1.8cm を測る。製作技法は凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は糸切痕の上から布目痕が認められることから、切り出した粘土板素材を筒形模骨に巻きつけて成形する工程が想定される。ただし 323・327 ～ 329 のように凹面に棒状工具のオサエが仕上げ工程で施され

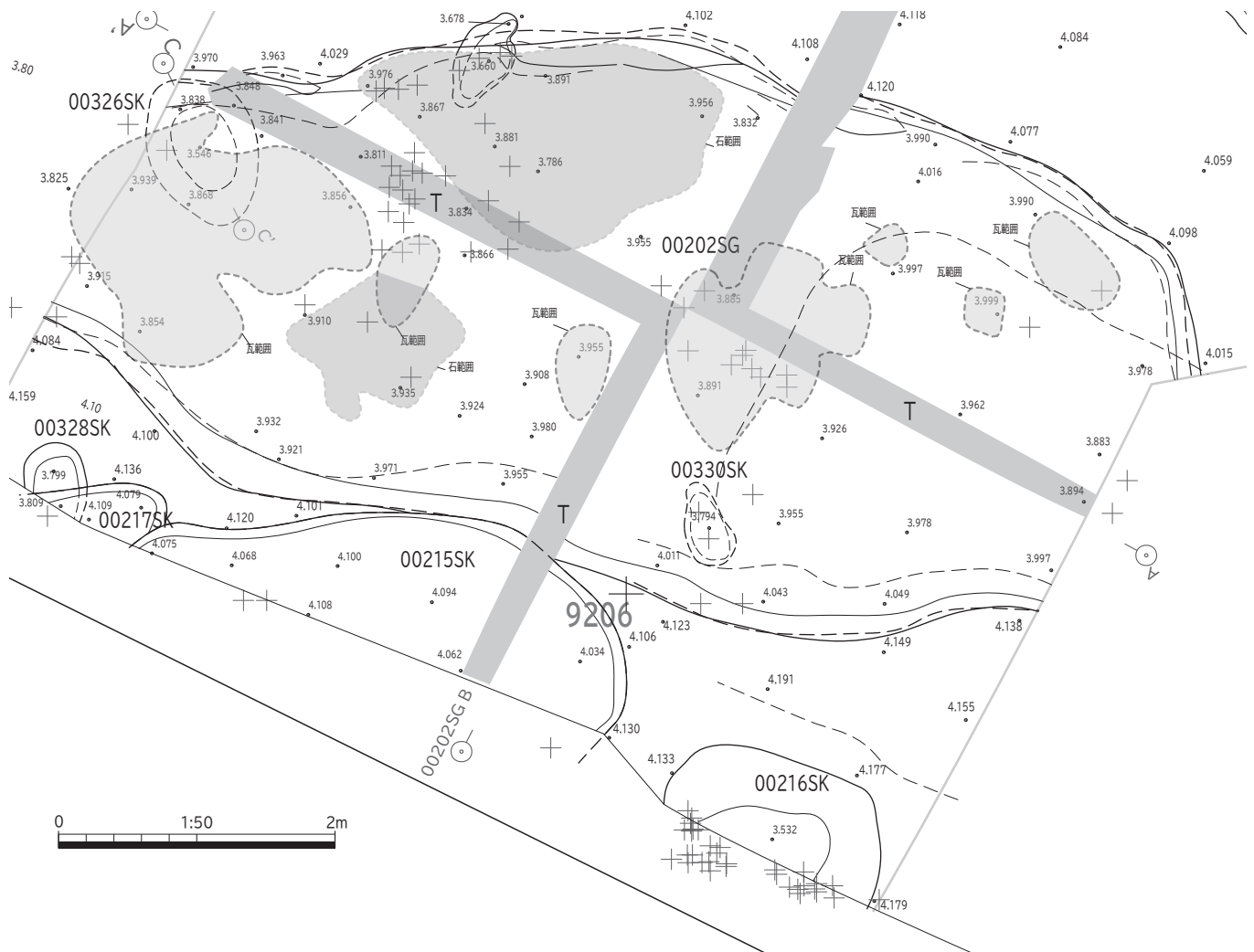
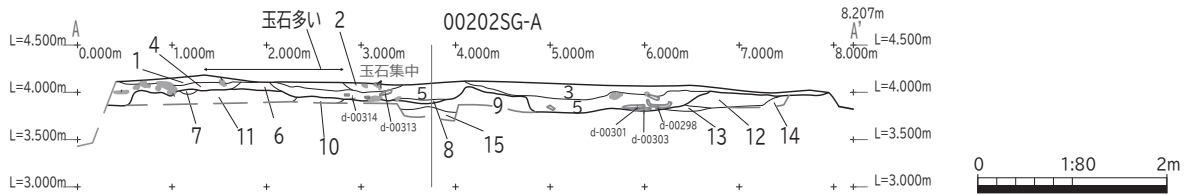
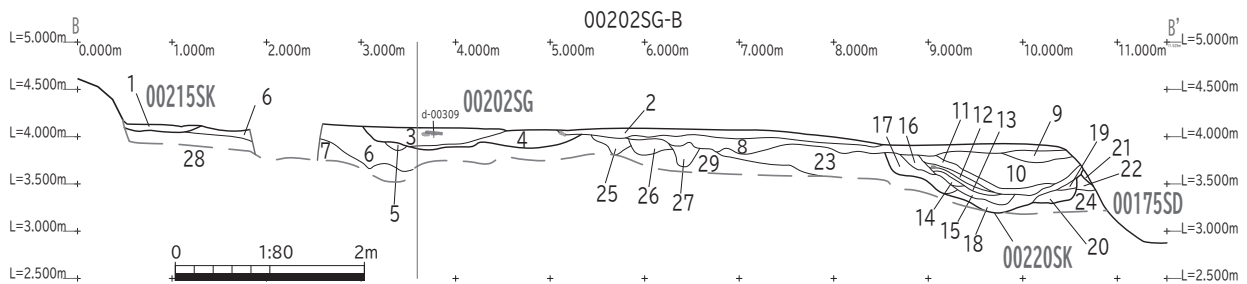


図 49 00202SG・00216SK 遺構図



1. 2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂混じり細粒砂層(玉石多く含む。黄灰色細粒砂小ブロック少量含む。瓦含む。炭化物少量含む)
2. 7.5YR5/1褐灰色中粒砂混じりシルト層(玉石多く含む。黄灰色中粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む)
3. 2.5Y7/4浅黄色粗粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色粗粒砂ブロック含む。炭化物少量含む)
4. 10YR6/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(中礫~大礫含む。鉄斑少ない)
5. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色粗粒砂小ブロック含む。大礫、瓦含多く含む。鉄斑少ない)
6. 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混じり粗粒砂層(褐灰色粗粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む。鉄斑少ない)
7. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり)
8. 7.5YR6/2灰褐色シルト混じり極細粒砂層(褐灰色粗粒砂ブロック少量含む。鉄斑少ない)
9. 10YR6/1褐灰色中粒砂混じりシルト層(鉄斑少ない)
10. 7.5YR6/1褐灰色細粒砂混じりシルト層(褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
11. 10YR7/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト層(明黄褐色シルト小ブロック少量含む。炭化物少量含む。鉄斑少ない。下位のSIか)
12. 10YR7/2にぶい黄褐色極細粒砂混じりシルト層(鉄斑少ない)
13. 10YR7/1灰白色極細粒砂混じりシルト層(褐色シルト小ブロック少量含む。炭化物少量含む。焼土少量含む。鉄斑あり)
14. 10YR7/2にぶい黄褐色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない)
15. 2.5Y7/1灰白色極細粒砂混じりシルト層(炭化物少量含む。鉄斑あり)



1. 7.5YR5/2灰褐色シルト混じり細粒砂層(灰黄褐色細粒砂ブロック含む。灰黄褐色中粒砂小ブロック含む。鉄斑あり。00215SK)
2. 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混じり粗粒砂層(褐灰色粗粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む。鉄斑少ない)
3. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色粗粒砂小ブロック含む。大礫、瓦含多く含む。鉄斑少ない。00202SGA5層対応。00202SG)
4. 10YR6/1灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(炭化物少量含む。鉄斑少ない。00202SG)
5. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑あり)
6. 10YR6/1褐灰色中粒砂混じりシルト層(鉄斑少ない)
7. 10YR4/2灰黄褐色シルト混じり細粒砂層(にぶい黄褐色細粒砂斑状に含む。鉄斑多い)
8. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂層(褐灰色細礫多く含む。細礫含む。中礫少量含む。鉄斑あり)
9. 10YR5/1褐灰色粗粒砂シルト混じり細粒砂層(灰黄褐色シルトブロック少量含む。細礫少量含む。炭化物少量含む。鉄斑少ない。00220SK)
10. 7.5YR5/3にぶい褐色中粒砂細粒砂混じりシルト層(灰黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。細礫多く含む。中礫少量含む。鉄斑あり。00220SK)
11. 10YR5/1褐灰色中粒砂混じり細粒砂層(細礫・中礫少量含む。土器片含む。鉄斑あり。00220SK)
12. 10YR5/1褐灰色シルト混じり細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑少ない。00220SK)
13. 7.5YR5/1褐灰色シルト混じり細粒砂層(灰黄褐色小ブロック少量含む。鉄斑あり。00220SK)
14. 7.5YR5/2灰褐色中粒砂混じり細粒砂層(褐灰色極細粒砂ブロック少量含む。細礫少量含む。鉄斑少ない。00220SK)
15. 10YR5/1褐灰色中粒砂混じりシルト層(細礫少量含む。腐植含む。00220SK)
16. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト細粒砂混じり中粒砂層(細礫含む。鉄斑少ない。00220SK)
17. 10YR5/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(灰褐色細粒砂ブロック少量含む。細礫少量含む。炭化物少量含む。鉄斑少ない。00220SK)
18. 10YR4/1褐灰色極細粒砂混じりシルト層(灰褐色シルトブロック含む。00220SK)
19. 10YR5/1褐灰色中粒砂混じり細粒砂層(細礫含む。00220SK)
20. 10YR4/1褐灰色細粒砂混じり極細粒砂層(灰黄褐色中粒砂小ブロック・灰黄褐色細粒砂小ブロック・灰黄褐色粗粒砂大ブロック少量含む。ラミナあり。00220SK)
21. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり中粒砂層(灰黄褐色細粒砂ブロック含む。細礫少量含む。00220SK)
22. 7.5YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト層(鉄斑少ない)
23. 10YR5/2灰黄褐色シルト層(鉄斑少ない)
24. 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂含む極細粒砂層(鉄斑少ない)
25. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑多い)
26. 7.5YR6/2灰褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色極細粒砂小ブロック含む。鉄斑多い)
27. 2.5Y7/1灰白色極細粒砂混じりシルト層(炭化物少量含む。鉄斑あり。00202SGA15層対応)
28. 7.5YR5/1褐灰色中粒砂混じりシルト層(黄灰色中粒砂小ブロック少量含む。炭化物少量含む)
29. 7.5YR5/2灰褐色中粒砂混じり細粒砂層(鉄斑あり)

図 50 00202SG・00220SK 遺構図

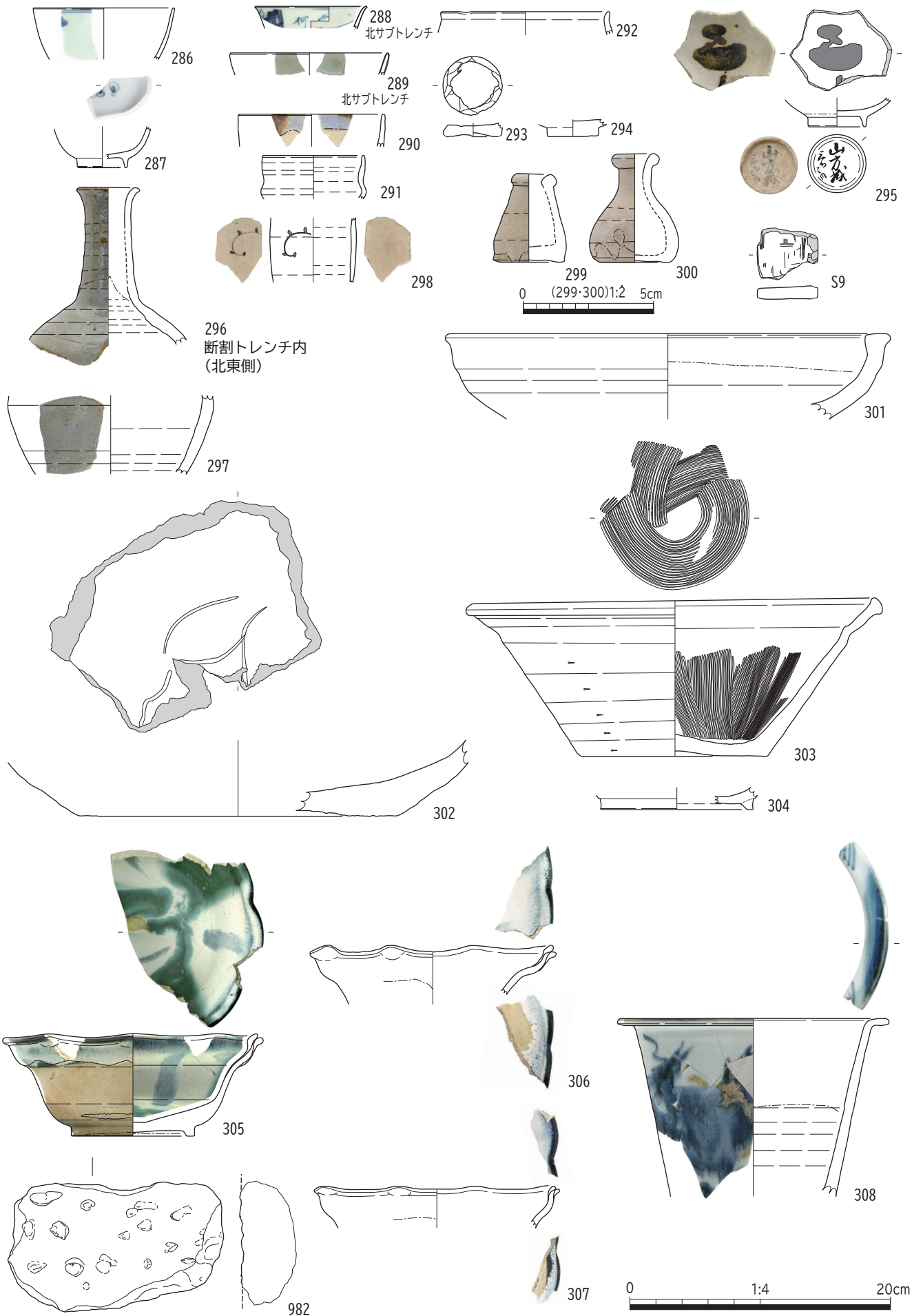


図 51 00202SG 出土遺物実測図 (1)

るものも一部に存在する。その他 329 は凸面に○の中に「一」の刻印がある。

平瓦は全形ないしは長さ・幅いずれかの判明するもの 7 点 (335 ~ 341)、縦方向に半裁された状態のもの 16 点 (342 ~ 355・357・364)、その他破断状態にあるもの 27 点 (356 ~ 382) の順に図示する。全形判明するものによれば大きさで大・中・小の 3 類に分けられる。平瓦 (大) は長さ 29.9cm、中心幅 29.7cm で広端面と狭端面が存在する (335 ~ 337)。平瓦 (中) は長さ 26.0cm、幅 22.7cm (338 ~ 340) で長方形、平瓦 (小) は長さ 23.7cm、幅 19.3cm (341) で端面幅の広狭がある。一方、端面や側縁の面取に大差はない。半裁状態にある一群は最も多数で、小片のなかにもこの分類に該当するものがあると考えられる。この形状はいわゆる熨斗瓦に分類されるもので、平瓦として製作された後に使用時に熨斗瓦へと転換したことになる。これは、00216SK の 413・414 のように焼成前に分割切り込みの施されたものがあり、

あらかじめ想定されていたようである。このような半裁平瓦の規模は平瓦 (大) に該当するもので占められており、逆に 325・326 のように全形判明品ながら縦に断裂していることを考慮すると、ほぼ半裁が前提で製作されていたと考えられる。その他の破片資料では、371・373・374 のように凹凸面に対する側縁の面取り角度がやや異なる一群も見受けられ、371・374 はやや厚さが薄い点も特徴である。379・380 は凹面に櫛歯状工具で条線が施されており、使用時に見える位置であることから施文の一種であろう。

棧瓦 (383 ~ 388・390) は 7 点あり、うち軒棧瓦 (383) は 1 点である。383 の瓦当文様は左三巴文と中心飾り + 唐草 2 の東海地域で一般的な型式である。384・385 は広端面に○に「一」の刻印がある。棧瓦は少数である。

以下は道具瓦など特殊品である。389・391 は雁振 (冠) 瓦で屋根の大棟に葺かれたものであろう。391 のように接合面は条線状のカキメが施されている。

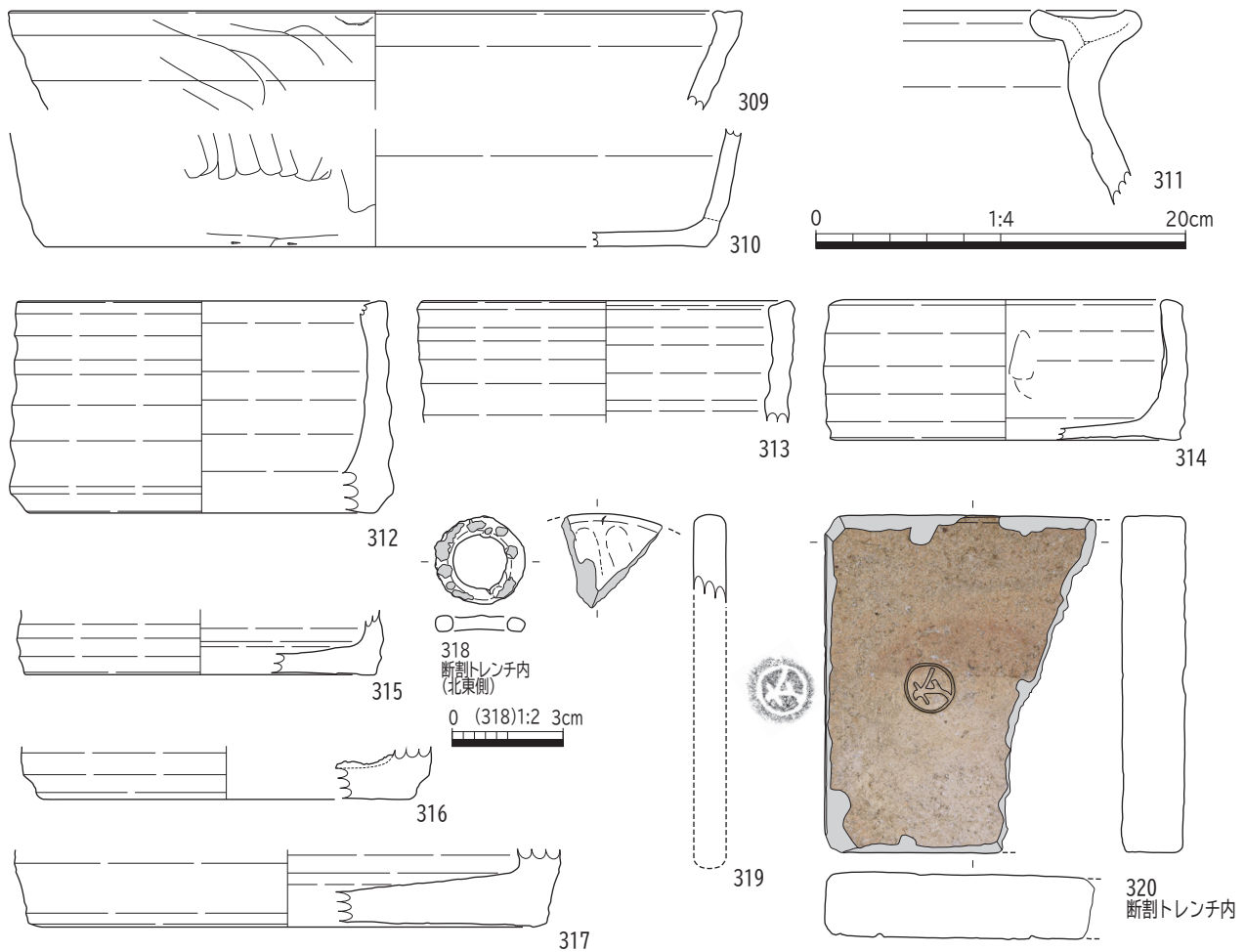


図 52 00202SG 出土遺物実測図 (2)

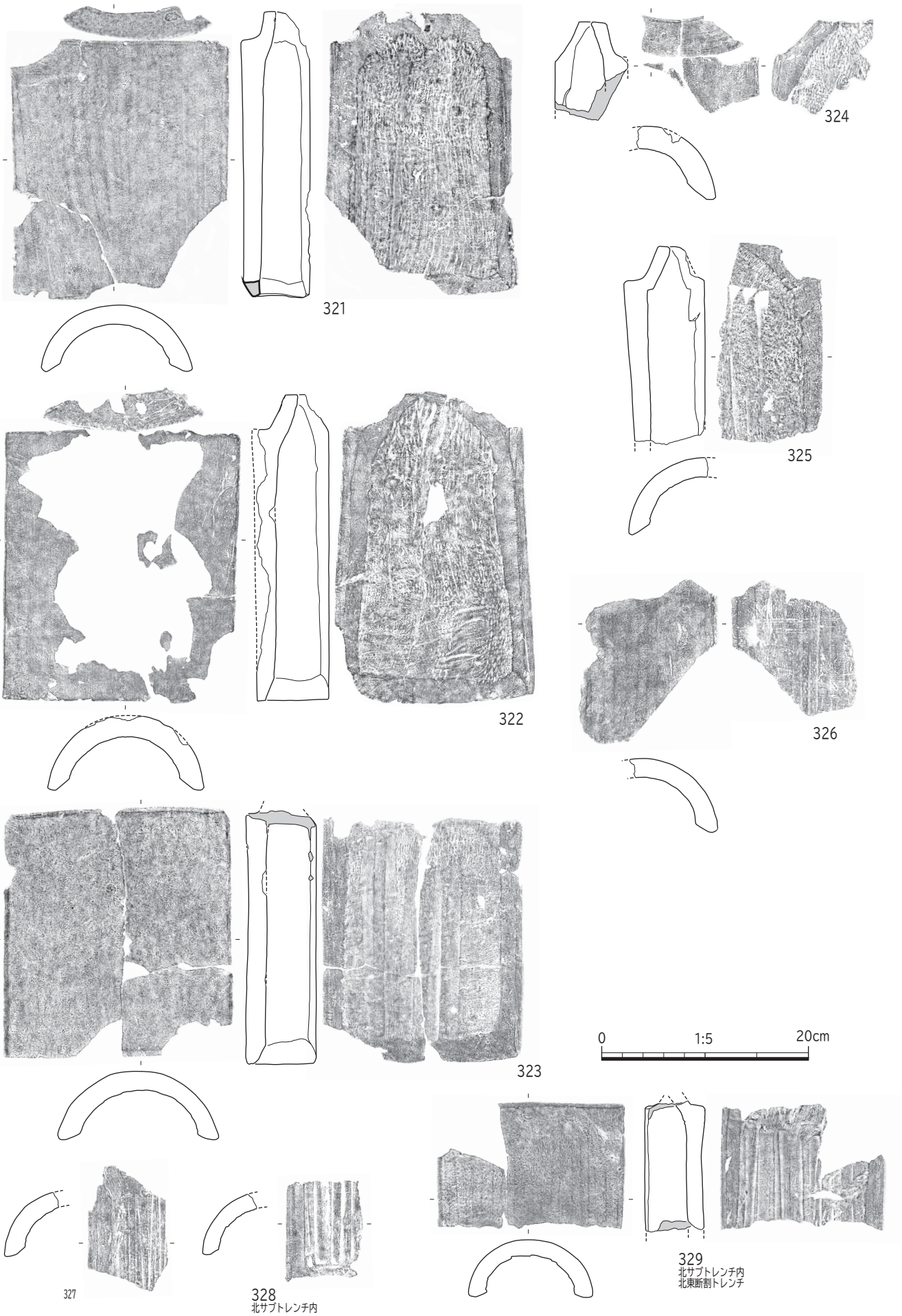


図 53 00202SG 出土遺物実測図 (3)

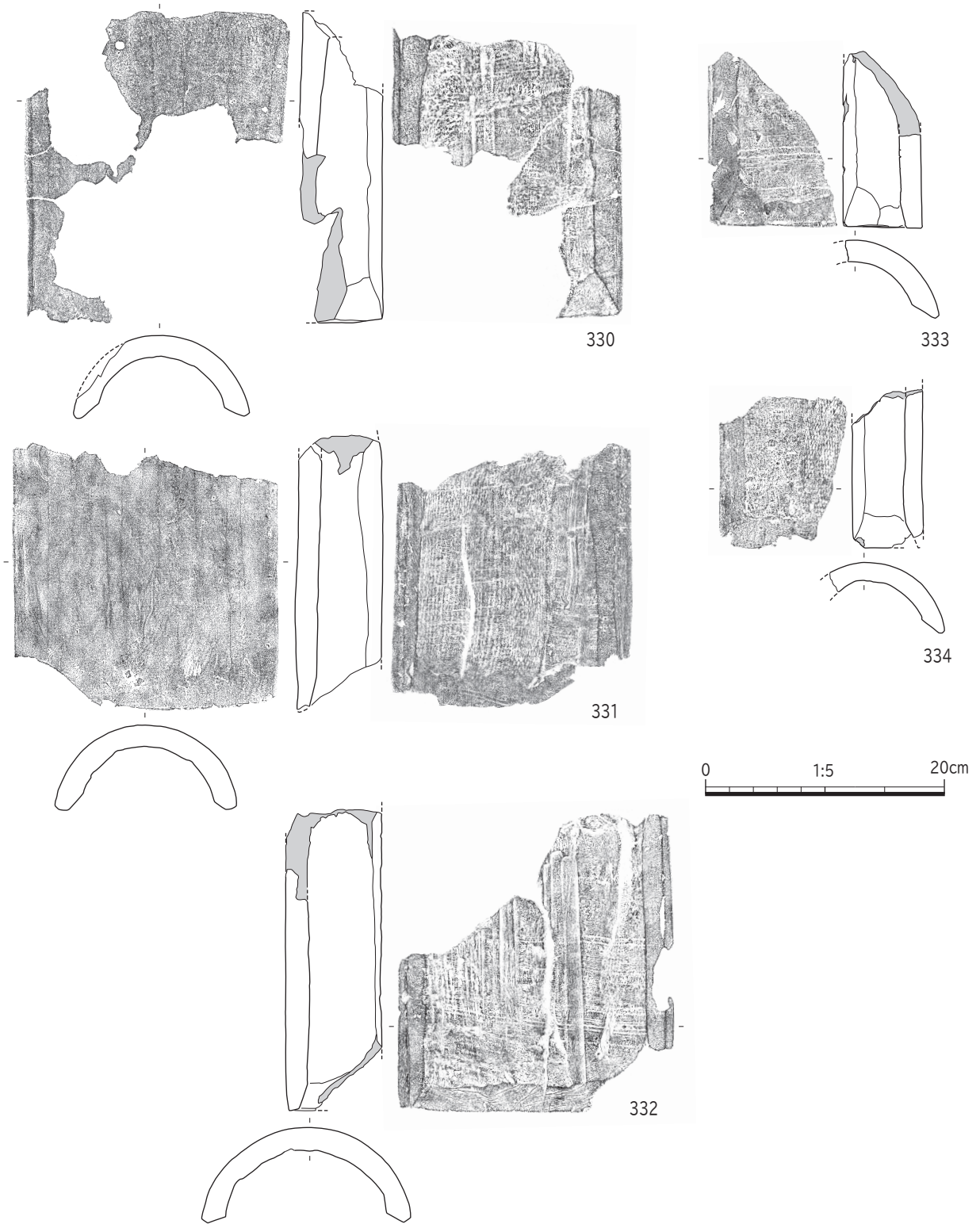


図 54 00202SG 出土遺物実測図 (4)

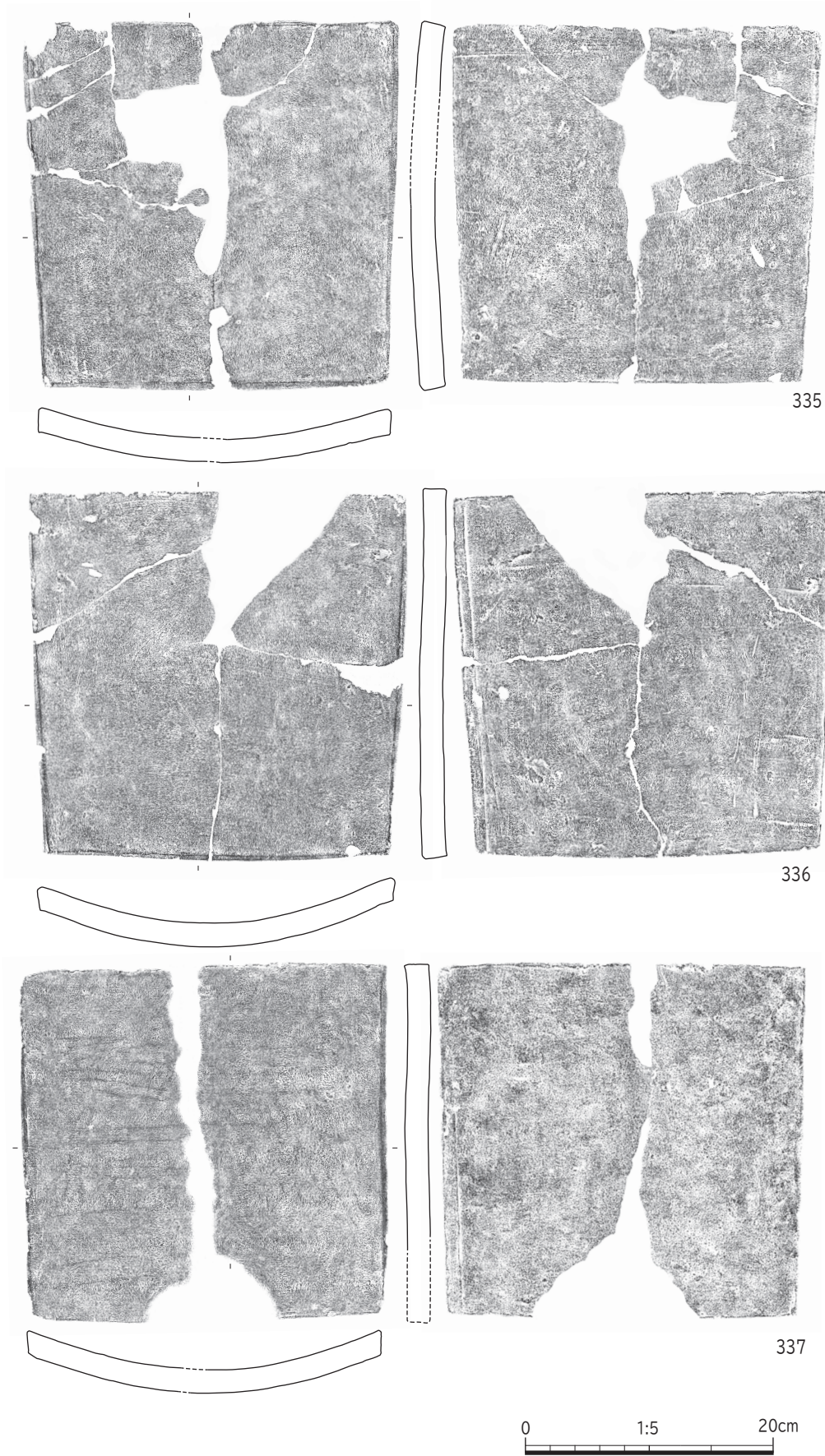


図 55 00202SG 出土遺物実測図(5)

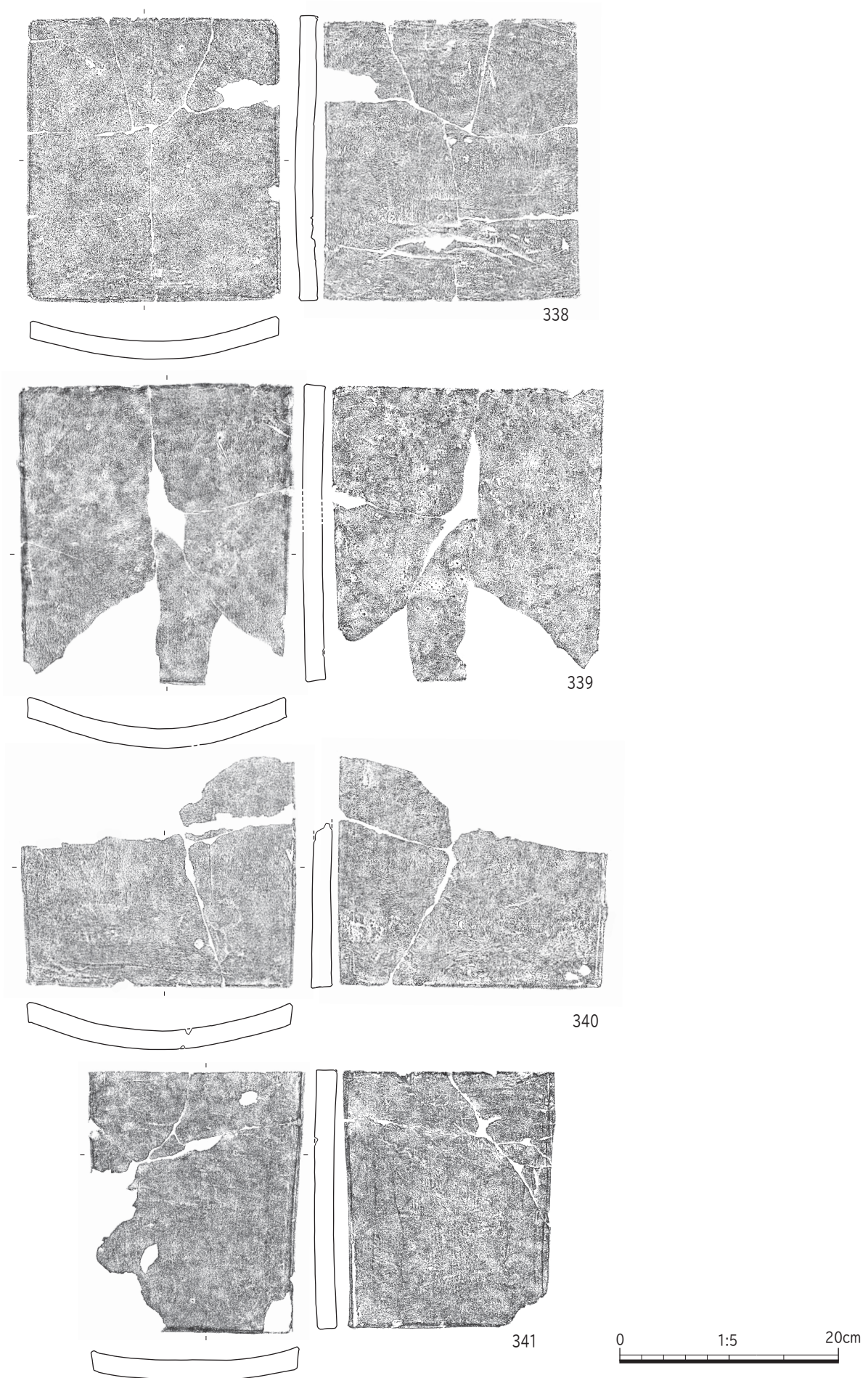


図 56 00202SG 出土遺物実測図 (6)

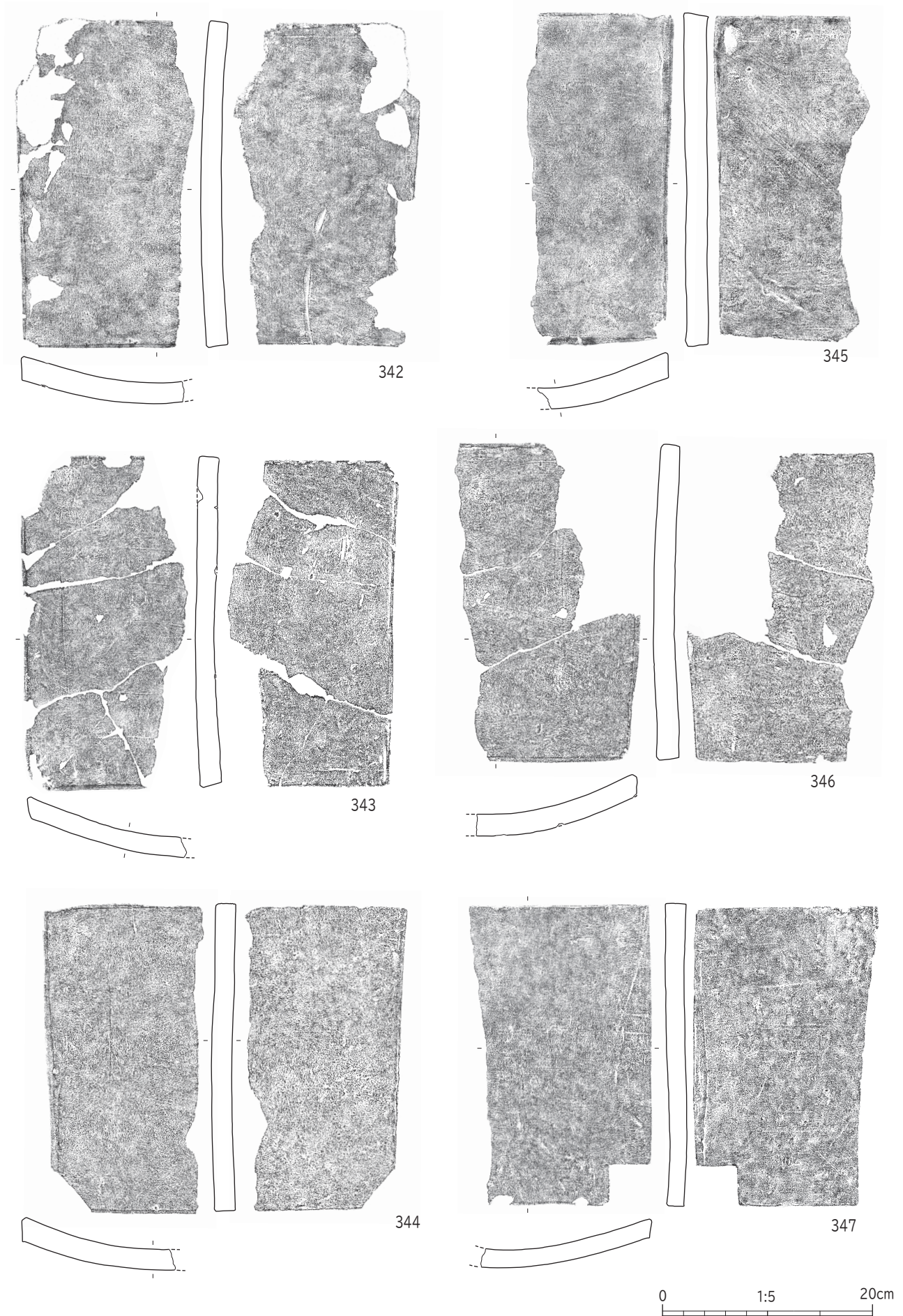


図 57 00202SG 出土遺物実測図 (7)

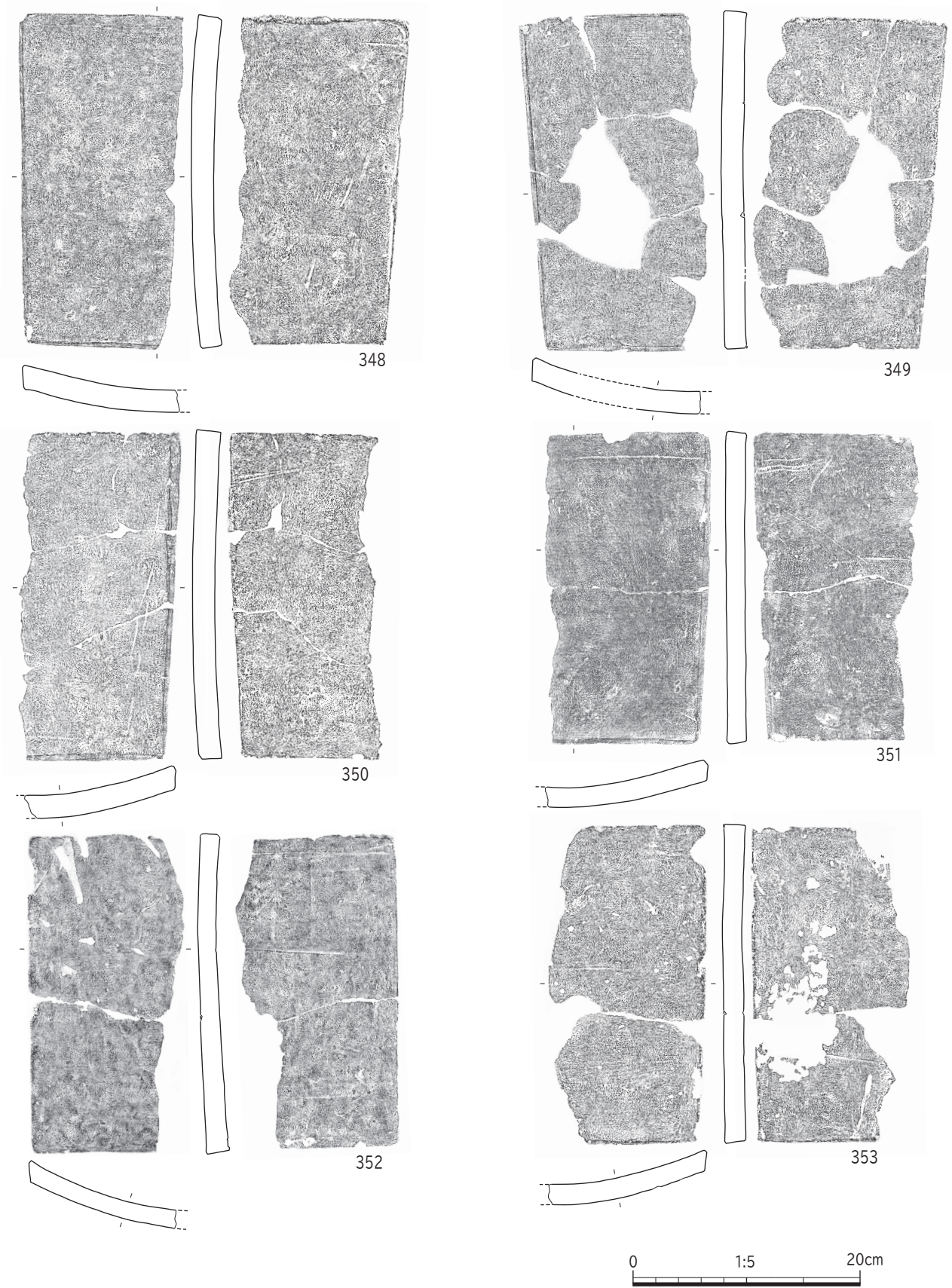


図 58 00202SG 出土遺物実測図(8)

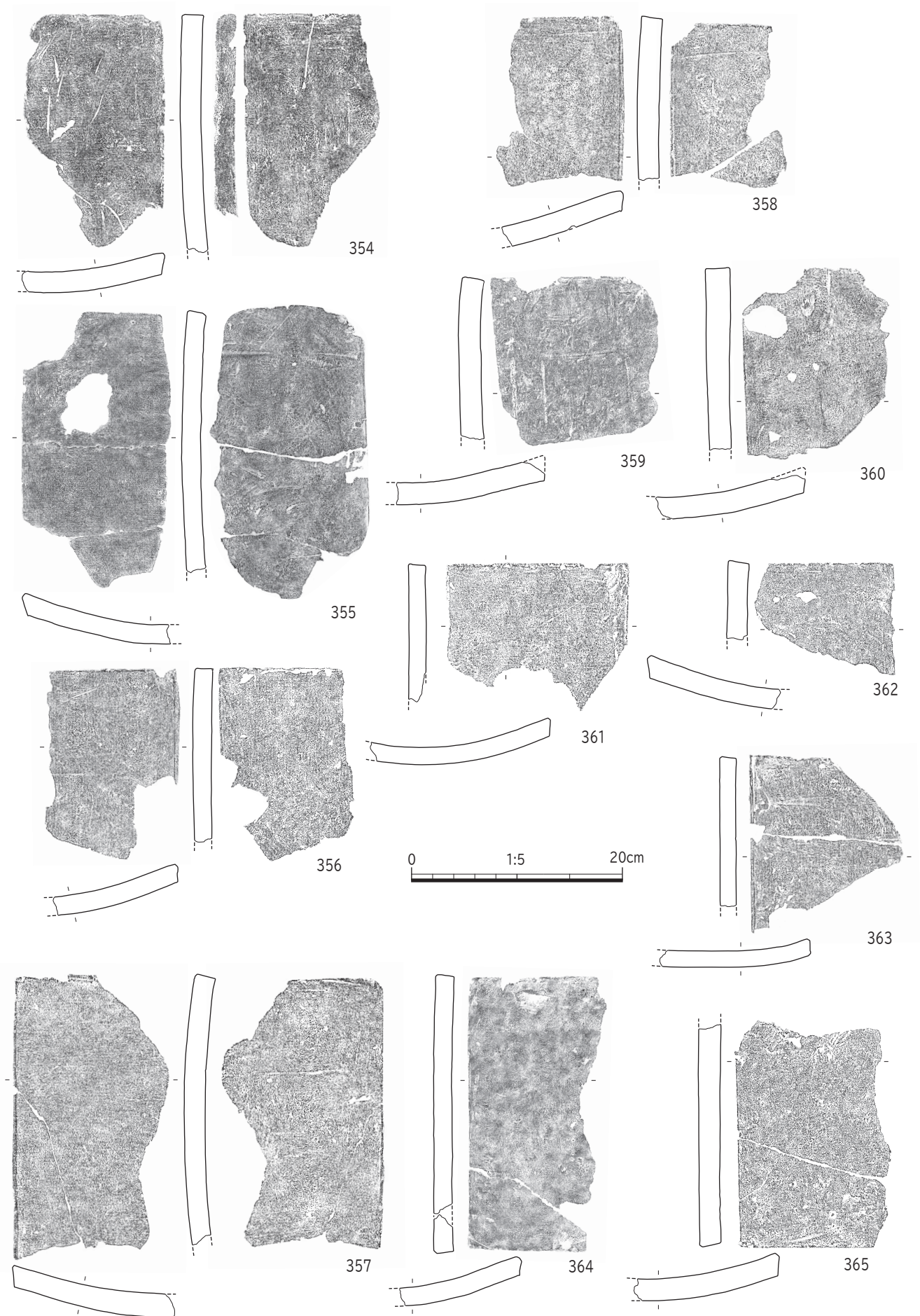


図 59 00202SG 出土遺物実測図 (9)

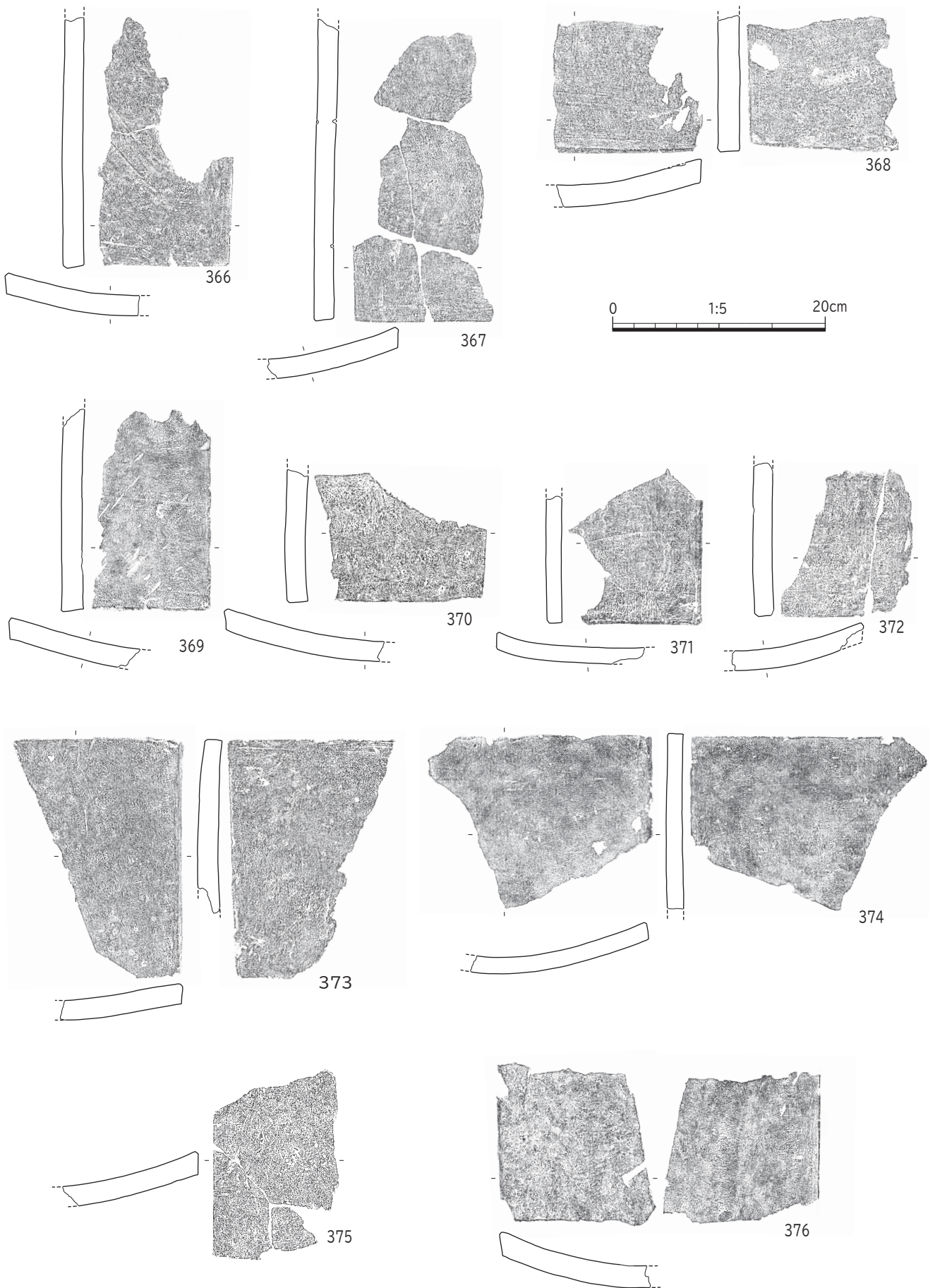


図 60 00202SG 出土遺物実測図 (10)

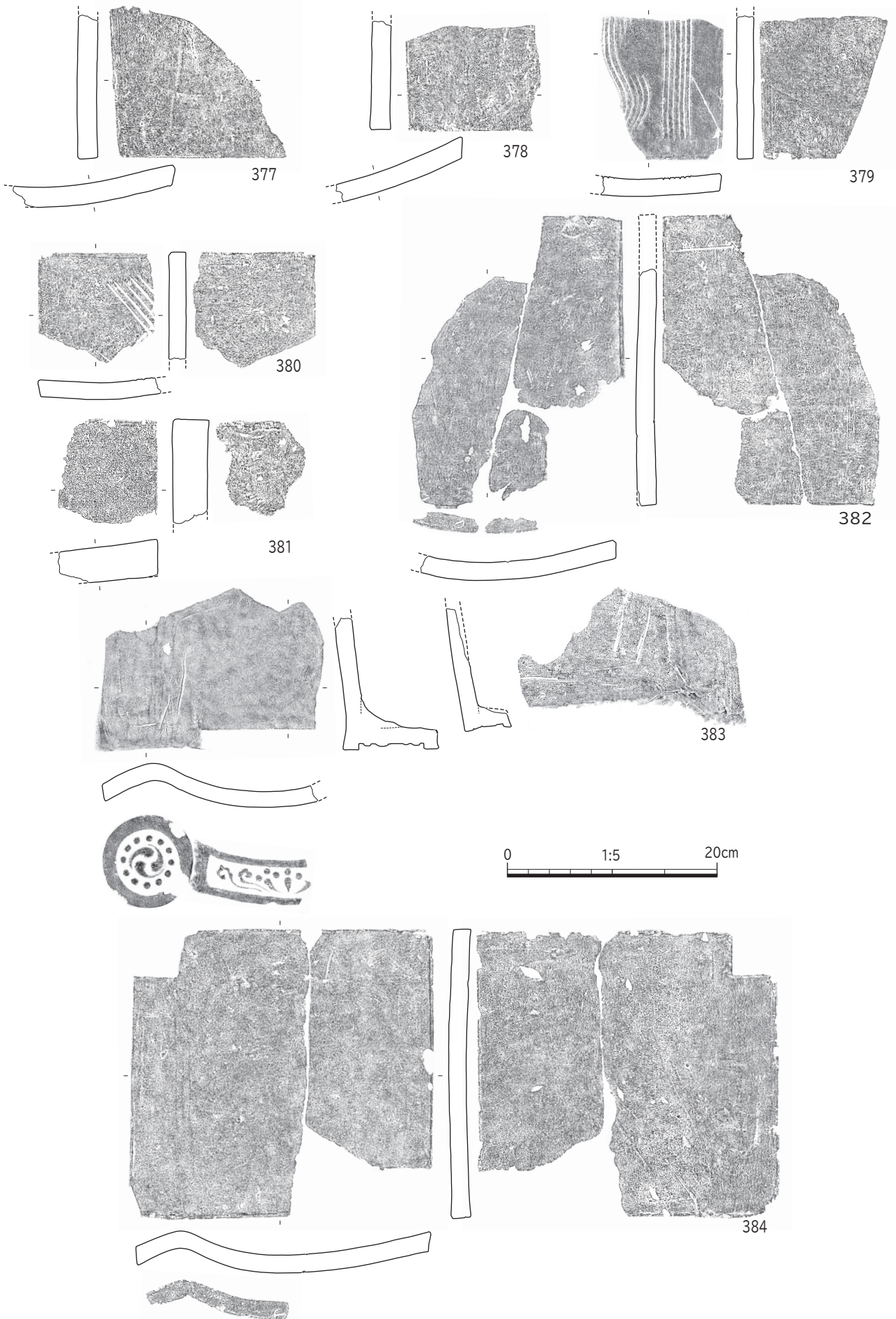


図 61 00202SG 出土遺物実測図 (11)

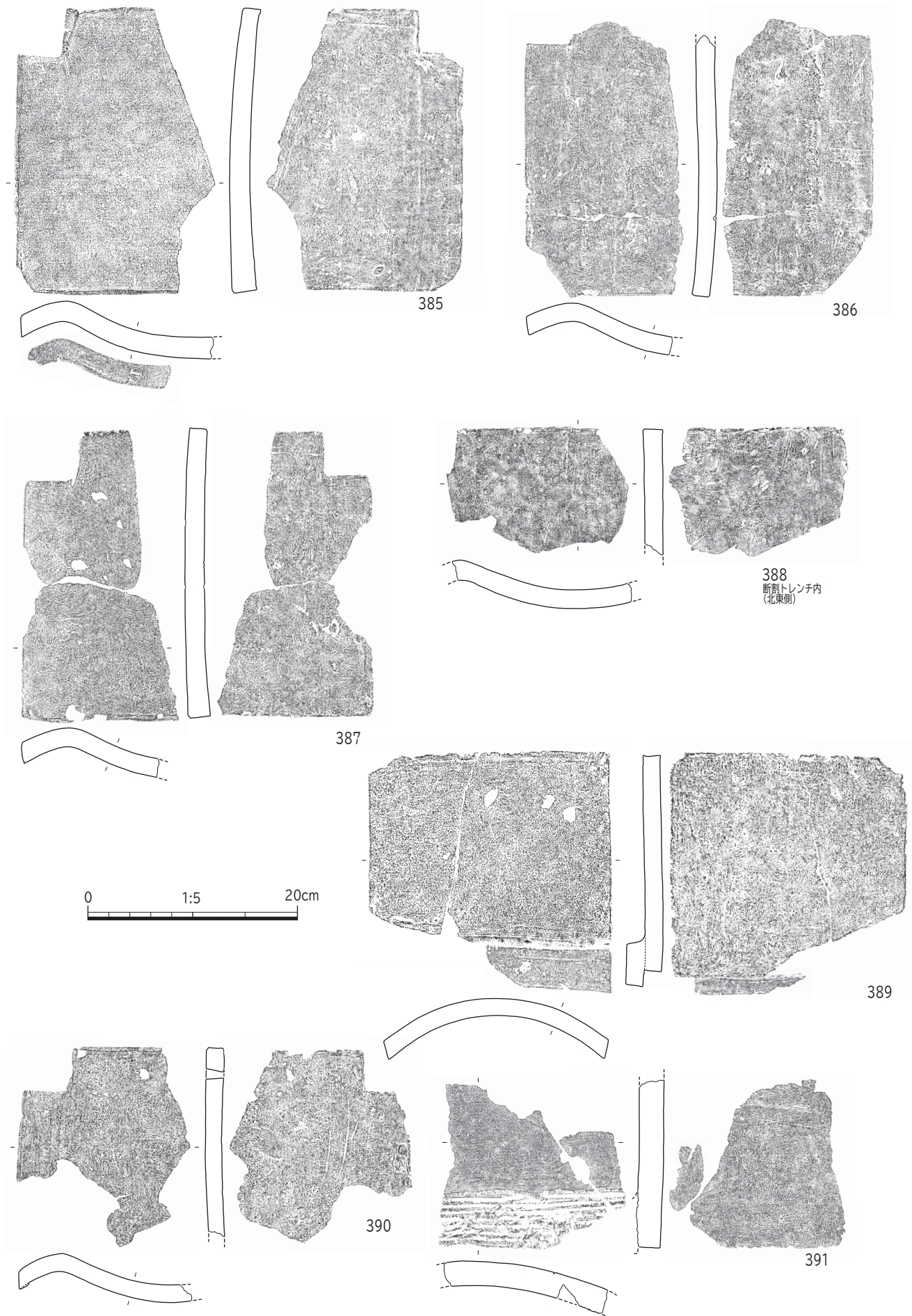


図 62 00202SG 出土遺物実測図 (12)

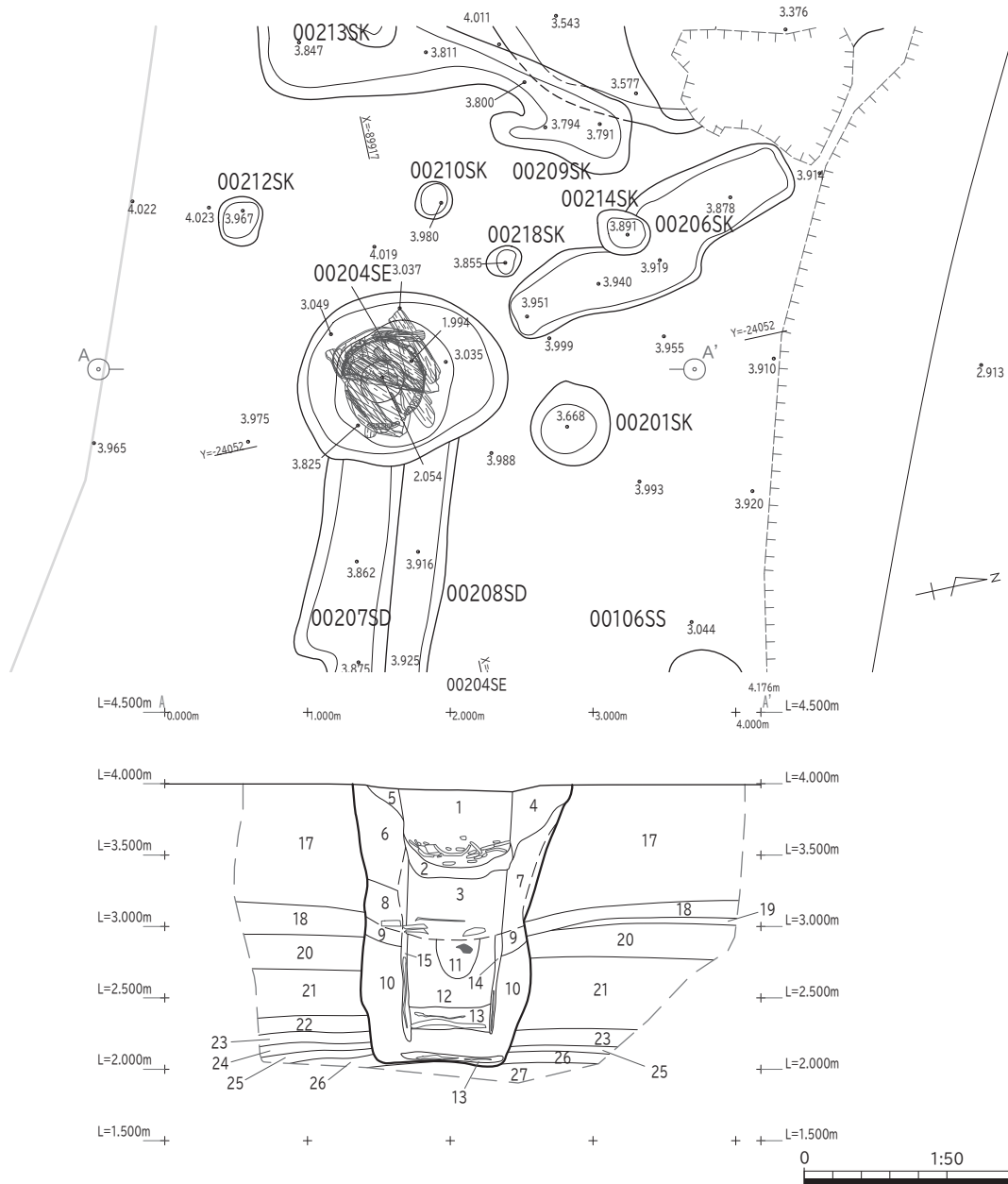
**00204SE** 調査範囲南端(21Ba区)、池跡00202SGの東約4mに位置する井戸跡である(図48)。その掘方は長軸約1.4m、短軸約1.2mの北側にやや歪んだ正円形の平面形に対して深さ約1.9mの円筒状を呈する。遺構検出時は直径約0.8m正円形の土坑として認識した。その後、約0.3m掘り下げたところで常滑窯産大甕の破片が折り重なるようにして出土したので、土坑底部に達したと思われた。しかし、その下層に埋土が続くことと側壁で基盤層がみえてこないことから、一回り大きな遺構の可能性が考えられ、再検出および断割調査によって井戸の掘方全体を把握することができた。したがって当初検出された正円の平面形は、井戸が機能した時点の筒部断面ということになる。

00204SEの土層は大きく4つの層(A～D)に分かれる(図63)。Aは常滑甕が出土した筒部の最上層で中粒砂混じりの細粒砂層(1・2層)で、常滑甕はその下部に集中する。先述のように破片が重なるようにして出土していることから、破碎した甕を廃棄して埋め立てた層と考えられる。しかしその下にある2層からは甕の出土がなく碗状に堆積していることから、もともと2層上面に甕が据えられていた可能性が高い。このように考えると、後述する掘方の層(4～7層)に対して甕を据えるための掘り込みを行った別の土坑とみなすこともできる。次にAの真下にあるBは、筒部内に堆積したシルト混じりの細粒砂層で、単一であることと小ブロック土の混入もみられることから筒部を埋めるために入れ込まれた土と考えられる。その下部では板状木製品も出土している。さらにその下層のCは、側壁に著しく腐朽した板状木製品が立て並べられた状態で確認されたことから(14・15層)、筒部は結桶が固定されていたことになる。しかもその最下部に当たる13層からは結桶の底板が並列して出土しており、結桶は底板のある状態だったと考えられる。結桶内は小ブロックの混じるシルト(11・12層)で満たされていてBとは明らかに異なっており、Bが結桶を引き抜いて埋め立てたのに対して、Cはそれをせずまたは抜き取りが不可能な状況で埋められたものと考えられる。Dは当初開削された時の掘方で、0.2～0.5m厚さを一単位として筒部結桶の外側に土を投入して固定していったものと思われる。

出土遺物は先述したように埋土のAで出土した常滑窯産甕と同B・Cで出土した結桶(板状木製品)と結

桶に付属していたと思われる鉄製品(M7～M9)がある。Dからは若干の瓦類が出土している。まず常滑窯産甕(図65-392)は全高81.0cm、推定口径62.1cm、底径19.5cm、最大径81.0cmを測る大型品で、残存破片の重量は40kgを超える。全体的に硬質の焼成であるが、中世段階に比べると釉の掛かりも全くなきいわゆる赤物と呼ばれるタイプである。断面がY字形となる口縁部は内傾する。外面は板ナデ調整で内面は斜め方向の指ナデと粘土帯積み上げ時の指オサエが連続する。これらの形態的諸特徴から17世紀前半のものと考えられる。なお、底部外面には墨書がある(判読不能)。また破片から全形を復元したところ、胴部中端を中心に蜘蛛の巣状に破片化していることがわかった。当該箇所を敲打して破碎した状態で廃棄したものと思われる。981は瀬戸・美濃窯産陶器の志野釉小皿で大窯期末期とみられる。393～396は平瓦または熨斗瓦で、396は単面に刻印がある。395・396は掘方出土であることから00204SE構築時に存在したものである。板状木製品は多数出土したがいずれも腐朽が激しく、形状を保っているのは図示した2点(W1・W2)のみである。いずれも両端部が欠損しているため本来の長さは不明であるがW2の残存長がそれに近いものと思われる。一方幅はともに6.4cmであり一定の規格で用意された材で構成された結桶の一部材と考えられる。なおW1は器面の一部が焼け焦げている。

以上のように遺構が形成された過程と出土遺物の年代から、00204SEの性格と時期的変遷がみえてくる。すなわち掘方を掘削して底面のある結桶を固定して筒部とした第1段階、それが解体され埋められた第2段階、さらに埋め立てられた後を掘り込んで大甕を据えて利用した第3段階、最終的に甕を破碎して埋め立てられた第4段階となる。第1段階の状況と、基盤層の砂混じり層(図63-21層)から湧水があることから、当初は井戸を目的に構築されたと思われる。しかしその後埋められた後は甕を据えているので、湧水ではなく注ぎ込まれた水を溜め込む溜め井戸へと転用されたのであろう。この第3段階までの時期は遺物の年代観からほぼ17世紀代に完了したと推測される。一方、第4段階の時期は特定できず、まず庭園が解体された江戸時代末期～明治時代が考えられるが、それ以前に造り替えのために埋め立てられた可能性もある。しかし、構築時期が江戸時代前期にほぼ限定しうることから、下御深井御庭が当該期に構築さ



1. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(10YR4/1褐灰色シルト小ブロック少量含む。細礫含む。中礫少量含む。赤物塗片下部に含む。鉄斑あり)
2. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(10YR4/1褐灰色シルトブロック多く含む)
3. 10YR4/1褐灰色シルト混じり極細粒砂層(10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂ブロック少量含む)
4. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂混じりシルト層(10YR4/1褐灰色シルトブロック含む。黄褐色シルト小ブロック少量含む。細礫含む。鉄斑あり。掘方)
5. 10YR4/2灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑あり。掘方)
6. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。細礫少量含む。鉄斑あり。掘方)
7. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(10YR5/3にぶい黄褐色にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む。木片含む。鉄斑少ない。掘方)
8. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層  
(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂ブロック少量含む。鉄斑少ない。掘方)
9. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト層  
(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂小ブロック含む。鉄斑多い。掘方)
10. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR3/2黒褐色シルトブロック多く含む。灰褐色シルトブロック含む。鉄斑あり。掘方)
11. 10YR4/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層  
(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂ブロック含む。鉄斑少ない)
12. 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト層  
(10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂ブロック・褐灰色シルトブロック少量含む。鉄斑少ない)
13. 7.5YR6/3にぶい褐色中粒砂混じり極細粒砂層(10YR4/1褐灰色シルト層状に含む。底板含む。鉄斑少ない)
14. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(井戸枠含む。鉄斑少ない)
15. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(井戸枠含む。鉄斑少ない)
16. 7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト層(10YR3/2黒褐色シルトブロック含む。井戸枠含む。鉄斑少ない)
17. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(鉄斑あり)
18. 10YR5/2灰黄褐色シルト混じり極細粒砂層(鉄斑あり)
19. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂層(鉄斑あり)
20. 7.5YR5/2灰褐色細粒砂混じりシルト層(鉄斑あり)
21. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(10YR4/1褐灰色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
22. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR4/1褐灰色シルト小ブロック少量含む。鉄斑あり)
23. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト層(鉄斑あり)
24. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR4/1褐灰色シルト小ブロック含む。鉄斑多い)
25. 10YR3/2黒褐色粘土質シルト層(10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロック含む。鉄斑多い)
26. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR5/3にぶい黄褐色シルト小ブロック少量含む。鉄斑少ない)
27. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト層(鉄斑あり)

図 63 00204SE 遺構図(1)

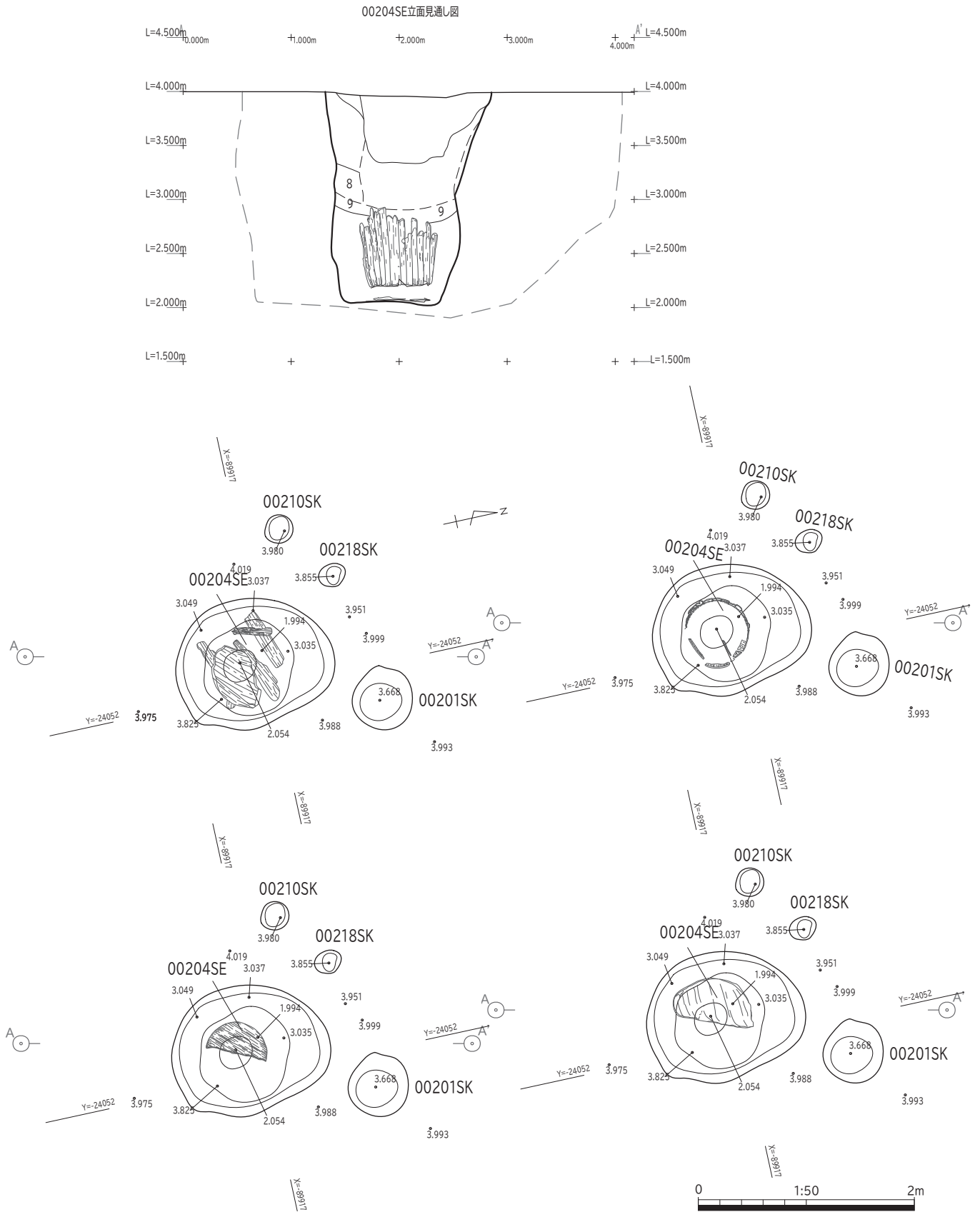


図 64 00204SE 遺構図 (2)

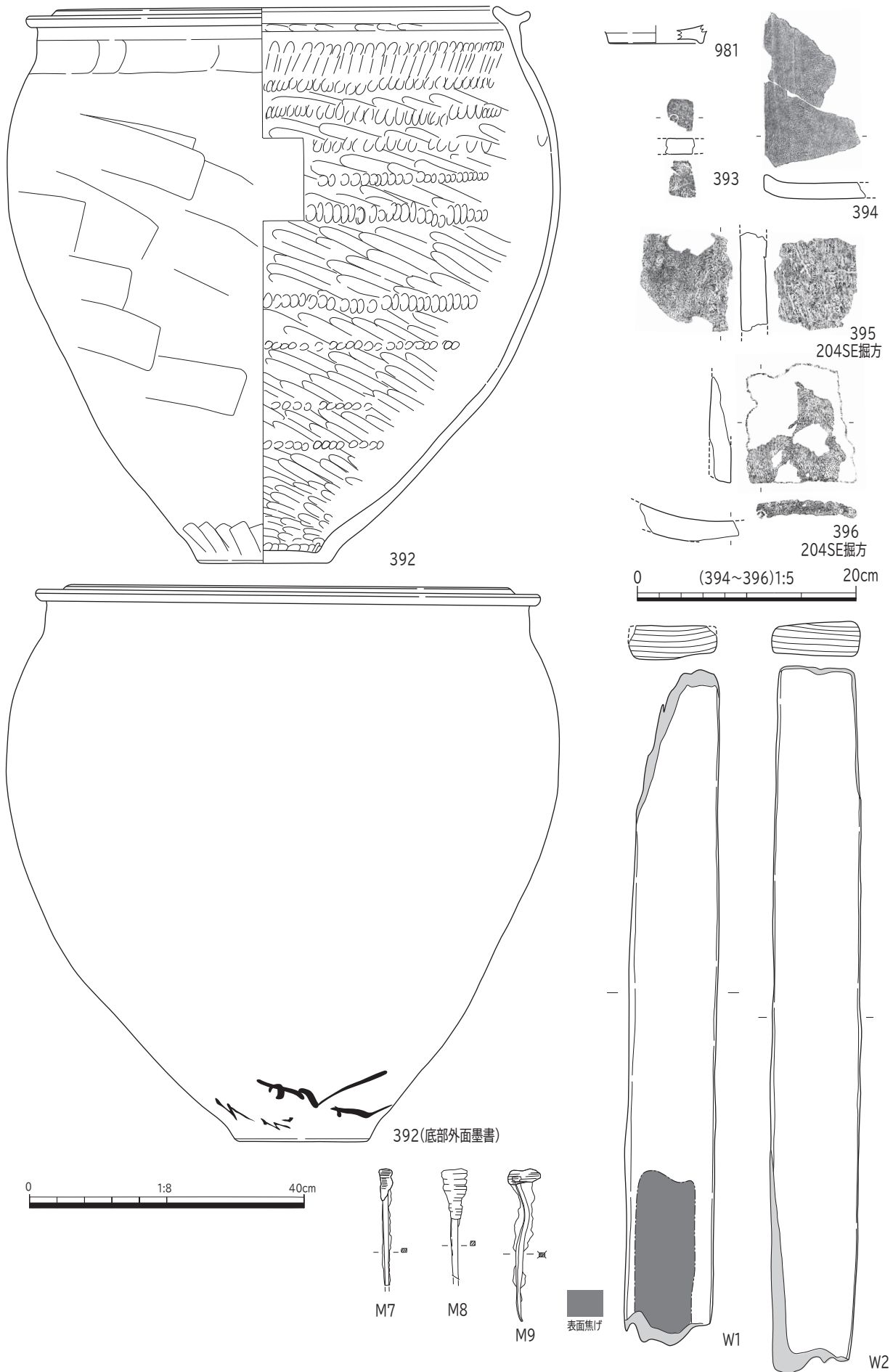


図 65 00204SE 出土遺物実測図

れたという文献史料からの見解に対する裏付けとなるだろう。

**00216SK** 調査範囲南端に位置し一部は調査区南壁(21Ba区)にかかる土坑である(図48)。同壁面の土層断面(図17の18層)によれば標高約4.3mから掘り込まれてその上部は浅い皿状を呈するが一部に深く掘り込まれた部分があって遺物の集中がみられる。検1面において確認されたのも当該部分の延長であり、遺構面では長軸約1.7m、短軸約0.8m以上、深さ約0.6mの丸みの強い隅丸方形である。埋土は1層で、シルトブロックや砂礫が混じる埋め戻しによるもので、深く掘り込まれた部分から玉石(円礫)や陶磁器類・瓦類が出土する。これらの状況から廃棄土坑と評価される。このうち玉石は調査区南端の約150㎡に散布していることから、廃棄の主体は陶磁器類や瓦類とみてよいだろう。

出土遺物は若干の陶磁器類から提示する(図66)。397～399は瀬戸窯産炆器の広東碗で概ね江戸時代後期、397は登窯第10小期である。401は大窯期の播鉢口縁部でその第1段階なので15世紀末～16世紀前葉と古い。402と403は同一個体の可能性がある瀬戸窯の植木鉢で江戸時代後期のものであろう。404は陶製小瓶、同類型のものが調査範囲南部で約20点出土している。口縁を厚口に作るころは共通するが405のように頸部の長い個体もあって法量の個体差がある。406・407は匣鉢で、407には胴部下端の2か所に○に「仁」の刻印(直径2.5cm)がなされている。おそらく瀬戸赤津の陶工の加藤仁兵衛家の所有関係を示していると考えられる。

瓦類は00202SGと同様に特徴のあるものを抽出し極力図示している(図67～70)。丸瓦は3点のみでいずれも玉縁とその付近の破片である。玉縁の長さは5cm未満と短い。全体に厚みがあって端面・側縁いずれも面取を施すなど00202SGのものと同様である。全形の判明するもの(412)は長さ22.8cm、幅21.8cm、厚さ1.8cmであり、規模での分類は00202SGの平瓦(小)に該当する。413～415も長さからみて同類型である。それ以外の破片では判事がたいがここでは平瓦(小)が比較的目立っている。427～436は棧瓦で430～433・435は端面に○

に「上」の刻印がある。おそらく同一工場の製品であろう。437は本発掘調査で唯一瓦当文様のほぼ全形が残る軒丸瓦である。面径18.0cm、厚さ2.3cmを測り、文様は左三巴文の外側に珠文12個を配する。438は軒平瓦で中心飾りから両方へ唐草文が2反転する東海式と呼ばれる型式である。長さ28.2cm、幅24.7cmを測り、00202SGの分類では平瓦(中)に該当する。また当該資料は、瓦当部の他に向かって左側縁に袖部が付されている袖瓦でもある。切妻部分のある建物の屋根に葺かれていたと考えられる。439も軒平瓦であるが瓦当が438の3分の2ほどで小型である。441は差込瓦で大棟の装飾用である。442は鬘斗瓦で長さ11.4cm、幅10.0cmである。443は雁振(冠)瓦である。444～448は軒棧瓦の瓦当部で448は右三巴文である以外はいずれも左三巴文で珠文は12個配される構成となっている。このうち444と445は同範である。

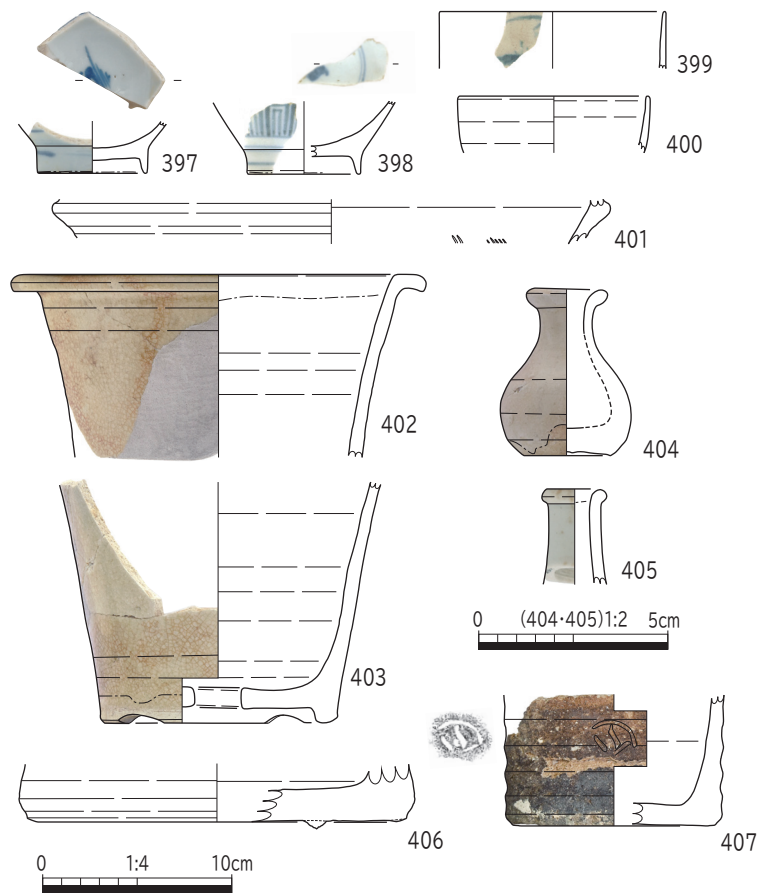


図 66 00216SK 出土遺物実測図(1)

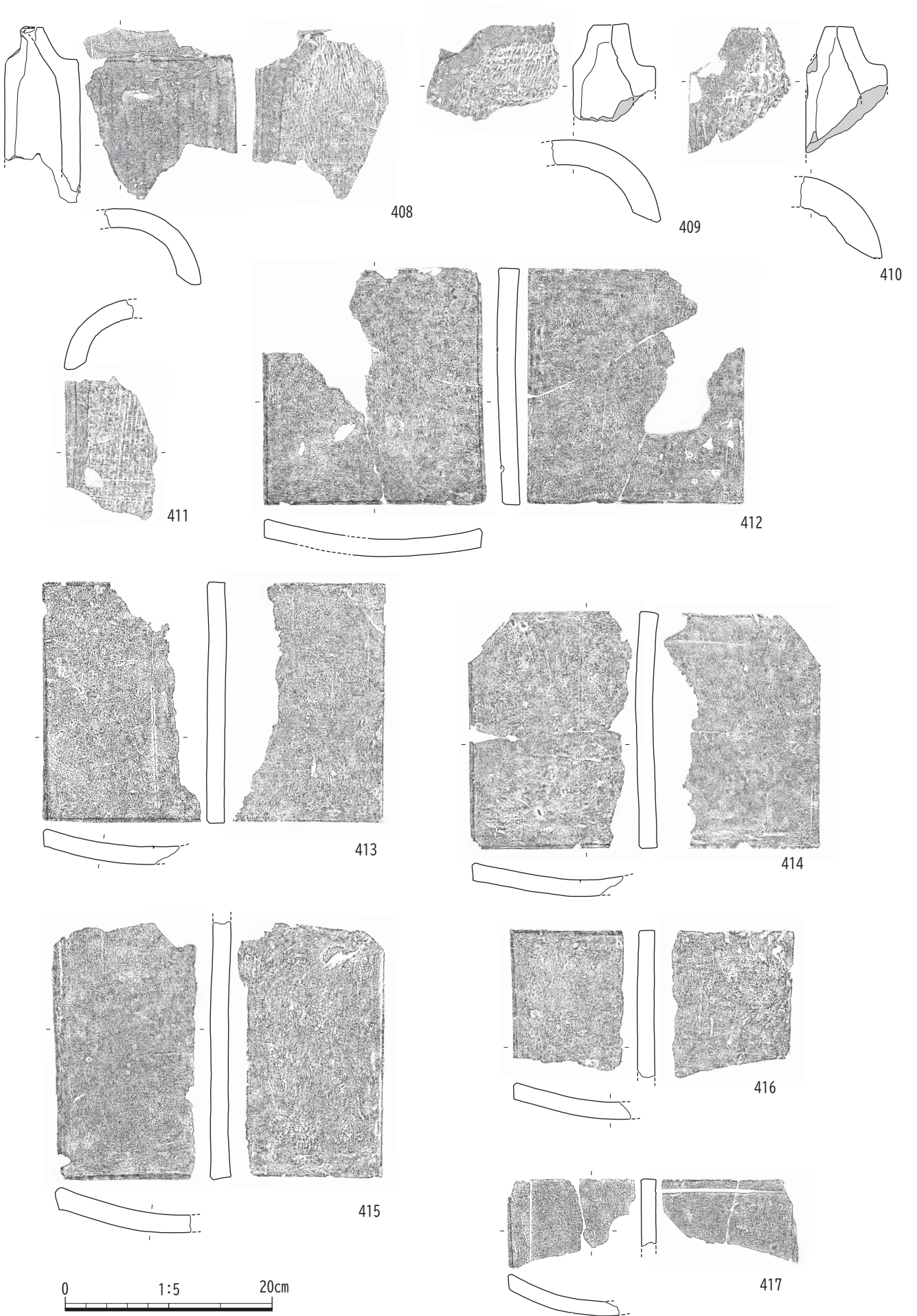


図 67 00216SK 出土遺物実測図(2)

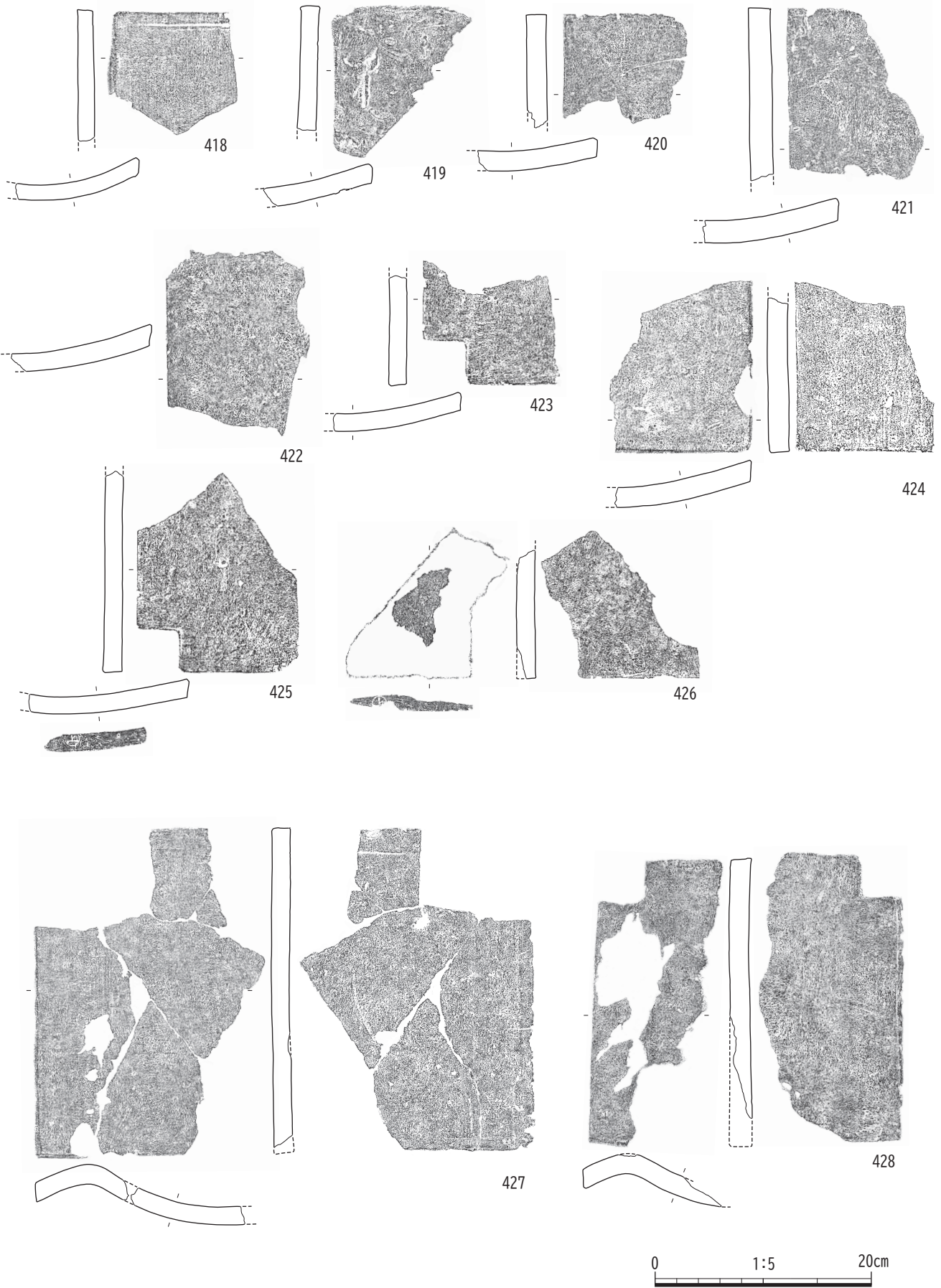


図 68 00216SK 出土遺物実測図 (3)

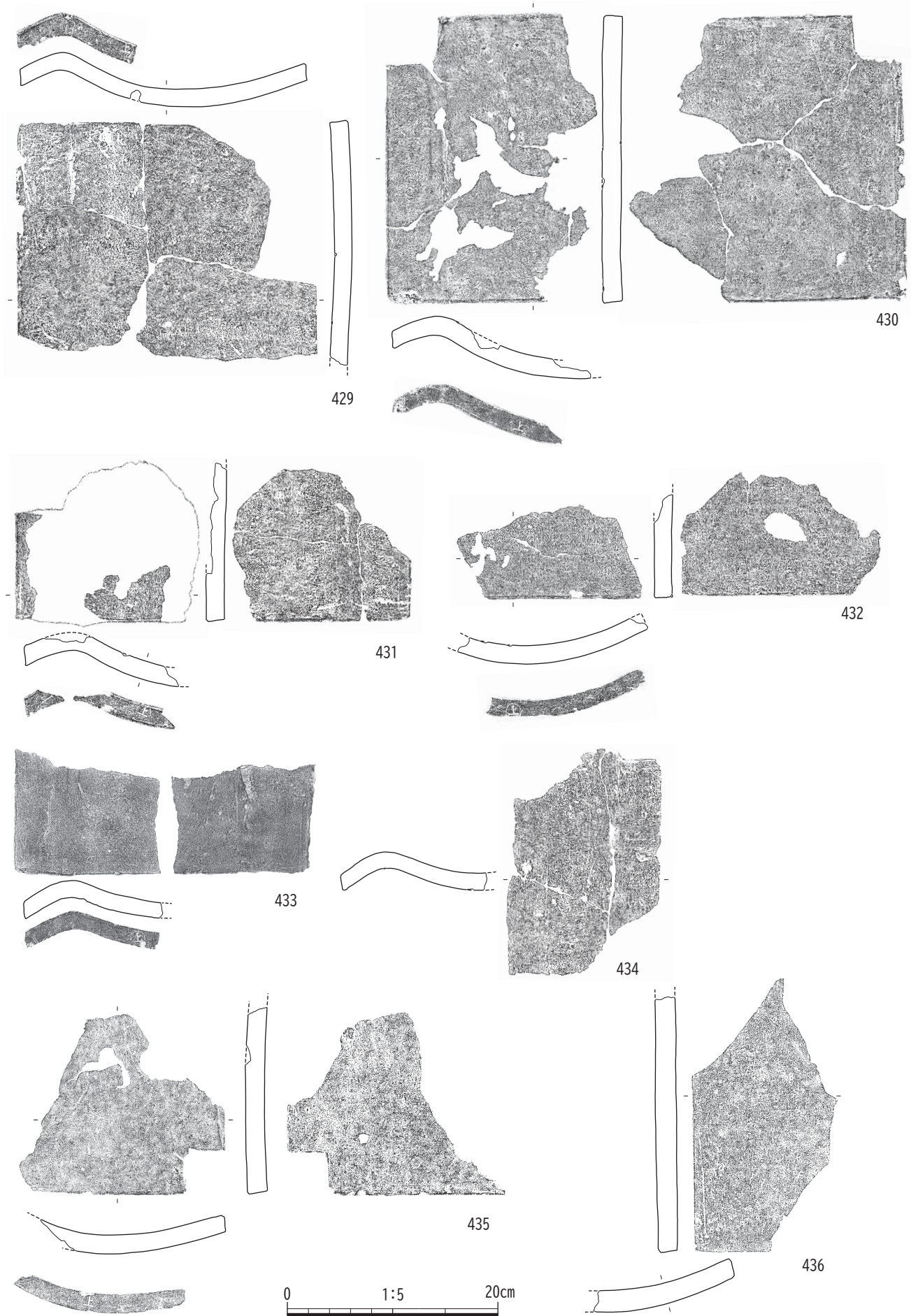


図 69 00216SK 出土遺物実測図 (4)

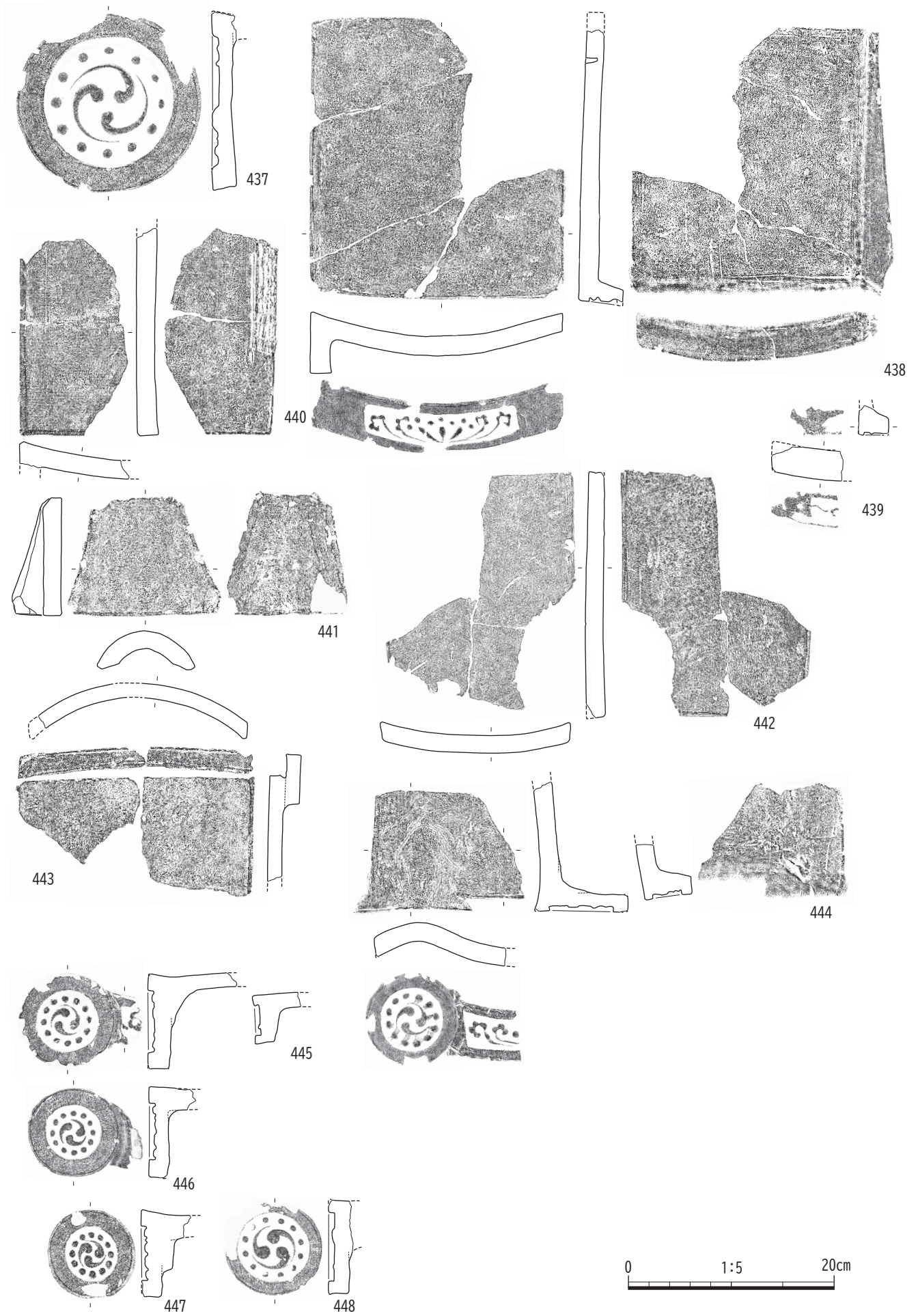


図 70 00216SK 出土遺物実測図 (5)

**00220SK** 調査範囲南端 (21Ba 区)、池跡 00202SG の北側に並列するように位置する (図 48)。00202SG 北辺からの距離は約 2m と近い。北西から南東方向に長く歪んだ隅丸長方形の平面形で確認されたが、その北辺は 00175SD とそれにかかる攪乱によって掘り込まれて失われている。そのため東西全長約 8.5m、残存部の短軸約 2.4m、深さ約 0.6m を測る。その掘り込みは逆台形で底面も確認できていることから、おそらく 00220SK の北辺は 00175SD の南辺とほぼ重なる位置になると思われる。このことから、復元される掘り込みの形状は細長い溝状の土坑となる。一方その南辺では土坑 00368SK と重複関係にあり、00220SK の方が新しい時期に位置づけられる。埋土は大きく 2 層に分かれ下層は細かく分層が可能

である (図 50)。上層 (10 層) は中礫 (直径 4 ~ 64mm) が混じる砂礫層で単一であることから人為的に一度に埋められた層であろう。一方下層 (11 ~ 20 層) は何度かに分かれて堆積が進んだと思われ、15 層では腐葉土が混じる間層も存在することから、一時的に土壌化が進む段階もあったと推測される。また後述する出土遺物の多くが下層から出土しているが、破片状態で出土するものもあればほぼ全形のまま出土するものもあって、これらが埋め立てのために土砂に混ぜ込まれたのではない廃棄であったとすれば、廃棄土坑として暫時凹地の状態が維持されていた可能性もある。

出土遺物には多量の匣鉢をはじめとする窯道具が含まれている。それに次いで陶磁器類が多いが、これに対

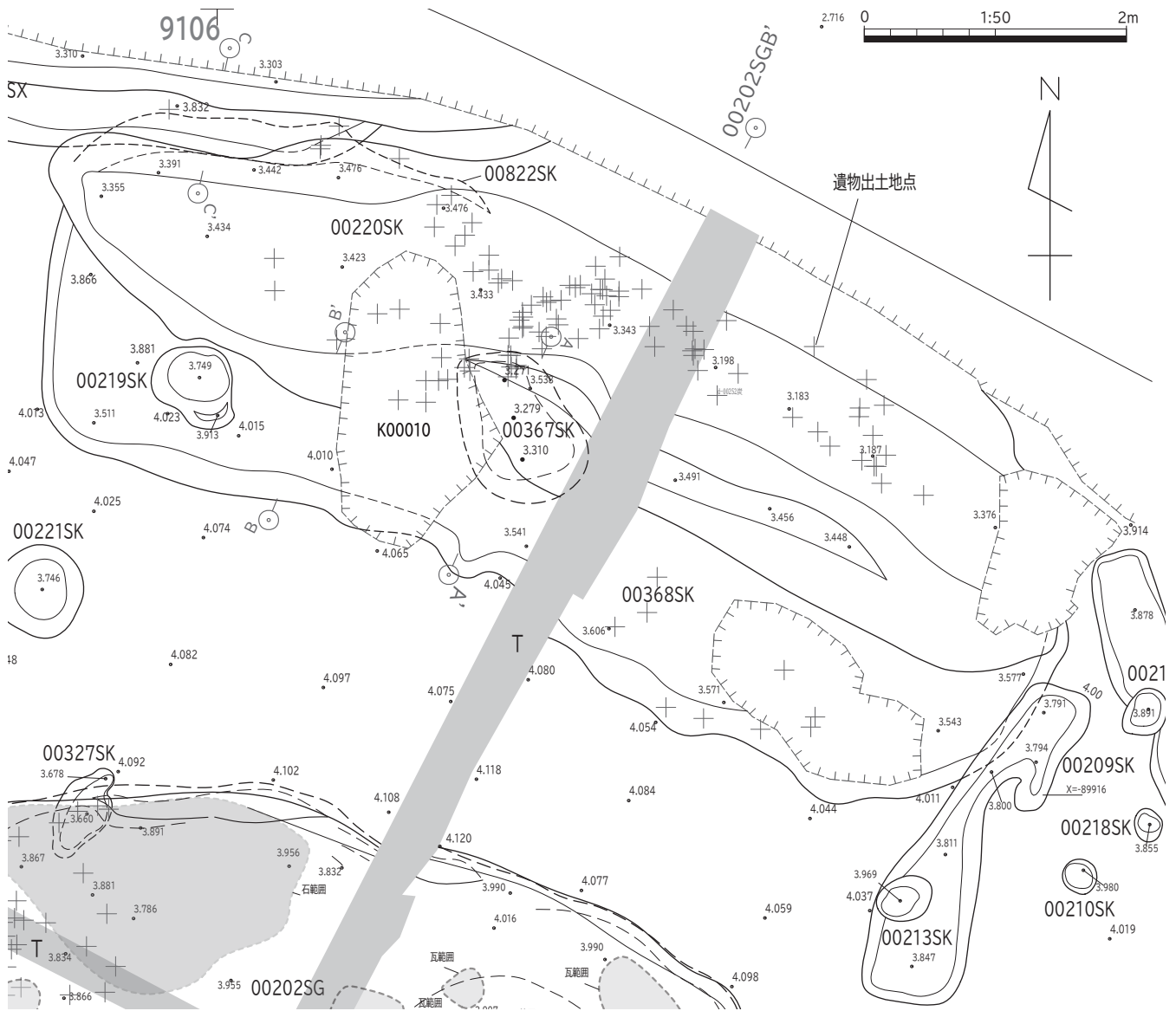


図 71 00220SK 遺構図 (1)

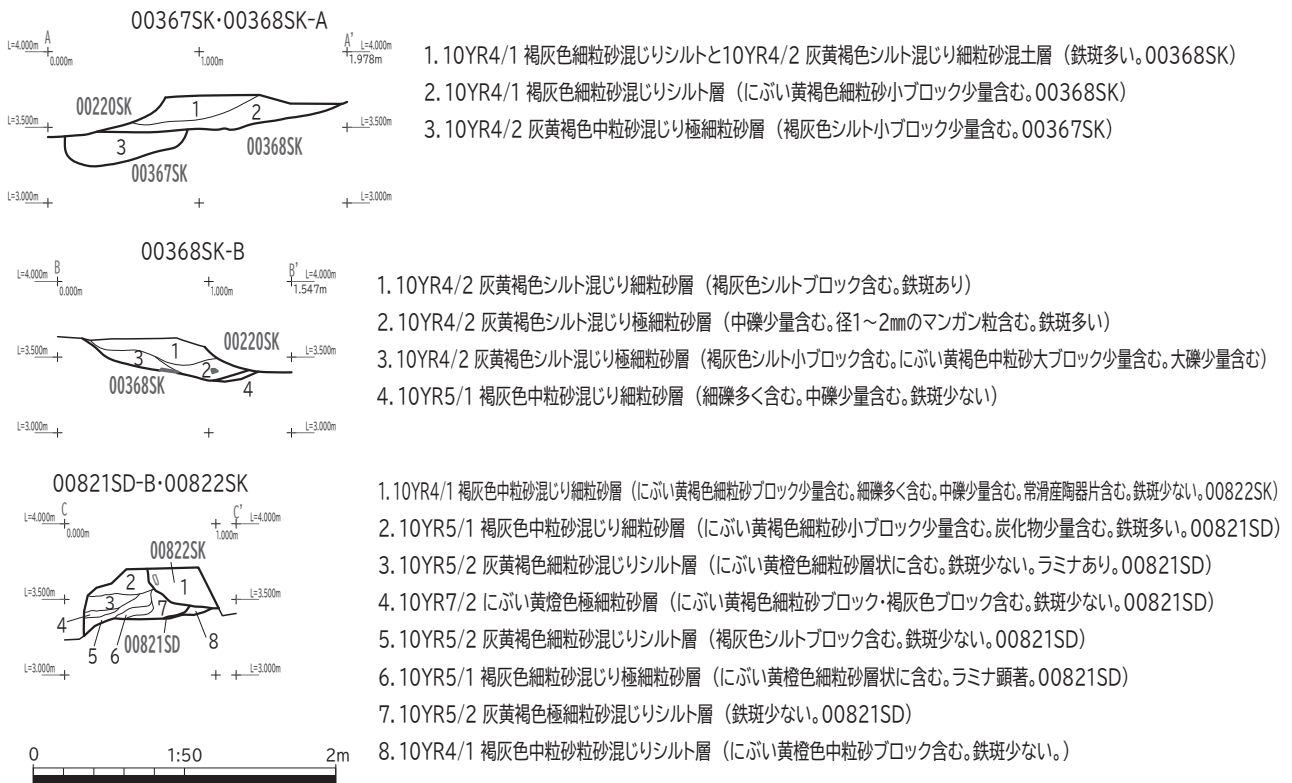


図 72 00220SK 遺構図(2)

して瓦類は 00202SG や 00216SK に比べて圧倒的に少量である。また一部は、下位の遺構 00368SK 出土と接合関係にある。

449 は肥前産磁器の望料碗で、この口縁部にはまり込む蓋が組み合わさっていたと考えられる。絵柄は柄杓や水瓶など物語性に富んでいる。451 は瀬戸窯産以外の染付磁器碗、453 も磁器碗だが瀬戸窯以外で生産されたものであろう。一方 456 の磁器端反碗は文様の特徴から瀬戸窯産である。457 は磁器の端反碗、458 も同じく端反碗だが瀬戸窯以外の生産地とみられる。459 は瀬戸窯の磁器端反碗で、連房式登窯第 9 小期とみられ瀬戸窯の磁器生産初期段階のものでめずらしい。460 も瀬戸窯の箱形湯呑であるが、焼成は良くない。登窯第 9 ~ 10 小期である。462 は肥前産の磁器で高台形状から広東碗に分類される。内外面ともに絵柄がないのが特徴である。463 は美濃窯の鉄釉碗で、桜ヶ根窯(岐阜県土岐市)などで生産されている型式である。464 は江戸時代後期の丸碗、465 は同前期の灰釉流し掛けの碗、466 は白釉で絵柄を描く技法で、瀬戸窯産ではなさそうな技法である。梅花文碗とよばれる煎茶茶碗の口縁部である。468 は美濃窯の御深井釉の碗で美濃窯の編年 3C ~ 4A 期にあたる。

469 は 18 世紀の復興織部と呼ばれる緑釉の皿で、江戸時代後期(19 世紀)まで製作される型式である。470 は磁器だが瀬戸窯では類例を見出しにくい不明品。471 は外面に陰刻で花文が施された香炉とみられる破片で、江戸時代中期の美濃窯産。472 は江戸時代後期の土瓶注口部で産地は不明。473 は江戸時代後期の望料碗の蓋で花と笠の絵柄が鉄絵で描かれる。

**御小納戸茶碗** 474 は御小納戸茶碗である。名城公園遺跡では池跡 00202SG で 1 点、00220SK で 2 点の計 3 点が出土している。そのうち 474 はほぼ完形品である。器形は丸みのある茶碗で白色の釉薬が掛かる陶器である。外部側面に 1 か所、底部内面に 1 か所、それぞれ鉄絵で「小」字が描かれている。00202SG で提示した 295 は底部内面に「小」字が大書されているが、本資料はそれに比べて小さく字形も整っていることから文字として認識しやすい。

先述のように御小納戸茶碗は藩主の近くで仕える役人の呼称であり、このことから御小納戸茶碗が出土する遺跡は尾張藩直轄の場所であったと考えることができる。御小納戸茶碗の出土例は江戸と京都にある。江戸は東京都新宿区に所在する尾張藩の江戸上屋敷(市谷邸)

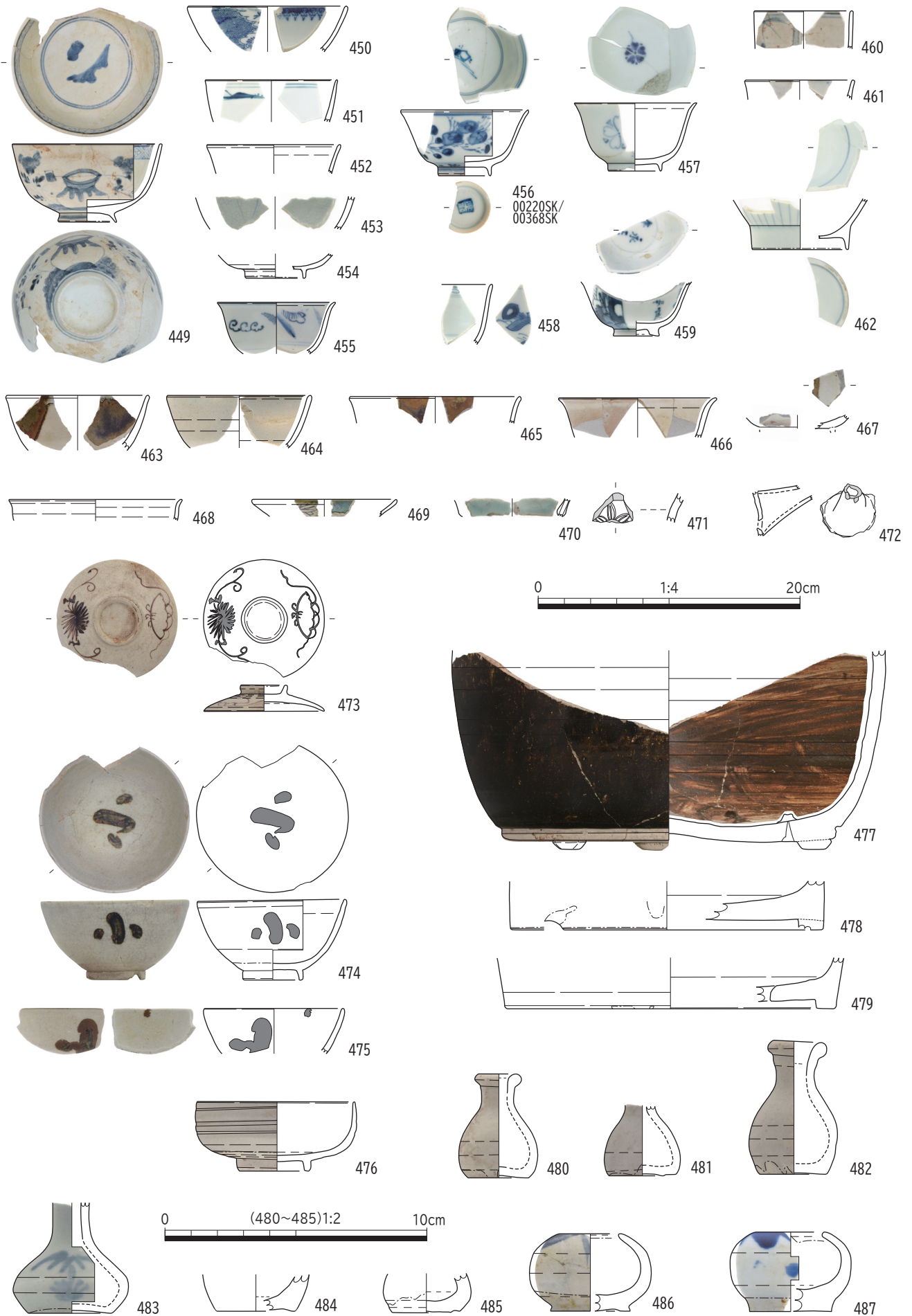


図 73 00220SK 出土遺物実測図 (1)

と下屋敷（戸山屋敷）で、前者は尾張藩上屋敷跡遺跡、後者は尾張徳川家下屋敷跡としてそれぞれ発掘調査がなされている。特に上屋敷跡からは 100 点以上が報告されており、藩邸内で集中的に保管・利用する空間があったようである。また「小」文字の描き方や器形の変化から 19 世紀前半代に型式変遷が想定され、御小納戸茶碗が柳茶碗とよばれる一群に後続する型式であることが示されている（内野正 2005「出土陶器碗からみた尾張藩市谷邸の画期 - 柳茶碗・御小納戸茶碗・灰釉平碗の分析から - 」『研究紀要』XXI 財団法人東京都生涯学習財団東京都埋蔵文化財センター）。それによれば 295 のような「小」を大書する型式（OKN I -1 型式）が古く、474 のような「小」を小書する型式（OKN I -3 型式）が新しく、19 世紀半ばとされる。

一方、京都は京都藩邸（吉田邸）で、元治元年（1864）に山城国愛宕郡吉田村から取得した土地に造られた下屋敷を端緒とし、明治 4 年（1871）に処分されるまで続した。当該地は京都大学構内遺跡（本部キャンパス）となっており、発掘調査で 2 点が出土している（京都大学総合博物館 2017『平成 28 年度特別展リーフレット 文化財発掘Ⅲ - 激動の幕末と京大キャンパス - 』）。こちら「小」が小書された型式であり、これも参照すれば 474 の年代は 19 世紀半ばとみることができよう。また 475 も「小」が滲んで大きくみえるが、器形は 474 とほぼ同じであることから同じ時期とみられる。

476 は尾張藩江戸上屋敷跡で多量に出土した灰釉の平碗である（内野 2005、前掲）。外面にロクロ成形時に凹線を生じさせている点が特徴的である。瀬戸窯で生産されたと考えられるが窯業地では例が少ない。底部内面に目跡があり重ね焼きで生産されたものであることがわかる。江戸上屋敷跡では役職名の墨書がみられることから、灰釉平碗も御小納戸茶碗と同じ用途であったと考えられている（内野 2005、前掲）。476 も丸みのある器形が上屋敷跡における分類の KH-3 型式に相当することから、18 世紀後葉～ 19 世紀前半の時期が想定される。

**植木鉢・小瓶類** 名城公園遺跡における江戸時代の遺物で特徴的なものとして植木鉢も挙げられる（図 73-478・479）。庭園で使用されたものと考えられるが、庭園自体は本来植栽を直植え可能であるから、植木鉢が有用な場所として御茶屋のような建物やその周辺が考えられる。一方で植栽の位置を変えることができる点で松林の

一角などに設置された可能性もある。いずれも灰釉の掛かる陶器で底径が約 30cm であるから比較的大きな植栽だったとも想定されよう。477 は瀬戸窯の火鉢で内面はハケ塗り痕跡が明瞭である。丸形の脚がつく底部外面には穿孔もなされている。480～485 はミニチュアの小平で、灰釉の掛かる 480～482 は同型式のものが調査範囲南部で比較的集中している。ただし用途は不明。483 は染付けで江戸時代後期か。486 は鉢形のミニチュアであるが瀬戸窯にはみられない型式である。487 は鉢形のミニチュアであるが口縁部近くに酸化コバルト（呉須）で染付けされたもので明治時代まで下る可能性がある。

**「風禅」刻印** 488 は瀬戸窯の磁器丸碗で、瀬戸地域で磁器生産が開始された 19 世紀初頭の型式である。瀬戸窯の磁器生産のルーツである肥前における絵柄のない碗の系譜にある。489 は端反碗、490 は、茶碗の外面にスタンプで花文などを列状に配する三島手と呼ばれる象嵌技法で飾り立てられており趣味性の高いものである。しかしながら焼成不良でさらに二次的な焼成もあって、器面の釉が荒れた状態となっている。底部外面に瓢箪形に「風禅」とある刻印が施されている。「風禅」は「正木風禅」とも称する香西文京という 18 世紀後半の尾張地域で活動し茶器を製作した陶工の可能性もある。焼成不良が存在することはすなわち出土地付近で窯業生産がなされていたことを示している。また、当該資料の胎土は祖母懐（瀬戸市）のものに近く、したがってそこから粘土を入手して生産に供していたと考えられ、「風禅」の関与する作陶活動の一端が明らかになった点で重要である。491 は濃緑色の釉が掛かる端反の茶碗の底部内面に刻印で施文されている。特殊な型式で生産地などは不明である。492 はやや大振りな茶碗で全体に厚めで小さな歪みがいくつかみられ高麗茶碗を模したようでもある。これも焼成失敗品で内面に同じ器の破片 2 点が釉着している。これも特殊な型式であるが、出土地付近の窯で焼成されたものの可能性が高い。

**「御庭焼」徳利** 493～495 は青灰色の釉が掛かった徳利である。大きく張った胴部から急に窄まった頸部はロクロ目の残しつつ細く伸び、口縁部は外反するのみである。一方底部は全面回転ヘラ削りが施され平らに整えられているが、その中心に楕円形に「祖母懐」の刻印がある。そして刻印の右上脇に「御庭焼」、左下脇に「中嶋氏」の焼成前刻書がなされている。刻書の筆致は丁寧

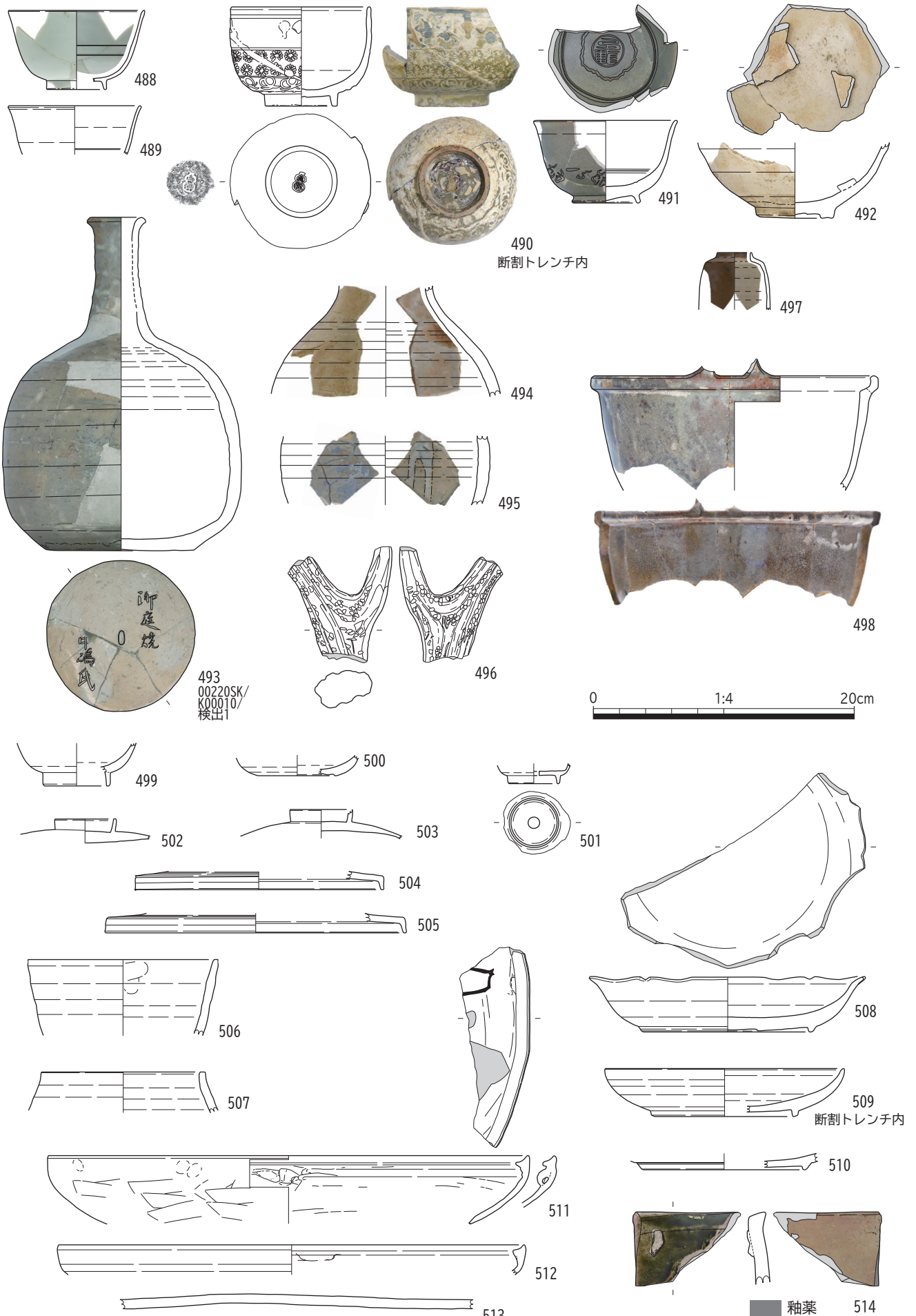


図74 00220SK 出土遺物実測図(2)

でさらに刻線内に釉が入り込んでいることから、底面全体に一旦施釉した後に文字以外の部分を拭き取る工程があったとみられる。また 493 の内面は全面に釉が回っているため施釉が丁寧であるといえる。興味深いのはあらかじめ「御庭焼」と刻書している点で、本来の御庭焼は、(尾張)藩主が家来や地元の関係者など目下に向けて配付する目的で製作させるものであり、対象者が受領してはじめて「御」が付く性格のものである。したがって焼成前から「御」が刻まれる点はその点で不審であり、当該資料が製作された経緯や目的を類推するうえで重要な文字である。一方の「中嶋氏」は人名というより瀬戸の赤津村の一部である中嶋という地域の小地名や小集団の呼称であった可能性がある。以上の類推に基けば、当該資料は「御庭焼」に従事する瀬戸地域の陶工たちが内輪で使う目的で製作したものだったとも考えられる。

**鹿角形陶製品** ニホンジカの角を模した施釉陶製品である。他の陶磁器類と混在して破片 1 点のみが出土した。よって 00220SK に廃棄された時点で原形は失われていたことになる。ニホンジカの角は、成長するにつれて幹角から枝角が 2～3 か所で分岐する。当該資料はその分岐部分に相当する。幹角の基幹に近い方の長軸は約 3.6cm で、そこからの高さは約 8.9cm である。この大きさは実物(成獣)のシカ角とほぼ同じであり、原形の全長は約 50～60cm に達したと想定される。またその表面は、溝状の凹みなどが指ナデや工具を使った刺突できわめて忠実に再現されており、出土した当初も取り上げるまでは実物のシカ角と思われていたくらいである。胎土は白色で全体に透明(長石)釉が掛かっている。

このように当該資料は、その規模からみてほぼ実物大を模していたことは疑いようがなく、角が取り付く本体部分が製作されたかどうかに関心が持たれる。ちなみにシカ角を模した陶製玩具は、名古屋城三の丸遺跡の発掘調査において土坑 SK239 から出土している(名古屋市教育委員会 2017)『名古屋城三の丸遺跡第 12 次発掘調査報告書(中央新幹線「名城非常口」地点)』。ここでは陶製の他の部位も出土していることからシカ全体を再現したものと考えられるが、角の全長は約 10cm 程度であってあくまでミニチュア品として製作されたと考えられる。ニホンジカは、奇岩や石灯籠・花木などとともに庭園を構成する要素として重視されていたとされ、19 世紀前半期名古屋城二之丸御庭を描いた『御城御庭絵図』

には庭の各所にシカの点在する景観が描かれている。また、庭園に置かれたと思われるシカを模した陶製品の存在も知られている(大阪市立美術館・根津美術館・徳川美術館ほか編 1973『近世の瀬戸』徳川美術館)。当該資料がこういった陶製品の一部であったかどうかは今後の検討課題である。

**素焼きの器** 498 は口縁部上端に把手(耳)がつく鍋で内外面に鉄釉とみられる釉が掛かっているが、鼠志野釉のように下に薄く白色釉も見えるやや変わった釉調である。499～510 は無釉の素地でいわゆる素焼きの状態である。いずれもクリーム色で上質な胎土で成形されており、磁器の素地である可能性が高い。499 は丸碗、501 は植木鉢、502～505 は蓋で、502 は平面形が角形の可能性がある。508 は口径が約 20cm の中皿の大きさがある輪花皿で、瀬戸窯であれば江戸時代後期の絵瀬戸で粘土を素材に陶器として作られるものである。底部内面に黒色の呉須の痕跡がわずかにある。509 も中皿サイズの皿である。このように多様な器種が素焼き状態であることは、これも出土地付近の窯における製作途中段階での廃棄がなされていることを示しており、窯自体の存在は不明であるが、磁器生産も行っていた可能性が考えられる。

**大型の鉢など** 511・512 は土師器の焙烙、513 も板状の土師質製品の一部。514 は緑釉のかかった施釉瓦(平瓦)である。515 は連房式登窯第 10 小期の播鉢、516 は同第 10～11 小期、517 は同第 8 小期、518 は同第 9 小期の播鉢底部である。519～527 は瀬戸窯の半胴甕(小型の場合は孫太)で、瀬戸地域の赤津村から搬入されたものとみられる。529・530 はきわめて大型の浅い鉢である。胎土に砂礫が多く混じっており、ヘラ削りでそれが荒々しくみえるが内面に長石釉が掛かっている。529 は内面に墨書か鉄釉か不明だが記号状のものが描かれている。さらに口縁部は残存部全体で摩滅がみられることから、長い期間にわたって使用され続けてきた可能性が考えられる。一方 530 は消耗は少なく平面形は隅丸方形を指向していたようである。これらは施釉されていることから水溜めの機能は有しているため調理の場で使うことも可能である。しかし共伴する陶磁器類の状況や窯道具の存在から、窯業生産の場でたとえば水簸した粘土を寝かしておくための容器などに使用されたことも考えられる。

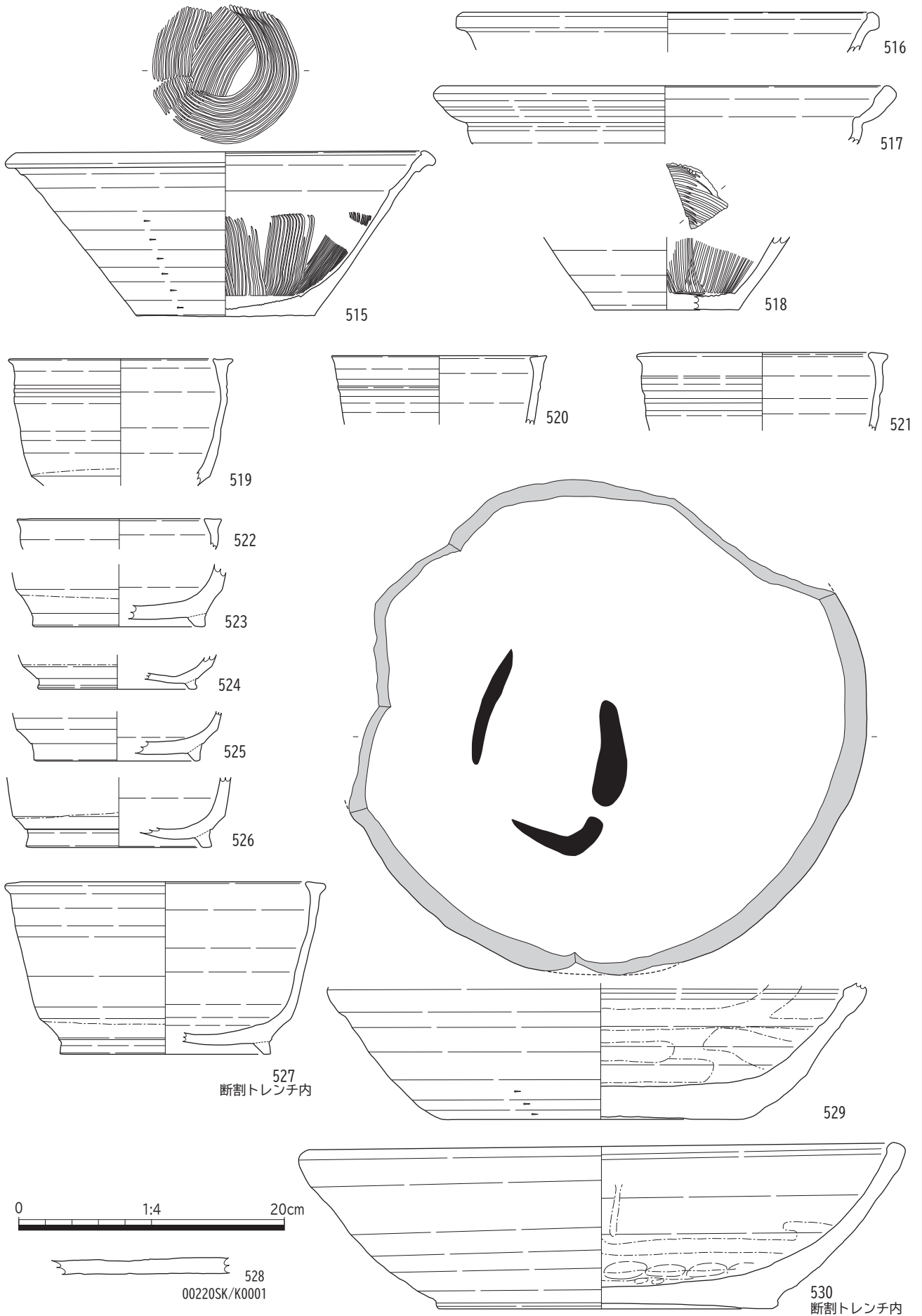


図 75 00220SK 出土遺物実測図 (3)

531・532 は江戸時代後期の卸皿である。533 は磁器の鉢で、白色の地に外面上半と内面口縁部に鉄釉が掛かっている。器壁が厚く残存部の重量も約 1.6kg と重い。底部内面には一部に凹みがあって青緑色の付着物がある。付着物を蛍光 X 線分析装置で分析すると、コバルト・マンガン・鉄を含む一方で、鉛とヒ素は全く含まれていないことがわかった。このことから絵付けの顔料を磨り潰す乳鉢であったと考えられる。534 は皿形の陶器片であるが、全体に濃緑色の釉が厚く掛かっておりしかも破断面にも掛かっている。このことから陶片を用いて焼成具合を確認するための色見と考えられる。536 は平面形が角形となる陶製品で中央と想定される箇所には円形の穿孔がある。537 はトチンの一種で隅丸方形の厚板状である。538～542 は輪ドチ。

**刻印のある棚板と匣鉢** 543～547 は棚板で、窯の内部で製品の窯詰めの際に使用する窯道具である。形状は方形であるが、543 では一辺約 20cm のほぼ正方形で厚さ約 2cm と小振りであるのに対して 545 のように長辺が約 25cm で厚さも 3.2cm を測るものなどサイズにはばらつきがある。素材は粘土板でヘラで整えただけの簡素な成形である。使用により自然釉が掛かっているものもあり、その範囲から 544 のように製品を置いた痕跡を知ることができる。この棚板群では 543 の側面に○に「仁」の刻印、545 の側面に○に「太」の刻印がある。

548～573 は匣鉢である。遺構内から出土したものとしては名城公園遺跡では最多の量である。棚板同様に個別のサイズにばらつきが目立つ。棚板にはあった製品の痕跡がないため、具体的にどのようなものを焼成していたのか推測する根拠に乏しい。ただし 557～559 のように側面に円形の透かし（窓）のあるものは、焼成時に火の周りかたに変化をつけることができるため、趣味性の高い仕上がりを企図していたものと考えられる。また 548 では側面 3 か所に○に「ニ」、549 は側面 2 か所に○に「仁」、550 は側面 3 か所に「太」とみられる刻印がそれぞれ確認される。「ニ」が「仁」の略記とすれば、棚板の刻印と合わせて「仁」と「太」の 2 種類があったことになる。これらは御庭焼の操業に携わった瀬戸窯の加藤仁兵衛家と加藤太兵衛家を示していると考えられる。窯道具に刻印を施す例はあまりないようであるが、複数の家が参集するかたちをとる場所ではこのような道具の管理も必要だったことをうかがわせる。

瓦類は陶磁器類に比べて量的に少ないが、軒瓦や道具瓦以外の瓦が出土している。574・575 は丸瓦で短めの玉縁は他でもみられる。576～585 は平瓦もしくは熨斗瓦で破片の状況からすると熨斗瓦が多くを占めているものと思われる。ただし側縁が凹面に対して鋭角に取り付いていることから、本来は平瓦向けの成形台で製作されたものを半裁して熨斗瓦として利用している可能性もある。なかでも 576 は平面形状は他とさほど変わらないが厚みが 1.5 倍以上あり大棟など特定の場所に使用することが企図されていたかもしれない。586～589 は端面に刻印があるものだが平瓦（熨斗瓦）か棧瓦かはにわかには判じがたい。586・587 は○に「大」、588 はまるに「一」か、589 は○のみの刻印である。590 は棧瓦。

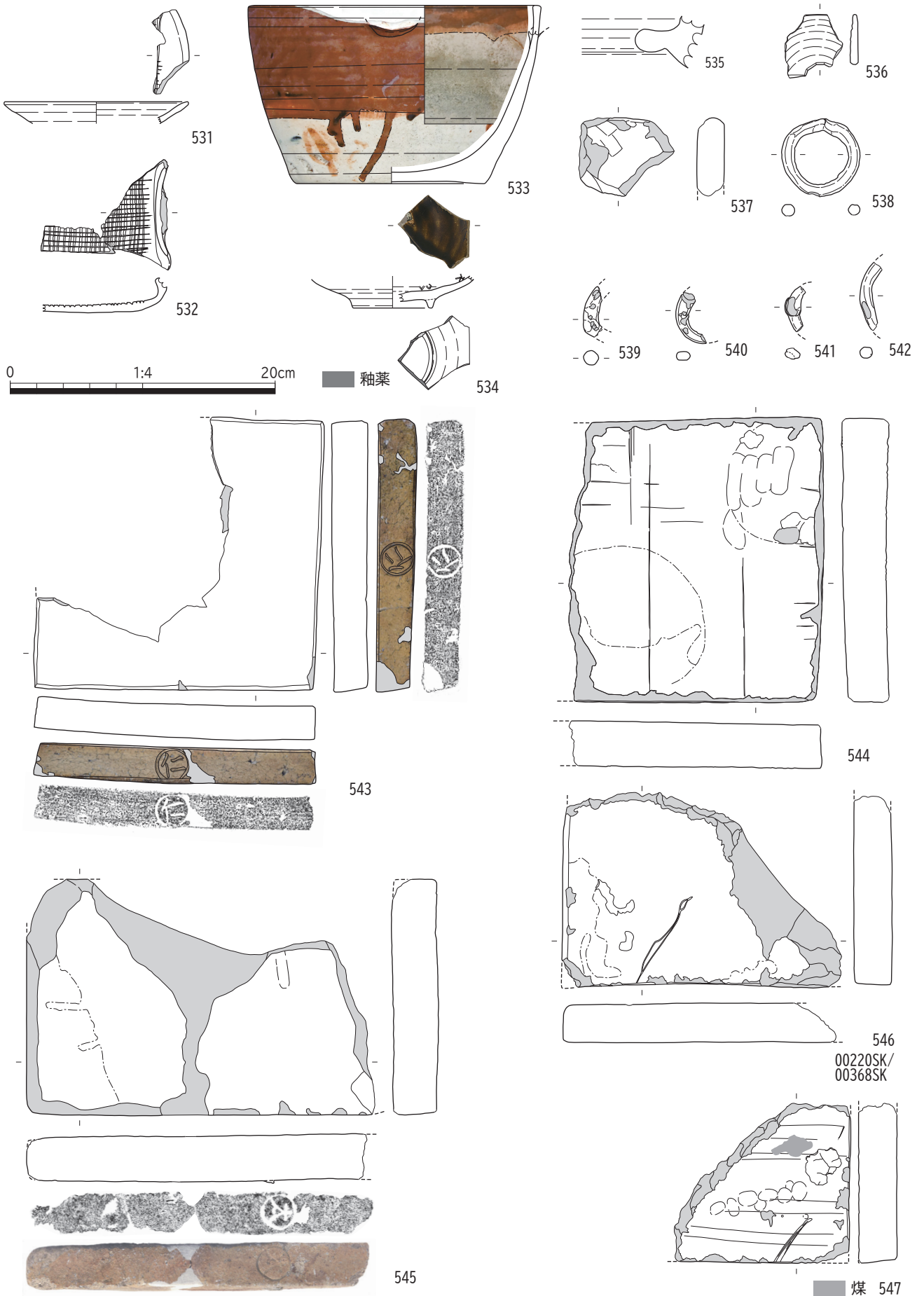


図 76 00220SK 出土遺物実測図 (4)

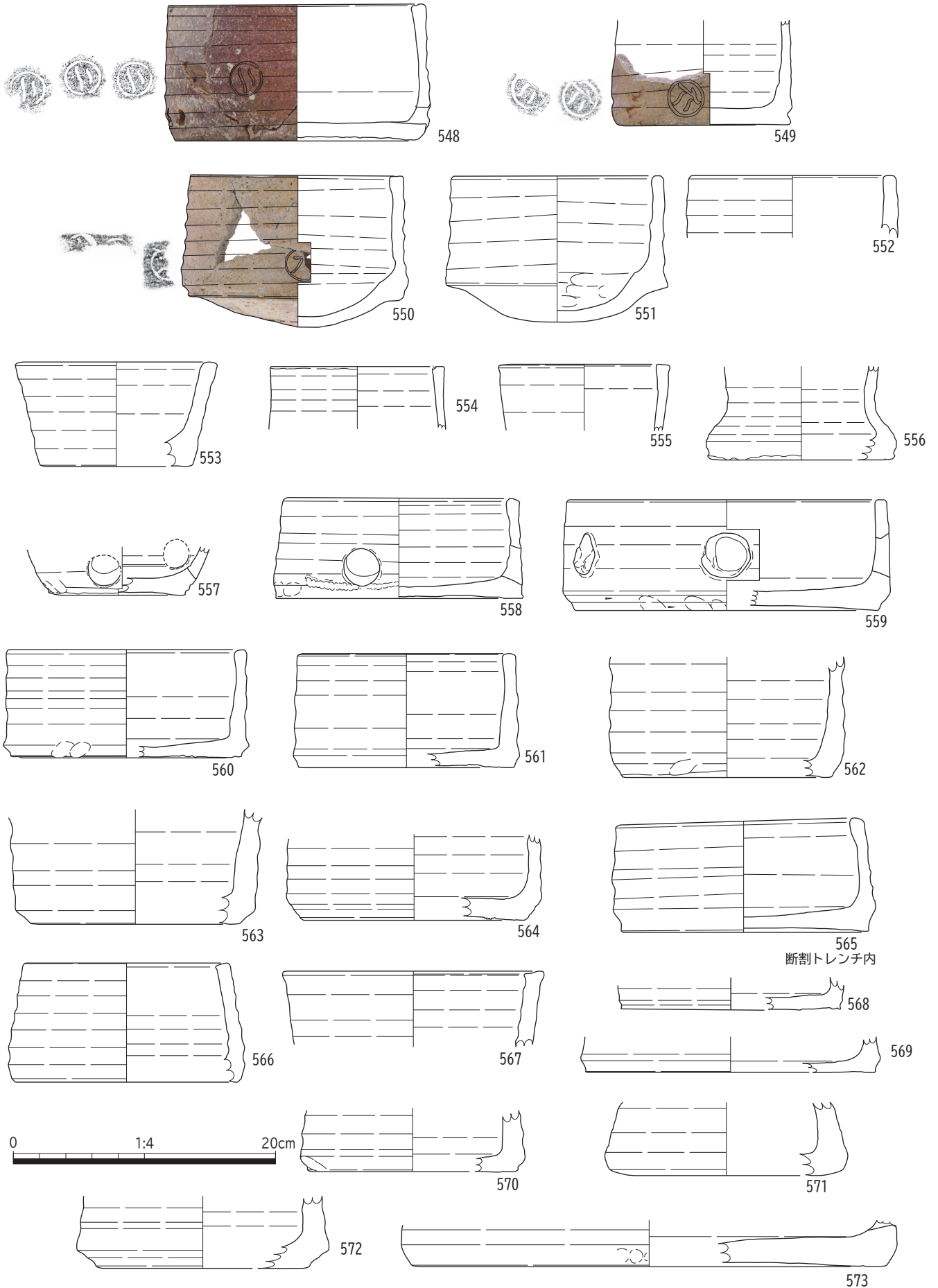


図 77 00220SK 出土遺物実測図 (5)

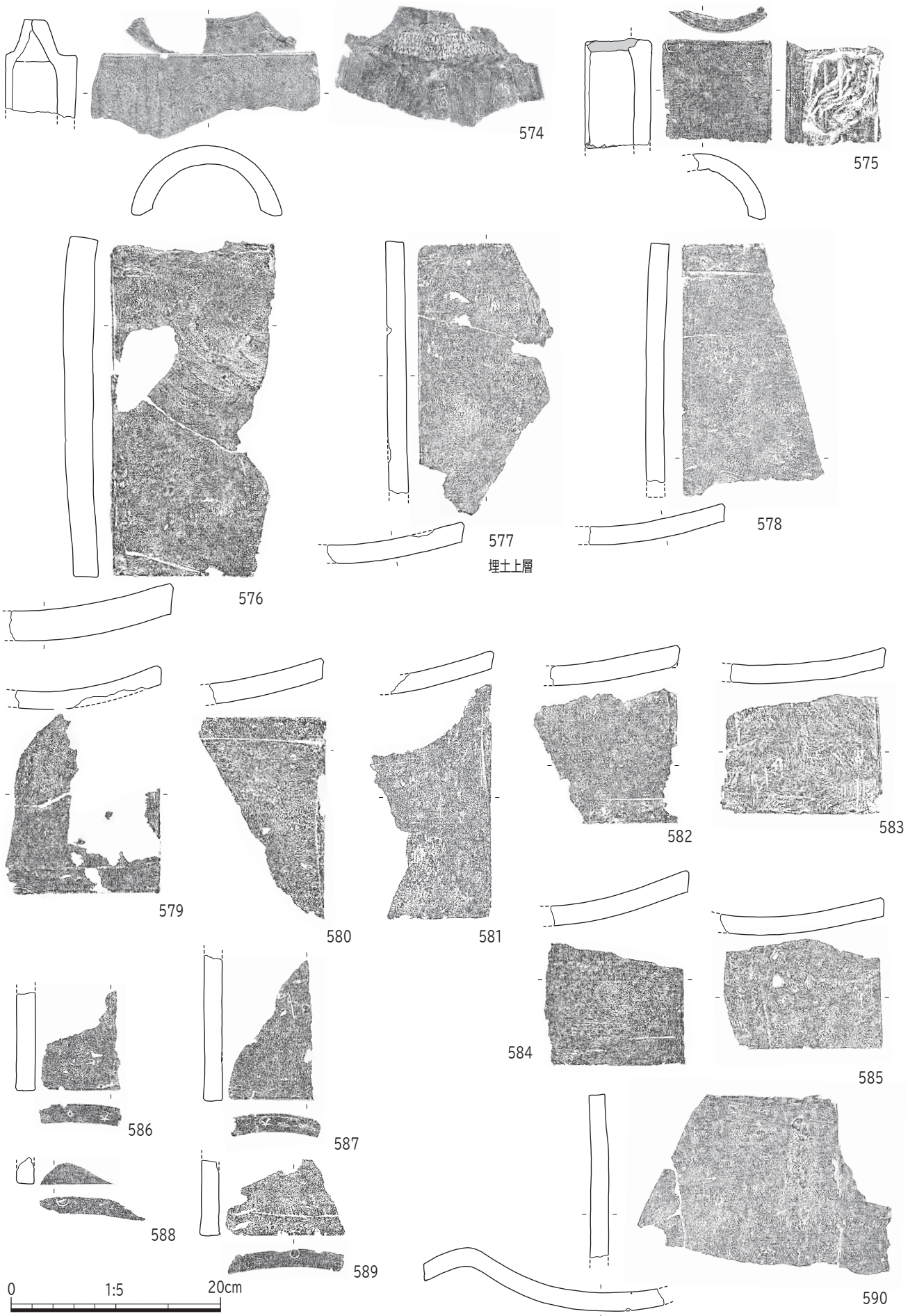
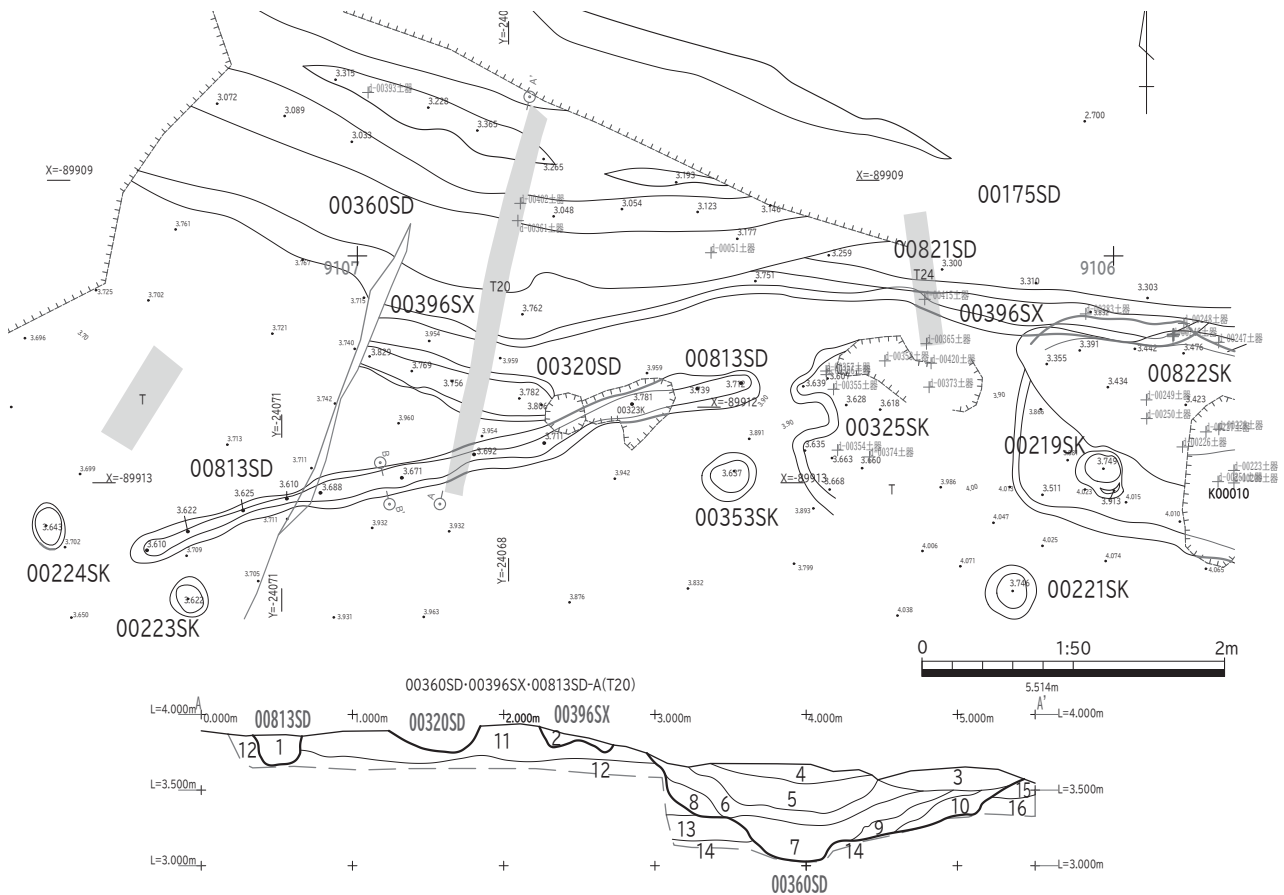


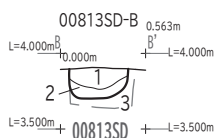
図 78 00220SK 出土遺物実測図 (6)

**00320SD** 調査範囲南端（21Ba区）、江戸時代後期～末期の廃棄土坑00220SKの西側約6mに位置し、江戸時代の溝00360SDや00822SDに沿う小溝である。長さ約2.6m、幅約0.6m、深さ約0.2mである。出土遺物は陶磁器類を中心に1点の平瓦（601）が混じる。592は青色釉の碗で生産窯などは不明、593は東濃型山茶碗、594は瀬戸・美濃窯産の皿で大窯期、595は瀬戸窯の茶入で

「小肩衝き」呼ばれる肩の張った形状であることから江戸時代前期以前か。596は筒形香炉の口縁部で外面は全面、内面は上部のみ流し掛けで施釉されている。597・598はいわゆる素焼き状態の陶器ですなわち未成品である。597は碗形をした底部付近、598は瓶類の口縁部で口縁部の返しなどが繊細に成形されている。599は窯道具の一種で棒ツク、600は器種不明の瓦製品でいくつ



1. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック多く含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑多い。00813SD)
2. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(細礫多く含む。中礫少量含む。00396SX)
3. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(灰黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。細礫少量含む。鉄斑含む径1~2mmマンガング粒多い。整地層)
4. 10YR6/2 灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(ラミナ状堆積。にぶい黄褐色中粒砂小ブロック。暗褐色シルト小ブロック少量含む。細礫・中礫少量含む。鉄斑あり。00360SD)
5. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂混じりシルト層(層の下部ににぶい黄褐色中粒砂大ブロック少量含む。鉄斑あり。00360SD)
6. 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(ラミナ状堆積。褐灰色シルト小ブロック含む。鉄斑多い。00360SD)
7. 10YR3~4/2 灰黄褐色中粒砂混じりシルト層(ラミナ状堆積。褐灰色粗粒砂ブロック含む。にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。鉄斑多い。00360SD)
8. 1.25Y5/3にぶい黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑多い。00360SD)
9. 10YR3~4/2 灰黄褐色中粒砂混じり極細粒砂層(にぶい黄褐色粗粒砂ブロック含む。鉄斑多い。00360SD)
10. 10YR4/2 灰黄褐色中粒砂混じり細粒砂層(細礫少量含む。鉄斑多い。ラミナあり。00360SD)
11. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑多い)
12. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じり極細粒砂層(褐灰色極細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑少ない)
13. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルトブロック含む。鉄斑多い)
14. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルトブロック含む。径1~2mmマンガング粒含む。鉄斑少量含む)
15. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂層(褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒多く含む)
16. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト小ブロック含む。径1~2mmマンガング粒多く含む)



1. 10YR4~5/2 灰黄褐色シルト混じり細粒砂層(褐灰色シルト大ブロック少量含む。径1~2mmのマンガング粒少量含む。鉄斑多い)
2. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混じりシルト層(褐灰色シルト大ブロック少量含む。鉄斑あり)
3. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂混じりシルト層(にぶい黄褐色細粒砂小ブロック少量含む。径1~2mmのマンガング粒含む。鉄斑あり)

図79 00320SD・00325SK・00360SD 遺構図

かの面取がなされている。上記した遺構と同じく江戸時代後期～末期であろう。

**00325SK** 調査範囲南端 (21Ba 区)、00320SD と 00220SK の中間に位置する。不定形な平面形で東半部は現代の攪乱によって不明瞭になっている。出土遺物は窯道具である匣鉢 (604 ~ 608) を主体として丸瓦 (609) 飾り瓦の一部 (610)、平瓦 (611・612) と東濃型山茶碗第 5 型式 (602)、瀬戸・美濃窯産孫太 (603) がある。遺物の構成としては 00220SK と似ており、同様の目的で

掘られた江戸時代後期～末期の廃棄土坑と考えられる。

**00360SD** 調査範囲南端 (21Ba 区)、00220SK の西側約 5m に位置する東西方向に延びる溝である。00320SD と並行するが規模は 00360SD の方が圧倒的に大きい。しかしながらその西側は攪乱、東側も 00175SD の上層から掘り込まれた攪乱によって失われている。確認された長さは約 7.7m で、検出面での幅約 2.6m、深さ約 0.7m である。断面は逆台形である。当該溝の西方への続きは攪乱の西方では検出されなかった。このことと、00175SD

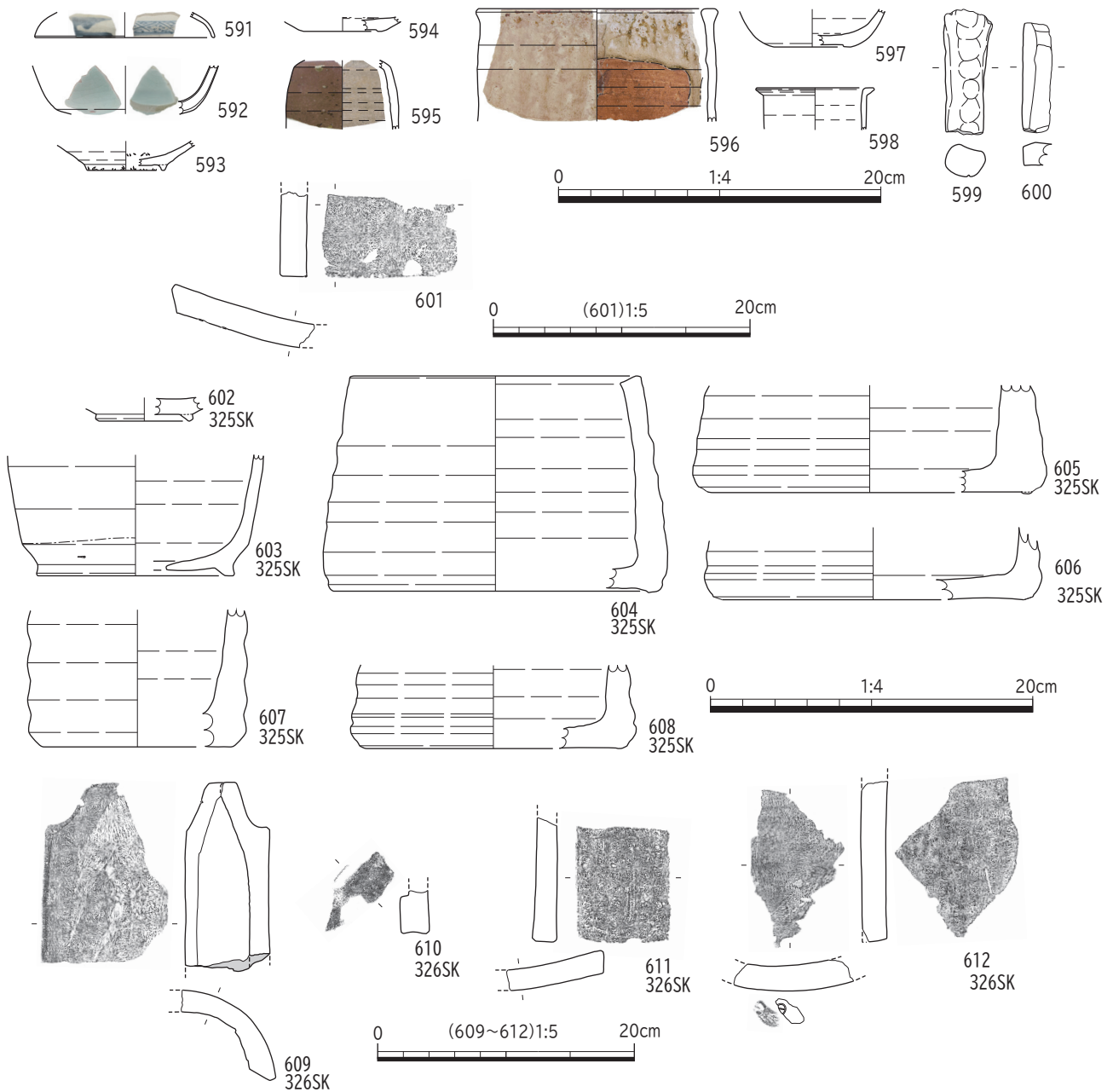


図 80 00320SD・00325SK・00326SK 出土遺物実測図

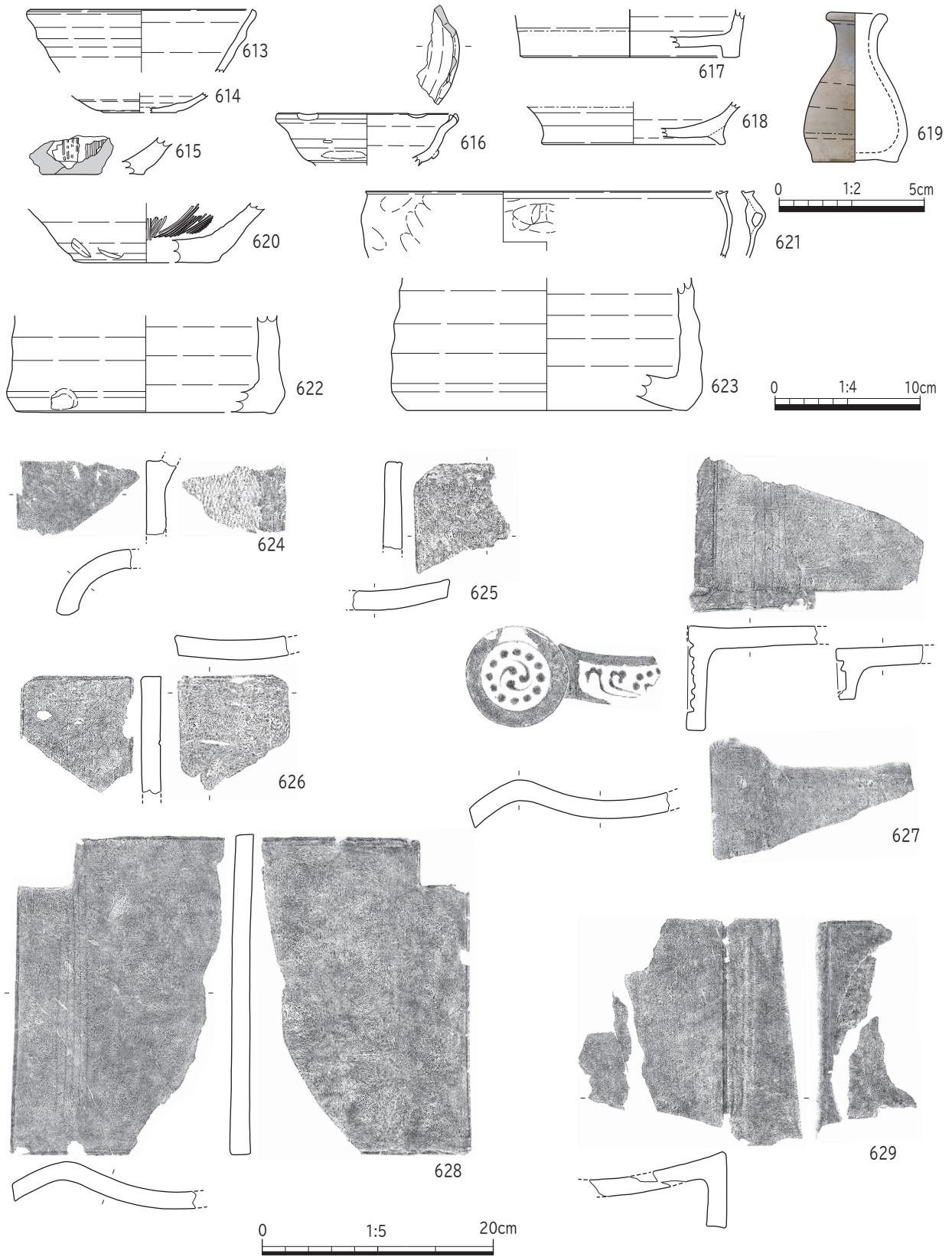


図 81 00360SD 出土遺物実測図

の土層断面で確認された最終的に機能した小溝部分の幅が 00360SD のそれに近いことを考え合わせると、00360SD は一旦 00175SD との重複関係から外れたもののその西方で再び合流して土層断面の地点では 00175SD の一部として認識された可能性が高い。すると、00360SD は大溝である 00175SD とは全く別物で『下御深井図面』に描かれた東西方向の小溝に相当するとも考えられる。この点は出土遺物の時期とも符合する。

出土遺物は江戸時代の陶磁器・窯道具・瓦類に大別される。613 は尾張型山茶碗の第 8 型式の可能性がある。614 は東濃型山茶碗第 11 型式である。615 は瀬戸・美濃窯産播鉢。616 は美濃窯産の皿で口縁端部が内傾していることから 17 世紀前半代と考えられる。617 は瀬

戸窯産の植木鉢、618 は江戸時代後期の半胴甕、619 はミニチュアの花瓶である。底部には回転糸切痕がある。620 は瀬戸・美濃窯産陶器で古瀬戸後期様式末期の播鉢、621 土師器内耳鍋で 17 世紀代である。622・623 は窯道具の匣鉢である。以上は小瓶を除いていずれも破片化している。瓦類は丸瓦の小片 (624)、平瓦 (625・6326)、軒棧瓦 (637)、棧瓦 (628)、端瓦 (629) があり、後三者が大きめの破片であることから遺構の埋没時期に関わるものである。

**00368SK** 調査範囲南端 (21Ba 区) に位置する。遺構の北半部は江戸時代後期～末期の廃棄土坑 00220SK と重複し、それより古い時期の土坑である (図 71)。00200SK と似た平面形と推測され、東西 (長軸) 約 8.1m、

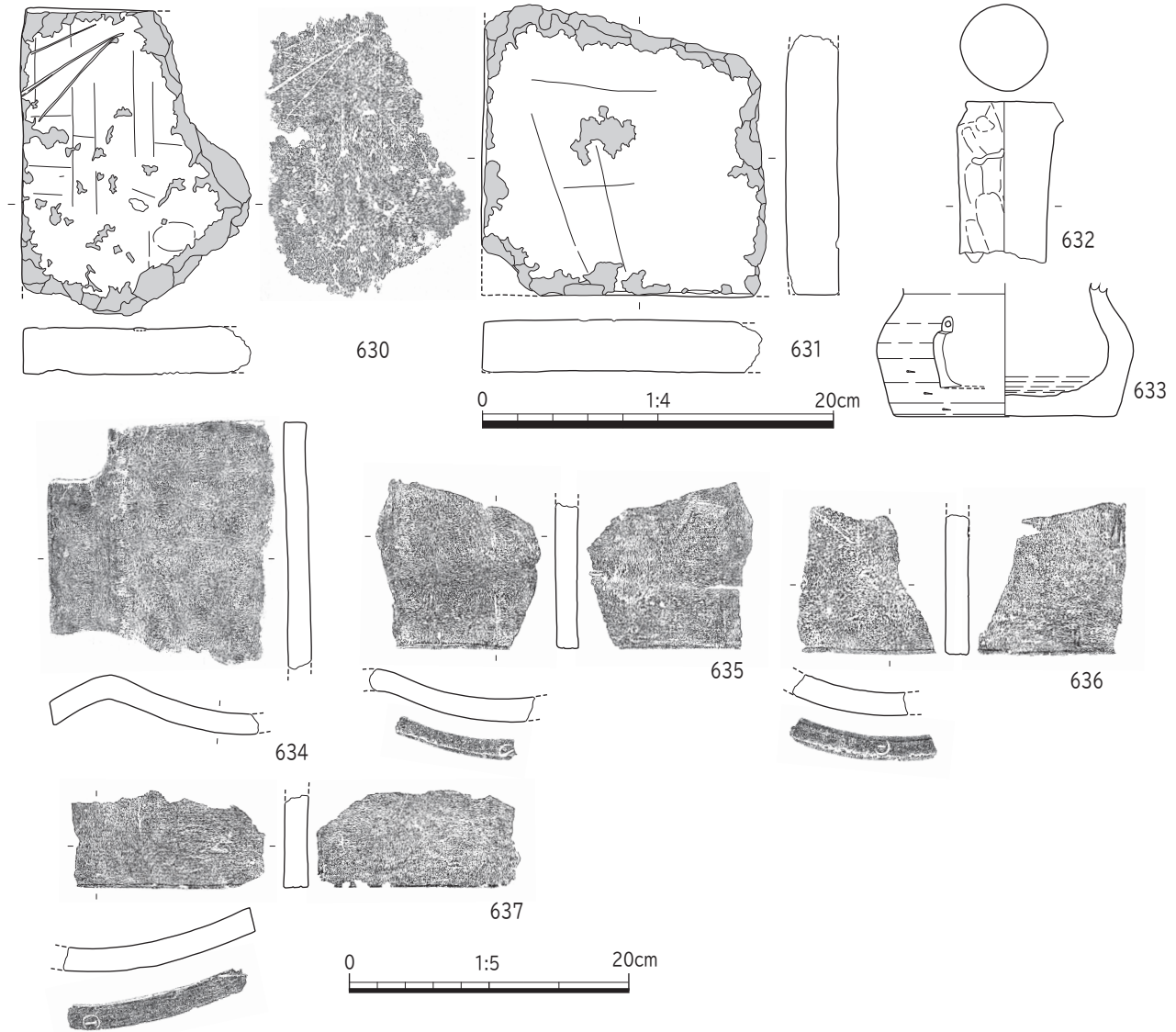


図 82 00368SK 出土遺物実測図

残存部の南北長（短軸）約 1.4m で、深さ約 0.2m を測る。出土遺物は窯道具と瓦類で、630・631 は窯道具の一種で窯の中で使用する棚板である。全形は不明であるが一辺約 15cm 以上の正方形と思われる。両者で若干厚さが異なる（630 は 2.7cm、631 は 3.0cm）。632 も窯道具で円筒形のいわゆる棒ツクである。これらは陶製で自然釉が掛かるなど窯内での使用があったことを示している。633 は上部に窄まっていく特殊な形状で、土師質・無釉であることから低火度による焼成（素焼き）と考えられる。側面に透かしとなる切り込みが施されている。匣鉢の一種の可能性もある。634・635 は棧瓦で 636・637 も曲がり具合から棧瓦と考えられる。635～637 は端面に○に「一」の刻印がある。このように、出土遺物の構成は窯業生産と建築資材が中心となっていることから、00220SK に近い。このことから 00368SK を掘り返してより深い土坑としたのが 00220SK と考えられる。

**00419SK** 調査範囲中央からやや東部（21Bb 区）の検 1 面で確認された土坑である。当該遺構の調査記録によれば、直径約 0.9m の円形で深さ約 0.2m の浅い皿状をしている。ところが当該遺構の調査後に下位の古墳時代前期の遺構検出面へ向けて重機によって掘り下げを行ったところ、標高約 3.1m の地点で江戸時代の土師器皿 2 点（図 83-215・216）が折り重なるようにして出土した。この状況では遺構検出面と遺物の時期が合わないことから、土師器皿は 00419SK 埋土内に存在したものと考えられる。これによれば、00419SK 自体は約 1m 以上掘り込まれていたことになる。

**00567SK** 調査範囲南東部（21Bb 区）に位置する。北練兵場期の高射砲陣地外周の土塁に関わる溝（00532K）の西側脇にある土坑である。長軸約 1.1m、短軸約 1.0m、深さ約 0.4m の円形皿状を呈する。出土遺物は明治時代前期のものが一定量含まれる。638 は瀬戸窯の型紙染付の碗で、外面の絵柄が繊細である。639 も同様の皿でともに生産期は明治 15～25 年である。640～641 も瀬戸窯の染付磁器、643 も型紙染付で明治時代前半期である。644 は近世の丸瓦、645 は熨斗瓦である。図示した以外にも平瓦の小片が 25 点出土していることから、周辺に散布していたものを片付けたとも考えられる。その時期は染付磁器の年代から明治時代前期のことと推測され、遺跡の場所が北練兵場に取り込まれる前の耕作地として利用されていた期

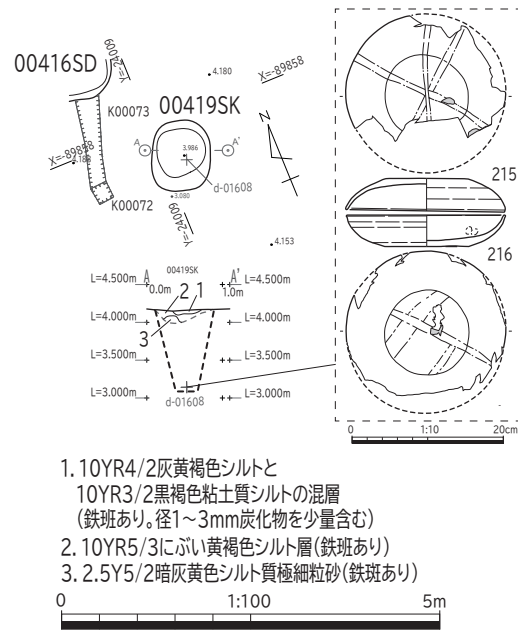


図 83 00419SK 遺構図

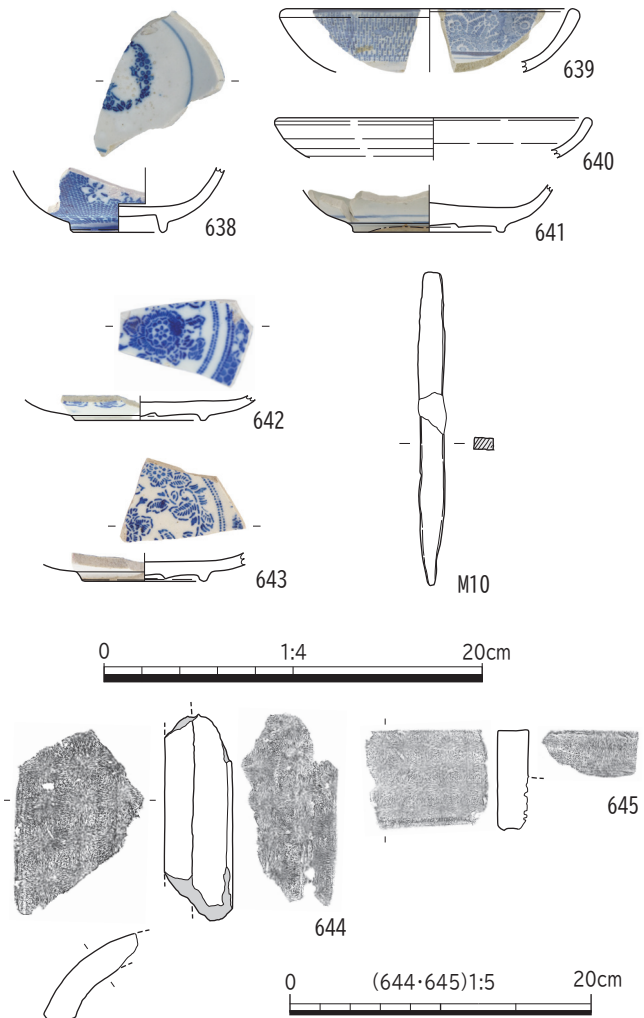


図 84 00567SK 出土遺物実測図

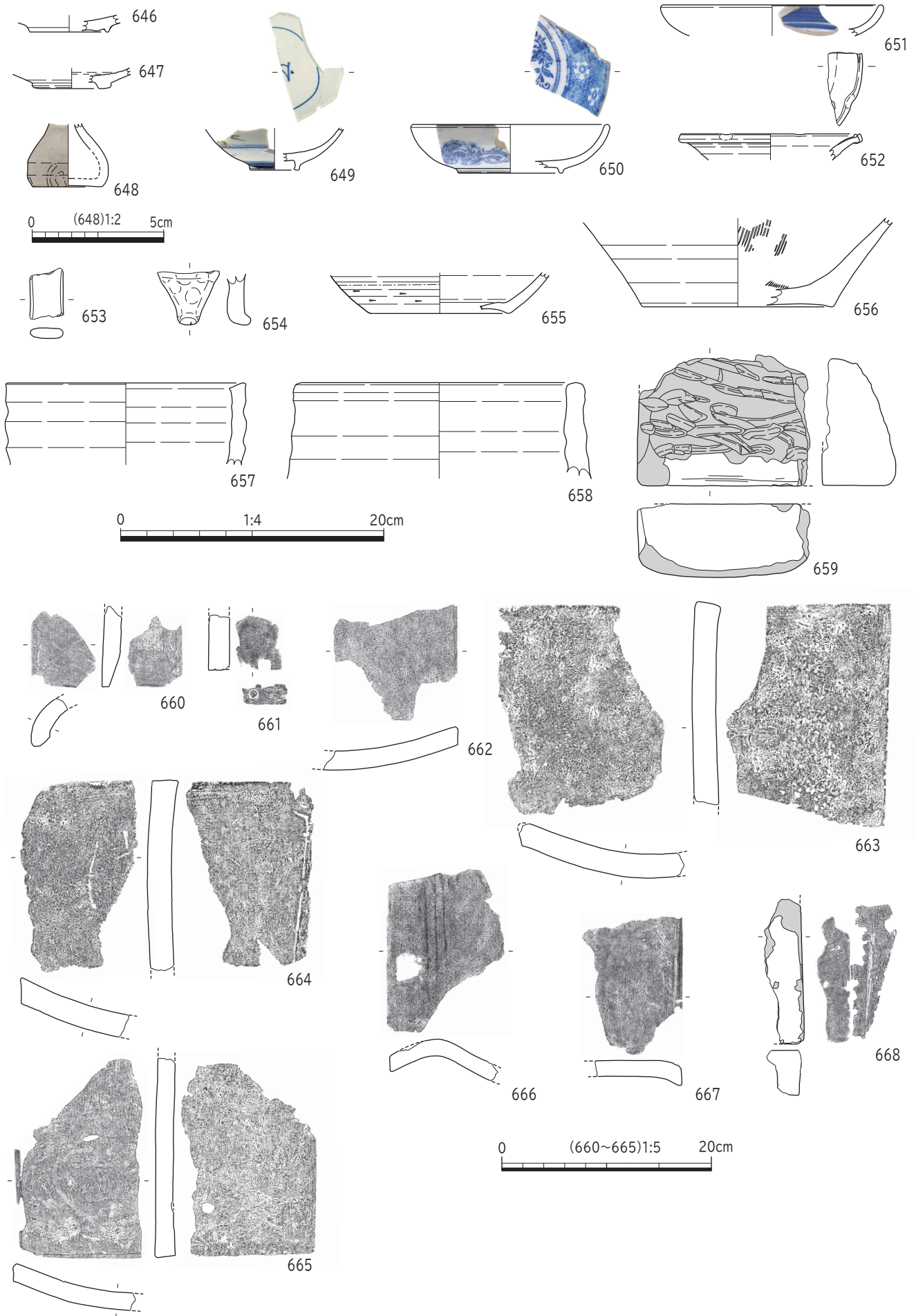


図 85 00583SD 出土遺物実測図

間の可能性がある。

**00583SD** 調査範囲南東隅 (21Bb 区) に位置する。遺構が検出されたのは旧河道右岸の砂が覆う遺構面で、ほとんどが近世以降の浅い掘り込みであった。その中で掘方の明瞭な L 字形に延びる溝である。調査区南壁からさらに東南東方向へ延びる一方、調査区内で約 10m 西へ延びたところで直角に近い鈍角で北へ屈曲し、さらに約 25m 延びている。したがって検出された長さは約 35m である。その断面はほぼ長方形ですなわち側壁の立ち上がりが直角である。遺構検出面での幅約 3.9m、深さ約 0.5m である。先述のように当該遺構の基盤層は砂層であるから崩落しやすいのであるが、あまりその痕跡がなく、底面の側壁立ち上がり部に直径約 0.1m の杭を打ち込んだとみられる小穴が約 0.4m おきに規則的に配置されている。このことから板で側壁を抑えるために杭を打ち込んだものと考えられる。ちなみに板や杭の残存はなかった。こういった特徴の遺構は遺跡内では他になく、きわめて特殊な存在である。

出土遺物は遺構の大きさに比べて散漫で、埋没時に混入したものが大半とみられる。646 は大窯期の瀬戸・美濃窯産陶器の丸皿または端反皿、647 は瀬戸窯産の糸引碗で江戸時代後期、649 は絵付けの碗、650 は瀬戸窯産の磁器で型紙と銅版転写が共存する絵付け皿で明治時代後期へ移行する頃のものであろう。652 は 17 世紀の美濃窯産輪花皿である。653 は灰釉か長石釉の大鉢の把手部分で、連房式登窯期の織部鉢にみられる。654 は 17 世紀代の瀬戸窯、香炉の三足である。655 は江戸時代後期の土瓶底部、656 は江戸時代の瀬戸窯産播鉢。657・658 は窯道具の匣鉢だが破片化している。659 は厚手の瓦製品で飾り瓦の一部か、カキメを入れた何らかの接合部であっただろう。660 は丸瓦小片、661 は平瓦の端部で○の刻印あり、662～665 は平瓦、666 はは棧瓦、667 は熨斗瓦、668 は 659 に似た瓦製品である。以上のように 00583SD は塹壕のような北練兵場を思わせる遺構形状であるが、明治時代後期以

降のものは少なく時期や性格を見定めることが難しい。

**00710SD** 調査範囲南東隅 (21Bb 区)、調査区南壁近くに位置する。東端で近世・近代の溝 00583SD と重複しそれより古い。そこから西へ延びて西端は旧河道跡に重複する攪乱で失われている。確認された長さは約 9.9m、幅 1.8m、深さ 0.2m である。669 は肥前の染付碗。670 は調査範囲南部に集中して出土するミニチュアの小平瓶である。671 は径の小さい (9.5cm) の軒丸瓦である。残存長が約 18cm あるので大棟に使用する差込瓦ではなく、本瓦葺の軒先に使われたものであろう。左三巴文で珠文は 12 個が配される。672 は平瓦である。遺物に窯道具はみられないが、江戸時代後期のもを中心に出土していることから、下御深井御庭に関連する遺構と考えられる。

**00821SD・00822SK** 調査区南端付近 (21Ba 区) に位置する。江戸時代後期～末期の廃棄土坑 00220SK の西側にある溝 00360SD と重複しこれより古い時期であ

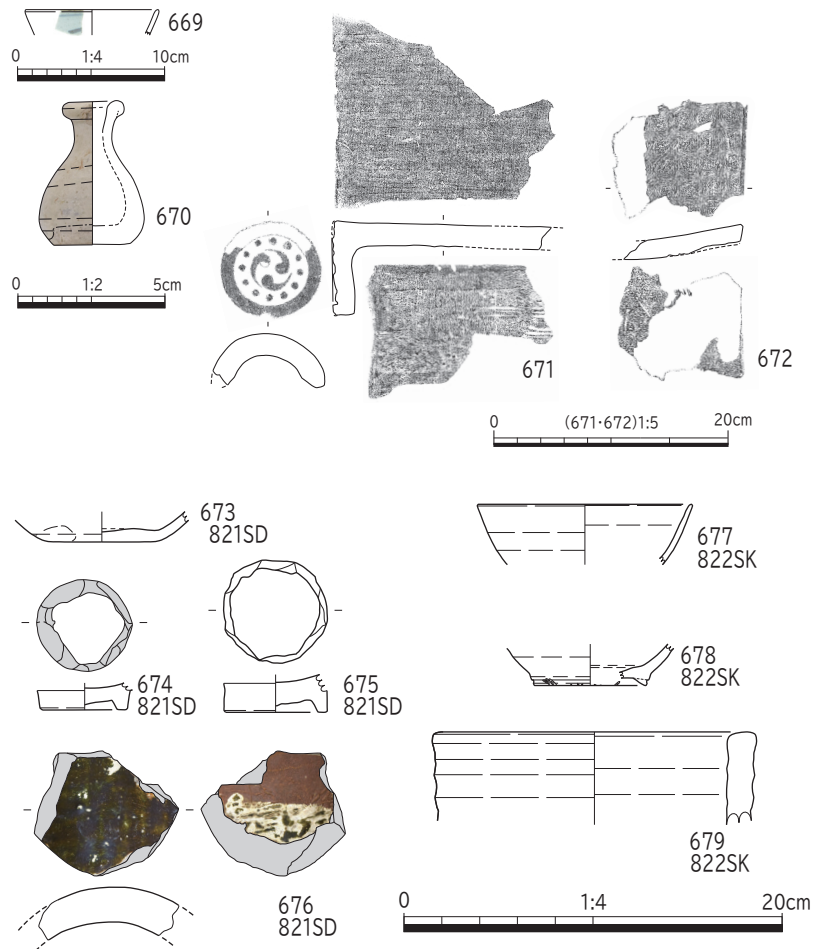
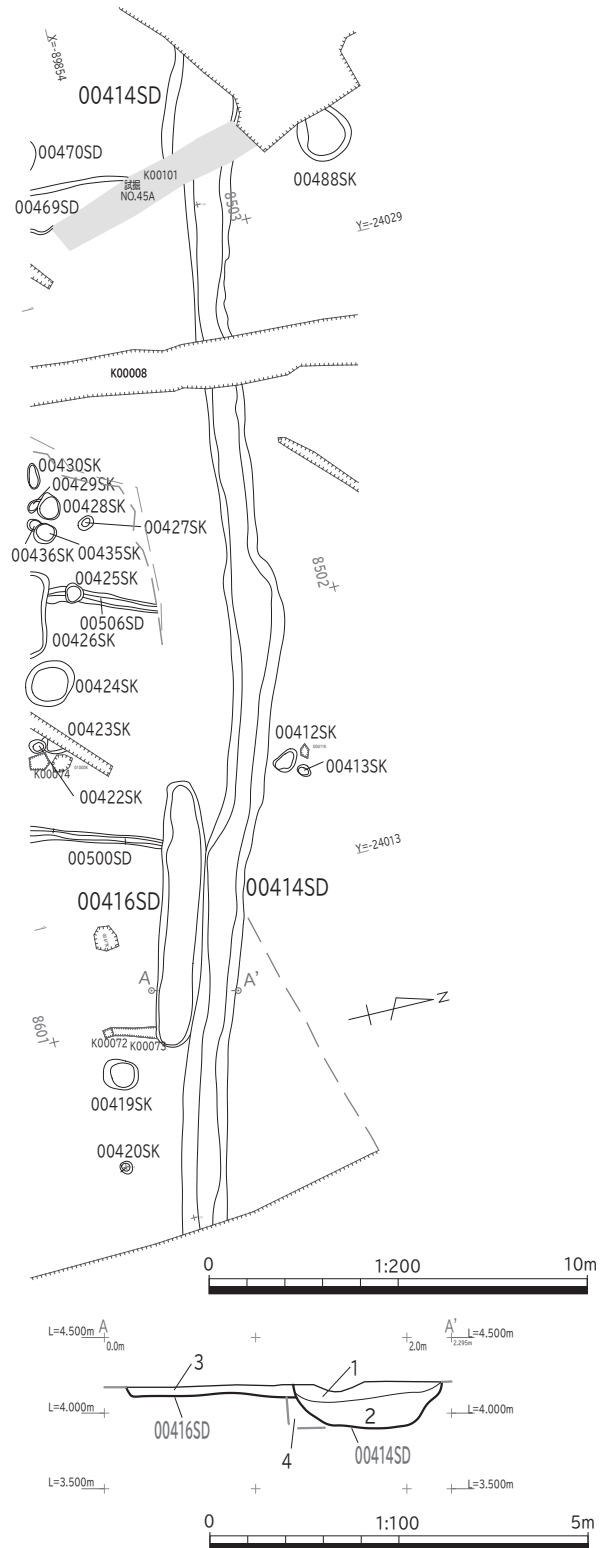


図 86 00710SD・00821SD・00822SK 出土遺物実測図

る。00360SD は 00821SD と方位がほぼ同じであることから、00821SD を掘り直したものであろう。出土遺物は江戸時代前～中期が主体である。673 は 17 世紀代の土師器皿である。本遺跡での土師器皿出土はきわめて少数である。674・675 はともに加工円盤に転用された瀬戸窯の陶器で、674 は流し掛け釉の天目茶碗で 17 世紀、675 は江戸時代前期の大碗である。676 は施釉瓦で凸面は濃緑色の釉、凹面は錆釉が掛かる。677 は比較的器壁が薄い碗で江戸時代中期か。678 は東濃型山茶碗、679 は匣鉢である。

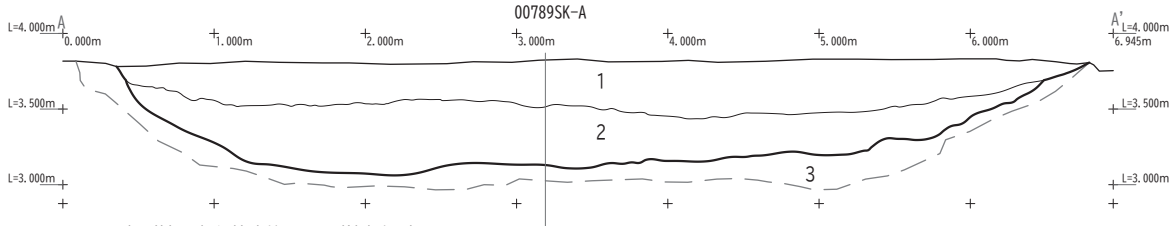
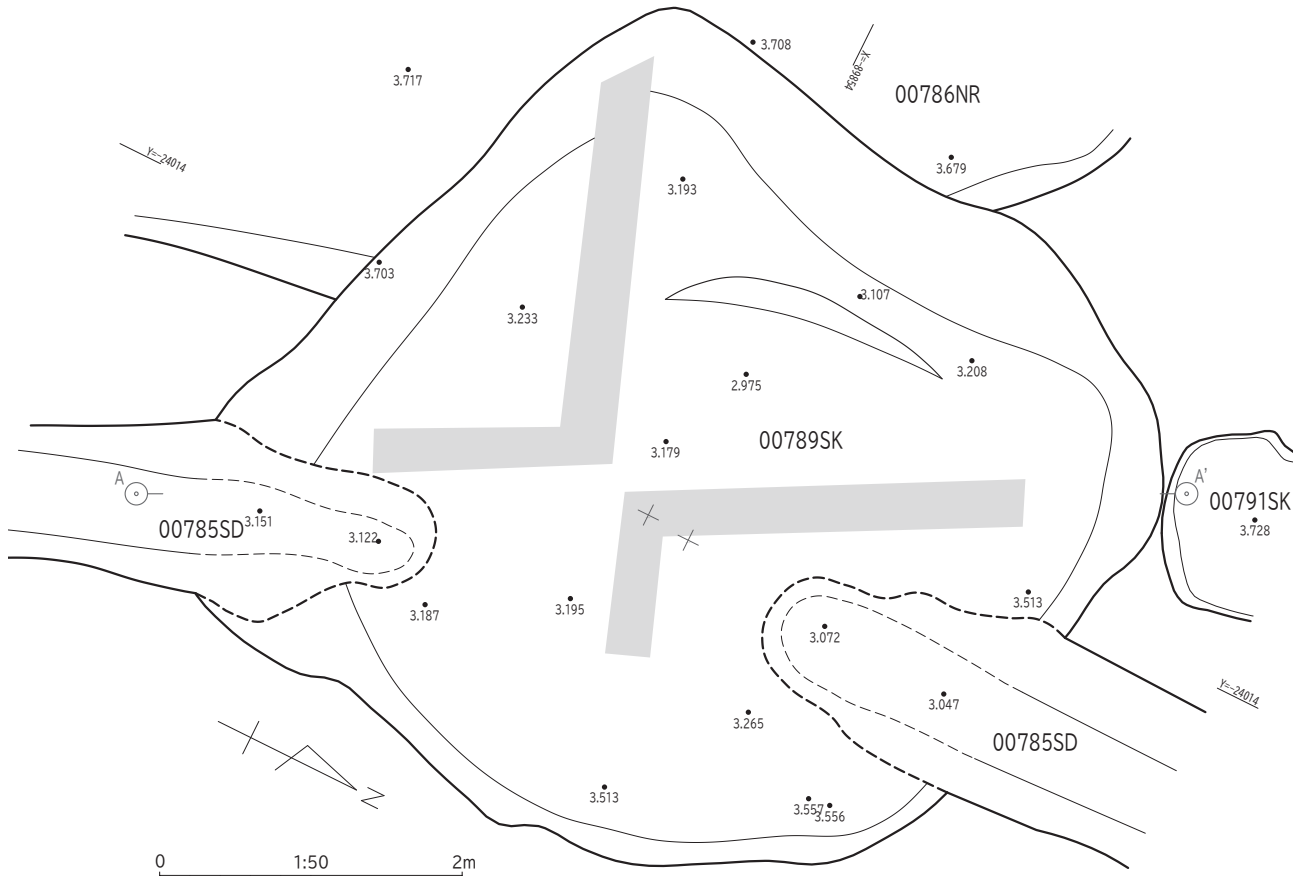
**00414SD・00416SD・00789SK・(旧 00390SD)** 調査範囲中央部 (21Ba 区・21Bb 区) に位置する東西方向に延びる溝である。若干蛇行しているが概ね西北西から東南東へ直線的に延びている。途中で両端はともに攪乱によって失われているので全形は不明である。確認された長さは約 30.9m、幅約 1.9m、深さ約 0.3m を測る。溝の形状や延びる方向から類推すると、その北側約 20m に位置する東西溝 00498SD・00499SD との関連が考えられる。ただし両者の方位角度はやや異なっており、00414SD の方がより南へと振れている。また 00414SD の南側には方格状の小溝群 (00500SD～00505SD など) が検出されているが、これらは 00414SD と同じ方位となっている。したがって 00414SD はこれら区画小溝群の基準線になっているとみるべきであろう。さらに後述するように 00414SD からは江戸時代中期以降の遺物はない。よって江戸時代後期の遺物が出土する 00498SD・00499SD と存続する時期が異なっていたことになる。以上から 00414SD・00416SD およびそれと同方位の小溝群は、下御深井御庭が整備される以前もしくは庭園構築後の江戸時代前～中期に機能していた耕作地区画溝群の可能性はある。

00414SD は、その半ばより東半部で並行する溝 00416SD と重複する。00416SD の幅は 00414SD と同じで長さは約 7.1m と短い。両者は上端をほぼ共有するような微妙な位置関係にあるが 00414SD の方が新しい時期である。またほぼ同じ位置で検 3 面の調査時に両遺構の下位で大型土坑 00789SK を確認した。00414SD と 00789SK の標高差は上端で 0.4m 近くあり、直接的な重複関係はない。よって 00789SK の埋没後さらに付近全体の堆積が進んでから 00414SD が掘削されたことになる。00789SK は、歪んだ隅丸方形の平面形をしており、長軸約 5.1m、深さ約 0.6m



1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色シルトの混層 (鉄斑あり。00414SD)
2. 10YR4/4 褐色粘土質シルト (鉄斑含む。00414SD)
3. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルトと 7.5YR5/8 明褐色シルトの混層 (鉄斑あり。炭化物を少量含む。00416SD)
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルトと 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトとの混層。(中粒砂含む。鉄斑あり。細礫少量含む)

図 87 00414SD・00416SD・遺構図



1. 2.5Y4/2暗灰黄褐色極細粒砂質シルト層(鉄斑多い)
2. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(層上部に鉄斑が多い層全体に径1mm程度の炭化物粒が混ざる。暗褐色粘土をブロック状に含む。層下部は噴砂により明黄褐色細砂が断裂する)
3. 10YR5/1褐灰色極細粒砂質シルト層(噴砂の影響で遺構北側と南側で明褐色細砂、灰白色細砂がラミナ状に堆積している)

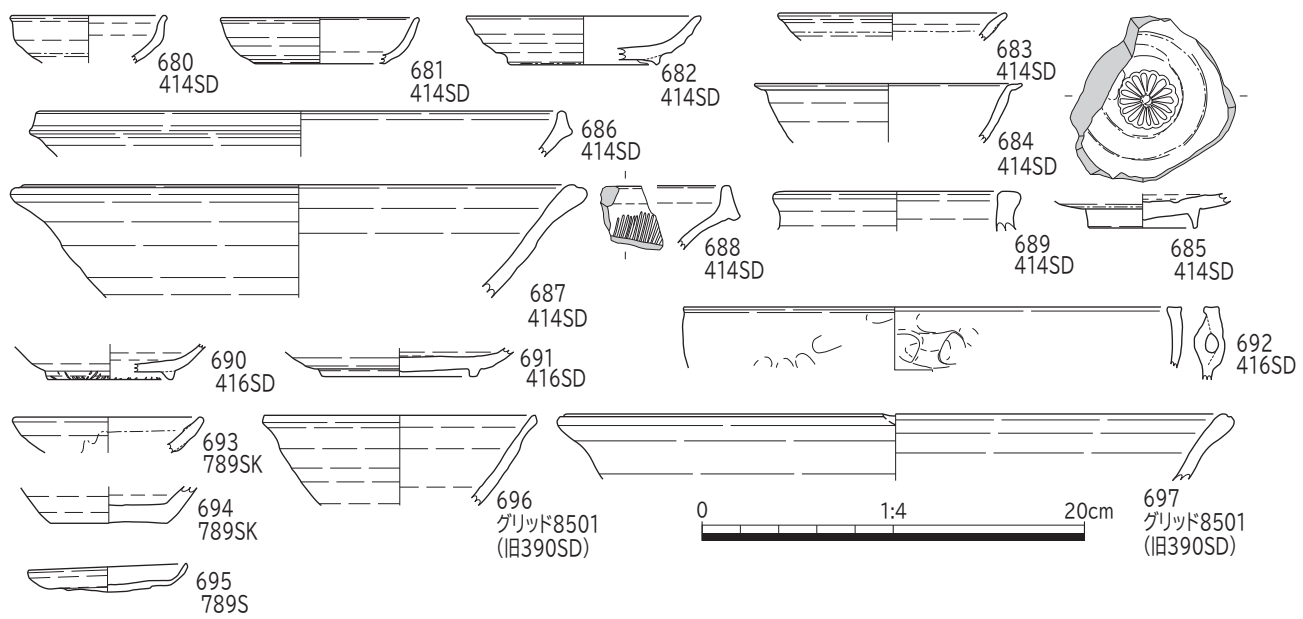


図 88 00789SK 遺構図・00414SD・00416SD・00789SK・(旧 00390SD) 出土遺物実測図

を測る。その断面形は緩い立ち上がりの皿状を呈しており、埋土は上下 2 層である。出土遺物は山茶碗のみであることから時期は中世で、井戸 00225SE と似た性格の水溜め施設だったと考えられる。

遺物は、中世から江戸時代前期の陶磁器類が主体である。680 は大窯期第 3 段階の小天目碗、681 は江戸時代前期の瀬戸窯小杯、683 は古瀬戸後期様式Ⅲ・Ⅳ段階の鉛釉小皿、685 は底部内面中央に菊文、686 は大窯期第 1 段階の播鉢である。00416SD からは東濃型山茶碗第 6 型式 (690)、瀬戸・美濃窯産陶器の皿 (691) があり 692 は土師器内耳鍋で時期は 17 世紀代である。789SK からは大窯期の丸皿 (693)、尾張型無台山茶碗 (694)、東濃型山茶碗の小皿 (695) が出土しほぼ中世に限定される。696 は 00414SD 付近で当初 00390SD として調査したが最終的に攪乱扱いで欠番となったものである。出土遺物には尾張型山茶碗があり第 6～7 型式である。

**00452SK・00491SK・00492SK** 調査範囲中央部 (21Ba 区・21Bb 区) に位置する。00414SD 南側の小溝群 (00500SD～00505SD など) と同じ区域に分布する土坑で、それらとの重複関係では新しい時期となる。00452SK は方形土坑で長軸約 1.1m で深さは数 cm ときわめて浅い。00491SK・00492SK は南北に長い方形の溝状をした土坑で、一体のものである可能性が高い。その全長は約 11.5m に達する。なお幅は約 2.1m、深さ約 0.2m を測る。

00452SK からは山茶碗類のみで 698 は東濃型山茶碗第 11 型式、699 は尾張型山茶碗第 5 型式である。00491SK からは、尾張型山茶碗第 7 型式 (700)、東濃型山茶碗 (701)、大窯期の丸碗 (702)、折縁中皿 (703) は古瀬戸の可能性があり、704 は江戸時代前期の小瓶か水滴で鉄釉の流し掛けのように見える。00492SK からは山茶碗ばかりである。705 は尾張型山茶碗第 6 型式以降、707 は東濃型山茶碗第 10 型式、710 は尾張型山茶碗第 5 型式

である。

**調査区中央部の土坑群** 調査範囲中央では 00900NR の埋土 (砂層) 上で直径 1m 前後の円形ないしは隅丸方形で深さ約 0.5m の土坑が多数確認されている。土坑群は重複し合っているものが大半で性格が端的にわかる遺物の出土はなかったが、砂地にもかかわらず掘り込みが明瞭に確認されたことやその平面規模から土坑墓の可能性も考えられる。

00403SK 出土の古瀬戸四耳壺口縁部 (711)、00404SK 出土の瀬戸・美濃窯産陶器丸碗は大窯期 (712)、00415SK 出土の尾張型山茶碗第 5～6 型式 (714)、00424SK 出土の尾張型山茶碗第 8～9 型式 (715)、00420SK 出土の古瀬戸後期様式 (716)、00470SK 出土の古瀬戸卸目皿 (717)、00490SK 出土の輸入陶磁器白磁皿 (718)、00501SD 出土の美濃窯産の皿は 17 世紀代で多治見市の笠原地区が生産窯とみられる (719)。00503SD 出土の大窯期第 1～3 段階の皿 (720)、00509SK 出土の尾張型山茶碗第 6 型式 (721)、尾張型山茶碗第 10 型式 (722)、山茶碗第 7 型式の小皿 (723)、東濃型山茶碗第 10 型式の小皿 (724)、古瀬戸様式の播鉢口縁部 (725)、小皿で入れ子のセットとなるもの (730)、瀬戸・美濃窯産陶器の鉛釉小皿 (731) がある。以上は瀬戸・美濃地域で一般的なものが多いが、732 のように丹波産の播鉢底部も存在する。当該資料は常滑窯産陶器のような褐色系で無釉が特徴であるが、それに比べて色調がやや暗い。時期は 17 世紀代とみられる。733 は瀬戸窯産の磁器皿で明治時代後半。734 は瀬戸窯産の皿であるが発色が良くない焼成不良とみられる。736 は茶入の上部である。口縁部は繊細だが肩の張った小肩衝とよばれる形状である。江戸時代前期か。00317SK からは 3 点の遺物を提示する。738 は天目茶碗で瀬戸窯の連房式登窯の時期で 17 世紀代、739 は窯道具の重ね焼き時に使用する輪ドチの

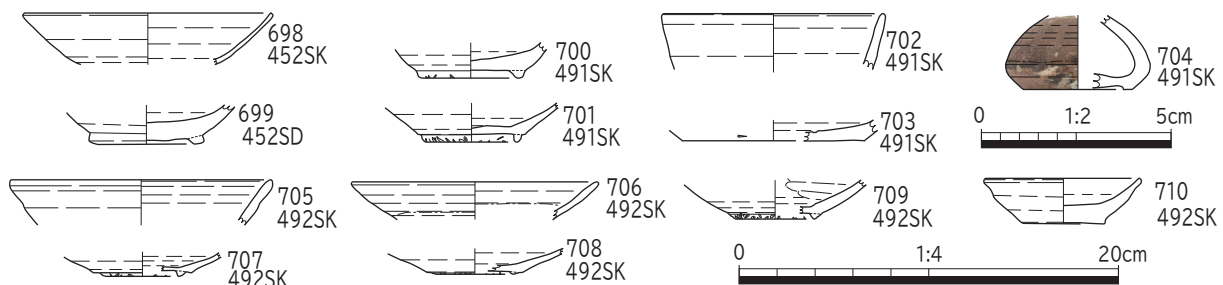
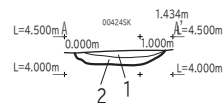
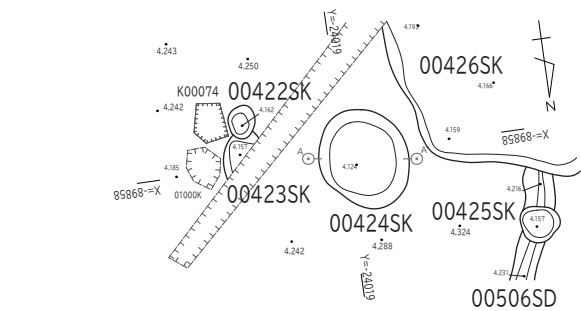


図 89 00452SK・00491SK・00492SK 出土遺物実測図

破片、740 は古瀬戸後期様式第IV期古段階の播鉢口縁部である。共伴遺物の時期からすると輪ドチの時期も江戸時代前半とみることできる。742 も古瀬戸後期様式第IV期段階の播鉢である。744 は尾張型山茶碗第5型式、745 は尾張型山茶碗第6～7型式。746 は瀬戸窯連房式登窯第3小期の長石釉小皿である。

以上のように調査範囲中央部に分布する土坑からは

17世紀代を下限とする時期の遺物が大半を占めており、付近が下御深井御庭に取り込まれる以前における土地利用状況の一端を示しているとも考えられる。



1. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質極細粒砂と10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混層(鉄斑あり)
2. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層(極細粒砂少量含む。鉄斑多い)

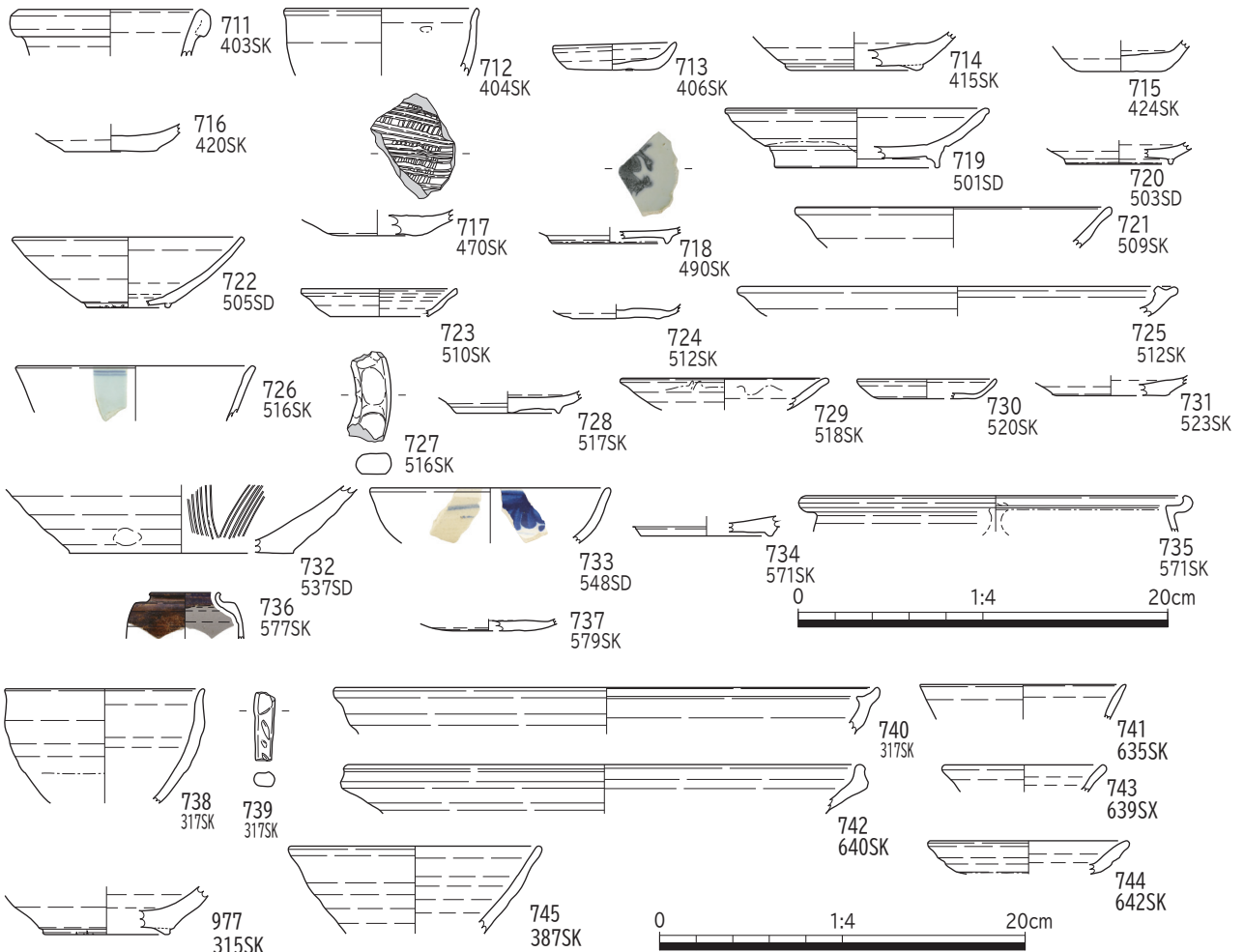
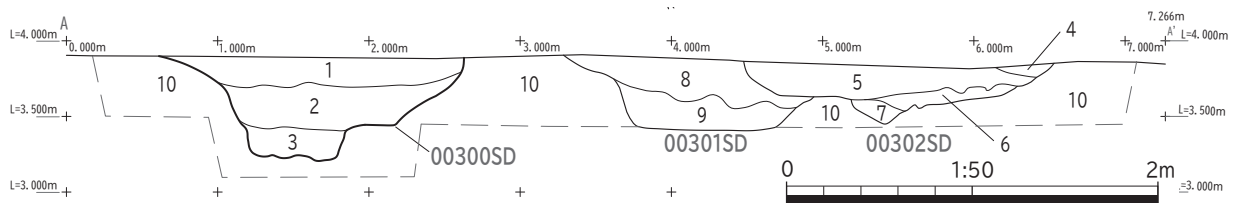
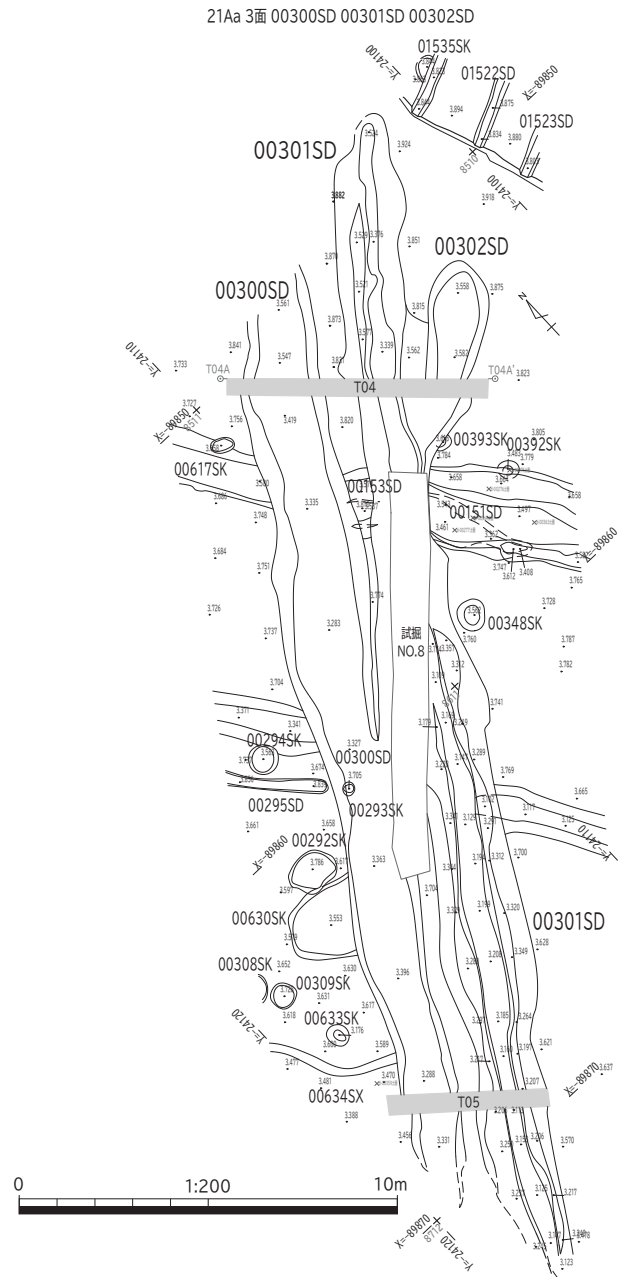


図 90 調査区中部の土坑群出土遺物実測図

00300SD～00302SD・00626SD～00628SD・00645SD・00654SD 調査区南西部（21Aa区）に位置する南西～北東方向に延びるいわゆる斜方位溝群である。検出が複数時にわたったため同一遺構（①00300SDと00626SD、②00302SDと00627SD）でそれぞれ別名称が付されている。遺構の重複関係から②から①へと同一規模で造り替えられたものと思われる。その南西端は攪乱で不明で北東端は00651SKの下で不明になっている。両者間で検出された全長は約47mで溝群全体の幅は約4mだが、個別には00300SDは幅2.6m、00302SDは幅1.6mである。そして南半部では00302SDに先行する00301SDの存在が断面で確認される（図91）。00300SDと00301SDは断面逆台形でいずれも明瞭な底面があり、検出面からの深さ0.4～0.5mである。その埋土はいずれもシルト小ブロックの混じる灰黄褐色系のシルトで、ラミナ堆積はみられないので水成かどうかは判断し難いものの、00300～00302SDで各々2～3回の掘り返しによって拡幅過程にあったことが確認でき、2回の造り替えを含めるとほぼ同一地点で7回以上の溝の掘削行があったことになる。

南半部の00300SD・00301SD出土遺物は、鎌倉時代から戦国期にかかる中世のものが多く見られる（図92）。00300SDからは746・748・749は尾張型山茶碗第6型式後半、747は同第9型式、750は同第7型式である。752・753は瀬戸・美濃窯産陶器の天目茶碗で連房式登窯第3小期で江戸時代前期、754も天目茶碗であるが胎土がやや異なり生産は瀬戸窯以外と推測される。また同資料は内面に被熱痕があり破断面を打ち欠いて加工円盤にしている。755は白色の素地に透明釉（長石釉）の掛かる17世紀代の小皿である。756は常滑窯の大甕口縁で14世紀前半である。一方00301SDからは757・759が



1. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(10YR3/2黒褐色シルトブロックを含み、10YR7/1灰白色細粒砂ブロックを含み、細礫多く含む。炭化物を含む。00300SD)
2. 10YR3/2黒褐色極細粒砂質シルト層(10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロックを含み、10YR7/1灰白色細粒砂小ブロックを含み。00300SD)
3. 10YR3/2黒褐色極細粒砂質シルト層(10YR4/1褐灰色シルトブロックを含み、10YR7/1灰白色細粒砂小ブロックを含む。00300SD)
4. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(00302SD)
5. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(10YR3/2黒褐色シルト大ブロックを含み、10YR7/1灰白色細粒砂ブロックを含み、細礫含む。00302SD)
6. 10YR3/2黒褐色極細粒砂質シルト層(10YR4/2灰黄褐色シルト小ブロックを多く含む、10YR7/1灰白色細粒砂大ブロックを含み、細礫含む。00302SD)
7. 10YR3/2黒褐色極細粒砂質シルト層(細礫多く含む。00302SD)
8. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(10YR7/1灰白色細粒砂小ブロックを多く含む、10YR3/2黒褐色シルト小ブロックを少量含む、細礫含む。00301SD)
9. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(10YR7/1灰白色細粒砂大ブロックを非常に多く含む、10YR3/2黒褐色シルト小ブロックを含み、細礫含む。00301SD)
10. 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂質シルト層(鉄分沈着。地山)

図91 00300SD・00301SD・00302SD 遺構図

尾張型山茶碗第5型式、758が尾張型山茶碗第6型式、760が東濃型山茶碗、761が瀬戸・美濃窯産陶器の播鉢底部である。762～764が瀬戸・美濃窯産陶器の重皿で762は底部外面に墨痕がある。また763・764は底部中央に穿孔がある。これらは灯明皿であったと思われる。765は大窯期の丸碗である。766は瀬戸・美濃窯産陶器の17世紀代天目茶碗で754と同様に加工円盤にされている。767は小杯で口縁部は全て細かく打ち欠かれて底部中央に直径約1cmの穿孔がなされている。口縁部全体に油煙が付着していることからこれも灯明に用いられたものと考えられる。768は瀬戸窯の鉢で口縁部内面にかえしが付く。登窯第11小期で19世紀半ばの瀬戸窯製品である。

次に北半部00626～00628・045SD出土遺物を提示する。769は登窯第1～2小期の長石釉丸皿である。770～773は山茶碗で第6～7型式である。774は鉄釉徳利の可能性があり登窯初期の袋物生産である。778～781は瀬戸・美濃窯産陶器播鉢口縁部で779は大窯期第3段階、780は同前半段階、781は大窯期第1～2段階と推測される。784は江戸時代前期（登窯期）でも比較的初期の丸碗で長石釉がかかる。底部内面には焼成時についたピンの跡がある。785は大窯期の播鉢底部。790は近

世の緑釉陶器、791は江戸時代初期の小碗で底部は削り出し高台。792は東濃型山茶碗第5型式、794は同第7型式、795は尾張型第4型式、796は大窯期端反皿、797は東濃型山茶碗第7型式か。798は江戸時代前期の瀬戸窯端反皿、799・800は内面に鉄絵の施された大型の鉢である。800は一部の鉄絵が赤色になっている。ともに17世紀代の瀬戸窯製品である。801～804は加工円盤で801は江戸時代前期の碗、802は同中期か、803は古瀬戸後期様式第IV段階の平碗、804は大窯期の播鉢底部をそれぞれ打ち欠いたものである。805は古瀬戸の合子、806は同後期様式の土瓶で、その注口部である。807は古瀬戸末～大窯期の有耳壺口縁部、808は古瀬戸後期様式第IV段階後半の盤類である。809・810は近世の丸瓦、811は平瓦の小片である。

以上に示した遺物は、平安時代後期（山茶碗第4型式）から江戸時代前期（登窯第3小期）までの時期幅の主体がありその後は極端に少なくなる。よって江戸時代前期に開削され、時期の古い遺物はそれ以前のもものが混入したと考えられる。一方で若干数ある江戸時代中期・後期のものは、溝の最終的な埋没時期に関わると考えられるも、明治時代になって庭園廃絶時の埋め立てのような多量の廃棄を伴っていない点に注意すべきである。このこ

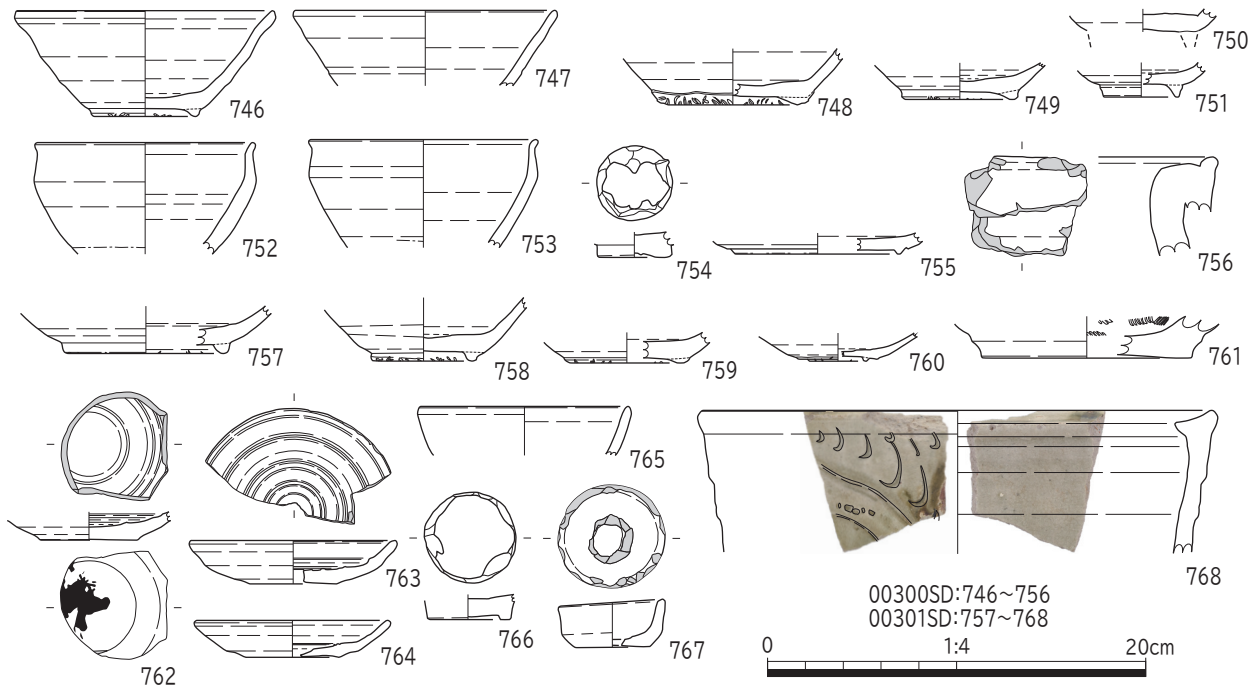


図92 00300SD・00301SD出土遺物実測図

とから、当該溝は 19 世紀前半の庭園改作時に埋められたその初期段階の施設であると推測される。

**00651SK** 調査範囲北西部(21Ca区)に位置する円形の土坑で、近世の斜方位溝 00626SD などと重複しもっとも上位で検出された遺構である。したがって遺構の時期として最も新しい時期に位置づけられる。平面形は長軸 5.5m のやや崩れた円形をしており、断面は播鉢状を呈する。その土層は他にない特徴がみられる(図 94)、上層(2・3・5層)はラミナ堆積のシルトであるのに対して、下層(7~16層)は円の中心方向へ盛り上がる分層線が見出される。当該層は一部にラミナ堆積がみられるもののシルト主体となっている。底面も中心がやや高くなっている点も通常の土坑と異なっている。遺物(図 95)は下層から混入した古墳時代須恵器杯身(812)、奈良時代須恵器高台杯(813)、平安時代の灰釉陶器(814)、大窯期の瀬戸・美濃窯産陶器の丸皿(816)があるが、00626SD の時期と比較していずれも掘削時期を示していないことは確かである。

**00085SD・00498SD・00499SD・00622SD・00694SD・02011SD・02012SD・02013SD** 調査範囲の中央部をほぼ東西方向に横切る並行する複数小溝群である。最西部に位置する 00085SD は、幅広の溝状遺構 00134SD に重複しこれより新しく、調査区西壁から西方に延びており東端は攪乱によって断ち切られている。その東方延長には 00622SD が位置する。00622SD は大溝 00001SD の埋土上に掘り込まれており、これより新しい。その東端では北側に食い違いの位置に 00694SD がやはり東方へ延びてその延長に 02011SD がある。02011SD には重複・先行する 02012SD と南側に沿う全長約 5m 未満の小溝(02013SD)がある。これらは旧河

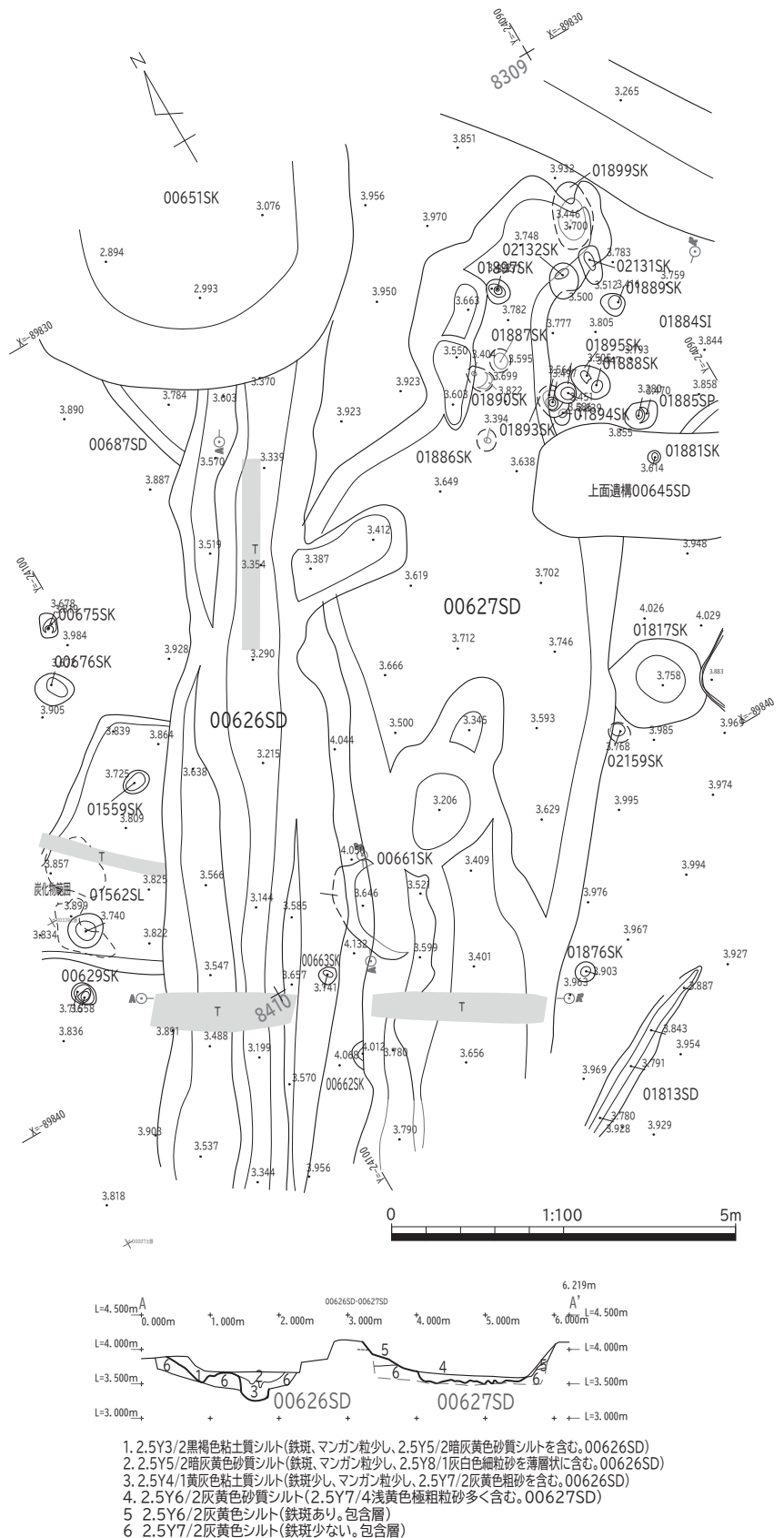
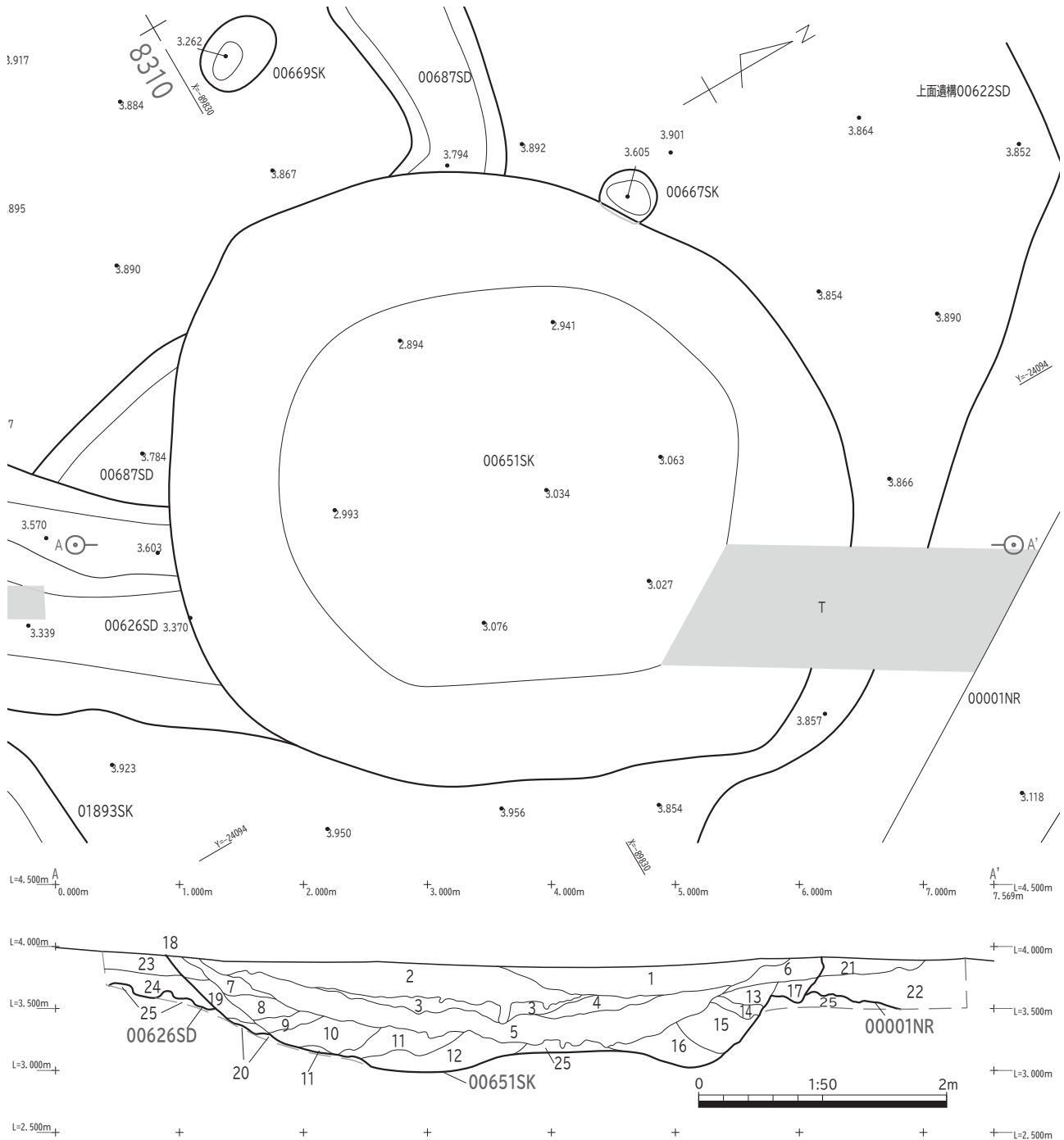


図 93 00626SD・00627SD・00628SD 遺構図



- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 10YR4/2灰黄褐色シルト(鉄斑あり。10YR6/6砂質シルト～細粒砂少し含む)</p> <p>2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(酸化鉄沈着あり。10YR8/3浅黄橙色中粒～極粗粒砂を薄層状・斑状に含む。ラミナあり)</p> <p>3. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト(泥土化。ラミナあり。ある時点の底部流入土)</p> <p>4. 2.5Y5/2灰黄褐色シルト(鉄斑あり。10YR4/1褐灰色粘土質シルトブロック含む)</p> <p>5. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト(鉄斑あり。10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂を薄層状・斑状に含む。ラミナあり)</p> <p>6. 2.5Y5/2灰黄褐色シルト(鉄斑あり。10YR4/1褐灰色粘土質シルトブロック含む。4層と類似)</p> <p>7. 10Y5/1灰色粘土質シルト(酸化鉄沈着あり。7.5Y2/1黒色粘土少し含む)</p> <p>8. 5Y4/1灰色シルト(酸化鉄沈着あり。10Y5/1灰色粘土質シルト少し含む)</p> <p>9. 10Y5/1灰色シルトと10YR8/3浅黄橙色細粒～中粒砂の互層(酸化鉄沈着あり。ラミナあり)</p> <p>10. 10Y5/1灰色粘土質シルトと7.5Y2/1黒色粘土の混層(酸化鉄沈着あり)</p> <p>11. 5Y6/1灰色シルト</p> <p>12. 5Y6/1灰色シルト(2.5Y4/1黄灰色粘土質シルト含む)</p> | <p>13. 10Y6/1灰色粘土質シルト(鉄斑あり)</p> <p>14. 10YR4/1褐灰色シルト(鉄斑あり。10Y6/1灰色粘土質シルト少し含む。2.5Y7/3浅黄色中粒～粗粒砂少し含む)</p> <p>15. 10YR4/1褐灰色粘土質シルト(鉄斑あり。2.5Y7/3浅黄色中粒～粗粒砂少し含む)</p> <p>16. 5Y4/2砂質シルト(鉄斑あり)</p> <p>17. 2.5Y5/2シルトと2.5Y7/3細粒～粗粒砂の互層(酸化鉄沈着あり。ラミナあり)</p> <p>18. 5Y4/1灰色シルト(酸化鉄沈着あり。10Y5/1灰色粘土質シルト含む)</p> <p>19. 10Y5/1灰色シルトと10YR8/3浅黄橙色細粒～中粒砂の互層(酸化鉄沈着あり。ラミナあり)</p> <p>20. 10Y5/1灰色粘土質シルト</p> <p>21. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト(鉄斑あり。00001NR)</p> <p>22. 10Y5/1灰色粘土質シルトと5Y4/1灰色シルトの互層(酸化鉄沈着あり。ラミナあり。00001NR)</p> <p>23. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(酸化鉄沈着あり。10YR8/3浅黄橙色中粒～極粗粒砂を薄層状・斑状に含む。ラミナあり。00626SD)</p> <p>24. 10Y5/1灰色シルトと7.5Y2/1黒色粘土の混層(酸化鉄沈着あり。00626SD)</p> <p>25. 7.5Y5/1灰色シルト(鉄斑あり。包含層)</p> |
|--|--|

図 94 00651SK 遺構図

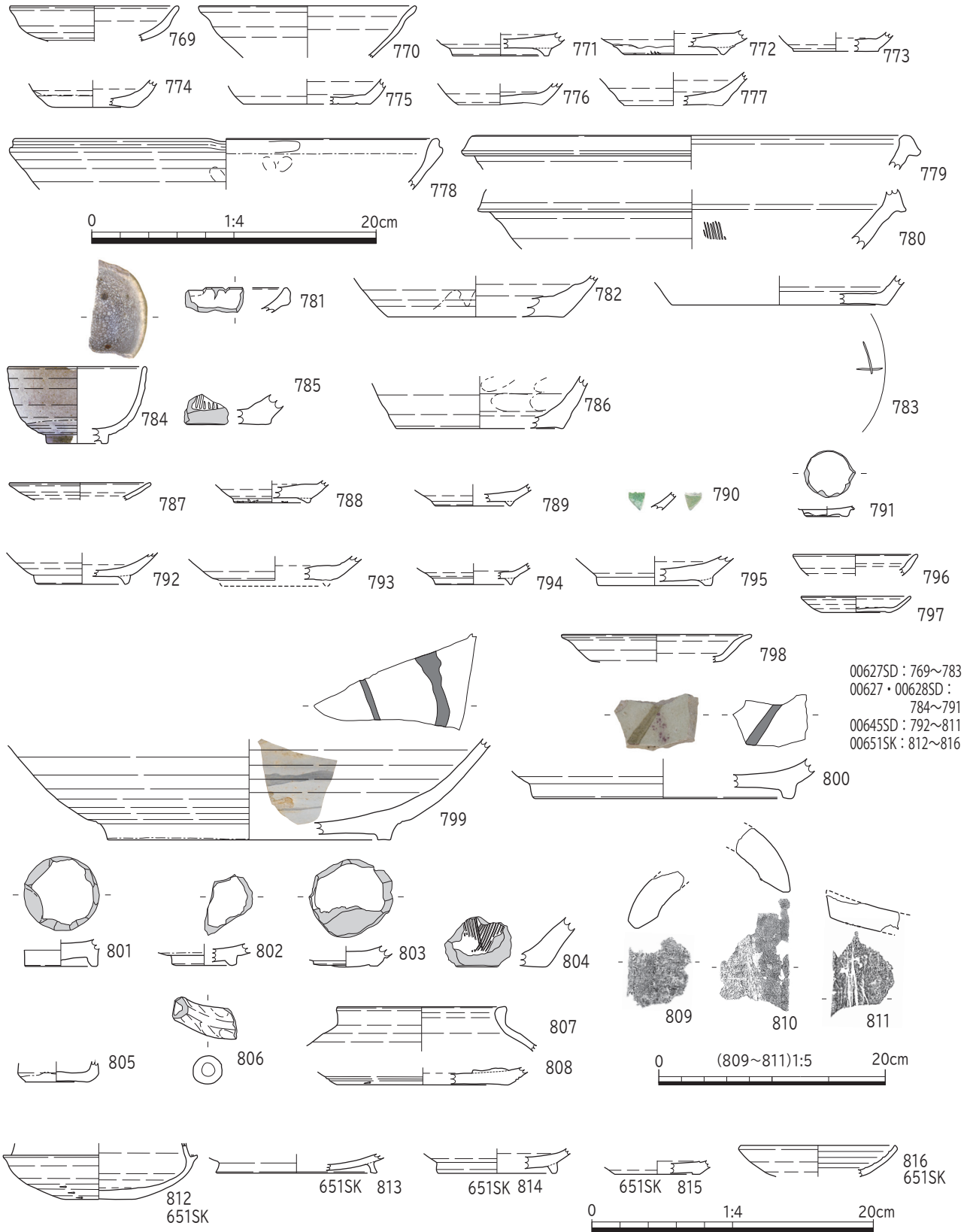


図 95 00626SD・00627SD・00628SD・00645SD・00651SK 出土遺物実測図

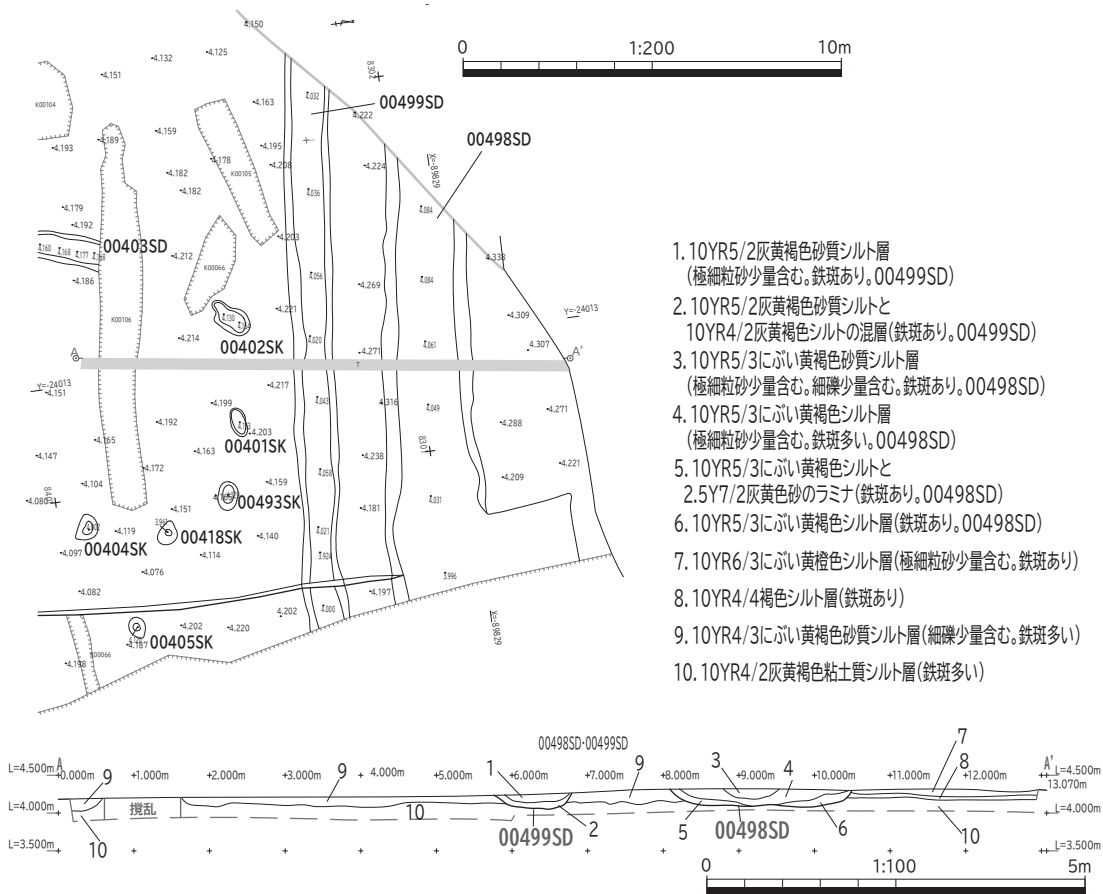
道 00900NR の埋土を掘り込んでおり 02011SD には南北方向へ分岐する小溝が取り付く。そして調査範囲東部(22A 区)に至ると 02011SD・02012SD の延長に 00498SD、その南側にグリッド 8204 から始まる 0499SD の順に複数小溝が並行する。このように不連続の箇所がいくつかあって遺構名が異なっているものの、一連の計画線上にあることが明らかな溝群を東西小溝群と呼称する。

東西小溝群で埋土の状況を確認しているのは 00622SD と 00498SD・00499SD の 2 か所の土層ベルトで、ともに下層でラミナ堆積、上層で木質の混じるシルト堆積となっていることから、当初水流のあった状態がやがて湿地状堆積へと埋没したと考えられる。00622SD は上幅 1.2m、深さ 0.2m、00498SD は上幅 5.0m、深さ 0.2m、00499SD は上幅 1.3m、深さ 0.2m で、浅い皿状の断面を呈する。

出土遺物は、00498SD から提示する。817 は東濃型山茶碗の第 6～7 型式、818 は同第 10～11 型式、819 は同第 11 型式、820 は瀬戸窯の大型鉢、821 は尾張型山茶碗第 5 型式、822 は東濃型山茶碗第 6～7 型式、823 は

尾張型山茶碗第 8～9 型式である。824 は灰釉陶器皿か。825・826 は合子に蓋か。827 は瀬戸・美濃窯産志野皿で大窯期 4 段階末、829 は絵付けの磁器蓋で瀬戸窯以外の生産、830 は鉄絵皿、831 は瀬戸・美濃窯産陶器の丸碗で底部内面に上絵付けがある。832 は江戸時代の瀬戸窯産緑釉碗である焼成不良で高台も通常のものとは異なっている。本資料は加工円盤に転用されている。833・834 は江戸時代後期の瀬戸窯土瓶底部である。835～839 は挿鉢で、835 は大窯期第 1 段階、837 は同第 3 段階、838 は大窯期だが時期不明、839 は登窯第 8 小期と考えられる。840 は江戸時代後期の瀬戸窯産植木鉢底部である。841～845 は瀬戸窯産製品で 842 は江戸時代中期の五合徳利底部。843 は大型の平碗で削り出し高台に内面のみ釉が掛かっている。古瀬戸期のものである。844 は江戸時代後期の半胴甕、845・846 は匣鉢(窯道具)、847 は古瀬戸後期様式前半の大型容器である。848～851 は近世瓦で 851 は端面に○形の刻印がある平瓦、それ以外は丸瓦である。

00499SD・00622SD の出土遺物は 00498SD と同様である。



1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト層  
(極細粒砂少量含む。鉄斑あり。00499SD)
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトと  
10YR4/2 灰黄褐色シルトの混層(鉄斑あり。00499SD)
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト層  
(極細粒砂少量含む。細礫少量含む。鉄斑あり。00498SD)
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト層  
(極細粒砂少量含む。鉄斑多い。00498SD)
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトと  
2.5Y7/2 灰黄色砂のラミナ(鉄斑あり。00498SD)
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト層(鉄斑あり。00498SD)
7. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト層(極細粒砂少量含む。鉄斑あり)
8. 10YR4/4 褐色シルト層(鉄斑あり)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト層(細礫少量含む。鉄斑多い)
10. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト層(鉄斑多い)

図 96 00498SD・00499SD 遺構図

852 は瀬戸・美濃窯産の合子蓋。853・854 は尾張型山茶碗第 6 型式、855 は輸入陶磁器の白磁碗で、発達した玉縁が特徴の 11 世紀後半～12 世紀のものである。856 は三足が付く瀬戸窯の折縁深皿である。857 は美濃窯産の合子蓋で江戸時代中期末（美濃窯の 3C 期）である。859 は瀬戸窯産の絵付け端反碗で口縁部にかけて焼き継ぎ補修痕がみられる。860 は肥前産、861 は小瓶、862 は平瓦、863 は丸瓦である。979 は 00622SD の瀬戸窯の灰釉丸碗である。

00694SK も同様に 864 は瀬戸窯登窯第 10 小期の絵付け端反碗で一方 865 も端反碗であるが瀬戸窯以外の生産とみられる。866 は肥前産磁器の絵付け蓋で 18 世紀代、867 は登窯第 8 小期の腰鑄茶碗である。

**01300SD・01301SD** 調査範囲北縁に位置する北東（22C 区）～南西方向（22B 区）に延びる小溝である。01300SD は 22C 区内で緩い弧線の小溝で全長約 14.1m、幅約 0.9m である。01301SD は、南西端が 00900NR 付近で不明瞭になる一方、北東端も同様に攪乱などで不明瞭で全体的にどこまで延びているかは不明である。遺構の重複関係は 01303SD や 01304SD より新しい時期と考えられる。幅 1.0m、深さ 0.6m でほぼ一定の規模である。

**01302SD・01303SD** 01302SD は調査範囲北縁（22B 区）に位置する弧線を呈する小溝で、01303SD と重複しこれより新しい時期である。幅約 0.5m で弧線は直径約 5.5m の規模と推測される。01303SD は 22B 区・22C 区の境界から調査区内に入り込み東方へ屈曲して 01304SD に合流するような形状で、そこから東へは 01303SD の上層に相当する関係である。

出土遺物の大半は 01303SD からで、869 は 00200SK 出土の大型鉢 529・530 に類似する口縁形状である。870 は匣鉢、871 は焼台で手捏ねで棒ツク状に成形されたもの。部分的に煤が付着しており、窯内で使用されたものとみられる。872～874 は瓦類で、872 は飾瓦の一部か。

**01304SD** 調査範囲北縁に位置するほぼ東西方向に直線的に延びる小溝である。22B 区から西方に調査区外に抜ける一方 01302SD と交差する地点から東へ延びて 22C 区内で攪乱によって不明瞭になる。なお 01304SD に並行する溝はない。途中 01305SD とも交差しているが 01304SD の方が古い時期である。遺構検出面での幅 2.6m、深さ 0.3m の断面が浅い皿状を呈する。その土層は下層（4 層）でラミナ堆積がみられることから構築後水流があっ

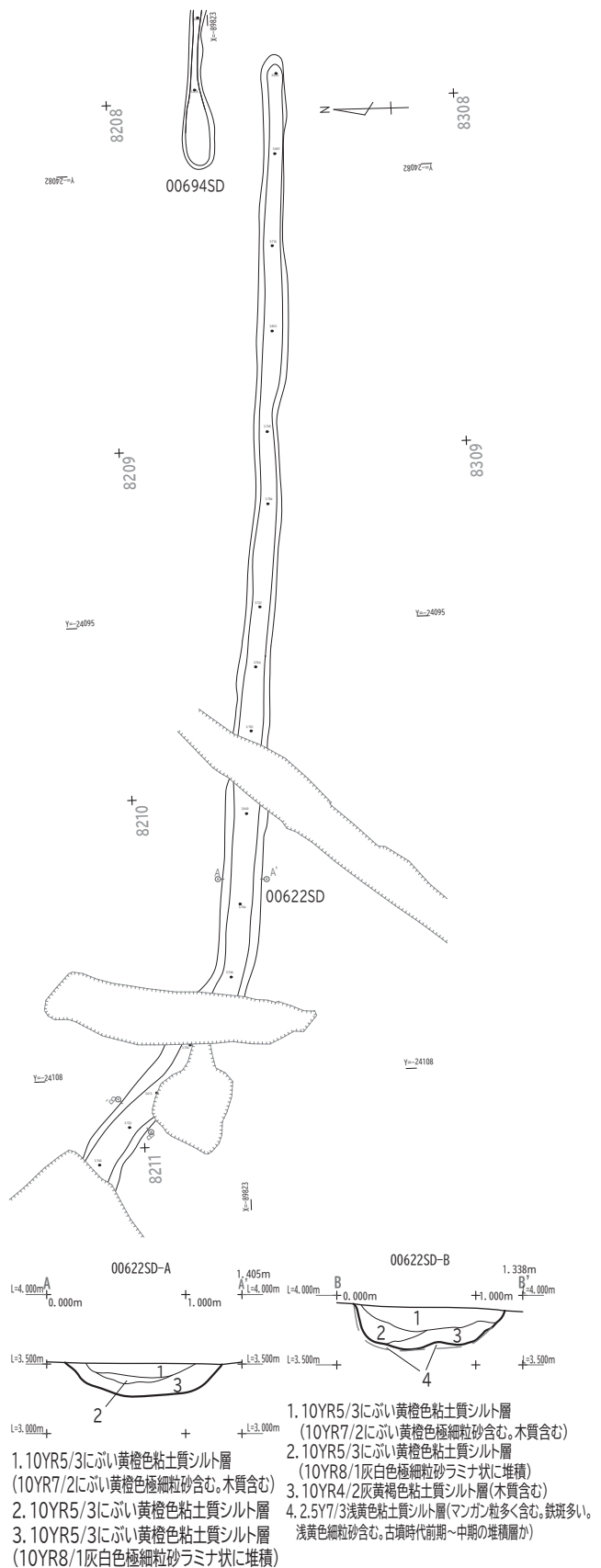


図 97 00622SD 遺構図

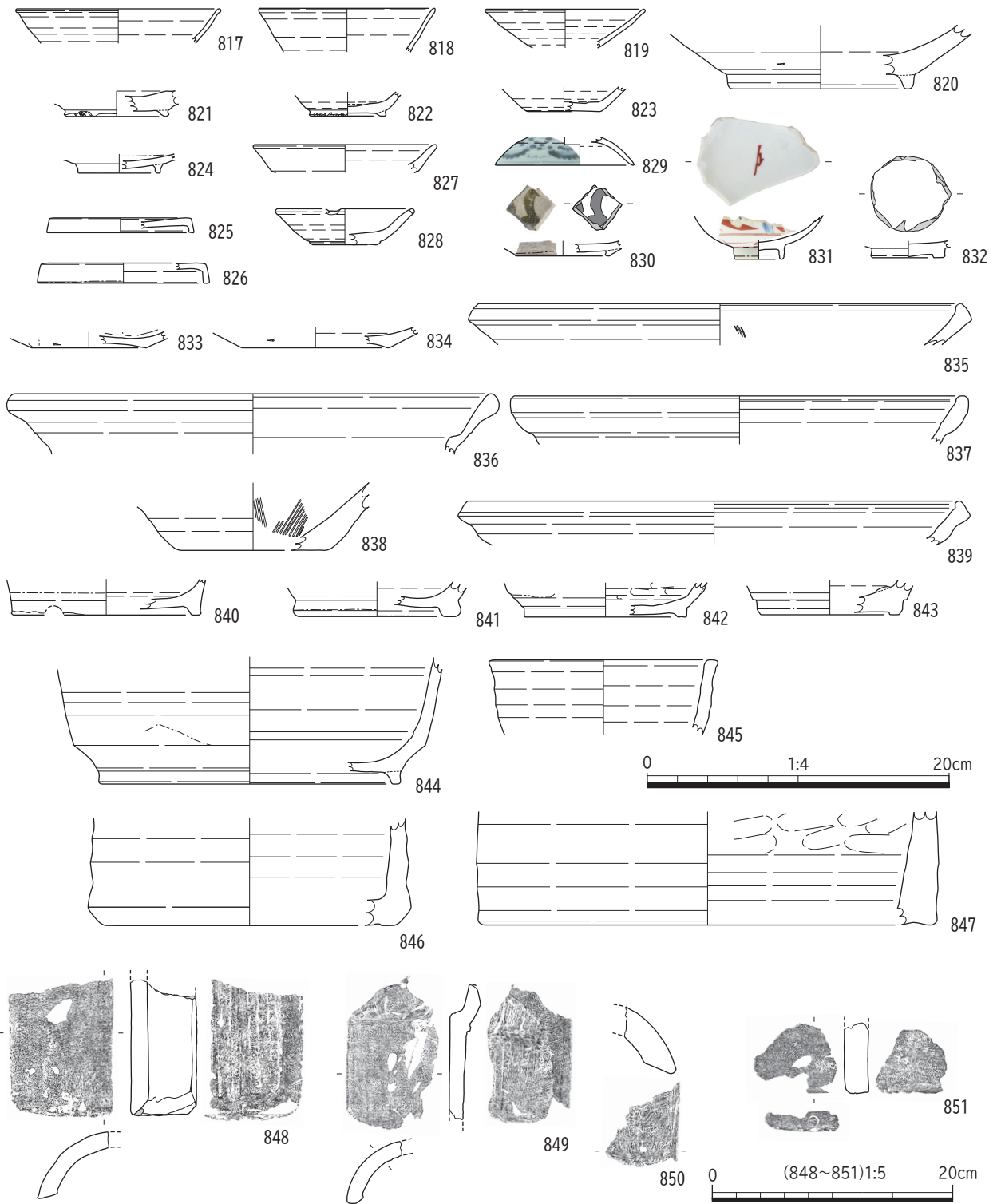


図 98 00498SD 出土遺物実測図

たと推測されるが上層（1～3層）は3回の掘り返しのたびにシルト主体の堆積で埋まっている。分層に対応した遺物の分布は確認できていないが、これらの掘り返しに対応して遺物の時期幅が長期間にわたっていると考えられる。

出土遺物は、調査区北縁の遺構群の中で最も多く中世戦国期から江戸時代にわたる（図 103）。877 は大窯期の天目茶碗、878 も大窯第 3 段階の天目茶碗で底部を使った加工円盤に転用されている。879 は瀬戸・美濃窯産陶器の輪花皿で半焼け（焼成不良）のものである。大窯期にも存在する。880 は大窯第 4 段階末期の志野鉄絵皿、881 は 17 世紀代の瀬戸窯産端反皿、882 は江戸時代前期の丸皿、883 も同時期の輪弁げ皿、884 は登窯第 2 小期の丸皿、885・886 は瀬戸・美濃窯産陶器碗で江戸時代中期である。887 は江戸時代後期の瀬戸・美濃窯産陶器丸碗、888 は登窯第 8～9 小期の腰鍔茶碗、889 も江戸時代後期の長石釉皿、890・891 は蓋物、892 は絵付けの小端反碗で川魚のようなモチーフである。893 は肥前産磁器丸碗、894 は瀬戸窯の植木鉢口縁部、895 は片口鉢、896 はその底部で外面は鍔釉のような鉄釉で内面にロクロ目が目立つ。897～900 は瀬戸・美濃窯産の播鉢で 897 は古瀬戸後期様式IV期新段階、898 は大窯第 1 段階、

899 は同第 2 段階、900 は 17 世紀初めで時期は揃っていない。901・902 は江戸時代後期の火鉢、903・904 は土師器の茶釜で戦国期～江戸時代初めのもの、905 は匣鉢（窯道具）で側面に円形透かしがある。906・907 はそれぞれ近世の丸瓦と熨斗瓦である。このうち江戸時代後期のものや窯道具は庭園末期の廃棄によるものであろう。

**01634SD・01635SD・01636SK** 調査範囲北縁に位置する正方位から斜めに振れる方位の南北溝である。南端は 00900NR で不明瞭になっておりそこから北東へ約 5m のところで 01634SD から 01635SD が分岐して並行して北東方向へ延びて 01304SD との交差点から先は 01302SD の下になっているとみられる。その交差点の下層では楕円形の土坑 01636SK がある。

遺物は 01636SK で数点あり、01304SD と似た構成である。908 は東濃型山茶碗第 11 型式、909 は 17 世紀代の向付で長石釉が掛かる。底部外面に足の痕跡と内面に円スイピンの痕跡がある。美濃窯の可能性あり。910 は瀬戸・美濃窯産陶器丸碗で江戸時代後期。911 は古瀬戸後期様式第IV期新段階の播鉢口縁部である。

**01658SK** 調査区北縁部に位置する。01634SD の西約 10m に位置する円形土坑で直径 1.2m、深さ 0.2m である。完形に近い山茶碗 2 点が出土している。912 は尾張

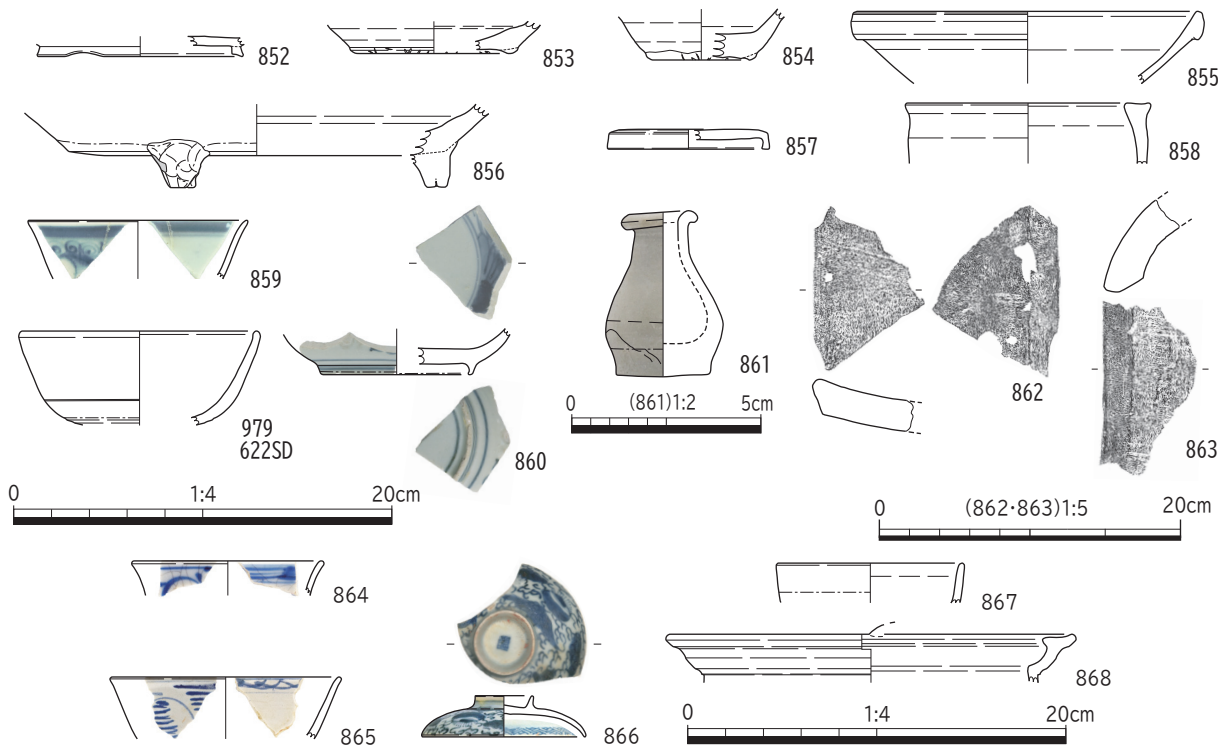


図 99 00498SD・00499SD・00622SD・00694SD 出土遺物実測図

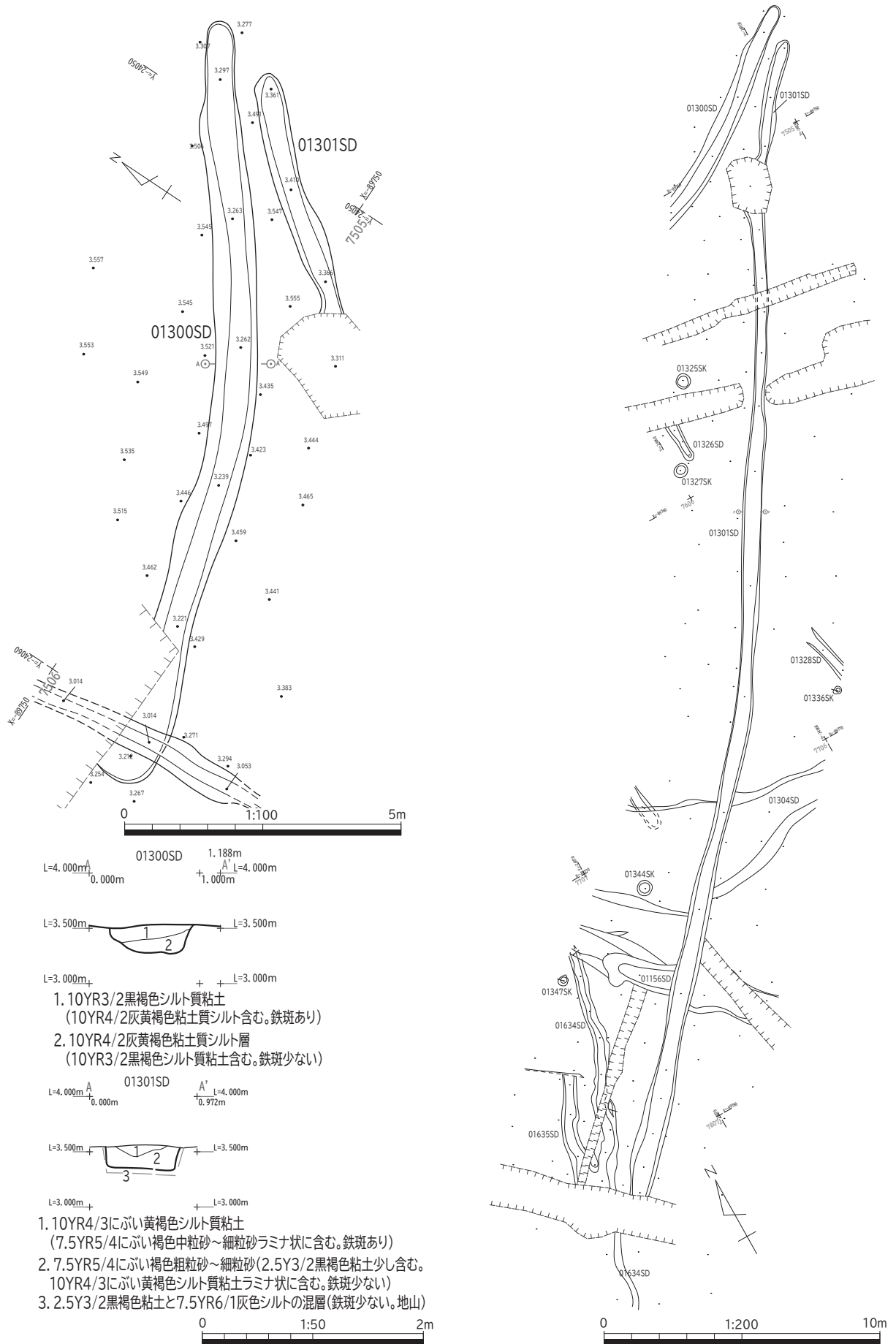
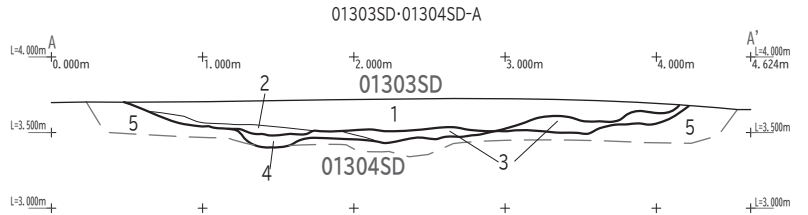
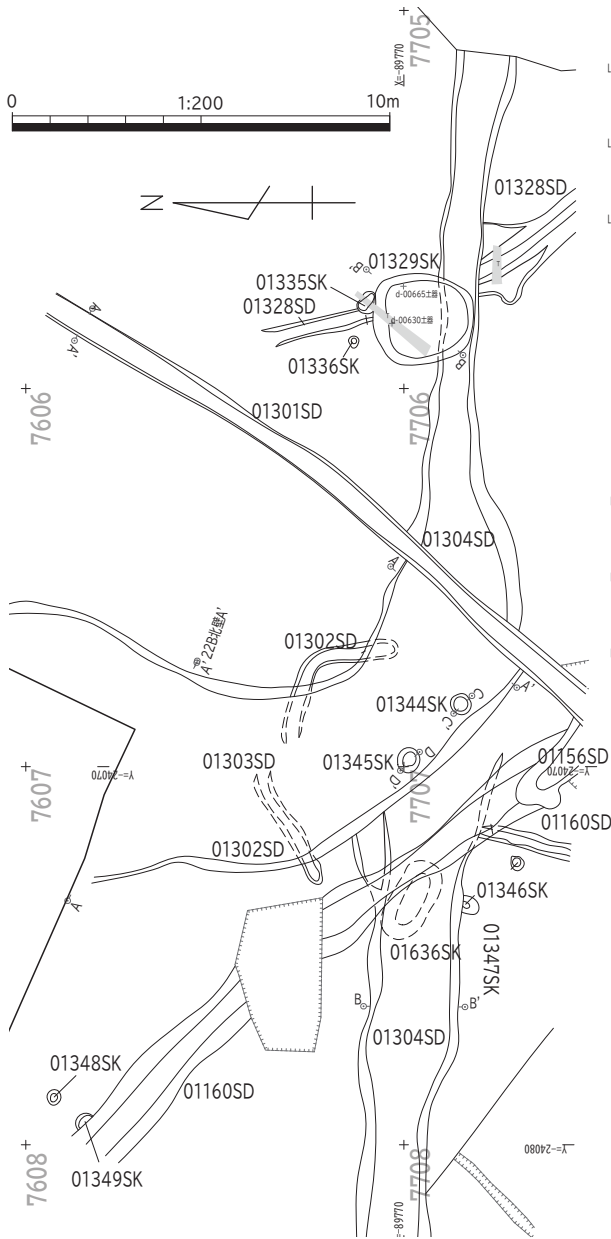
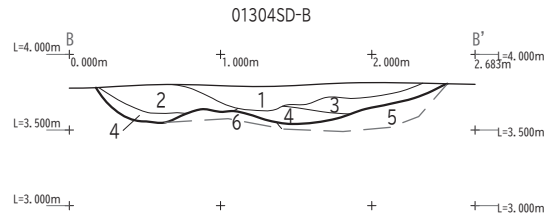


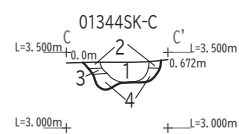
図 100 01300SD・01301SD 遺構図



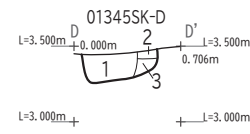
1. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト(鉄斑多い。10YR3/2黒褐色シルト質粘土ブロックわずかに含む。10YR5/4にぶい黄褐色シルトラミナ状に含む。1303SD)
2. 10YR5/6黄褐色細粒~中粒砂(層下部に鉄分沈着。1303SD)
3. 10YR4/3暗褐色シルト(10YR5/6黄褐色極細粒砂ラミナ状に含む。1304SD)
4. 10YR5/6黄褐色細粒~中粒砂(10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロック少量含む。1304SD)
5. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト(鉄斑あり。炭化物わずかに含む。地山)



1. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR4/6褐色細粒砂含む。炭化物少量含む。鉄斑多い)
2. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト層(10YR5/6黄褐色粗粒~中粒砂多く含む。鉄斑多い)
3. 10YR3/4暗褐色粘土質シルト層(鉄斑多い)
4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト層(層下部に鉄分沈着。10YR5/6黄褐色極細粒砂ラミナ状に含む)
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土(鉄斑あり。地山)
6. 10YR5/6黄褐色細粒~極細粒砂(鉄斑あり。地山)



1. 10YR5/1褐灰色砂質シルト(鉄斑あり)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(鉄斑あり)
3. 10YR6/2灰黄褐色シルト(鉄斑あり)
4. 10YR6/1褐灰色シルト(鉄斑あり)



1. 10YR5/1褐灰色砂質シルト(鉄斑あり)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(鉄斑あり)
3. 10YR6/2灰黄褐色シルト(鉄斑あり)

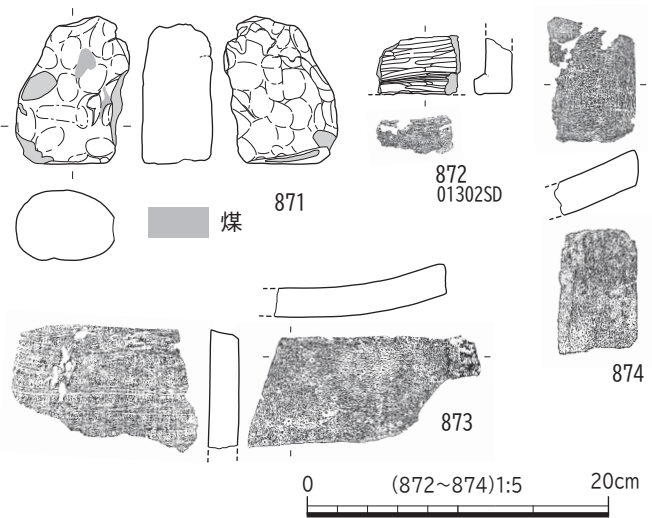
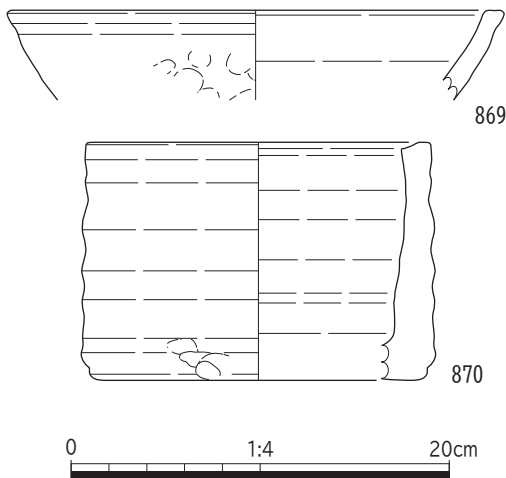


図 101 01302SD・01303SD 遺構図・出土遺物実測図

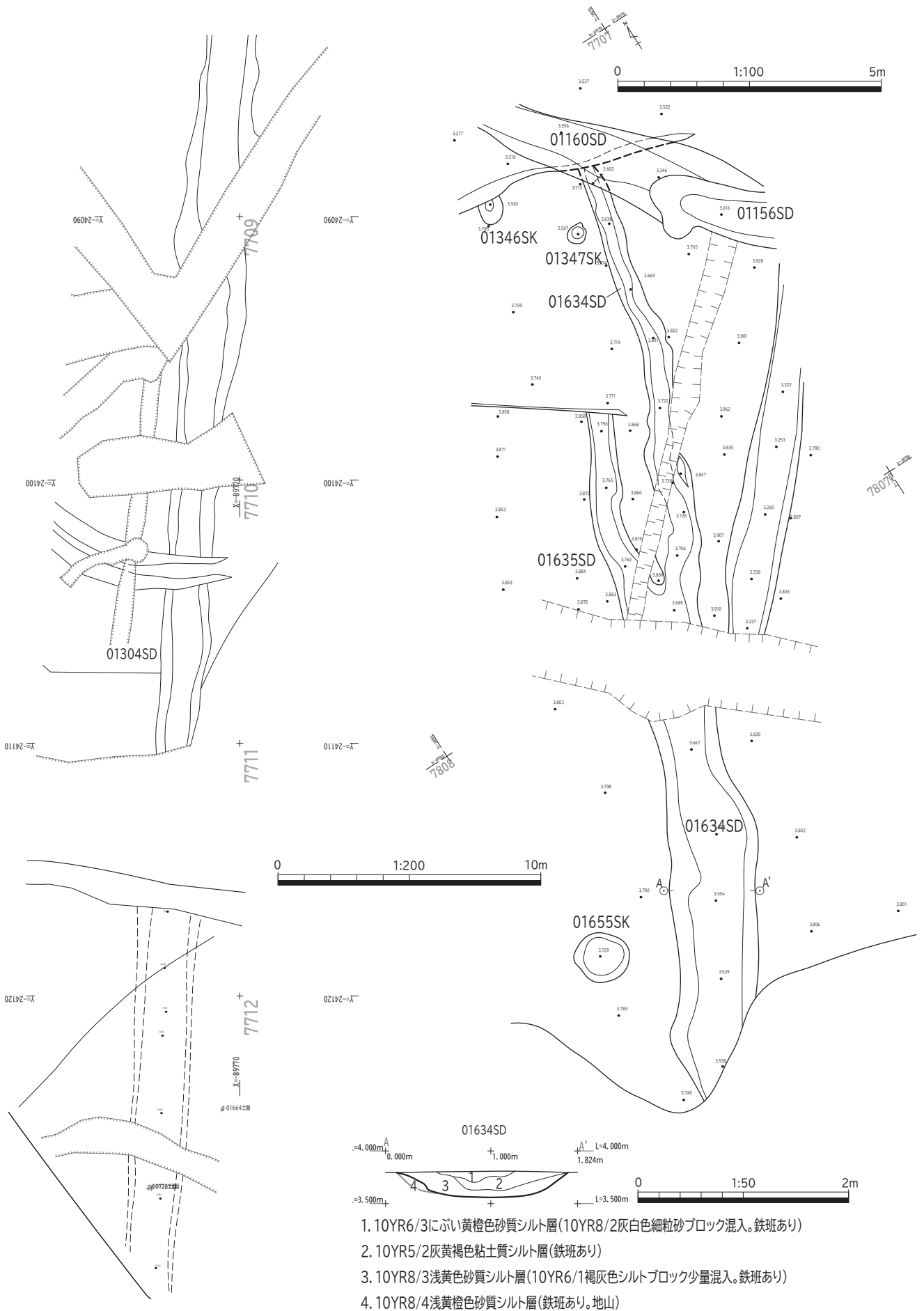


図 102 01304SD・01634SD 遺構図

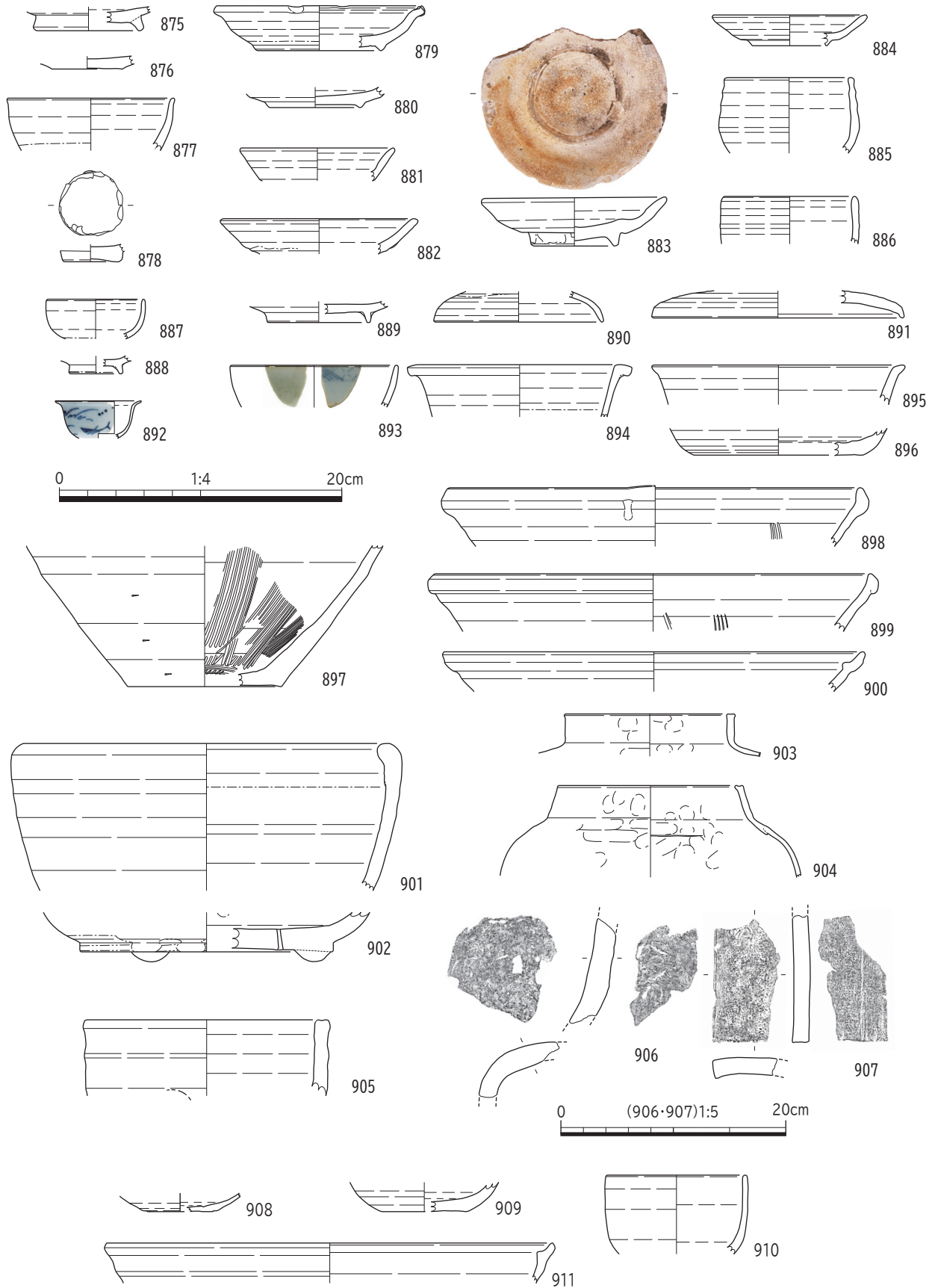


図 103 01304SD・01636SK 出土遺物実測図

型山茶碗第 7 型式である。913 は同第 8 型式で、無高台の底部に板の木目圧痕があるほか判読不明の墨書文字がある。

**00225SE** 調査範囲中央部に位置する中世の井戸である。検 1 面において確認されているので砂混じりのシルト層を掘り込んで構築されている。平面形はほぼ正円形で検出面における長軸は約 3.6m、底面径は約 1.3m で深さ約 0.8m を測る。このことから断面形は緩い播鉢状を呈する。埋土 (図 106) は基本的に周囲からの流れ込みによる堆積となっているが、5 層の堆積前に掘り返しによって若干外側へ拡張されたように見受けられる。その後炭化物が混じる 2 ~ 4 層堆積時は廃棄土坑のような状態であったと推測される。出土遺物の大半はこの廃棄土坑の段階で入ったものと考えられるが、山茶碗類の小皿 (925) が最下層で出土していることから、構築時期も概ね 13 世紀前半とみられる。井戸に分類しているが、井戸側などの構築物はなくその痕跡も見出せなかったことから基盤の粘土質シルト層に掘り込まれた溜め井として機能していたと思われる。用途としては後述する竪穴建物跡群に重複する畝状小溝群 (耕作地) への給水だったかもしれない。

出土遺物で特筆されるのは緑釉陶器の香炉蓋 (916) である。陰刻花文に透かしも加わった精緻な文様構成となっており四葉の花弁を想定して復元が可能である (図 105)。猿投窯産で K-90 号窯式期と考えられ平安時代前期である。ただし当該資料は 00225SE の検出時に出土しており、ほぼ埋没後であることから直接的な関係は薄い。917・918 は尾張型山茶碗第 6 ~ 7 型式、919 は東濃型で第 5 型式、921・923 は尾張型第 6 型式の底部、922 は尾張型第 7 型式、925 は尾張型山茶碗の小皿で第 6 型式である。926 は古瀬戸前期様式後半の卸し皿で山茶碗との共伴関係から 13 世紀中葉であろう。

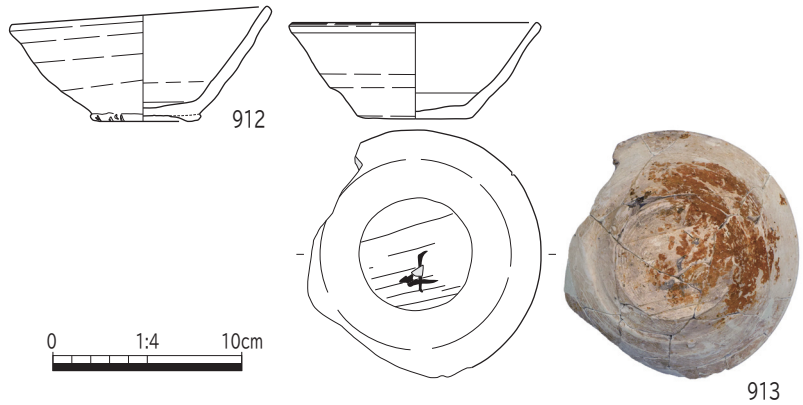


図 104 01658SK 出土遺物実測図

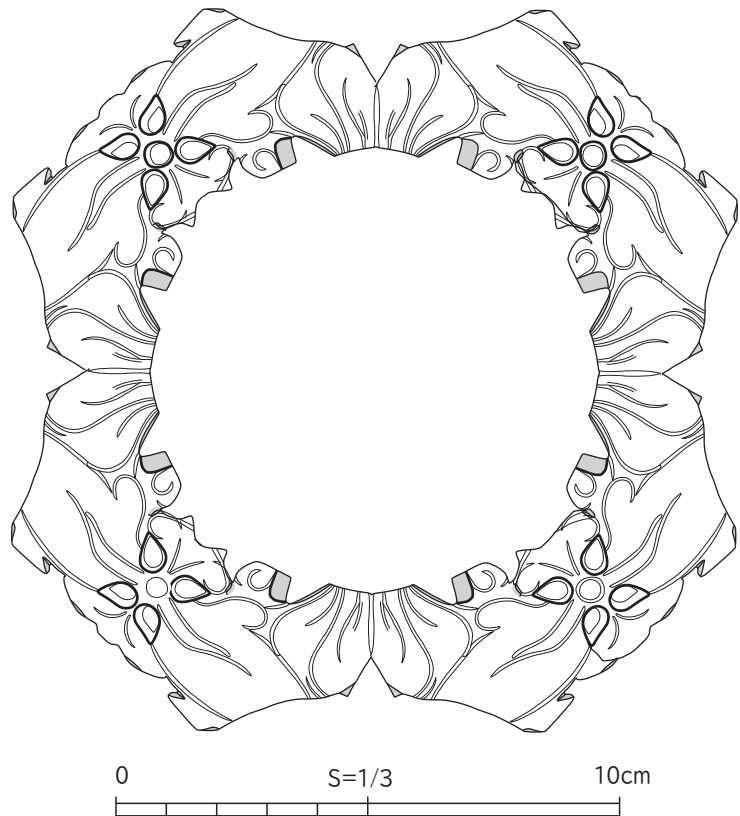


図 105 00225SE 出土緑釉陶器香炉蓋 (916) 復元図

**その他中世・近世遺構の出土遺物** 944 は古瀬戸後期様式第 IV 期新段階の卸し目付き大皿、946 は近世常滑窯産の赤物甕、947・948 は尾張型山茶碗第 6 型式、950 は香炉のようでもあるが内面に釉が掛かっている。江戸時代中期か。952 は中世の輸入陶磁器の青磁碗、953 は古瀬戸後期様式第 IV 期新段階、954 は東濃型山茶碗第 7 ~ 8 型式、956 は口縁部に把手がつくとみられる。

瓦類も各遺構に散在する。957・958 は丸瓦であるが

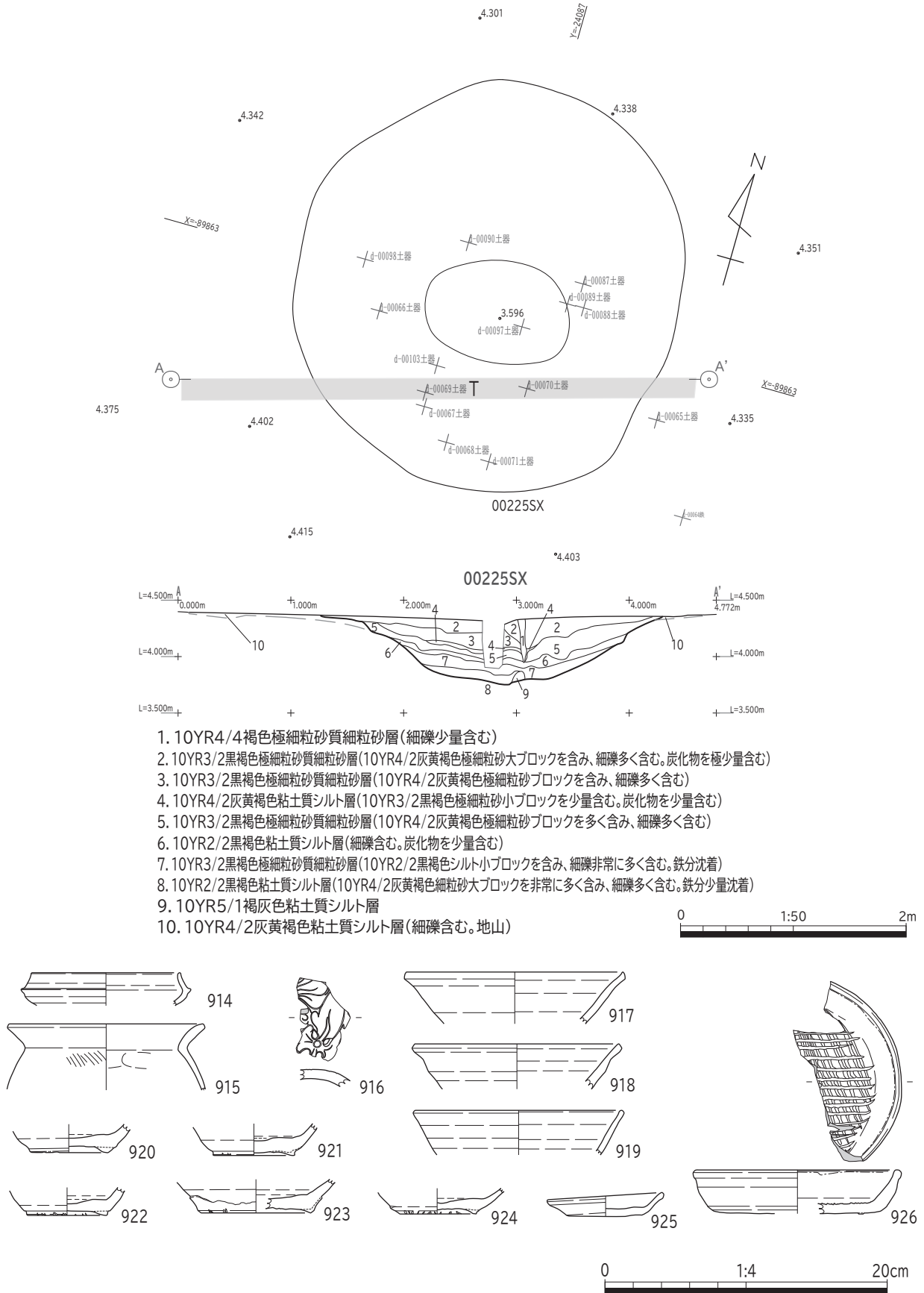


図 106 00225SE 遺構図・出土遺物実測図

極端に厚さが異なっている。959 は平瓦、960・961 は熨斗瓦で側縁付近のみに反りがある。

**灰釉陶器** 灰釉陶器は平安時代の猿投窯産である。名城公園遺跡では灰釉陶器の時期（9～10世紀）に限定できる遺構はなく、そのほとんどは中・近世の遺物に混じって散見される。ほとんどが碗・皿で、瓶類などの器種は破片でもきわめて少ない。高台が三日月形をしてい

るものや端部を尖らせたものは K-90 号窯式期、角形高台（965）は K-14 号窯式期で点数から 9 世紀後半が中心とみなせる。968 は大型の碗である。971 は灰釉陶器末期から山茶碗初期段階の短頸壺または瓶類で高台は三角形である。

以上のように、名城公園遺跡の平安時代は希薄で遺跡変遷においても空白期といってよい。

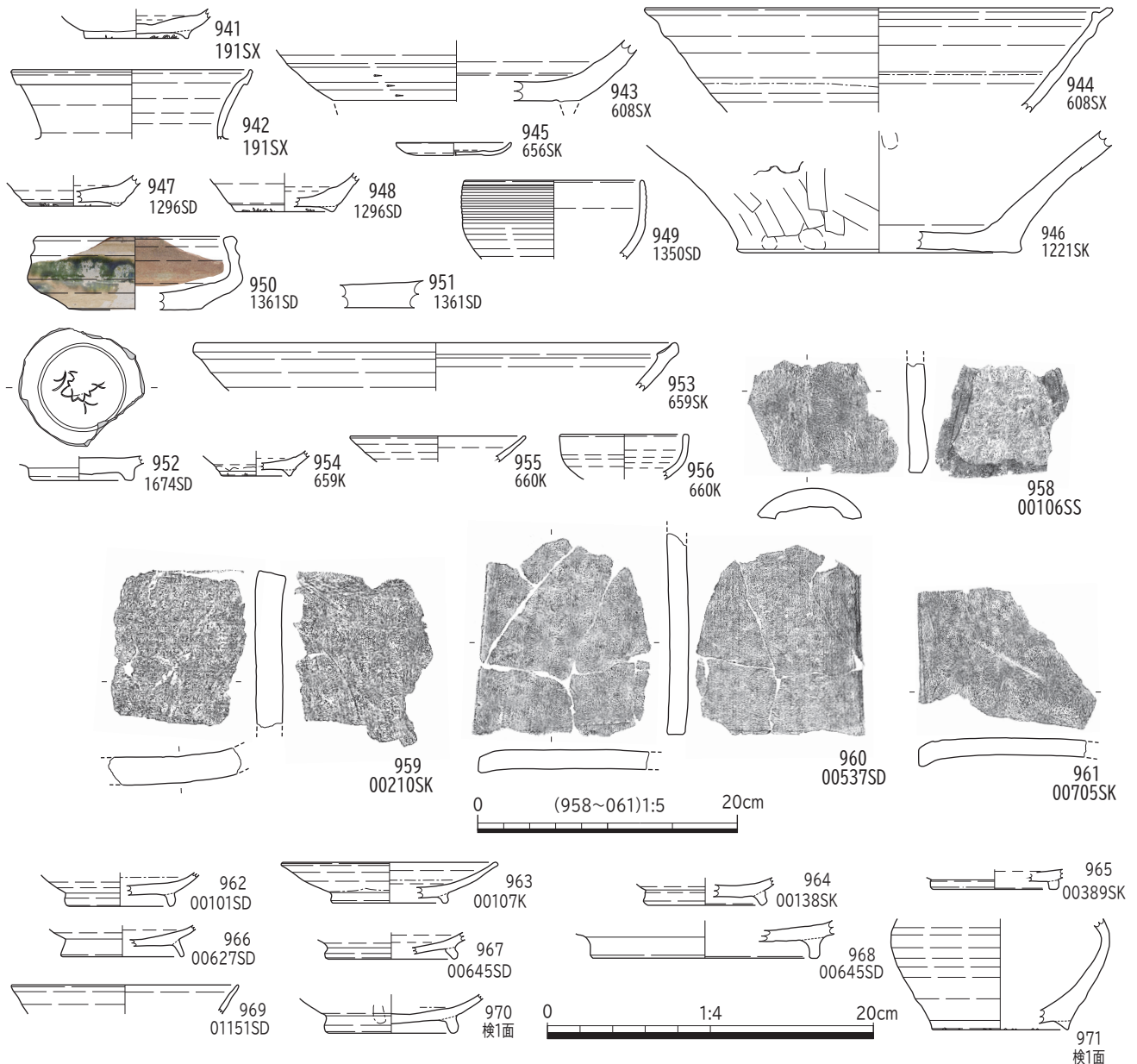


図 107 その他中世・近世遺構出土遺物と灰釉陶器集成実測図